

校長室の本棚の中から『わたまへ』という学校文集を見つけました。それは、今からちょうど八十年前の大正十年から昭和三年までの八年間にわたって作られたものでした。

びっくりしました。おそらく山形県でも最古に近い「学校文集」だと思いました。これは宝物です。改めて渡前小学校の歴史と伝統の奥深さを知った思いでした。

当時の子ども（今もお元気であれば九四才から七九才）はどんな作文を書いたものだろうか・・・興味津々で読んでみました。その結果、この宝物を私一人だけが読んで、また校長室の本棚に眠らせておくのは惜しいと思うようになってしまったのです。

そこで「温故知新」と題して、八十年前の作文を紹介してみようかと思いい立ちました。故（ふるき）を温（たずね）ることによって、新しきを知ることができるかもしれないという漠然とした思いからです。

時間があるときにワープロを打ち、不定期に発行させていただきたいと思っております。どのくらいの作文を紹介できるかわかりませんが、息切れしない程度に頑張ります。

読みやすくするために、仮名づかいや作文作法は、現代のものに直させていただきます。（校長・大戸）

この「温故知新」が、ご家庭に様々な話題を提供することができれば幸いです。

大黒様のお年夜

（大正一〇・一二・一四）

二年 齋藤とめの

十二月九日は、大黒様のお年夜でした。

私のうちでは、大黒様のにこにこして居るのをかざりました。そして、さとう米いりや、とうふにみそをつけたのや、いろいろなごちそうをあげて、手をたたいておがみました。それから、豆を入れたなますをたべました。赤いごはんをたき、みんな一しよに夕ごはんをいただきました。

すぎてから、みんなあつまって、さまさまおもしろいお話をして、九時ころおへやにいきねむりました。

うさぎ

（大正一〇・九・一四）

二年 高橋たねる

私は、学校からかえると、うさぎにもち草をあげます。すると、うさぎはおも白がって、うまそうに食べます。私は、うさぎがかわいくてたまりません。毎日せまい箱に入れて居るのがかわいそうです。

お天気の良い時は、きつと外に出して遊ばせます。すると、さもゆつくりしたようなかおをして、ぴんぴんはねて遊びます。

これからはだんだんさむくなります。さむくなるのに、私のうさぎは毛がはげてなおりません。けれども着物を着せる事も出来ません。

ひる休み

（大正一〇・一・一二）

二年 大川 桃え

私は、今日の三時間目の休み時間に紙を吹いてとばせて遊びました。紙は吹かれると、くるくるまわって上に上ったり、下に下ったり大そうおもしろかった。

一方では、まわたをとばせたり、又わらったり、とんだり、はねたりするので、私もおかしくなりました。富子さんは、わあわあいっておもしろがりました。たねいさんは、まわたを吹いて、あれあれ、あがると言うようなかおをして、一生けんめいに吹いていました。私は紙をとばせることが大すきです。

私のうちの子ねこ

（大正一〇・六・二四）

二年 阿部 市郎

私のうちの子ねこは、かわいいねこです。

私が学校からかえると、ねて居たのも足音を聞きつけると、ニャアニャアといって、むかえに来ます。私はすぐにあんじやれ（じやれさせる）をさせます。

うちのねこはおなごねこで、年は一つです。私が魚をつかまえて来てたべさせると、うまがって食べます。みちげねこですから、白いところと黒いところと赤いところがあります。

くびにはよだれかけをかけて居ます。それは、姉さんがこしらえたのです。

豆まき

（大正一〇・二・九）

二年 五十嵐かちえ

私のうちでは、二月三日の晩は豆まきでしたから、おとうさんは、はかまをはいて、大きなこえで「福は内、鬼は外」といって、パラパラと豆をまきました。私はおどろいて、こたつにあたってねむって居たのも目がさめました。

ねこもこたつの上でねむっていたのが、大きな目をして、せなかを高くしました。すると、うちの人たちはねこを見て、みんなわらいました。おかあさんが「おやおや、おとうさん。又、そんな大きなこえで。ねこも子どもも、みんなおきましたよ」

と言いましたら、おとうさんは、わらいながら、「大きなこえをたてるのが、一番よいもんだ」とおっしゃいました。

まずは『わたまへ』の創刊号の尋常二年生の作文から紹介しました。この号は大正十年の七月に発行されているので、これらの作文は、一年生時代に書いたものだと思います。

ひよっとしたら、だれかのおじいさん、おばあさんの作文かもしれません。だれにでもこんな可愛い時代があったのです。ぜひ、読み聞かせを。

大すきなざっし

(大正一〇・一〇・一九)
尋二年 五十嵐やよめ

昨日おつかいに行つたかえりに、ざっしを買つて来ましたが、うちへかえるまで、見たくて見たくてたまりませんでした。

けれども、まず、うちにかえるまでたのしみにしておこうと思つて見ないでいつたら、弟は

「僕にも」

といつて、戸の口から出てきました。それで

「二人で見ましよう」

といつて見ました。

(ざっしには、子ねこのことがかいてありました)

「私の子ねこは、よい子ねこ。ごらんさい」

と、花ちゃんがだき上げたら、おやねこが、

「もしもし、あなた、おじようさま。私の子猫でござ

います」

といったのもあります。又、花ちゃんや文ちゃんはよい子どもだというのも書いてありました。

「のこりの二枚だけは、あすのたのしみにしておきな

さい」

と、弟にいうと、弟もおとなしく

「はい」

といいました。

今日もうちへかえつたら、あのつづきを見ようと思つて、たのしみにしています。

お母さん

(大正一〇・一二・八)
尋二年 大川 桃る

私のおかあさんはよいおかあさんです。私が小さい時、あたたかいふところの中に入れておちちをのませてくださいたり、私の着物をあらつたり、かみをゆつてくれたり、おべんとうにごはんを入れてくれたり、たびを買つてくれたりして下さるのは、みんなおかあさんです。

もし着物が切れるとすぐぬつてくれます。又、私の足がきたなくなるとおかあさんは「足がきたないからあらえ」と言つて、おゆをわかつてくれます。

私はいつも、おかあさんをありがたく思つて居ますから、おかあさんを大事にします。おかあさんは、私を大事にします。

大黒様のお年夜

(大正一〇・一二・一四)
尋二年 成澤おとく

私のうちでは、一二月九日のぼんに大黒様のお年夜をしました。

私は川に行つて、大黒様をあらいました。あらうと大黒様は笑つて居るようなかおをして居ました。

それから、大黒様とえびす様をかざり、おぜんをそなえました。そして、豆めしをたき、豆なますをこしらえてあげました。また、大こんのすづけもそなえました。

子ねこ

(大正一〇・一二・二〇)
尋二年 五十嵐かつゑ

私が学校からかえると、うちの子ねこは私の足にからまります。私が「ちゃこや、ちゃこや」と言つてよぶと「ニヤオ」といつて、ひざに両手をのせます。手をくれると、すっかりなめてくれるから、きたないのでしかるまねをすると、かえつてよつてきます。冬になると、こたつに入つて居て、人が足を出すとだれの足でもなめてくれます。

私がおはんやごちそうをたべらせると、うまがつてたべます。私はねこをかわいいのです。

以上は、今の学校でも書かせている「生活文」です。今も昔も生活文が作文の主流であることに変わりはないようです。

しかし、この文集には生活文だけでなく、作文力を高めることをねらつた課題作文も多くあります。次の作文は、描写力のトレーニングだったと思います。

雪

(大正一〇・一・一八)

尋二年 高橋とみ子

家の屋根も小屋の屋根も、みんな白くなって居ます。すずめは枝から枝へとんで大そうおも白がって遊んで居ます。

梅の木も松の木も、きれいな花が咲いたようです。電信の針金は、まるで白い白いまつ白なわたでも、くりくりまいたようです。

すずめが「ちゆう、ちゆう」鳴きながら、学校の屋根ににげて行きました。

もうふゆだ

(大正一〇・一二・四)
尋二年 金内 金吾

いつのまにか鳥海山も月山もまっ白になりました。このごろまで、木のはがまっかになつてそまつていたのが、今はみんなおちて一枚もありません。

今日は、雪が花のように、ばらばらふつて来ました。私のうちでは、今日あたりはきつとこたつをにかけてみんなであたつて居ましよう。

これからもつと雪がふると、こらがすつかり白くなつてしまいます。すると、手ぶくろをあて、たびもはかなければなりません。

どちらも、二年生が書いたとは思えないほど見事な描写文です。当時は、作文を「綴り方」と呼んでいました。「方」というのは「技術」です。「技術」は、修業しなければ身につかない。だから、修業を意識した指導をしたのでしよう。それに比べると、最近「技術」を軽視しているかもしれない。反省・知新 (大戸)

分教場の友達に

大正十年度
尋三年 齋藤 千ヨ

とみせ(富瀬)さん、おわかれしてからよほどたちました。みなさんはどうぶですか。私はどうぶで毎日学校にかよっています。私どもは今日から第十七のところをならいました。

おわかれしてから雪もだいぶふりました。

あなた方の太田先生は、私のうちの前ですから、たびたびあうことがあります。

せんだつてはねんしじょう(年賀状のこと)ありがとうございます。

私の方では雪がつせんのしょうか(唱歌)をきいています。大へん勇ましいですよ。しゅうしん(修身)も第十六をきいています。

これからもますますからだをじょうぶにしてくださいどうぞ、みなさんにもよろしく申してください。

さようなら

冬になると分教場で勉強する子どももいたようですね。富瀬さんは、どこの分教場かな?

遠足

大正十年度
尋三年 丸山新治郎

朝、文助君のよられて起きてみると、おかあさんはごはんをにぎっていました。私は、いそいでしたくをして、文助君と二人で学校へ行きました。

そうして停車場の所で人かずをしらべられて汽車にのりました。

まどから外を見ると、森や田や島がみんなあとへとへとんで行きます。つるおかの停車場へ来て、それから大山の停車場で下りました。

トンネルへ来ると、中はみんなくらやみで、でんきがたくさんついていました。そして、トンネルを出て加茂の港を見ると、さかなとりが赤い着物をきて舟に乗って居ました。汽船がけむりを立てていました。

ゆのはまへ行つてべんとうをたべました。海の波がくるとみんな岡の方へにげて行きました。

かえりには善宝寺を見て、また大山の停車場で乗って藤島停車場で下りました。

家にかえったのは七時ころでした。

私どもの学校

大正十年度
尋三年 成澤せつ子

私どもの学校は、わたまへのまんなかほどにあります。わたまへの学校は、ほかの先生がたから、よい学校だとほめられます。

私どもの教室では、六十三名の生徒が一人の先生からまい日きいています。

学校では(屋根が)こぼ屋根だのをこんどはかわらにとりかえましたので、大そうりっぱになりました。

霜

大正十年度
尋三年 大瀧須恵野

今朝は大そう寒いので、外に出てみたら屋根の上に霜がまっ白でした。菊も赤い花びらに白みがさして来ました。霜にあたったからだろうと思います。

橋には霜がまっしろで、私どもはその上をすべつて来ました。あんまりすべつて、私がころぼうとしました。犬は朝から元氣よく走っていました。

だんだん日が照ってきて、そのへんの霜がだんだんとけて来ました。道の悪い所には氷がはつて、私どもがそれの上がったらみんなやぶれて、その中からきたないどろ水が出て来ました。

ひるころになつて暖かくなると、みんなとけてしまふのです。

いわゆる「なりきり」作文もあります。何になつたつもりで書いているかあててみましょう。←

?????

大正十年度
尋三年 小野寺慶治

私は島に植えられています。そして、だんだん大きくなるとききれいな花がさきます。それで、ちようちよが私を見つけて、私の頭の上にあがつたり、又、ひらひらととんでいって、ほかのあたまとまったりして居ます。

私に実がなると人がきてすつかり取つてたべますから、大そういとうございます。それでも私は死にません。(また)実がなります。

それでも、年を取るとだんだんなくなります。それで、うちの人はこまるでしょう。

題は「よど豆」(えんどう豆)でした。 大戸

僕のうちの馬

大正十年度
尋四年 富樫 吉郎

僕のうちの馬は、今年十四才になりました。よほど年もとつたので、元氣も弱っています。僕はだそうこまつて、或る時父に向かつて

「馬を買つたらよいではありませんか」と言つたら、父は

「元氣のよい馬を買つてみせるから、おとなしくせ」と言いました。

僕は、どんな馬だかわからないから、馬を買うのを楽しみにして待つています。

どんな馬を買うのか。やせた馬か、太った馬か、力の強い馬か、中くらいの馬か、力の弱い馬か、力の強い馬か、この五つのうちのどれかであろうと僕は思つて待つています。

……どんな馬かずいぶんしつこく考えて書いていますね。期待の大きさが伝わってきます。 大戸

文集第一号の尋常4年生のページには「生きもの」を題材にした作文がかなりありました。そこで、この号は「生きもの特集」にしてみました。

燕と蟬

(大正一〇・六・一八)
尋四年 佐藤 元蔵

暖かくなってきました。燕が今は盛んに苗代の上や田の上をピイピイさえずりながら、虫を食って飛んでいます。又、電線にくっついていたりもありません。

燕は暖かな所が大そう好きですから、毎年春おそくなる、海や山をこえて、何千里もある遠くから飛んで来るのです。中には死ぬのもあるでしょう。

燕は大そう人の役に立ちます。

第一、虫をとって食べます。そうすれば田のためによくて、稲はずんずんのびます。

私どものうちに巣をつくって、うちの人のようかわいくなりません。

*

この間初めて、蟬の鳴く声を聞きました。蟬は木の上の方で、うれしい声で鳴いていました。

私は、ああ、今度は蟬の鳴く時節になったと思った。去年は、蟬をしめて、はらの所を糸でつないでくしめたことがあったが、今年はそんなことはしません。色は黒いのかば色のまじったような色です。

蟬は大そうかわいらしい虫です。

虫の声

(大正一〇・九・二八)
尋四年 齋藤美恵子

秋になりましたから、かわいらしい虫も出て来ました。私が、夜、勉強していると、馬おいやこおろぎなどが、かわいらしい美しい声を出して鳴いていました。私は、その美しい声を聞くと涼しそうな心持ちがします。

私がまだから外を見てみると、一匹の馬おいがまく(カーテン：大戸)の外に来て鳴いていました。

馬おいは、この長い秋の夜を鳴き通している虫であります。私も馬おいに負けないで勉強します。

蛍がり

(大正一〇・六・二九)
尋四年 榎本おみえ

私は、きのう蛍がりに出ました。お友達、私と三年のつ子さんとよし子さんと、としゑさんと行きました。

三人で遠くの方にいきますと、蛍がたくさんいました。私どもはあぜみちにおりてとりました。

その晩は大そう雲が晴れて景色がよいのに、蛍の光のキラキラしたのを見ると、大そう景色がひきたちました。そして、たくさんとりましたが、うちに来てからみ

んなで分けました。

私に九匹、つ子さんに十一匹、としゑさんに十四匹、よし子さんに九匹ずつあたりました。

私は蛍がりがだいすぎです。

蛍

(大正十・七・十八)
尋四年 近藤 治作

このごろ、理科で蛍を調べました。蛍という虫はおもしろい虫です。私は四年生になつてはじめて蛍のからだを知りました。

蛍の羽は四枚です。上の羽は下のやわらかな羽をもっているのです。とぶ時は上の羽を上げます。足は六本あります。前の二本は長いのです。

光ったり消えたりしますが、光る時はいきをすう時で、光らないときはいきをはくときです。私は蛍をかわいらしくてなりません。

私のうちの鯉

(大正十・九・九)
尋四年 佐藤 豊恵

私のうちには少しばかり鯉が居ます。赤くて大へんかわいらしゅうございます。そして、水の中でおよいでいますが、鯉はふわふわと動いています。

やきふやそうめん等をやると、大きな口をあけてたべます。隣にいた鯉がじぶんもたべたくなって、二匹でけんかのようにしてたべる事もあります。ですから鯉の居た所にもついでついでにたべさせるようにといて、笑いながら話をした事もあります。

朝早く起きてその鯉を見ますと、目がさめるようです。学校から帰って行くと、すぐ、まず何よりも早く鯉を見ますが、誰か水を取りかえてくれたのか、水はきれいになって鯉も心持ちがよいようにおよいでおります。

私は鯉が大好きです。けれども、たべるものではありませんよ。

母鳥とひな鳥

(大正十・六・十五)
尋四年 富樫まさい

母鳥がひな鳥を呼ぶときには、「ここここ」と呼びます。(こんなことを言っているのです)

「子どもたち子どもたち、おいしいごちそうをたべさせるからおいで。仲よくおたべ。たんとおたべ、仲よくおたべ。そんなにピヨピヨなかないでおたべ」朝のごはんがすんだら、

「お昼や晩のごはんはまたあとで」といいます。

どの作品からも、豊かな感性と純粋でやさしい気持ち伝わってきます。ほのぼのとした気持ちになりながらワープロを打ちました。

慈しむ心がいいですね。

大戸

一日の朝

(大正十・二・三)

尋四年 井上 幸吉

朝まだ暗いうちに、もちをあぶっていると、おかあさんが

「幸吉や、お前もこんど十二になったぞ。おとなしくせいや」と言った。

先生はお年を取って(今年)いくつになったんでしよう。やっぱり、もちをあぶっているかも知れない。面白いと思っただことがある。

朝、いろりのそばで、もちをあぶっていると、もちがあわのようにふくれました。

それを私がとって猫の鼻先の所にやると(猫が)それをぱくつと食ってしまった。するとあついで、猫はすたばたする。(猫は)手でもちをとろうとするが口にひつついてとれない。おかしくておかしくて、たまりませんでした。

猫の様子を想像して、思わず笑ってしまいました。皆さんはどうでしたか？

理科しらべ

(大正九・七・二〇)

尋四年 高橋勘治郎

昨日は理科で「えんどう」をしらべました。ほかの学校からも、先生方がたくさんお出でになりました。えんどうの花は蝶の形をしています。

葉は羽形であります。

根にはたくさん玉がついています。

実は大そううまい物です。わたしはごくすきです。

ほかの先生方が、いっぱいいらんでいる所で答えるのは、よい気持ちがありました。私は理科がすきです。

調べてみると、渡前小は、大正九年に師範学校附属小学校の梅本八郎先生を講師として、理科の教授訓練を受けている。

他校からも多数の参観者が訪れたようである。

そうしたことが実り、翌年、県より優良校としての表彰を受けることとなる。

ここで私は日付を間違っして記していたことに気がついた。

実は、文集には月日しか載っていないかったのに私が「大正一〇」を書き加えていたのです。

ところが、この文集は、大正一〇年の七月に発行されたものです。ということは、大正一〇年の七月に書かれた作文が載るはずがない。全くの不注意によるミスです。

これまでの四号までの作品は、全て「大正九年度」に書かれたものです。
この号から訂正しました。(すみません……)

私の人形

(大正九・八・一五)

尋四年 成澤 よき

人形は、人の形をとってこしらえた物である。毎日毎日同じで、ちっともかわらないが、着物の別なのをきせると少し別になる。

顔はいずれも桜顔で、髪はさげているのもあるが、髪をゆつてくりをかけているのもある。いつ見てもおとなしい顔をしている。

人形の着物はたもとの着物である。おびは黄色である。小さい人形もたもとの着物をきて、はかまをはいている。

ある時は体操をさせたこともある。そのお人形は、お母さんから買っていただいたのである。私を買ったのと二人いる。

今朝の天気

(大正一〇・一・一〇)

尋四年 本間直治郎

もう雪もきえてきた。いよいよ春だぞと思つたら、こんな大ふぶきになった。

今日は、大そうなふきだ。隣の家まで行くのもおもやみだ。野原に立っている電信柱もひいひいと、うなっている。

昨日はよい天気で、大そうよかつたが、今日はこんなひどい天気だ。私たちが学校に来る時などは、大そうなめにあつて、ようよう来た。

私どもの村から学校までは大そう遠いので、ふき山がいくつもあつた。中には、こしまでものがつたのがある。しかし私は、四年生になってから一日も休んだことがないから、こんな天気(が、なんだ)と元氣を出して来た。

ふき・おもやみ・のがつた・・・などの方言が生きています。どんな意味かわかりますか。
昔の子どもは、本当にたくましいですね。

春の景色

(大正九・四・一六)

尋四年 小林 すみゑ

春になったから、だんだん暖かになりました。きのうまでは雨がふっていました。今日はたいへんお天気がよいので、空も青々としています。

どこの山を見ても景色がよくておもしろそうです。道のわきには草が青々としています。

外のうちのくずやねからはいきがたっています。人は田で馬をひっぱって、ばこう(馬耕)をおこしています。小川はどんどん流れて行きます。

「くずやねからはいきがたっています」などは、実際に見た人でないと書けない。なるほどと思いましたが。まさに春を感じさせます。
大戸

この「温故知新」を楽しみにしている人がふえてきているようです。

何人かの子どもから「うちのひいおじいさん（おばあさん）の作文ものせてください」などと注文されました。また、病気で寝ているおばあさんの枕元で作文を読んであげたという話もお聞きしました。法事の際に仏様に供える予定という話もお聞きしました。

そんなお話を聞くと、益々やる気が出てきます。しかし、困ったことがあります。

この『わたまへ』という文集は、全員の作文を載せてはいけません。

この文集を刊行された第八代校長 大沼與吉先生は巻頭言で次のように述べています。

・・・皆さんの綴ったもの、中で割合によく出来たと思ふのを・・・「よい出来」ほんとうに沢山ありました。これを皆入れたかったがお金に限りがあるので、それも出来かねました・・・

だから、残念ながら「うちの・・・」というリクエスには応じられない場合もあるのです。

そこで考えました。五号までは、私が適当に選んで掲載していましたがそれを次のようにします。

—— 文集にある全員の作文を掲載する。

ただし「全部」ではなく「全員」です。

というのは、その年のその学年に、同じ人の作文が複数ある場合があるのです。そういう場合は、一つだけしか掲載しませんという意味です。かなりの量になると思いますが、出来るだけ多くの人の作品を紹介していきたいと思っています。（大戸）

もう春になった

大正十年度

尋三年 加藤おとめ

もう春になってきました。

春になってきたので、小さな子どもたちでもあそばれるようになりました。

それからうめの花がさくと、うぐいすもうめの木でなきます。

みちばたには、つんべ（これは何かな？大戸）が小さな葉を出してきました。

たんぼへ行くと、みちはかわかわとかわいていました。もちぐさもはえていました。ぼんけもはえていました。ぼんけは、もうすぎてきたのもありました。

ぞうりもはかれるようになりました。木がおおおとしてきました。

★みち（道）はかわかわとかわいて（乾いて）いました・・・と読めましたか。「かわかわ」は方言かもしれません、なかなか感じが出ますね。

私の人形

大正十年度

尋三年 小関 つぎ

私は人形が大好きです。

この人形は、おばあさんがおみやげに東京から買って来たのです。

目はぼつちりとして、顔は色白です。口は赤い口もとであいらしゅうございます。

着物はごろ（布の種類）の着物を着せておきます。おびもごろです。かみはつけがたです。

「つけがた」とは、どんな髪型かな？

日記

大正十年度

尋三年 齋藤金三郎

四月二十八日 水曜 雨

昨日から日記をつけることにしました。

昨日、あかんぼうがさかきをそった時、あかんぼうがさわいたので、目の上が切れて血が出ました。

私はかわいそうだと思ったが、学校がおそくなるかと思つて、さつさと急いで来ました。

学校から帰ってくる時、さくらがきれいにさいて居ました。

赤ん坊はどうなったんでしょうかね。

日記

大正十年度

尋三年 押井みさを

四月二十八日 水曜 雨

昨日、私が学校からかえつて、こうせんをたくさんくつて居ると、ねえさんが私をわらわせました。私は「くしょん」とでました。

ねえさんが私をわらわせたから、私もわらわせましたが、ねえさんはわらわせても「くしょん」とはでませんでした。

「こうせん」とは、粉菓子のことでしよう。私も食べた記憶があります。

「くしょん」とは、むせて吹き出してしまった咳やくしやみのような音だろうと想像しました。

私のうちのうさぎ

大正十年度

尋三年 渡部おとよ

私のうちのうさぎは、白いのもあり、ねずみいろのもあります。うさぎのおやが二ひき居ます。子が五ひき生まれました。

うさぎはかわいいものです。うさぎは、耳は長くてからだは小さいのです。

うさぎは、びよんびよんはねます。（学校にいて想像しても）うさぎのはねるところが見えるようです。

★今も昔も、うさぎは子どもに人気がありますね。

平成十四年度も継続して発行します。

ご愛読をお願いいたします！

完全学校週五日制のもと、新指導要領による新しい教育が、本年度よりいよいよスタートしました。

こうした変革の時期であればあるほど、この「温故知新」は価値は増していくと思っております。(大戸)

冬の寒い時

大正十年年度

尋四年 菅原喜之助

今は冬ではないが、冬になったら、どんな寒い顔をするだろう。

学校に行く時も帰るときも、ふきの吹く所を走って歩かなければならない。走って歩きながら物をおとす事などもある。

ふきが吹いて自分の村が見えないようなときは、電信柱がうなるような音をたてる。そんな時は、とても帰られないような気がするものだ。しかし、出てみると思つたようではない。

私は、冬になるのがいやでならない。

当時の「ふき」のすごさが伝わってきます。

私の見た牛

大正十年年度

尋四年 佐藤 恒治

私は、道で大きな牛を見たことがあります。

大きな角が二本あって、いやな目つきでじろりじろりと私を見ていました。

腹やのどは土(地面)につくほど肥え太って、短い足のたりのたりとあるいて行きました。

短い作文ですが、見たことを上手に表現して

兎

大正十年年度

尋四年 本間 利明

兎はほんとかわいらしい動物です。

僕のうちにはいませんが、米吉君のうちや清一郎君のうちのを、なんべんも見たことがあります。

毛は白く、眼は赤くありました。子は一度に七、八匹もつそうです。子はねずみのようでしたが、まっ白で、ちよこちよこあるくあたりは、子は親兎よりもずつとかわいらしいものです。

子兎のまだ眼のあかないのを見たこともあります。目があかないものだから、ちちをのむ時には、親兎の腹の下にくぐって、口のさきでさがして、やっとなつてのむのでした。

兎というものは、まことにかわいらしいものです。

☆ なかなかよく観察しています。とくにゴシツク体にした部分に感心しました。

春の景色

大正十年年度

尋四年 山口 藏治

冬もだんだんすぎて、春になって来ます。春になると暖かくなってきます。

梅の花が咲きますうぐいすが梅の枝にとまって、ホーホケキョホーホケキョと鳴き出します。

桜の花も咲きます。桜の花がちらるようになると、ちようちよが飛びまわります。ちようちよがとぶのは、雪がふるようです。

草も大きくなって花が咲き出します。すみれやたんぽぽや色々な花が咲いて、花のむしるをしいたようになつて大そうきれいです。

風は暖かで、春はほんといいい心持ちがします。

私のうちの赤ちゃん

大正十年年度

尋四年 近藤こしげ

二月二十二日に、私のうちのお母さんが赤んぼうをうみました。私のうちの赤んぼうは男の子で、なまえは吉郎です。今は一つです。私は、学校から帰つていくと、赤んぼうをおぶいます。

私のうちの人が、赤んぼうが一番男ぶりがよいといっています。

私は赤んぼうをだいたり、おぶつたりして赤んぼうをだまします。私は、赤んぼうを大そうかわいがっています。私のうちの赤んぼうは、今いじめにはいっています。

今いじめにはいっています・・・とは？

私のうちのおじいさん

大正十年年度

尋四年 押井 清女

私のうちのおじいさんは、七十二才になりました。

私は、学校から帰ると勉強をして、それから、おじいさんから赤んぼうをおんぶさせてもらいます。

私が赤んぼうをおぶっている間、おじいさんはお庭をはいたり、ご飯をたいたりして待っています。

うちのおじいさんは、大そうよいおじいさんです。

着物を送ってやる文

大正十年年度

尋四年 押井おふさ

お手紙いただきまして、ありがたくはいけんいたしました。

あなた様はご丈夫で、毎日学校へかよっているそうですから、私は大そううれしゅうございます。

あなた様のおたのみの通りの物を買おうと思いましたが、望みの品物がございますでした。それで、大へんおきのどくですが、しろにみどりの形のついでいるのを買いました。

☆ その着物は十五日ごろにとどけます。さようならいつ実社会に出てもいいように、このような文の書き方も練習させたのだと思います。(大戸)

もう春になった

大正十年度

尋三年 渡部 金一

せんだつて、うぐいすが私の家のきんじよの梅の花を見てとんで来ました。そして、ポーホケキョーと、きれいな聲を立ててうたいました。

それは、節句の朝ごはんをたべてからのことです。それから、私が「うぐいすが来た」というと、おばあさんと子どもたちが出て来ました。

五人でたのしんで見ていると、きれいな聲を立てていたうぐいすが、ばあたとんで行ってしまいました。

節句・・・おそろく端午の節句、五月五日か？

うさぎ

大正十年度

尋三年 富樫幸三郎

私のうちのうさぎは大そうかわいいうさぎです。

朝、私がうさぎに物をくると、かわいい顔を出して食べました。そして、私が庭であそばせると、うさぎはぴよんぴよんはねました。私が手を出すと、私のそばによつて来ます。うさぎは大そうかわいいものです。

うちの赤ちゃん

大正十年度

尋四年 佐藤 さつ

うちの赤ちゃんは大そうかわいらしゅうございます。私はうちの赤ちゃんを一番かわいがつて、学校から帰るとすぐ「ただいま」をして、あまぐもぬがないですぐいじめのそばへよつてあやしてあげます。するときれいな顔をしていじめにはいつて、にこにこしながら「うまうま」といいます。

私があまぐをかけに行くときすぐ泣き出します。

私は「そんなに泣かないものだ」といつて、また、そばによりますと泣くのをとめます。私が少しでもはなれると泣くので、何かおもちゃでもあずけてから用事のある方に行かなければなりません。

私のうちの赤ちゃんは去年の五月三日に生まれたので、今年は二つです。私はうちの赤ちゃんを一番かわいくあります。

私のうちの赤ちゃん

大正十年

尋四年 阿部千代女

私のうちの赤ちゃんは大そうかわい赤ちゃんです。私が学校から帰つていつて、泣いている時には私がいってやりませす。「ねんねんころころねんねこせ」といつてだくとときもあります。

おぶつてたんぼに遊びにゆく時もあります。ねえさんがおぶつてゐる時は、家の中の座敷やえんがわで子もりうたをうたつております。

お座敷やえんがわにいと涼しい風が吹いて心持ちがよいから、お座敷やえんがわでだましてゐるのです。

初めて理科をやつて

大正十年度

尋四年 阿部 玉子

私はこの間初めて理科をおならいしました。

私は理科などは面白くないと思いましたが、なかなか面白く感じました。

私は（今は）理科がだいすきです。又明日も理科があるので、私は何の花をおならいしますかたいへん楽しみです。

この花の中には何があるか、皆しらべるのです。それが面白く感ずるのです。（たとえば）梅の花にはおしへもめしへもあるのです。

シリーズ 大沼與吉校長 その書

この文集を創刊した、本校第八代校長の足跡をまとめた本が「長沼郷土史研究会」から発刊になり、渡前小学校にも贈られてきました。

なかなか偉大な教育者だったようです。

その本の中の「生涯のあらまし」を何回かに分けて抜粋して紹介させていただきます。

*

大沼與吉は、山形県東田川郡長沼村の出身である。

明治二四年九月五日、父倉治と母桑野の長男（八人兄弟）として生まれた。・・・略・・・

與吉が長沼尋常高等小学校に入学したのは、明治三一年四月、卒業したのが三五年三月である。修業年限は尋常科四学年・高等科三学年であるが、学級数は、尋常科三学級・高等科一学級で、教員は、北楯校長・鈴木・野沢・芳賀の先生方である。

明治三二年の生徒数は、尋常科男一一六名・女三〇名、計一四六名。高等科男三七名・女三名、計四〇名。総数一八六名である。・・・略・・・

與吉、高等科三年の明治三七年、日露交戦となり、経費節減のため、高等科が単級となる。教員は、廣木校長・鈴木・藤森・加藤の先生方だが、一致和合して課外授業にもあたられてゐる。・・・略・・・自学や相互学習も取り入れられ、恐らく與吉は先生の助手的立場にたたされたのではないか。

與吉は、明治三九年三月、長沼尋常高等小学校を卒業。体格もよく、読み・書きすべてに優れていた。出来物な子どもと言われた。高等科在学時のテスト・図画などの作品がのこつてゐる。

與吉在学中には、妹くらよ・かほるも同じ学校にかよつており、勉強好きな與吉は、決められた農作業をさつさと終え学校へ出かけるものだったと語つていた。明治三九年、数えで一五歳を迎えた與吉は、子どもにない家督を相続していた伯父作治と養子縁組をした。・・・略・・・養父の作治夫婦は、長沼小学校前に二階建ての家を建て駄菓子などを商売し、ミセネと呼ばれていた。

(つづく)

昨日の雪中運動

大正十年年度 尋五年 成澤 豊作 (柳久瀬)

昨日(一月十九日)は、たいそうよいお天気であったので、全校の生徒は先生方と一しよに散歩に出かけた。それは、西の方のたんぼであった。

学校を出る時はみんな大元気で、みんな愉快に出て行った。雪はもうかたくて、何人あるいても走ってもプツリともしなかった。

鏡のような氷があつて、ころんだものもあつた。その人が顔色をかかわらせて、

「こんな所に来ては、なにもおもしろいことはない。

こんな所にこなかったらよかつた」

といった時は、おかしくてたまらなかつた。

それでも私どもは大元気で走ったりすべったりしてたいそう愉快であつた。

が、又、心配でもあつた。なぜかという、あんまり天気がよいので、じきにグチャグチャになると思つたからである。そればかり心配であつた。

和名川のお稲荷様は、昨日はじめて見た。あのほらあなが、もし、きつねがほつたとすれば、きつねは人よりすぐれたところがあると思つて見てきた。

天気の良い時に時々こういう運動をすることは、からだのために大そうよいと思つた。

和名川のお稲荷様の近くに、まだ「ほらあながあるのかな？」

僕のくせ

大正十年年度 尋五年 宮崎 龍隠 (渡前)

僕のくせは色々ありますが、一番得意なのは口笛です。家の中でいつも口笛をふくので、母にうるさいとしかられます。その時はよしたつもりで何かやっていると、又うるさいとしかられるので、びっくりすることがあります。

自分のくせというものは、なかなか直すことがむずかしいものです。

私の家

大正十年年度 尋五年 中山 良吉 (渡前)

私の家は東渡前で、南のはずれにあります。

私の家は北むきです。その前には久次郎君の畑があります。久次郎くんの畑には、菜種菜や大根などが植えてあつて美しそうです。

又、うしろには寺の森山があつて、まことにさびしい感じがします。

前には美しいつぼがあつて、そのわきには豚小屋があります。豚は毎日グウグウとないて居ます。又、馬もおりますが、この馬は来年あたりにとりかえるといふことです。

★この作文で、良吉さんの家の場所がわかりますか？

私の方の村

大正十年年度 尋五年 武田はるよ (砂塚)

私の家の村は渡前村大字砂塚という所です。人家は十三軒で、人の数はざつと九十人居ります。村人は大抵農夫であつて、朝は早く夜はおそくまで一心に働いて居ります。

学校にはいつている人は男も女も皆で十五人である組長は、武田たかゑさんであつて、私どもに大層親切をつくしてくれるので、皆よろこんで学校に来ます

現在の数字と比較してみると.....

朝起き

大正十年年度 尋五年 井納おしげ (荒俣)

朝早く起きれば、よい空気をすって気持ちがいばかりでなく、家がだんだん盛んになります。

それと反対で朝ねをすると、からだがなまけて気持ちがわるく、仕事もはかゆきません。また、下男や女までもなまけたり、悪いことをしたりしますから、家はだんだん衰えます。

昔、西洋のある農夫は、朝ねをして財産をへらしたが、友だちのおかげで気がついて早く起きるようになったので、財産を取り返したという話もあります。

われわれは今から朝起きにくせつけて、気持ちよく働くようにしなければなりません。

お月様

大正十年年度 尋五年 齋藤みよき (渡前)

私は、今までなんにもしらないで居つたのはお月様のことです。それを、私はこのごろの夜、蛍がりにいつたときに気づきました。

私が走るとお月様も走りました。私にとまるとお月様もとまりました。

お月様は今まで思っていましたよりも面白いものだと思います。お月様は、私のかげを地べたに面白く写しています。

?????

大正十年年度 尋五年 富樫さだゑ (箕升)

私は「○○○」と申します。

私は店にかざられて居ましたが、人に売られ知らない家に行きました。そして、なべに入れられてグジグジとにられました。私は熱くてたまりませんでした。

私をにあげると、その日におばあさんのおせんにつけられて、その晩に色々な物を入られました。ごはんを入れたり、お湯を入れたり、さまざまな物を入れてくれました。私の仲間もいました。

なりきり作文です。題は何でしょう。↓茶わん

学校の模様を知らせる手紙

大正十年度

尋五年 阿部富三郎

だんだん暖かになって、梅や桜などの花は散って来ました。此の頃は、雨が降ったり、天気になったりして、大そう悪い時期であります。

あなた様は丈夫でいらっしゃいますか。私は丈夫で毎日学校に通って居ますから御安心ください。

学校は、もと、あなた様がいらっしゃった時よりも大へんちがつて居ます。西体操場には瓦をのせましたその中には、電灯が二つついています。

先生方も大分おかわりになりました。矢田部先生は今年の三月におなくなりになりました。又、長南先生や石川先生や荒木先生は、ほかの学校に御出でになりました。

私どもの教室は、二階の一番西側にあつて、土肥先生からお習いして居ます。

それから、唱歌室もかわりました。又、新しく理科室も出来ました。

これからだんだん暑くなるにしたがつて、悪い病がはやりますから、御からだを御丈夫にしてください。

学校の模様を知らせる手紙

大正十年度

尋五年 小野寺鐵吉

此の頃はだそうわるいお天気であります。

圓治郎君は御丈夫ですか。

私は丈夫で居りますから、何とぞ御安心ください。

圓治郎くんは、今は何をしておりますか。

私は、やっと五年生にあがったのです。五年生になったものですから、大そういそがしくなりました。

学校も、その後よほどかわりました。屋根には今さかんに瓦を上げております。

先生方もかわつて、私は今、土肥先生からおならいをして居ます。そのほか伊藤先生と小林先生がお出でになりました。

此の頃はだそうわるい病気がはやるそうですから、圓治郎君も御丈夫でいて下さい。さようなら。

手紙の書き方を覚えるための課題作文でしょう二人とも、転校していった友達を想定して書いています。圓治郎君は実在したのかな？

朝顔

大正十年度

尋五年 丸山 安治

私の家にも朝顔があります。毎朝美しくさきます。色は赤と青の二色ですが私は、どの色も好きです。

私は毎朝早く起きて水をかけます。

朝顔は、ほんとにきれいな花です。今日も赤四つ青七つさきました。人の心も朝顔のようにきれいにしなければなりません。

私のうちの蚕

大正十年度

尋五年 山口 芳美

私のうちでは蚕をかうというので、お母さんが鶴岡に種紙を買いに行きました。

かえつてくると種紙をだして「これは、こうはいい種であつて、二十五日頃生まれる」と言うのであつた。

二、三日ぐらいになつて、たくさんうまれていた。見れば、くものようで、からだがいみなまっ黒であつた。それから、私がやわらかい桑の葉を取つてきて、細かくきざんでくわせました。すると、たべました。

だんだん日がたつと大きくなって、桑の葉もだんだんたくさんたべました。こんどは、桑の葉に上がりはじめる様になりました。

上がつて来る頃になると蚕のからだがかさみ通る様になりました。そして、桑の葉をたべないで、頭を上げながら繭をかける所をさがします。

それをひろつて「まぶし」へうつすのです。少しでもおくれると、かごのうらやたなのすみなどで、繭をかけるはじめますから、ちつともゆだんできません。

だから、お母さんもお父さんもこの蚕が上るまでには、夜もろくろくねむらないそうです。

「まぶし」とは???この「まぶし」に移すタイミングが難しいようですね。

シリーズ 大沼與吉校長 その式

明治三一年四月。酒田大地震後、新築されて二年目の真新しい校舎に入学する。校長は、北楯大二、大柄な與吉の担任はどなただったであろうか。：：：略：：：入学生徒数は、男五六名・女九名、計六五名である。女兒の就学は依然としてふるっていない。この年の不就学者は、男一八名・女一六〇名で、その就学率は、男八九・二八%、女一一・一一%である。

明治三一年、昨年の大不作により費用の増加を見ず。校長俄然退職せられ、爾後職員の変更甚だ多くなる。後任者、青年壯者なれば生徒も勇壮快活の氣著し。

：：：略：：：(長沼小学校の歴史のひとつコマです)與吉の高等科入学は明治三五年四月。入学者は二六名である。第四学年卒業時は七名である。

明治三七年日露交戦となり、経費節減のため職員も四名となり、生徒も落穂を拾い、これを売り学校費用の一助にしている。又、三八年は村農会に螟虫の蛾を売っている。当時は、勤勉節約の教えを受け、貯蓄が奨励される中で勉強している。：：：略：：：

明治三九年、與吉高等科卒業。加藤準訓導理科実験準備の為負傷し、六〇日間治療したれども遂に左眼を失明するに至りぬ。

註「螟虫：めいちゅう」ずい虫：どんな虫なんでしょう。その虫の蛾がなぜ売れのでしょうか。(大戸)

修学旅行が近づいてきました。

五月十六(十七)日 仙台松島方面に行きます。

そこで今回は、文集の中から、修学旅行のことを書いた作文を探してみました。

第四号(大正十三年度版)にありました。当時は、高等科二年(現在の初二)で行ったようです。

小学生にはちよつと長すぎて、しかも難しいかもしれませんが、できるだけひらがなに直してのせましたので読んでみてください。

旅行日記

大正十三年度 高二年
高橋 米蔵(和名川)

五月三日。ぼくは、朝の午前四時に起きて、まず、第一に天気がよいか悪いかを見ました。

天には小雲一つなく、星が多くひかひかと光を出している。また、東の方を見ると山々にはうすく横雲がなびいているので、ぼくは、あら、今日は最上の天気と見受けたので、すぐ家にかけてこみ、母に行く用意をしてみました。それから、ゆっくりとごはんをたべて、家の人一同に行くということを言って、又、わすれものがないかをしらべて、ないので家を飛びだしました。

停車場の方へ向かっていくにはよい道がないから、細い悪い道を歩いて鉄道道に上がって停車場に向かつて急いで行った。

停車場につくと、だれもいなかったの、どうしたのかと、まず心配していた。ところが、停車場の時計が五時だったので安心した。まだ時間が早いからだと思つた。

少しすぎると、金三郎君が来ました。二人して色々話をしているうちにだんだん生徒が集まってきた。又先生方も来て汽車の来るのを待つていた。

そうすると、見送りの先生も多く来て、汽車にのつてさようならをした。藤島停車場をはなれた。

汽車に乗ればまず安心して、汽車のまどからひろびろとした野原をながめていると、馬耕をしている馬が驚いてはねあがり、人をどんどんしぶいて、土人形のようにされていた人もあつた。

余目についたのでおりて、新庄行きのをまつていた。まもなく新庄行きの汽車が来た。その汽車にのつて陸羽西線の鉄道に向かった。

余目から狩川、清川、津谷、升形、新庄に行く間は主に山谷や川を渡ったりして、非常にゆかいに感じた。又、トンネルがあり、今ぐりあげたと思うと又トンネルが、又も又もとトンネルが多くあつて、ずいぶん面白くて、又来たいと思つた。

新庄についた時は午前十時であつた。：：略：：

停車場から少し歩いて庄内館に道具をおいて新庄の高等小学校の大運動会を見た。見ていると、風俗や言葉が少しちがつていた。高等小学校から庄内館に帰り

昼ごはんを食べて、午後零時の小牛田行きの汽車にのつた。その鉄道は陸羽東線である。

新庄を出発してから窓の外をながめていると、あとから山形行きの汽車がやってきて、だんだんにぼくらののつている汽車に追いついてきた。もう追いつかれると思つたら、ぼくらののつている機関士が、後から追いついてくるのを見つけたと見えて、どちらも早め競争となつた。その時は、目がくらむようであつた。向こうの機関士がぼくらの「負けるな、負けるな」と大声でさけんでいるのを聞いて笑つていた。だんだんと汽車ははなれて、ついには見えなくなつてしまった。新庄から小牛田に行く間はずいぶん暖かかつたので中途の停車場で水をくんでもらつたりしました。

：：略：：小牛田から仙台行きの汽車にのつた。ぼくは知らない人の間にはさまつてしまつたので、何もはなしができません、その時は非常につらかつた。だまつて話を聞いていると、その二人は静岡県の人であるといつて話をしていた。

それからまもなく松島駅についた。汽車の中から見ていると、ぼくらをのせる電車が来ていた。汽車からおりて、まず電車を見た。見たこともなければのつたこともないから、その時の気持ちはどうたえようもなかつた。電車にのつてみると、汽車よりもたいへんふれてあつた。(ゆれる)ふれるからであるか、持つところがあつた。：：略：：

松島村についた時は雨が降つていてたいへんであつた。：：略：：宿の二階に上がつて松島の景色を見た。けれども雨が降つて美しい景色とは思わなかつた。二階の中に松島の絵はがきを売る人々がいたので、そこで絵はがきを買つた。：：略：：ごはんを食べるときになると下女がわんわんしゃべつて、とてもゆっくりとごはんを食うことができなかつた。：：略：：湯に入つてそこにつきました。夜はいろいろ話をして面白かつたです。

長いので書ききれません。以下、旅程のみ。

五月四日(二日目)

瑞巖寺↓雄島↓五大堂↓小舟で松島出発(午前十時)
↓塩釜到着(午前十一時) ↓塩釜神社↓塩釜停車場発
(午後零時五十分) ↓仙台停車場着(午後一時) ↓宿
↓軍隊のあるところ↓青葉城址↓林子平の墓(ここで
不法なことをして先生にしかられる) ↓県庁↓宿

五月五日(三日目)

仙台停車場発(午前八時十五分) ↓新庄↓余目
：：略：：余目の停車場で藤島行きの汽車を待つてい
る時に、昨夜、渡前の工場が火事で焼けてしまつたとい
う話をしていた。そこでぼくらは火事場を見に行こう
と思つて汽車にのつて藤島についた。その時、時間は
午後四時でした。：：略：： (長い旅でした。大戸)

電灯

大正十年度

尋五年 榎本 安治

電灯はこの家にもついています。私のうちにも一つついてます。ポンプ小屋や道などにもついています。朝と晩には一ぺん消えます。

電灯はランプとちがつて、勉強するに大そう都合がよいのです。時々消えることがあります。その時は近所の人からすぐに直してもらいます。

つぎ物をしたり、わら細工をするに便利です。電灯は庭や台所やへやなどに持って行かれます。しかし、電灯はあぶないから、よく取り扱わなければなりません。

電灯は庭や台所やへやなどに・・・この電灯はかいちゆう電灯ではありません。コードを長くして家中のあちこちに持っていったのです。 大戸

私のうちの柿の木

大正十年度

尋五年 菅原てつゑ

春にわずか青いめを出してあった私のうちの柿の木は、もう花がすぎて小さい実になりました。

その種類もさまざまであるが、あま柿が六本、しぶ柿が十一本です。

しぶ柿もあま柿も今年はたくさんになりました。去年もたくさんなつたけれども、小さいうちに半分ほど落ちたのです。今年は、去年の二倍ほどになりました。

どんな小さい木でも、私どもの背くらいのも、みんなになりましたので今から楽しみにしています。柿は、どんなしぶくともさわしさえすれば食べられます。

旧師に送る手紙

大正十年度

尋五年 瀧澤喜久治

この頃は御手紙を下さいまして、まことにありがたく御礼申し上げます。

先生の方では、よほど寒くなったでしょう。私の方では、先生も生徒も皆丈夫でありますから御安心ください。

今は稲かりもできて、たいていのうちでは稲あげをしております。もう、かりあげのもちをついたうちもありましょう。私のうちでは、もう二、三日でできるそうです。

学校の運動会は九月二十八日で、もうすぎました。その日は天気がよくて、大そう幸せでした。

農学校の運動会は今日でしたが、雨が降ったのでのびたそうです。又、連合運動会は十月五日です。今は一生けんめい、その練習をしております。

これからだんだん寒くなりますから、先生には、いっそう御からだを丈夫にして、御病氣などにかからないようにして下さい。 さようなら。

何事も精神

大正十年度

尋五年 田村こよし

「何事も精神」というのは、昔から多くの人の言葉に伝わった格言です。この格言のように「一心」になりさえば、何事もできないことはありません。

一心というのは、自分のありったけの力を出し、まごころをこめてすること、学問をするにも、他のことをするにも、きわめて大切であります。

私は、この学年は八番になるつもりで勉強したけれど残念なことに九番にしかなれなかつた。まだ、一心になることが十分でなかつたからである。もっと勉強しなければならぬ。

夏の夕立

大正十年度

尋五年 佐藤みさを

庭の前にはとんぼがうれしそうにとんでいます。せみのなく声は、いっそう暑さを感じさせる。

空の雲はいそいでゆきます。するとまもなく、黒々とした雲があらわれてきました。たちまち空一面黒くなつて、かみなりがなりだしました。光がびかびか光かと思つと、雨が一時に降り出した。向こうを見るとしばらくの間は見えません。やがて雨がはれると、青い空がでてきて、草や木の葉もせいせいとして、見るからに涼しい気持ちになります。

シリーズ 大沼與吉校長 その参

與吉は、師範学校入学まで長沼小学校の欠員補充教員に採用されており、その経験が與吉の将来に大きな影響を与えたと思う。又、この頃、鶴岡の書道家黒崎研堂に師事し書道にも取り組まれている。

師範学校在学中には父の急死にあい、七人の弟妹や母のことを思い学業継続ができるのかについて悩まれ心機一転命がけて勉学に励まれたようである。

在学中、母校長沼小学校の新校舍落成式を記念して開かれた書画展覧会に出品するなど、母校思いの学生だったと評されている。

大正元年一〇月一五日、山形師範学校本科第一部を特待生で卒業。母校長沼小学校に赴任でき、お世話になつた長沼に恩返しできることを誇りにし、精一杯勤務したので、地区民や生徒の評判よく、與吉が来てから学校が見違えるようになったといわれ、学校への信頼が高められた。

大正二年には青年団が発足しており、御真影奉安庫設置にあたっては、與吉が村長岩浪安藏宅を夜明け三度にわたり、羽織袴の正装でお願いされ、その誠意と教育的情熱を買って寄付されたというエピソードがある。

大正六年には、第一回校友会・長沼村青年団連合大運動会を開催している。(つづく)

米国の排日

大正十年度 尋六年
富樫 建造 (柳久瀬)

日米両国の不和は実に重大な問題である。広い世界に正義だの人道だのと言っている米国は、表面ばかりで、その裏面は非常なる世界的罪悪をもっている国で、人道の敵である。この度、排日、排日で米国の国内は大いにやかましくなっている。

この時において我が日本でいくらががんばってもとてもとてだめである。この有様で、世界の平和が保たれるなら、平和でない国はあるまい。世界の平和を唱えている米国が、この有様で平和になれるかどうか、甚だ疑わしいではないか。

朝鮮の独立運動を後押しするようでは、日米両国の衝突となるにちがいない。

排日の談判に日本から出かけて、万一、破裂して戦いとなれば、かの米国の米の字もなくなる程やっつけなければならぬ。

そうするためには大切なものは、我々のもっている精神、即ち大和魂である。我々日本人は勇を練り、胆を養い、知徳を磨いておかねばならぬ。

ああ、米国を打ちつぶしてしまわねばならぬ。

軍国教育と世情が生み出した作文であろう。
こと(内容)の善悪はともかく、当時の六年生がこのような、大人びた作文を書くことができたことにびっくりした。

ありの共同

大正十年度 尋六年
成澤林次郎 (渡前)

庭を見ていると一匹のありが来た。いきなり土をかけるとありはようやく頭だけ出した。

そうしている所に、又一匹のありが来た。

すると、土の中のありが頭をふった。救いを求めるのである。

これを見たありは、急いで引き返した。そして、他のありを五、六匹集めて来て、ようよう引き上げた。うずめられたありは弱って死ぬようになった。他のありは帰らないで養っておった。少したつと、みんなでひいて行った。

僕は、ありは共同生活しているものと、驚いた。

楽しい海水浴

大正十年度 尋六年
本間寛治郎 (平形)

八月八日は、伊藤、本田、三浦の諸先生と海水浴をしに湯野浜に出かけました。

私は生まれてから一度も海水浴をしたことがありませんので、行く時は大元気をもって出かけましたが、心の中では何となく恐ろしさも感じました。けれど、行って見たら小さい子供がたくさん入っているのので私も今までの大元気を失わずに持ちつづけました。

しかし、海を見渡したら、沖の方から大波がよせて来るので、よほど気が弱ってきました。

その中、先生方がいよいよ泳ぎはじめたので、私も後から泳ぎ出しました。そして、波の来る方に向かって泳ぐと、波が来るたびごとに身体は上に上がりました。僕らの方の先生などは、ずっと沖の方まで泳いでいきました。私もこれからはいつそう泳ぎの練習をしようと思いました。

いかに楽しい海水浴も終わって、家に帰ったらつかれ果てて、ごはんを食べるとすぐ、よく朝まで眠ってしまいました。

蚊

大正十年度 尋六年
榎本 健蔵 (柳久瀬)

僕が毎日、楽に送っている中、一番いやなのは蚊である。どこに行っても蚊が足にたかってくる。夜眠っていても、蚊がブーンと耳のそばに来ると、たちまち目が覚める。

ある日、僕は友達と遊んでいるとき「皆さん、夏が来て一番いやなのは何でしょう」とたずねたら「蚊です」と答えた。

私も毎日は毎日のことですが、学校にくる途中、足に昼蚊にたかられるのは実にいやでたまらない。ことに面白い話などをしていっているのにたかられると、あたら話も、すぐ聞かえなくなってしまう。

蚊は、これくらいいやだ。

シリーズ 大沼與吉校長 その四

大正八年、渡前小学校に転任。翌九年より第八代校長に就任。教授訓練の研究意欲を高めるための講習会開催に力を注ぎ、教授上の改善により児童の訓育学業に大きな効果をあげた。

大正十一年には山形県より表彰を受け渡前小学校が県内外に知られ、三五〇名の視察者を迎えている。

大正一〇年、由良で臨海教授を開始したことが今日まで継続していることや、文集『わたまへ』の発行、大正十一年には武術大会を先駆的に開催している。今日の県下に誇る渡前剣道の産みの親ともいえる。

又、大正十一年開催の東田川郡教育品評会では職員の研究物で一等二点、児童の成績物でも一等二点を得るなど児童と教師が一体となり取り組んでいる教育の熱心が伝わってくる。

與吉校長の思い出が渡前小の『百年の歩み』や佐藤やよめ著の中の「先生」の欄にも掲載しており、後世にもその偉大さが伝えられている。

高橋俊二氏所蔵の一双の遺墨は、当時の與吉校長を偲ぶ貴重なものである。

大正十二年三月、東村山郡視学官に榮転。大正十四年から昭和五年まで県視学官を務める。(つづく)

停車場前

大正十年度 尋六年

鈴木正七郎(新屋敷)

停車場に行つて見ると、働かない人はいない。倉庫では馬車でどんどんと米を停車場にはこんでいる。菓子屋では菓子をこしらえている。精米所では米をついでいる。

又、配達人は汽車のくる毎に来て、荷物を持って行く。そして、停車場はいつもにぎやかである。

家も多く建つて、私が行くたびに大工がてこてこ家をこしらえている。

東田川郡の中心であった当時の藤島、そして駅前のにぎわいがしのべれます。

いつもの朝

大正十年度 尋六年

菅原 徳七(新屋敷)

日曜日の朝は早く起きられるのに、学校に来る日は何だかねむたい気がする。

朝起きると第一に便所に行く。それから鳥屋に行つてひよこを出す。それから、せきで顔を洗つて、学校道具をそろえる。それから、ごはんを食う。それでもまだ時間があれば本を見て来る。本をつつんでもまだ時間があれば、ひよこに食わせる菜を畑から取つて来て、こまざいてやる。

そのくらい朝の仕事をなせば、たいてい学校にくる時刻になる。

眠たいといいながらも頑張っていますね。顔はせきで洗つて、ひよこの世話もしています。

友の入学試験の合格を祝する文

大正十年度 尋六年

成澤 三郎(荒俣)

尋常科もはや終わりました、君は中学に入学したのであります。入学したのであるからは、勉強のことは充分にやってください。

君は小学校にいた時も成績は善いほうであると聞いていた。僕は君の入学試験の出来不出来は、全く自分のことのように心配であった。

ところが今、入学したのを聞いて、僕も非常にうれしかった。君はより以上にうれしいであろう。お祝い申し上げます。

君はこれから中学にいそしみ、僕は一生懸命に高等科につとめます。そして共に、よい成績で進もうではありませんか。

まずはお祝いまで申し上げます。さようなら。

当時、尋六年のあとには就職・高等科・中等学校進学コースがありました。当時の鶴岡中学(現 鶴岡)は庄内地方の最高学府でした。

友の怠惰を諷する手紙

大正十年度 尋六年

齋藤 安治(渡前)

春治君、入学試験など受けるって、そののん気におつてはともだめだよ。

もう三月になるぜ。入学試験の日はもう近づいてきたよ。僕は残念に思います。早く勉強してくれ給え。僕も小学校の高等科に入るつもりで勉強しているよ。僕の学校では、今試験が始まっている。君の学校でもおおかた試験が始まっていることと思う。

それ、だんだん目の前に入学試験がせまって来た。早く早く用意し給え。そして、奮発して必ず入学してくれ給え。僕はそれを待っているよ。さようなら。

兄さんと別れる時

大正十年度 尋六年

高橋おさめ(和名川)

うちの兄さんは十二月一日入営するので、前の日のうちに出発した。その日、私は学校を一時間で上がつてきて、うちの人と一緒に藤島停車場に行った。

私は兄さんと一緒に下りの汽車にのつた。兄さんは大元気でなにやら話していた。兄さんは菓子を買ってくれたが「お前はよく勉強して、よい成績をとらなければならぬ」といった。

まもなく、余目もすぎて狩川駅に来た。そこでおりた時は、あともう一年も兄さんの顔は見られないと思うと、なんとなく悲しくなった。

汽車は兄さんをのせて狩川を去つた。

別れはいやなものだが、これもお国の為と思えばしかたのないことだ。どうぞおからだを大切にしてください。下さいと祈つた。

私は次の汽車で家に帰つた。そして、きっとよい成績をとつてみせると思つた。

山形の連隊に入営したのであろう。

藤島停車場までではなく、狩川まで見送りにしています。肉親の愛情の深さが読み取れます。

俳句

春風

高橋おさめ

そよそよと たもとうごかす 春の風

春を待つ

高橋みつぎ

うぐいすの 梅の木にくる たのしさよ

ひなまつりを待つ

五十嵐みどり

いまにあの たのしい春の ひなまつり

春の雪

田村たけの

ゆきふりて 春の心も 忘れけり

はつゆめ

庄司ふさゑ

はつゆめや なにを見るのか 宝船

冬の梅

齋藤 於繁

はるなれば うぐいすとまる 梅の枝

夏

大正十年度 尋六年

工藤きよせ(上藤島か駅前)

にわとりは早くも起き出した。東の山から顔を出した朝日は夜のくらやみをやぶって、緑ぶかい夏を照らした。木々はようやく目を開いて、きらきらと葉末の露が光る。

太陽が東の山から一間二間とはなれ、強くからだを照りつけると、あせはだらだらと流れる。暑さにたえかねて、ざぶんと水の中へはいりぬるのも夏の面白い遊びである。

夜になってからは、ほたるが出る。涼しい風はたもとをなでる。さらさらと流れる水は月をくぐり、きらきらかがやく。

まさに、女流作家のような美しい描写文ですね。

私の尊敬する人

大正十年度 尋六年

高橋みつぎ(和名川)

私が尊敬する人は楠正成です。北条高時が後醍醐天皇を流し奉った時、楠正成がいなかったら、我が大日本帝国はどうなっただろう。

正成がいなかったら、おそれおおくも萬世一系の天皇はここで切れて、家来がほしいままにしていって、遂には外国のものになってあったかもしれない。

そうなったとすれば、日本の人民はどんなに苦しんだでしょう。

又、日本人は萬世一系の天皇をいただいているといつてじまんすることもできなくて、小さくなっていなければならなかったのだ。

うんよくも楠正成がここにあらわれたので、日本はまず命の助かったようなものです。

私は楠正成を尊敬します。

土谷先生に近況を

大正十年度 尋六年

齋藤 善吉(渡前)

拝啓 あたたかになりました。今年の花もあの強い風の為に雪のようになって、ぱらぱらと落ちてしまいました。こちらの方では、苗は二寸程のびています。

このごろ、ずいぶん強い風がふいて木の枝がおられました。多くの家は皆やねをこわされました。

翌日、私が学校に行く時、どこの家でもみんな、こわされた所をつくらっていました。私の家も少しこわされました。

土谷先生、御丈夫でいらっしゃいますか。こちらは皆丈夫です。

近い頃に、六年生は湯野浜に修学旅行をします。私はまことにうれしく、今より楽しみにしています。

村の学校もかわらににして、大へんりっぱになりました。また、六月には例の各学校の連合談話会がありました。

すが、渡前の六年生はこの学校の六年生よりもまけはしないでしょう。その成績はなお後に又御知らせします。さようなら。

下落

大正十年度 尋六年

高橋 金吾(柳久瀬)

近ごろ、我が国内はずいぶん騒がしくなったようではないか。

それは、物価が下落したからであると思ふ。この下落は、米の相場に依りても知ることが出来るものである。即ち、今の米価は去年の半分にも足らないではないか。然るに一昨年頃は物価が騰貴したため昨年から今年にかけてにわかには下落になったと思う。

今は、東京、京都付近などは下落が甚だ大なることだと思ふが、この庄内付近には不景気は来たが、物価の下落はそんなに甚だしく来ない。もしも、この下落が盛んになっていけばいくほど人民が苦しむ、又、国内がもっとも騒がしくなっていくと思ふ。

それであるから、もっと米の価を高くして、物価の高低を定めて、甚だしき下落がないようにしていかなければならないと思う。又、不景気もないですむことと思う。

信じられないほど大人びた書きぶりですね。

シリーズ 大沼與吉校長 その五

昭和五年より天童尋常高等小学校第十代校長に就任天童実科高等女学校第二代校長・天童農商補習学校長兼任であった。

当時、組長、級長を選挙により任命しており、すでに民主的方法が取り入れられており、又、全校児童の親桜会を催し楽しい学校づくりに努められているのである。学習指導でも児童の自発的活動による学習を推進していること、また勤労の精神や意思力の錬磨のために校庭の修理やスキー場の修理を児童にもやらせているのである。

昭和六年には国際親善に関する講話を行ない、重要さを強調している。職員の研修では、日曜と交換して全職員を付属小学校に授業参観させている。又、国語の権威者芦田恵之助先生を招き講習会を開催し、県内外からも参加させている。

大沼校長は、書道にも力を入れられ、書道研究会を開催したり、自ら手本を書き競争的に書かせ体育館に張りだし、習字の成績を向上させたことで知られている。又、天童市の「御苦楽園」の碑文や「舞鶴公園」の佐々木忠蔵先生酬恩碑の碑文は心血を注いだ遺墨として後世に伝えられるものである。(つづく)

僕の机

大正十一年度 尋二年
齋藤 憲一(渡前)

僕は、こんど、おかあさんからよい机をいただきました。僕はうれしいので、すぐその上に本を立てておいたり、ひきだしの中へちようめんやえんぴつを入れたいりました。

この机は、おじいさんが小さいときつかっていらつしゃったのです。それをねえさんがいただいて、ながい間つかっていました。

こんどねえさんが新しい机を買ってもらったので、僕がいただくことになりました。僕はこの机で毎日、本をよんだり、字をならつたり、さんじゅつをおいたりしてべんきようをしています。

この机は、祖父から孫まで三代にわたつて使つているのですね。昔の人はものを大事にしていたことがよくわかります。
(大戸)

山形にいる兄さんに

大正十一年度 尋二年
高橋 正雄(和名川)

兄さんとわかれてから、一年ほどなりました。兄さんはじようぶでしようか。私は大じようぶです。

こんど、二六日から学校がはじまりますから、夏休みの前よりもつとよくべんきようをしようと思つています。

兄さんは、毎日へいたいのでしごとをしているでしょう。これからは、ますますからだをじようぶにして、よいへいたいになってください。

私も兄さんからまけないでりつばな人になります。さようなら。

あるばんのかみなり

大正十一年度 尋二年
齋藤 於敏(渡前)

みんながよくねむっていますのに、私ばかり目がさめましたので、あたりを見ますと電気がきえてまっくらでした。

そのうちにピカッゴロゴロとなり出しました。私はこわくてたまりませんでしたから、

「おかねちゃん、きよ子ちゃん」といって、そばにねている人をよびました。二人は「はい」とへんじをして、また、だまつてしまいました。

となりのへやにねていたおかあさんが、あかりをもつて来てくださいましたが、とうとう二時までねむられませんでした。(おかげで) つぎの朝は、いつもより一時間もおそくおきました。私ばかりがだいきらいです。

犬子

大正十一年度 尋二年
佐藤 小菊(幕の内)

私のうちの犬は、このあいだ赤ちゃんをもちました

二、三日たつてから、おや犬はわんわんといいながらごはんをたべに出て来ました。

私は大きなおわんに、ごはんとおさかなをどつさりやりました。それから、くらに犬子を見に行きました。まだ目のあかないかわいい犬子が三匹いました。そつとあるかせてみると、少しばかりしかあるけませんでした。私はおや犬や子犬を、さむくないようにすつかりこもじにくるんでやりました。三匹のうち二匹はうたるんだと、うちの人がいいました。かわいいそうでありません。

子犬のはなさきや、手足のまめ(？大戸)はまっかになつています。おや犬は子犬をかわいがつてからだ中をなめてくれます。

小さなびようぶ

大正十一年度 尋二年
成澤 操(荒俣)

赤ちゃんのうしろに小さなびようぶが立ててあります。それには、美しいあね様やかわいらしい子どもや景色のよい海をかけた絵紙がたくさんはつてあります。これはみんな、おかあさんが町にいつていただいたきたのです。

赤ちゃんがなく時には「これこれ赤いあね様」といつてみせると、赤ちゃんはにこにこしてなくのをやめます。私どもが、ちよつとして(このびようぶに)あなをあげたりすると、おばあさんにしかられます。

シリーズ 大沼與吉校長 最終章

昭和一〇年には(天童尋常高等小学校で)山形県連合女教員大会を開催させており、女子教員の将来に期待をかけている大沼校長の先見的な考え方も窺える。

翌一年にはプール建設もしており、渡前小で始めた県下初の臨海教授のことを考えあわせると、健康な体力づくりやたくましさ育てるための教育的信念に基づいたものと思われる。

当時、山形県の教育を方向づける学校として実績をあげ、東京都や青森県・岩手県などより多数の学校視察者も見られ、広く県内外に知られている。

昭和一三年には、異例の抜擢で上山国民高等学校長に就任。在職中専修科の中に女子部を設置。

昭和一五年定年退職。後、山形県教育会の事務局長を一八年まで勤め、県教育界の重鎮として教育一筋の道を歩んでいる。

戦後は県教育会の立て直しに奔走。昭和二三年四月七日、享年五七歳で没。若くしての死が惜しまれている。(おわり)

二九歳で渡前小の校長、そしてその後も教育界のエリートとして過ごされたことがわかります。

ゆき

大正十一年度 尋二年
富樫 勇(幕野内)

家の屋根もくらの屋根も、四方の山も、みんなまっしろです。松の木にも杉の木にも、重そうにゆきがつもっています。

でんきのはりがねなどは、ちょうどわたをまいたようです。

すずめが二、三羽、さむそうに学校の屋根ににげていきました。

情景描写の練習文だと思えます。昔は、二年生から、すでにこのような練習をして表現力を鍛えていたんですね。(大戸)

大運動会

大正十一年度 尋三年
成澤 弥市(渡前)

十月三日は大運動会でした。

高等科の人たちも先生も、旗を立てるやら商品を運ぶやら、いろいろなじゅんぴをして、それから、君が代を歌いました。

一番はじめは一年生で、それから五年以上のゆうぎでした。ゆうぎは、おどりのようでした。

三年はいつ走るのがかと思つて、待つ所にいたら三年の番になりました。一組二組にあつたので(どういう意味だろう?) 私はおもやみだようでしたが、カレンカレンと鐘がなつて、みんなが走り出した。

僕は一回目は一等で、心持ちよく走りましたが、二回目は運悪くころんで、くやしくてくやしくて泣くようでした。

それから、五年生の一人一足や六年生の一人四足があつて、それから間もなくおわりました。

おえてから、三浦先生が赤白のせいせきのお話をしました。せいせきは白の勝ちでした。

運動場をまわりながら唱歌を歌つておわりました。

此の間の大水

大正十一年度 尋四年
小野寺慶治(荒俣)

此の間、大水が出ました。その時、私の方の川は水がいつぱい、田や畠に水がついていた。流れはあまりつよくないが、川に木やくいが流れてきた。

町のあたりでは大さわぎだということであつた。大川は水いつぱいであつたという。また、でんご(?)土手がきれて、どんどんと水がはいつて来そうだ。それだから、石やら俵やら長木やら土手にはばけたということ、私のうちのお父さんからきいたのです。それでも水がついて、家の下で水がどんどん流れるそう。道は腰までかかるそうです。

家の中に水がついた人々は、二かいにあがつたそう。二かいのない家はどうしてくらすのだろうと思つた。らく町のあたりは家がたいてい流されてしまった

そう。又、川には、はしや小さい木や大木が流れて来そうだ。

人も流れて来そうだ。三川橋に三十人(死者か?)あがつたそう。その後、又、五十人流れて来そう。助川では、水のつかないうちは、たつた二軒しかないそうです。一軒のうちではほとけさまに水がついたそうです。

それから、私のうちの畠や田の耕作はあまりよくないということだ。水がついた所は上川原と東川原です

この小野寺慶治さんは、おそらく、本校の校歌の作詞者であろう。さすがに作文は得意だったらしく、長文を書いている。それにしても、すごい大水だったようである。八月のことだったらしい

僕の小さい時

大正十一年 尋四年
渡部 金市(渡前)

僕の小さい時には、わたのたくさんはいった赤い着物を書せられたものです。「この子は体が細いから兵隊に行けないだろう」と、六つ七つの頃、僕のことをいつていました。

赤ん坊の時は、いずめにはいつて泣いた。

小さい時に、僕が馬がすきだといつたので、おとうさんが木の馬をこしらえてくれたそうです。その馬は今もまだ、くらに上げてあります。

僕が六つの時であつた。鶴岡に兵隊のれんしゅうを見にいつた時、大砲や鉄砲の音がきびしいので、僕は泣いたとうちの人からおしえられた。僕は大きそうはずかしかった。

小さい時は、ほんとうに泣きみそだったものです。

私のお父

大正十一年度 尋五年
加藤順市郎(箕升)

私のうちの父は、朝早くから夜おそくまで働いて、家に来てからもそれぞれの仕事をして、それからごはんをたべて少しばかり話をしてねどこにはいります。しばらくたつと、雷のようないびきをかく。そうすると、おかあさんと、「ああ、このいびきや音を聞くと耳がたこになるようだ」といつて悪口を言う。

ある晩、お父さんはすごくくたびれたのか、ぐんぐんといびきをかいていると、おかあさんが鼻をしめた(でも)それともしらずに、あかんと口をあいていびきをかいていました。

先にきていた孫ばあさんもいびきにたまげ

「おれだら、このいびきのそばでは、とてもねむられない」といつて、すぐうちにかえつてしまった。

私のうちの父は、いびきをかかないでねられない習慣になつたのでしよう。

↓仲のいい家族の様子がわかりますね。(大戸)

日記

大正十一年度 尋三年 十一月二〇日 渡邊子之吉(渡前)

今朝、うさぎからにげられて大そうこまりました。私は友だちを大せいつれて来ましたが、かしこくしてめられませんでした。

そのうち、僕は、土にぼったりとたおれました。たおれるとおとがしたので、うさぎはびっくりして、すぐ走って、家の下へはいりました。はがいくてたまりませんでした。

家の下にはいって、さおでたたいて出そうとおもったら、うさぎは、たたかれるとわるいから、すぐ外へ出はりました。出はると、友だちはすぐがってしめました。おもしろくて、おもしろくて友だちにおれいをいいました。

日記

大正十一年度 尋三年 十一月二〇日 太田 好(渡前)

今朝、目をさまして見ると電気がきえていたので、「電気はなぜきえたのであろう」と、とこの中で言ったら、お母さんがききつけて、「雪が降ったからだ」とおっしゃったので、私はおきて外に出て見ると、なるほど雪が五寸程降って居ました。

そして、道に行つて見ると、ねこが私をちよるかすように、にやにやと行つたので、私ははらが立つて来て、雪だまをにぎってねこになげつけたら、ねこは家の下にかくれたので、私はうちへ入りました。

二つとも方言が使われています。がってとかちよるかすとはどういう意味かわかりますか。

今日のくさ

大正十一年度 尋四年 七月一日 富樫幸三郎(幕野内)

私は、朝からびょうきでおもしろくありませんでした。今まで、こんなことはなかったが、今日はなんとしたことか、からだはほんとうでなかつた。体その時にはあせが出て、今にもたおれそうになりました。

その時、伊藤先生が私を小使い室につれて行って、「ここで休んでいなさい」といいましたから、そこにねて居ました。

三時間休みましたが、まだほんとうではありません。

あつい

大正十一年度 尋四年 七月一日 城戸 善治(幕野内)

今日は大そうあつい日です。着物は一枚しか着て居ないけれども、あせはだらだらと流れる。からだはちかちかする。ほんとうに心持ちがわるい。あまりあついで頭がいたくなりました。

のどがかわいて水のみたくになりましたが、井戸水が出ないので、先生に「小使い室にいつて水をのんで

きてもようございますか」とききますと、「水をはこんできてもらいますからまって居れ」とおっしゃいました。私はしかたがないからがまんをしました。

この当時は保健室がなかったようですね。

大水

大正十一年度 尋五年 九月八日 佐藤 元藏(和名川)

此の頃の水は、めつたにない大水であった。

今朝、町にいったお母さんは、行かれないとことづけをよこした。(でも)一時間ほどたつと、お母さんはうちにかえってきました。

私は「水はどんなでした」と聞くと、母は「大そうな水で、晩になつたら村にもついて来るかもわからない」といいました。私はたまげてしまいました。

まもなく晩のごはんをたべた。すると、川近きあたりでは早鐘をうちだしました。電気はこない。すると村の半鐘も鳴りだした。消防たちは皆集まって来る。そのうちに助川の村中は舟であるかなければならないという話でした。

しているうちに、助川(の人たち)が私の(村の)方に泣きながら走つて来た。それを見た村の人が集まってきた。「荷物はどうした」と聞いたら、二階に上げてきたからさしつかえないということでした。

水はしだいしだいに我が村に近くなる。そうしているうちに我が村にどうどうと来る。うちの前の道をどんどんと流れていきました。村の部長が「今夜は主人一人おきていれ」とふれてきました。

村に押して来た水はひざまでかかった。僕のうちには、庭までついてしまった。

横山の橋は半分流されてしまったという話であった人は十二人死んだそうです。

事実が書いてあるので(助川の人・村の部長さんの行動)緊張感がよく伝わってきます。 大戸

おばあさん

大正十一年度 尋五年 佐藤 恒治(大半田)

私のうちのおばあさんは、今、八十三になります。よいおばあさんで、私が「おばあさん、おかしをくれないか」と時々はたりますが、そのたびに、たなからおかしを出して来て「そらそら、あとないぞ」といつてくれます。あとないといつても、ほんとうはありそうだから、又はたると「あやや」とくどきますが、またこわそうなようすをして立って行って持つてきてくれます。

このごろは病氣をしてねていましたが、二、三日さきから少しずつおきています。手のあたりはやせてしまつて、骨と皮しかないようです。ねたい時はねておきたい時はいつでもおきています。

* 大正十年、昭和三年までにタイムスリップ

うさぎ・うさぎ

大正十一年度 尋三年
阿部 市郎(上藤島)

五月一日からかっておいた、かわいらしいうさぎをうることにしました。

かわいそうで、うるときにもちぐさをたばねて、あたまをなでて、どうぶ(?)に入れ、なみだをながしながらわかれしました。

*

八月九日は、どこの家でもこつきをたてました。そのうちでも、にかいのまどからこつきをたてています。

私は、あさはやくおきて、こつきをたてました。こつきは、いかにも日本のはたであるように、かぜにふかれています。そのうちでも、朝日のはたをたてているうちもあります。

八月九日は何の日かわかりますか？ 大戸

私のうちの

大正十一年度 尋三年

ちようせんぎく

富樫きよせ(柳久瀬)

私のうちに、ちようせんぎくがある。ももいろや、むらさきや、白や赤などがまじって、今、花のまっさかりです。花のかたちは日本ぎくにしています。

おばあさんはみごとだといって、それをとって、ほとけ様にそなえました。それは、私のおかあさんが、ずうっとまえにうえたのです。はじめは大へん小さかったが、まい朝、私が水をかけたので、こんなに大きくなって、こんなにみごとな花がさきました。

私は、ももいろのが一等すきです。白いのもすきです。おばあさんも赤と白がすきなそうで、なんでもそれをとります。

花がすぎるときたなくなつて、かれてきます。それをとつてもむと、中からたねがでてきます。それをとつておいて、らい年又まくのです。

お母さん

大正十一年度 尋四年
太田子之吉(渡前)

昨日、私が学校からかえると、かきを一つたべました。もう一つたべようとしたら、お母さんが「そのかきはしぶいかきだから、かわをむいてたべれ」とおっしゃいましたので、私はかわをむいてたべたら、しぶくなかった。

お母さんに、「かわをむいたら、しぶくはありません」といいましたら、「おやのいうことをきくと、わるいことはないもんだから、おやのいうことはきくもんだ」とおっしゃりました。

私は、「はい」といいました。

本当に素直でいい子ですね。

大戸

元日の朝

大正十一年度 尋四年
小野寺かめゑ(荒俣)

元日の朝は、私と兄さんと、誰が早く起きるか起きくらべをしました。

私は、夜早くねて夜の明けるのをまっています。そうしてねていると、時計の音がしましたから、お母さんに「今なつた時計は何時ですか」ときいたら「今のは二時です」といいました。

私は、お母さんに「もう一時間で起きます」と言うのと、「それならお父さんといっしょに起きて、もちをあぶりなさい」と言いました。

私は「はい」と言つて、ねていますと、もう三時がつきました。さつそく起きて、かおをあらつて、水にくんでいろりをほつてみると、火がたくさんありました。私は、すみをもつてきて火をおこして、兄さんに行つて見ますと、兄さんはまだねていました。

私が兄さんに声をかけますと、兄さんは私に「起きたか」と言いましたから、「起きました」と言うのと、「それなら、またねます」と言つてまたねました。

私は、もちを持つて来てあぶつていますと、下男が来て三人であぶつていたら、兄さんやたくさんの人が起きて来てあぶりましたが、小さい子はあぶれませんがから見えていました。

それでも、火がたくさんおきていたので、早くあぶれました。そして、ぞうにをたべました。

妹は起き競べに真剣になっている。が、兄は？

早くうちへかえりたい

大正十一年度 尋五年
近藤 治作(荒俣)

今日、せんすいの水をひかせて、鯉、金魚などをあげて、よいのを酒田の品評会に出すのです。去年は二等になった。今年は何等になるかわからないが、父は勇んでいます。大きいになると、六百匁もかかるのがある。

今頃、うちの父が鯉に水をかけられて、土を塗つたような顔をして「ひどいひどい」と言っている様子が目の前に見えるようだ。こんな事を考えると、家に早くかえりたくなつてならないのだ。

この間から、大工が三人来て、品評会に持つて行く鯉箱をこしらえていました。

朝、学校に来る時は、あさい所は水がなくなつて、鯉がばたばたはねていた。僕は、学校からあがつて来てからしめろうと思つて元氣を出して来た。

ふしぎな事には、なまずを入れないのに、九月何日であつたか、水を引かせたら、なまずがたくさん居てあつたから、今日もきつといるだろうと思う。

勉強どころではないですね。気持ちわかるよ。

遠足

大正十一年度 尋三年
阿部 俊夫(上藤島)

木よう日に松田先生につれられて、きぶね森に遠足にいきました。

たんぼをながめると、もう、たいていいいなあげが出来ていました。しばらくいくと森につきました。私どもは、お宮のまえにらんで、みんな手をたたいておがみました。

それから、べんとうをおろして、森の中にはいってあそびました。森の中で大きなへびがいましたから、私が竹でつつきました。すると、へびは草の中にげていきました。森の中であかいもみじをひろって、先生にあげました。私は、くりもひろいましたが、すっかりくされたのでした。

ごはんをたべてから、しばらくあそんで、先生につれられて、学校にかえりました。

貴船の森の油絵は三階の学習センターにあり。

つくえ

大正十一年度 尋三年
小池 芳(幕野内)

私は三年生のくみの六ばんめにつくえであります。毎日、三年生の生徒が私を二人でたなきます。すこしデンとはいいますが、そんなにげえ(?)ではありません。

私のおなかにはしよもつなどがはいつていて、いつもきれいにあります。そして、そうじをする人は私のふたをきれいにふくので、いつもひかっています。それでも、ふきようがわるいとひかりません。そして私のおなかには、すずりもはいつているので、すみ水がついています。

私のふたには、はし入、ほん、ふるしき、せきばんかみ、ほごなどのかみにかいてあるのがはらつてあります。

せきばん、ほごとはどんなものかわかりますか?

よる

大正十一年度 尋三年
齋藤つる糸(渡前)

私とおばあさんときくをはずしていたら、おばあさんがあしをあらおうとして、とかたにいきました。

おばあさんは、戸をあけたとき、お月さまをおがみました。私は、おばあさんに「なしておがんだのですか」ときいたら、「あまりおめでたいからです」といいました。そして、おばあさんは「今日は、何の日ですか」ときいたので、「今日は十七日です」と私がいきました。

それから、またきくをはずしていたら、私がねぶりかけをしました。そしたら、おばあさんが「ねむれ」といいましたから、私はきくをはずさないでねました。

それからは、おばあさんとおかあさんがしました。

「きくをはずす」・・・きくとは「菊」かな?
十一月十七日は何の日だったのだろうか?

春になった

大正十一年度 尋四年
加藤おとめ(箕升)

春になったので、今までかかれていた草もみんな青々となりました。

今は、さくらやなたねの花ざかりです。うめの花もさいたのですが、今は、大ていちつてしまいました。春になったので、大へんあたたかになりました。今は天気がよくておもしろそうです。

つばめもとんで来ました。色々の花もさきましたので、ともだちと野原に花をつみに行きました。花がたくさんさいておったが、一番きれいにさいていたのはすみれでした。つんだ花をもってうちへかえって、びんにたてておきました。

近ごろは、野原に花をつみに行くことなどしなくなりましたね。花は畑かハウスか花屋・・・

昨日

大正十一年度 尋五年
富樫 吉郎(柳久瀬)

ああ、夏になった。

先生から、水あびをゆるされた。ああ、よかった。水あびというとは、はねるほどおもしろい。一昨日は、どぼで水をあびました。たくさんの人とおよいで、船に乗った。船に乗ると、船の上から水中にはねる。そうして下につく。そのうちにあがって来る。それからまたおよぎ出す。又、船に行つてはねるとおよぐ。そうしているうちに、船の綱がはなれた。みんなでおよいで船を又もとの所にもつて行った。

私がつないで、それからもう少しあびて、家にかえつて見ると、家の人が誰もいない。あやしみて見るとおばあさんが一人、座敷にねておった。

(それから) 台所について見ると、かまどに火をたいてありました。(消えかかっていたので) 私がたいてやりました。すると、おばあさんがおきてきて「よいこだ、よいこだ」といつて、にこにこ笑いました。その時は、大そうよい心地がした。

「どぼ」とは、黒瀬川か藤島川のどこかにあったのであろう。船もあつたとは!

この当時は、プールもなかったし、海に連れて行ってもらえることもなかったと思います。しかし、近くに自然の遊び場があったのですね。

でも今の川はコンクリートで護岸され、水質も悪いので危険です。泳いではいけません。大戸

今年も五、六年生の海浜学校が近づいてきました。七月二〇〜二一日、由良で一泊二日で行ないます。渡前小学校の海浜学校は、今から八〇年前、大正十年に始まりました。

『わたまへ』には海浜学校のことを書いた作文がかなりあります。この号では、その中から、第一回目の海浜学校のことを書いた貴重な作文を紹介します。

その当時は、五、六年ではなく、高等二年（今の中学二年）の行事でした。高等二年の人が書いていますので、長く、難しい言葉もありましたので、私が原文をこわさない程度に書き直しました。あしからず。

由良の海水浴日誌

高等二年 浅賀 作治（大半田）

大正十年七月三十一日 快晴（一日目）

今日は、由良に海水浴に行く出発の日だ。

……略……話しているうちに大山駅に着いていた。汽車を降りるやいなやすぐ歩き出した。山形県でもかなり繁華な大山町も通り抜けて、あるいは緑したたる稲田の中、あるいはうぐいすのこえる気持のよい明るい山中を通って、由良に着いたのは午前十時頃。うしろは山前は海。そのただ中に雄島が座っている。道具を寺の縁側に置くとすぐ海水浴場に行ってみた。そして、先生の注意も守らず泳いでしまった。もちろん僕もそのうちの一人だ。ああ、こうして五日暮らすのもゆかいだ。

泳ぎあげてお屋におくるとて走って帰ったが、彼らは早やご飯は過ぎていた。大急ぎでご飯を口の中にかき入れて、すぐ海水浴場に走り、薄暗くなるまで海につかった。これが生まれて初めての海水浴だ。海に入って寒くなると砂の上に寝ころび、温かくなると又、海に飛び込む。泳ぎくたびれると船に飛び乗る。やがて太陽は雄島（白山島）のかげにかくれる。宿に帰るとご飯やお菓子が出た。格別の味であった。九時近くだったので、僕と良三君と光彦君と三人で床についた。色々のじょうだん話や世間話をしているうちに、しらずしらず眠ってしまった。

八月一日 日本晴（二日目）
……略……顔を洗うとすぐ勉強にとりかかったが皆の本を読む声で何も考えられない。

今日も一日中水にひたつたが、昨日と同じで、樽まで行かれない。おいしいな。樽までは元気が出るがそれより沖に行くと元気が少しもなくなってしまう。もどりが恐ろしいからだ。他の人たちは皆、樽より沖に泳いで行く。

今日は、特別、雄島登りをした。ちろちろした石段は下の方に向いている。一歩踏みはげせば何十丈とも知らぬ下に落ちて死んでしまう。手に汗を握り握り登った。やっと、がまんがまんを重ねて、中の宮まで登った。下を見れば、目はくらまんとするばかりの高さ。北も絶壁。東は石段。南はうっそうたるやぶ。実に危機一髪と言わなければならない。

中の宮からまた上に登れば、何百年か経た巨木が茂っている。その中を我らはかき分けかき分け、やっと島が一番上まで登った。目の前はすぐに断崖絶壁だ。ここまで登った人々をかえりみれば、先生方と付き添

い五、六人と、児童は僕と良三君とただ二人限り。その時はお互いに島上でほっと息をついた。降りる時、踏みはずすか踏みはずすかと思つて、気がひやひやした。

昨日まではかやがなかったが、今日はどこから借りてきたのかかやがある。ご飯を終えるところにもぐりこんだ。八月一日もこれで暮れる。

八月二日 青天（三日目）

一天雲もない八月二日は静かに明けた。

ご飯を食べていると本田先生が「今日は三瀬の気比神社に行く」とおっしゃった。ご飯を過ぎて休んでいると先生が気比神社に行くについての注意をしてくれた。

我らはすでに短い石段を上ってはや気比神社に詣でて、池のそばの小道に腰を下ろした。幾千年たったかと思われ大木が生い茂って、昼でも一人ではさびしい感がある所だ。……略……

八月三日 曇（四日目）

空はどんよりくもって小雨がぱらぱら降る。昨日の天気とはがらりと変わっている。

午前中は内でも本を読んでいたが、あまり気がせま苦しいので、海岸に貝をひろいに出た。珍しい貝は一つもなかったがたくさんひろった。これが、僕が故郷に持って帰るおみやげだ。

昼ごはんを食べていると、伊藤先生が「午後から雄島上がりですから」とおっしゃった。僕らはこんな雨降りにと盛んに不平を言った。いくら不平を言ったところで勝つ見込みはない。……略……我らは雄島から帰る途中、湯に入つて体を清潔にした。

八月四日 晴（五日目）

……略……今日は、朝の復習が終わるとすぐ水泳の競争だ。四日間鍛えた手なみを見せる日は来た。

僕は固く決心して、雄島からの競争には必ず入ってみようと思つた。あの水泳の大家から習った横泳ぎを用いようと昨日の夕方から思つていたので。

有志の児童十二、三人と付き添いの人と先生方は早や舟に乗った。船頭さんは一生懸命に小島に向かつて漕いだ。いよいよここからだ。

有志は舟べりから下りた。先生からの声で泳ぎ出した。横に泳ぐ者、抜き手で泳ぐ者さまざまだ。

僕は元来泳ぎは下手であつたが、意地で泳いでみようと決心したものの、泳がないではすまないと思つて一生懸命に泳いだ。泳いだは泳いだ、なにぶんにも長い路なので、くたびれたから舟に乗ろうかと思つたが、僕の意志が許さない。いくら恐くてもここまで泳いできて……と思つて歯切りをして泳ぎ続けた。

ああ、もう少しだ。一息入れて大抜き手で勢いをつけてみた。岡の方からは、もう立つ立つという声が聞こえてきた。立つてみたら、なるほど身が立つ所まで来ていた。ピリの方であつたが、自分が熱血をしほって泳ぎ、又、少しも休まないで泳ぎ着いたのだ。自分が自分をほめた。自慢するわけではないが、平生、泳ぎの下手な僕であるからいつそうほめずにはいられない。愉快愉快、四日間鍛練した効果が今日の今見たのだ。……略……女中さんに「来年も来なさい」と言われたときに、ああ、漁村の人は心が美しいものだと深く深く思つた。……略……了

子ども達も先生方も全員元気に二学期を迎えました。今学期もまた発行します。ご愛読ください。 大戸

忠蔵を思う

大正十一年度 尋五年
押井 梅江(荒俣)

ああ、かわいそうだ忠蔵を。

あの去年の夏に、私どもが何かをするたまねをして又、外に行く時にもついてきたり、あるいは、つれて行かないと、いやな声を出したりしていた。

かわいらしい顔、大きな身なりをしていた忠蔵は、去年の十月の末に、自分の生まれた父母のそばであつかわれることになって、本当の自分のうちへかえされてしまった。その時には、よほど向こうまで送りにいった。

わかれる時に「さようなら」といったら、忠蔵は「大きくなったら、また遊びにくるからまっていて」といいながら、手をひかれていってしまった。

よほど向こうまでいってから、また私が「さようなら」といってたら、又あちらでもかなしそうな声で「さようなら」といって答えて別れた。その時には、忠蔵のすがたが見えなくなるまで、そこに立って見ていた。そして、なくなるとわかれて家にかえった。家にかえって、そのことを話しますと、おばあさんは目に涙をたくさんよせて「それであるから、あつらえ子をとるものではない」といって、なくなるとあきらめた。このように、あつらえ子は、やる時にはかわいそうである。

あつらえ子とは？ わかりますか。

大山のお祭り見

大正十一年度 尋六年
小林 栄一(上藤島)

一昨日は、六時九分の汽車で、大山のお祭りを見に行った。

汽車には、人がもう真っ黒になって乗っていた。私、よく切符を買って汽車に乗ったが、大山まで立ち通しであった。

大山に着くと第一に親類のうちに行った。それから曲馬も見た。活動写真も見た。くねものなどは実によく出来てあった。太鼓がドンドン、笛がピイピイ。子どものラッパまでなつて大そうにぎやかであった。その他、仁王様のかけものもあつた。うちにかえったのは夕方であった。

慶治君

大正十一年度 尋六年
小野寺 虎太(荒俣)

慶治君は何事をやらせても上手です。まず、学校でいえば、書き方が上手で、その他の学科もたいへんできるそうです。慶治君は荒俣で一番できます。うちにきても二階にあがって大声をあげて本をよん

でいます。

慶治君の家に行つて一番目につくのは清書です。見るとたいい「甲」でありました。清書は一枚もすてたことがないといっています。慶治君はなかなか感心なものです。

昨日も感心したことがあります。

慶治君は目が悪いので、昨日からめがねをあててきました。すると、みんなが慶治君を笑いましたが、慶治君はすこしも気にかけません。平気でめがねをかけて学校にきました。

慶治君はなかなか感心なものです。

この慶治君は、本校の校歌の作詞をしてくださいました小野寺慶治さんであらう。

慶治さんは、この作文を書いた虎太さんより二つ年下です。それなのに、先輩の虎太さんがこのようにほめていきます。のちに東京消防庁第五方面本部長(消防監)まで出世していますが、子どもの頃からその片鱗が見られていたのですね。

画・精米所

大正十一年度 尋六年
高橋 米蔵(和名川)

八月二十五日に、僕は佐藤元治郎君と画の練習をしました。佐藤君は渡前の学校でも指折りの画の名人である。まず写生画をかいのみようというので、他の家に行つた。すると、そのうちの子ども達が二人、とんぼをしめようとして、ほうきを持っていた。すると、佐藤君は遠くはなれてわからないようにそつと二人を写生してしまつた。

それから、僕の家のやぐらに来て色をぬつた。はじめに屋根や木や子どもを塗ってだんだんにこくした。出来上がった時は絵師がかいたと思われるほど上手に出来た。

二十六日に、学校に来て先生に見てもらつたら、この学校はじまつてからこんなよい画はないといつて、ほめてくれたということだ。

佐藤君はほんとに上手なものだ。

元治郎さんは米蔵さん二年上のようなです。

僕の村は県道のそばでもなく、停車場に近いところでもなく、どこに行くにしても大そう不便である。したがってひらけないのだ。

しかし、近いうちに、僕の村と砂塚と組合をこしらえて、精米所をたてるということだ。

今までは、米をつく時には渡前に行つたり、家のからうすですついたりしていたが、今度精米所が立てばそんな苦しきもいらぬ。

これもみな、村の区長さんや村の主な方々が親切に心配してくれるおかげである。

おとぎ話

大正十一年度 尋六年
今野みやゑ(柳久瀬)

ある晩、姉様から面白いおとぎ話を聞きました。ある所に八重子さんという可愛い女の子がおりました。この子どもは、山の奥で育った子どもでございました。

ある日、学校から帰る途中、きれいな可愛らしい花を見つけました。八重子さんは、さつそく笹舟をこしらえて、その花をのせて、すぐそばの小川にはなしました。そして、八重子さんはそのまま帰ってしまいました。

美代ちゃんのお家は、ある小さな小川のそばにありました。美代ちゃんは朝早く小川へ水くみに行きますと、美しい小さい花をのせた笹舟が流れてまいりました。美代ちゃんは「あら」とさげんで、花を見つめておりました。

とろうと思つて手をのばしましたけれど笹舟にはとどきませんでした。何か棒のようなものはないかとさがしているうち、笹舟はずんずん流れて、大きな大きな海のただ中の無人島の岸へその花がつかまりました。そして、風のために陸へ吹き上げられ、根がつき、新しい芽を出しました。やがて花もさきました。今よりもっともつと大きい美しい花でした。

八重子ちゃんも美代ちゃんもそのことは知りませんでした。笹舟は花の下でひからびていました。花の名はなんというか、だれも知りません。

夏の養生

大正十一年度 尋六年
松浦こたけ(大半山)

我々はいつも、養生を忘れてはなりません。わけても夏はわるい病気がはやりやすいから、よくよく注意しなければなりません。

ことに飲み物に注意することが大切であります。暑いからといって、むやみに生水を飲むのは言うまでもなく、氷水、ラムネなどを多く飲むのもよくありません。熱さない果物を食べるのもよくありません。たとえ熱したもので、度をすこすとよくありません。

次に、三度の食事の時間も定め、分量をきめて食べなければなりません。又、寝るときも腹まきをしてひやさないようにしなければなりません。

このようにすれば、たいてい病氣にかからないで丈夫でいられます。

これで第二号を終わります。次は第三号です。第三号には、初めて一年生が登場します。

しかし、一年生の作文はカタカナだらけで、かなり読みにくいので、ひらがなと漢字の文に直してのせてみました。あしからず。

大戸

一年生

大正十二年度 尋一年
齋藤 武(渡前)

私は四月一日から学校に入ったのです。お母さんからかばんをかってもらいました。それから、お父さんから石版(せきばん)のふちをつけてもらいました。それに字をかけたいわれしました。

私はじゅんし(兄か?)がつかつた一の巻きをかいてハナ・ハトとならいました。そして学校に行つたのです。

先生が日の丸のはたを出して、これはなんですかときましたから、私ははたですといいました。それから、あのお宮はなんですか、とききましたから、私はそんしゃ(村社)五所神社ですとこたえました。先生は、私をほめました。

すべり遊び

大正十二年度 尋一年
齋藤喜三郎(渡前)

私のうちのわきに大きなふき山ができました。

私もはそこをのりおちて遊びました。すると、子どもがおおせい遊びに來ました。そして、そりにせてといいますからのせました。

すると、でんきち君がそりからおちました。林治郎君がそれを見て「おちた。あははは」とわらいました。

田の神あげ

大正十二年 尋一年
丸山 とめ(上藤島)

きのう、田の神あげでおもちをつきました。

私がおねていると、にわでドスンドスンとおとがします。おきて見ますと、兄さんがはちまきをして、もちをついていました。

そのもちを神様にあげました。それからみんなで神様をおがんで、もちをたべました。

私のべんとう

大正十二年度 尋一年
五十嵐英吉(上藤島)

私のいまもつかつているべんとうは、おかあさんからかっていたいたいたいものです。

はじめは、ねえさんのおさがりをつかっていたのですが、私は人があたらしいのをもっているのがけなりくて、おかあさんにはたつてかつていただきました。

私は、このべんとうにごはんを入れてもつてくるのがたのしみです。

しろうぎ

大正十二年度 尋一年
加藤 三郎(幕野内)

きのう、私はまわりしろうぎをしました。すると、じんないのお父さんが酒によつてきて、自分でかおにまっ黒くすみをつけて、おれはまけないぞといっていました。でも、まけたので家にかえつてしまいました。

一年生

大正十二年度 尋一年
齋藤 京(渡前)

私は、四月一日にお母さんにつれられて、学校に来ました。教場(教室)にきて、まさ子さんとならんでつくえにすわりました。少したってから、かまだ(鎌田?)へえんそくにいききました。

運動会で、私は三とうになったこともありす。このあいだは、音楽会がありました。私やみねさんが唱歌をうたいました。

ゆき

大正十二年度 尋一年
齋藤 茂代(渡前)

きのう、私はあさはやくおきて見ますと、ゆきがたぐさんふつていました。木は、白いわたをかぶせたようになつていました。私はびっくりしました。学校からかえつていって、山をこしらえたり、いろいろのものをこしらえてあそびました。

お正月れい

大正十二年度 尋一年
山口 みね(渡前)

私は藤島へお正月れいにいきました。私は藤島の家についてから「ただいま」といってうちへはいつていきますと、おとうさんが出てきて「みねだか」といいました。おひるになつたからといって、おもちをあぶつたべさせられました。

おばあさん

大正十二年度 尋一年
加藤 松吉(不明)

おばあさんはかぜをひいてねています。私は手をもんでやりました。そして、おばあさんのそばではなさがじいさんのおはなしをきかせました。おばあさんは、よろこんできました。そして、りんごをもらいました。うまくてたまりませんでした。

私のおひなさま

大正十二年度 尋一年
成澤 なつ子(渡前)

私は、おかあさんに「おひなさまにはかせるはかまをぬってください」といいました。おかあさんはぬってくださいました。私はよろこんで、おひなさまにそのはかまをはかせました。そして、おひなばこにのせておせました。そのおひなばこは、いつでもたなの上にあけておきます。

ゆうべ

大正十二年度 尋一年
野口 市松(渡前)

ゆうべ、おねさんはごはんをたべてから、私に「糸をうつつしてくれ」といいますから、私は糸をうつつて

渡前小学校の宝物 学校文集『わたまへ』より

* 大正十年〜昭和三年までにタイムスリップ

やりました。するとねえさんは「ありがとう」といいました。それから、ねえさんはさいほうをしました。おとうさんはさげによつてきて、私をよびますからいってみました。すると、おとうさんは、ゴムぐつをぬがしてくれといえますから、ぬがしてやりました。

ともえちゃん

大正十二年度 尋一年
渡辺 竹恵(渡前)

ともえちゃんは、いずめにはいつています。私があやしてやるとわらいます。あわあわをしてやりますと、ともえちゃんもあわあわをします。小さな手をだして「うまうま」といいます。

和名川の「高橋 俊二」さんは、この「温故知新」の大的愛読者です。

なにしろ高橋さんはただ読むだけではありません。感想や解説をワープロで打ち、学校にお届けくださつております。

それが今現在、七枚にもなりました。高橋さんの感想と解説は実に味わい深く的確な文章です。ですから、それを読むと子ども達の作文がいつそう素晴らしく、わかりやすいものになるのです。

そこで、本人の了承を得て、時々紹介することにいたしました。作文を思い出しながらお読みいただければ幸いです。(大戸)

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

二二号 押井梅江さんの「忠蔵を思う」

あつらえ子とありました。(その「あつらえ子」という言葉は)私も聞くことがありました。

親が乳がでないので、乳の余るよその女のへり子にだしたり、結婚して何年も子供が生まれないので知人から「もらい子」をして育てていたら子供が生まれて返したり、あるいは何年もたないうちに生母に返さねばならなくなつたり、昔は今より「あつらえ子」があつたと思います。

家族のきずなは強く、一家親子三代家族に子供が五人はめずらしくありません。それでも幼い子供を離さねばならなくなると、親子、まご子、兄弟の愛情を断つことになるので、たいへんな決心がいりました。また、そのあとは、決心がもどると悪いので、両家であるべくあわないようにしました。

忠蔵君は養子としてもらわれていったけれど(その家に)子供が生まれて実家にかえることになつたのかあるいは生家の事情で引き取つたのでしょうか。

いずれにしても愛情を断ち切られることは悲しいことです。そういう運命に耐えて、強く豊かな人間がつかられていくのでしょうか。

私のうちの馬

大正十二年度 尋二年

富樫 勇策(柳久瀬)

私のうちの馬は、今年、四つだそうです。その馬にのりたいと思いますが、ピンピンはねてとてもおられません。ですから、この馬には一ぺんものつたことがあります。去年の稲上げの時ものらないでしまいました。今年はのりたいと思っています。

朝おき

大正十二年度 尋二年

城戸 しげ(幕野内)

私は、このごろ朝はやくおきられなくてこまります。おばあさんに大ごえでおこされても、ねむっています。日よう日には、ゆっくりおやすみなさいといわれませんが、日よう日には、かえってはやく目がさめます。

ごっこしり

大正十二年度 尋二年

梅津 文雄(柳久瀬)

私はまごいをつりました。家に来てかめに入れておきますと、おかあさんが火をたいてまごいをあぶって、私にたべさせました。私はよろこんでたべました。おかあさんにうまくたべたといいました。

文ちゃん

大正十二年度 尋三年

宮崎 東龍(渡前)

私のうちに去年まで文ちゃんという赤ちゃんがいました。それはそれはかわいかったです。ところが、ある日のこと病気をしました。父母はしんばいして、おいしゃさんからみていただいて、くすりをもらって、ちちといしよにのませました。それから、もものつゆものをのませましたが、かわいそうに、文ちゃんは去年の夏の七月二十七日の午前六時半ごろに死んでしまいました。そう式は二十九日にしました。

おばあさんは「龍稔(兄)をまっていたにちがいない」とくやしんでおりました。兄さんは二十八日から夏休みで帰ってきました。この話をすると涙をこぼしてくやしがりました。そう式は平形の龍間寺様のおしようさんがしました。はかば家の前にあります。

私のうちの赤ちゃん

大正十二年度 尋三年

成澤 朝恵(渡前)

私のうちの赤ちゃんはかわいい赤ちゃんです。私が学校から帰っていくと「あさえ」とよびます。私が机の上に本をおろし茶の間に本を読みますと、私の前にすわって「あさえ」とよびますから、私が「はい」とへんじをすると、「かみをゆってください」といいました。私は「べんきようをして本をおい

てからゆつてやる」といいました。

赤ちゃんは、私がべんきようをしている間、おかあさんのあたたかなふところの中にだかれて、おちちをのんでいましたので、私がわらいますと、いままで、あたたかなふところにだかれていたのをちゃんとやめました。

私の弟

大正十二年度 尋三年

佐藤 きく(荒俣)

私の弟は七才になりました。そうして、今年学校に入ります。

きかなくてたまりません。いつも(なまいきな)口をきいたり、きかなくします。

「学校に入ったら、きかなくしてはいけませんよ」とおしえていますが、なかなかききません。そうして、まだ何も(字や計算のことか?)しりません。

四月一日から学校に入りますよとおしえています。

私は学校の桜です

大正十二年度 尋四年

菅沢(菅原?)しが(幕野内)

私は学校の桜です。春になって、私はきれいにさかすると、あれ、桜がきれいだ、みんなあたりによって見ますので、来年はもっともっときれいにさせて、今年よりもよろこばせてやろうと、思っています。

私は学校の桜ですから、誰もものぼって枝をおったりしませんから、よろこんでいます。

私はせいが高いから二階も見えます。もし人が本を読んだ時にはよく見えています。又、休み時間に、みんな元気に遊ぶすがたを見ると、私も遊びたいと思えますが、私には手足がありません。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

二二号 高橋米蔵さんの「画」

画の名人佐藤元治郎さんは現高橋祐貴君の親戚で家もそこにあつた。子供のときから学問が好きだったが鶴岡で働き郵便局につとめ、局長となり任務を全うする。休日には写生のついでに和名川にも立ち寄つてくれた。祐貴君の家の床の間に掛け物一幅あり……

二四号 齋藤 京さんの「一年生」

鎌田林のことが書かれていました。

当時の「遠足」を昔の人は「運動会」ともいっていました。自然や風物を見学しながら、先生や友達と近親感を強めるだけでなく、体をきたえることもねらっていたからでしょう。

柳久瀬村を通り、現在は羽黒地区の中村をすぎ鎌田に行きます。そこに原生林のような林がありました。子供にとっては殺風景な面白みのない所でした。距離は学校から鎌田林まで四皿余りだと思えます。今では昔の面影はかげも形もありません……

明日は、藤島町の五・六年生が全員出場する小学校陸上記録会があります。

学校では、今朝、壮行会をしました。私も心から渡前小学校の健闘、好成績を祈っています。

ところで、昔も学校対抗の陸上大会があったようです。連合運動会と呼んでいました。

今日は、その時の作文を紹介します。

高等科一年生（今の中一）が書いたものですが、五六年生は、これを読んで闘志を高めてください。

連合運動会が来た

大正十五年四月二四日
高一年 長沢 房吉（大半田）

残念であった、残念であった。

昨年の運動会を思うと何となく心悪く感ずる。今年こそと、今より決心をしている。

僕らは、必ず勝たねばならん。

昨年は僕ら尋常科のリレーが悪かった為と思つていゝる。今年こそ、僕らは死んでも勝たねばなりません。場所は僕らの学校だし、他の学校より笑われてはなりません。

今年も又、横山、藤島とわが校の競争だろう。

僕は母校の為に必死になつて走ろう。今年は天気が悪いので練習する所はありません。

僕は五百米（リレー）の一人です。自分のつとめにはあらんかぎりの力を出して、百米につとめなければなりません。

いよいよせまつた来月二十一日は僕ら一同、必死になつて走ろうではありませんか。

そうして、昨年のうらみをはたしてやろう。今年の高等科の名誉を上げよう。

連合運動会

大正十四年六月二十三日
高一年 加藤おとめ（箕升）

ああ、くやしかった。かねてから楽しみにしていた運動会もすぎて、だれの顔見てもぼんやりしている。私の考えでは、神の助けをかりても必ず一等になつてメダルをとるつもりだったのである。

おいしいことには（運動会が）近づくとつれて体がだんだんいたんで、とても走れないようになった。けれども、手ぬぐいをこしにぎしりとむすぶと（なんとか）走られた。

毎日の夕暮れ、うらの広いところを走つた。お父さんには、立つていたり、坪をながめたりしているひまで、時計を見てもらつて、だんだんと走れるようになった。運動会の日まで一日もそこを休んだことはありません。どんなにこわくとも、決勝戦で一等にならなければならぬといふ厳しいかくごでした。

しかし、そのようにはいきませんでした。百米の所までは一等になりましたが、大きな人にぬかれて二等になりました。こんなにくやしいことは今までになか

つた。くやしみがとがっかりしたのが一緒になつて、つむぐられても、たたかれてもなにもわからなかつた。来年は必ず一等にならなければ死んでもいい。

米

大正十二年度 尋四年
富樫 元せ（柳久瀬）

米は何からできたものか知らなかつたが、今日、先生からこう教えられました。

「むかし、ある神様が死んだときおうまれになつたものだそうです」

それをまいてみたら、一つの穂ができた。その穂をとつてかんじようしてみたら八十八つぶあつたということでした。それがだんだんかわつて、このような米が出来たということです。

米はなくてはならないものです。米がなくては、我々は死んでしまふばかりです。

僕の家

大正十二年度 尋五年
成澤 勇（荒俣）

僕のうちの家は広く長くて、大きな鯉やきれいな金魚がたくさんいます。

蚕のまゆの中のさなぎを取つてくわせます。すると皆が浮かんできて一つずつくわえて行きます。

その中には、僕が川からつってきたドイツま鯉もいます。つってきた時は五寸くらいでした。

一番の大きいのは一尺五寸くらいで、二番目のは一尺くらいが二匹あります。その他はたいいてい似たようなのが、たくさんあります。僕は鯉が大好きです。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

二四号 野口 市松さんの「ゆうべ」

この作文には、家族の一人としての気配りのさまがうかがわれる。

むかしは祖父または父が娯楽がわりに酒を飲む機会が多かつたような気がする。肉体労働がきびしく、テレビなどの娯楽も少なく、せまい家に大ぜいと、心の休まるところが少ないということでしょうか。

飲んでくると、からまると悪いので家族も慎重にむかえたものである。戸口に入ると「ただ今」とむかえに出るのが習慣であつた。

人それぞれくせが違い、長つたらしい説教をする人子どもを無性にかわいがる人などさまざまである。

野口さんの父は、子どもがかわいくて、わざと子どもに甘え「いい子、いい子」と頭をなで、うんとほめてくれたことでしょうか。

（野口さんの）母は床屋、父は齋藤三郎右衛門さんの執事で、多忙な両親を思い、幼いころから自立心が強かつたと聞く。庄農から教師をめざして勉強を重ね、その本は兵隊に行つても……略……

初夏

大正十二年度 尋四年
松浦よしみ (大半田)

朝はさむくて草には朝つゆがかかかってぬれていた。昼ころは暑くて水およぎでもしたいような気がした。むこうの山はみなみどり色につつまれている。そのへんの青い竹や木なども青い葉でしげっている。田の草取りの人はかさをそろえて楽しそうにうたをうたっている。

家のはたの池の水は、さらさら流れて赤い鯉が泳いでいる。家の中では、日がまどの所がかがやいている。また夜には蚊ががんと、小さなこえを出していた。外に出ると、私の家の前では、ぴかぴか光るほたるがとんでいた。

これも情景描写文の練習のようです。上手に書いていますね。特に次の文は印象的です。

田の草取りの人はかさをそろえて楽しそうにうたをうたっている。
当時の草取りの様子が目に浮かぶようです。

田植えどき

大正十二年度 尋五年
佐藤 謙藏 (大半田)

田植えどきは大そう忙しくありました。私は、苗とりをしたり、苗はこびをしたりして手伝いました。うちでは丁度、私たちの休みが終わるといふ日に出来ました。

出来た日は、サバ、イワシ、鯛などを買って、手伝い人にごちそうしました。

休み中は、ちっとも休む日ありませんでした。おじいさんは「天気がよくてさつきよりよかった」と、おしゃいしましたが、苗とりをしている私たちは、あまりにあつうございました。

もう夏だ

大正十二年度 尋五年
高橋 眞一 (大半田)

もう夏だ。だんだん暑くなって来た。もう水あびもよい時節になったが、まだあびられないと思っただけです。今日、藤島小学校の生徒が「眞一君、水あびしないか」といいました。

私は知らないふりをして家にかえって、湯に入りました。ところがあつくてたまりませんでした。

お祭りの日

大正十二年 尋五年
成澤 伝藏 (荒俣)

昨日は僕の村のお祭りでした。僕が学校から帰って行きますと、うちにはお客さまが三人来ておりました。うちの人は、もう忙しげにうちをこしらえておりました。

ねえさんとお母さんから「お前も火をたいて手伝っ

渡前小学校の宝物 学校文集『わたまへ』より

* 大正十年〜昭和三年までにタイムスリップ

てくれ」といわれましたから、熱心にお手伝いをしてからお祭りに使えと五十銭もらいました。

その銭は、お母さんにあずかってもらいました。

虫の声

大正十二年度 尋五年
齋藤 慶藏 (渡前)

僕が本を読んでいますと、かきねの方で、美しい声でキリキリと鳴く音がしました。

その声を聞くと、何となく気持ちがかわって、自分も虫のような声を出したいように思いました。

今少ししたら、又、色々の虫が出ましよう。その時また虫の声をききながら、一心に勉強しましょう。

活動写真を見て

大正十二年度 尋五年
金内福太郎 (和名川)

九月二十五日は、この学校で活動写真がありました。私はどれも面白く見ました。

あわれなのは小野訓導でした。小野先生が尋常四年生を写生につれて行った時、先生が「この川に入つてはならない」といわれたのに、四人の子供は、先生のいうことを聞かないで川に入りました。そして、流されてしまいました。

「助けてください」という声に、先生は、はっと思つて、すぐに川に入って二人の子供を浅い所につれて行きました。もう一人川に居りますので、先生は、その子も助けようと、又、川に入りますと、その子供が足にすがりついたので、先生はおよがれなくなって、とうとう死んでしまいました。本当にかわいそうでなりません。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

二三号 丸山 とめさんの「田の神あげ」

十一月二三日は新嘗祭。稲刈も終わりがちで、田の神に感謝のいのりをささげた。床の間に田の神をかざり、稲と荷なわをそなえ、お供えもちで一年の稔りに感謝したのである。

稲の調整が終わると、ほこりはらい一月。田の神おろし、三月春分の日、四月鎮守様の春まつり、五月もち草まつり、五月末か六月初めに田植えのさなぶり、七月鳥海、月山への水乞いに代参をおくる。八月稲穂の無事出穂を祈念しお墓参り。稔りを祈り鎮守様の秋祭り。秋の収穫作業に多忙な毎日が続く。子供もそれにつれて思い出深い生活をおくるのである。

二三号 高橋 米蔵さんの「精米所」

和名川は三〇戸足らずの小さな村ですが精米所がありました。(しかし)砂塚と組合で建てたとは知りませんでした。東田川電気組合ができ電灯がともされ脱穀作業には発動機が入り始めました。……

飛行機見物

大正十二年度 尋五年
齋藤金三郎(荒俣)

七月一日には飛行機がとぶというので、私どもは、これを見に行きました。

赤川の土手に上がり、馬場の東の土手にこしかけてそよそよと吹く初夏の風に吹かれながら、今か今かともちかまえていました。

間もなく、落雷の如く音をたてて、すうっと飛び上がりました。初めは大きかったが、次第次第に上がって、しまいにはトンボのようになり、玉のようになつて、しまいには見えなくなつてしまいました。

しばらくたつと、知らないうちに、とんでもない所に大きくあらわれ、すうっと下がりました。下りるときはあぶなかるうと思つたら、はんたいに、うまく下りました。

今となれば、これは実に貴重な体験記です。

我が村の言い伝え

大正十二年度 尋五年
齋藤 キヨ(渡前)

私どもの村は、今から凡そ(およそ)五百年前に始まつたということです。

その後だんだん家がふえてきて、上渡前、東渡前、西渡前三つになつておりました。

ところが、今から四百年ほど前に、大洪水がありました。その時、東渡前の東を流れていた川の川筋がかわつて、東渡前が川になる心配がありました。そのため、東渡前の人々はたいてい、上渡前や西渡前に移住したそうです。

その時のことか、或いはその後のことか、はつきりとはわかりませんが、ある大洪水の時、川上の方からご神体が流れて来そうです。

村人がそれを見つけて、拾いあげてお社にまつたのが元の観音様であつたそうです。

村の言い伝えも調べてみると、中々おもしろいものがあるものです。

我が村の言い伝え

大正十二年度 尋五年
加藤おとめ(箕升)

私どもの村がはじめて箕升新田になつたのは、今からおよそ五十年前のことです。この新田をつくつた人は今ではとうになくなつたそうです。その人を新田大将といつたそうです。

その人がなくなつて墓にうめられてから幾日かたつて、ある村人が「大将が死ぬ時に金をたくさん持つて死んだそうだから、そこをほつてみよう」というのでほつてみたら、短刀一振と銭六文が入つていたそうです。村人は又、その所に大将をうめたそうです。

今でも新田大将をうめた墓があります。その墓を今

でも新田墓といひます。

又、四十五、六年前に、鶴岡百間堀の中村という姓の人が、私の村に始終行き来をしていたため、おみやげとして、私の村ではよろいやかぶとなどをいただいたそうです。それが今では村の宝物になつていゝるそうです。

これによれば、箕升は今から百三十年ほど前にできた村ということになります。

ところで、その宝物は今でもあるのかな?

我が村の言い伝え

大正十二年度 尋五年
小関 つき(荒俣)

私の村のうぶすな神、即ち白山神社は、私どもの村をお開きになつた神様です。大そう鳥が好きな神様であります。

むかし、ある狩人が来て、うづら鳥をとらえようとして、社から六百間あまりもはなれた柳久瀬橋付近にあみを立てて待つていましたが、とりは、いつのまにかたつてしまいました。少したつと又とんで来ましたからとらえようとする、又いつのまにかたつてしまいました。

幾度も幾度も失敗して、とうとうとらえかねて大そうおこつて村の総代の人にそのことを話しました。

村の総代人は「それは気の毒ながら、うぶすな神がおとがめになつたのだ」と聞かせました。すると狩人はおどろいて帰つたということです。

私の村では、にわとりや鳥を殺して食べたりますと家内が繁盛しないといつて、今でもかたく禁じております。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

十九号 佐藤 元蔵さんの「大水」

赤川の今の堤防は、昭和の初めごろに作られた記憶があります。上級生に連れられて助川の川原に遊びに行きました。和名川から歩いて二十分ばかり。たんぼ畑の道を七、八人ぐらい。村をはなれてとなり村の大きな川に遊びに行くのは、低学年の子どもにとっては冒険です。

そこでは、大勢の人夫がいて堤防づくりをしていました。鉄道線路のような細くてせまくて線路をつくりトロッコで土を運んでいました。

人夫は「危険だから、勝手に来るんではないよ」と言つてからトロッコに乗せてくれました。下りになると早く走るので、子どもは絶対さわらないように注意されました。昔はダムもあまりなかったのです。堤防がこわされる大水がありました。山から木がどんどん流されてきます。水が引くと村中でたきぎひろいをしました。ガソリンのない時代の大事な燃料です。

すきな色

大正十二年度 尋五年 佐藤みさを(大半田)

私が小さい時には赤色が一番好きでしたが、今は大きくなったせいかみどり色が一番好きになりました。友禅ごろの着物にみどり色などがまじっていると、そこがめだつて美しい。又、たけながなどにも赤やみどりまじりついていると美しい。

むらさきもきれいです。私はむらさきよりもみどり好きです。みどり色の草は本当に目がさめるほど美しい。

私は、この間、赤とむらさきのまじった友禅ごろで人形に着物をこしらえてあげました。

我が家の歴史

大正十二年度 尋五年 齋藤 米(渡前)

私の家が建ったのは、この頃のように思われるが、指をおつて数えてみると、たちまち十年になります。ちょうど私の生まれた年であります。

私のお父さんとお母さんは、私の家の先祖であります。わずか十年の間に妹と弟が生まれました。

家は、新しくて農家風でないといっています。それは、初めのうちは盛んに農家をやらなかったからだと思います。

今朝のふぶき

大正十二年度 尋五年 野口 たみ(渡前)

今日は大そう天気が悪い。(一月三日)

私が目をおさまして、弟とゆめの話をしていると、お母さんが台所で「家がうずまるようになった」とおっしゃるので、起きて見てみると、家の前に雪の山が出来ていた。

お父さんは、その雪をぬくために、ずきんをかぶりシャベルを持って外へ出た。やがてお父さんが入ってきた。見るとからだ中が真っ白である。

朝、米をとごとすると、水は皆こおっていた。お母さんが隣のうちに水をもらいにいこうとしたが、隣のいえが見えないくらいにふぶきである。

うちのかわいいなにかは皆たおれてしまったが、このふぶきではとてもおこされぬ。

お父さんとお母さんが「こんなふぶきは何年さきからないだろう」と、話をしているらしやた。

雪の朝

大正十二年度 尋五年 齋藤おすみ(渡前)

昨日はひじょうに寒かったので、かたつむりのようにちぢまってねた。(表現がうまい！大戸)

今朝起きて見ると、庭一面に綿をしいたように真っ白になって雪がつもっている。かきの木やなしの木にはきれいな花がさいているし、さわらの葉は綿帽子をかぶっている。

弟は朝早くから友だちと雪だるまをこしらえていたが、寒くてだめだといってうちへ入ってきた。でも、

ボチはうれしそうに寒さも忘れて雪の中をかけまわっている。

かきの木やなしの木は風にふかれて、見ているうちにみな散ってしまった。

こまる

大正十二年度 尋五年 武田みねゑ(砂塚)

この時間はこまりました。綴り方の題を考えてこないで、大そうこまりました。

みんなはおもしろそうに書いているのに、私一人だけ題がないのでこまっています。先生が「こまる」という題を教えてくださいました。私は大よろこびでこの文を書きつけました。(おもしろい先生だ！大戸)

その他にも、もっとこまるがありました。このごろの運動会に、赤が負けた時に大そうこまりました。

今日は天気がわるいので、外で運動の練習をされなからこまる人がたくさんいるでしょう。

私のうちの子犬

大正十二年度 尋五年 松浦さくゑ(大半田)

私のうちの子犬は、近頃までいたのですが、いつのまにかいなくなりました。

大そうかわい子犬でありましたから、かい道を通る人は、いつも子犬を見て歩きました。でも、今になっては子犬を見ることができません。それで親犬は天気のよい日はこえづかに上がって、ひんひんないています。前には子犬と二匹で遊んでいたのです。

私がおばさんのうちから来ると、二匹でむかえに出て来て、私にとびつく子犬でした。あのかわい子犬が今でも目に見えるようです。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

二六号 「連合運動会」について

三部連合運動会といって、添川、東栄、渡前、藤島八栄島、横山、押切、長沼の八つの尋常高等小学校の運動会である。私たちの頃は、藤島会場と渡前会場が交互に行なわれていた。

渡前には池上先生をはじめとし、歴代体育の素晴らしい先生が赴任されて、小学校のみならず青年学校でもその有名をとどろかせていた。

校内運動会は、現町内対抗であるが、それでも村人は応援に熱を入れる。運動のにぶい私はつらい立場にあるが、それでもピリにはなるまいと一生懸命走ったものである。

校内運動会でもこのような熱の入れ方である。連合運動会にかけ熱の入れ方はすさまじいものがある。「わたまえ」の作文によく感じがでていと思う。渡前の教育にかけ熱は、今思い出してもすこいと思う。だから連合運動会になると、どこの会場にかかわらず、村人が大勢かけつけて応援してくれた。

昨日のふるまい

大正十二年度 尋五年
東海林ひとせ（上藤島）

昨日は、うちでふるまいがあったので、一時間で学校をひきました。私が学校からかえってみると、まだお客様が来て居りませんでした。もう十一時になりましたので、私はおつかいにあるきました。

それからだんだんお客様がそろそろ来ました。私は赤ちゃんをおんぶして手伝いました。

夜になると、大きな電気を三つつけましたから、すみからすみまであかるくなりました。

うたをうたう人や、おどりをおどる人や、うたいをうたう人やさまざままで、大そうにぎやかでありました。

——何のふるまいがあったのでしょね？（大戸）

芽

大正十二年度 尋五年
佐藤 恒江（大半田）

此のころは芽がだんだん大きくなって来ました。

私が、おととい、つばのあたりをまわって見ると、しやくやくが芽を出していました。ぼたんの芽も大きくなって来ました。

たいていの芽は大きくなりました。草の芽は一寸ほどのびたのがたくさんあります。

やさしいようなものでも、去年うえたのは芽を出して来ました。

山の方も芽を出したのか、青々としています。

私のうちの赤ちゃん

大正十二年度 尋五年
高橋うめ（和名川）

私のうちの赤ちゃんは去年の八月に生まれました。

この月で七カ月になります。今日は昼から赤ちゃんをおぶってあそびに出かけました。

赤ちゃんの名前は勇といます。毎日いづめに入っています。そして、赤ちゃんが泣くと、私にだましてあげます。

いくらだまして泣く時には、姉ちゃんをよんでおちちをのませていただきます。すると赤ちゃんは心よくねむってしまいます。

蜘蛛

大正十二年度 尋六年
阿部幸太郎（上藤島）

巢をかけていたのにハエがくつついた。蜘蛛はさっそくハエをとりにくる。

ハエはブンブンいわせる。すると、蜘蛛はどんどんにげて行く。来ては又もどる。もどってはさつさと来て見るが、やっぱりブンブンいわれるのでこまっています。

ハエはその内にいかにも苦しいように見えてきた。にがしてやりたいような気がした。私が蜘蛛をしめると、蜘蛛は丸くなって、糸を出し

て、つうと土の上におちて、だまってしまった。

体が悪かったため

大正十二年度 尋六年
富樫 米吉（？）

私は校長先生とお別れの時、藤島停車場まで見送りに出ました。その時、藤島停車場へもう少しでつく所で、私はにわかにかがいたくなりました。

元藏君が富樫先生にいらせてくれました。

先生が私の所に来て、停車場のいすの上にねせてくれました。そうして、土屋先生と淵田先生と二人のマントを二枚重ねてくれました。

そのうちに生徒や先生方は校長先生と別れる時、万歳をしました。私はその時、いすの上にて居ったので、もし頭がいたくなかったら、私も皆と一しよに万歳をやられるのに、ねて居っては出来ないのと思つて見ると、なみだがぼろぼろこぼれました。

この作文には大正十二年三月二三日のことと書いてありました。

この校長先生は以前にこの紙面で紹介した大沼興吉先生です。東村山郡視学に榮転し、この日に藤島駅から任地に出発したのでしよう。

それにしても、子ども達にもずいぶん親しまれた校長先生のようなですね。こんな風に別れを惜しむ子どもがいるとは、うらやましいかぎりです。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

再び 十九号 佐藤 元藏さんの「大水」

先日、九六才のお婆さんが和名川のお寺にお参りにきて、当時のことを思い出すように語りました。

「夜になると水がますます増してきて、こわくて寝ることまでできず、あんな恐ろしいことはない。翌日杉谷地のたんぼに木や枝が流れてきて、シダミひろいをした覚えがあります」

（昔は）村の東の方に中川、大半田と助川の中間から村の西を北東に流れた川が合流していた。

和名川の名前の始まりは、その輪の内の村、すなわち輪名川から変わってきたという。

その真偽のほどはわからないが、和名川の東方の小字の名称に上沖・沖・下沖があり、村の西方に中谷地杉谷地があった。

大正十一年の大水は昔を思い出させるように流れてきたものであろう。

原始時代から月山、朝日山系から流れた大小の河川は所を定めず流れ回り、土砂を堆積して肥沃な庄内平野をつくってくれたのでしよう。平野を耕した祖先の人たちは、水と早ぼつから稲、野菜をまもり、洪水から家、村をまもるために水利組合をつくり、共同して利水につとめた。

寒い朝

大正十二年度 尋六年
阿部まきよ(上藤島)

秋もはや暮れようとしている。
吹く風は私共の顔を強くなでてほんとうに寒い。
木の葉は皆散りはてて葉もない木は、風にゆられて
あちらに曲がりこちらに曲がりして、ゆらゆらゆれて
いる。

田の水の上はガラスでものせたようにうすく凍って
いる。それを見ると、本当に寒々そうに感ずる。
花はもう見ることはできず、ただ軒の南天だけは赤
く実っている。もみじは黄色になったかと思う間もな
く、この間の強い暴風雨に吹かれて、みんな土に落と
されている。↓ 情景描写の練習ですね。(大戸)

母

大正十二年度 尋六年
小野寺よきゑ(荒俣)

母は様々なことを考えています。子供のことや食べ
物のことなど色々のことを思っているのです。

私共の小さい時は乳をのませたり、温かいご飯を食
べさせてくれたりして、大きくさせてくれたのです。

それから、食べ物のことは、明日は何を食べさせれ
ばよいか、あさっては、と色々心配しています。

それから、寒くなれば綿入れをこしらえて着せるや
ら、暑くなればゆかたを着せるやら、十月頃になると
あわせを着せてくれたり、私共が裁縫する時にはきれ
(布)を買ってくれたりして色々心配している。

ですから、大きくなつてからは、母の心を安心させ
てあげなければなりません。

私のひよこ

大正十三年度 尋二年
小野寺清市(荒俣)

私のひよこはかわいいひよこです。米をくれるとみ
んなよつて来て、小さくちばしでたべます。おやど
りはたべないで見えています。大きな米を小さくわつて
ひよこにたべさせることもあります。

私は学校から家に行きますと、すぐひよこに水や米
をやつてたべさせます。

ひよこは、さむいときは、おやどりのはねの中にだ
かれます。

私のうちのひよこ

大正十三年度 尋二年
押井たつの(荒俣)

私のうちにはひよこが三羽います。
この間、一羽が見えなくなつたので、私とねえさん
といっしょうけんめいたずねましたが、とうとうゆう
がたになつても見つかりませんでした。

にいさんに「ひよこが一羽見えなくなつた」という
と、にいさんは「それはたいへんだ」といって、たず
ねましたがやつぱり見えませんでした。

つぎの朝、ほかのひよこにモミをくれていましたら
にわの方から、羽をひろげるとんで来ました。

ゆうべ

大正十三年度 尋二年
上野まさ子(上藤島)

ゆうべ私のうちに、とめさんとおかあさんがふるに
はいりに来ました。

ふるにはいつてから三人でなぞかけをしました。

私は「土の中から白いあたまを出しているのはなあ
に」とかけましたら、とめさんは「だいこん」といい
ました。

それから、おかあさんは「土の中で赤いかおをして
いるものはなんでしょう」とかけました。私は「それ
はにんじんです」とこたえました。

それからとめさんは「ちつぺたつぺふぐりたまは」
とかけました。おかあさんは「それはからとりです」
といいました。

ちつぺたつぺふぐりたまが、なぜ「からとり」
なんだろう・・・？ 誰かわかりますか？ (大戸)

私のうちの犬

大正十三年度 尋二年
土田 二郎(柳久瀬)

私のうちに犬がいます。子供がはしると犬もはしつ
てついて行きます。

ある日、犬とねこがけんかしました。ねこはまけて
にげて行きました。

犬に「手をくれ」といって手を出すと、犬は手をな
めます。私がよぶと、犬ははなをクンクンいわせて、
私のそばへきます。

私は学校からかえつて、犬を見るのが楽しみです。

いなかり

大正十三年度 尋二年
齋藤 定吉(渡前)

今は、どこのうちでもいなかりをしています。

私のうちでもいなかりをしていますが、人が不足で
すから、いつまでたつてもできません。

おとうさんとおかあさんが、いっしょうけんめいに
なつてかっていますから、私どもも、そのかつたいね
を持って、てつだいをします。

私のうちにいなかりは、いつになったらできるでし
よう。

—— 子どもも大切な働き手だったのでね。(大戸)

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

二七号 金内福太郎さんの「活動写真」

今の映画。声も音楽もない無声映画。

映写機のわきに物語を語る弁士がいて、筋書きを感
情をこめて語ってくれる。

小学校の体育館で活動写真があると、夜にもかかわ
らず、村々からソロソロと集まったものです。

有声映画(声の出る映画)になったのは、昭和十年
代からでした。時代の進歩は早くて夢みたいです。

ほたるしめ

大正十三年度 尋三年
佐藤 武(荒俣)

私は夕べほたるしめに出かけました。まっ黒いやみにほたるが光っています。また、高い所にとんで行くのがあります。私は小さいびんの中に入れて、それにしめたほたるを入れました。そして、それに水を少し入れておきました。それから、田の方にとんだりするほたるを竹ではたきおとして、たくさんしめて、はなしをしながらかえって来ました。家にかえっていてもうとに見せたら、大そうよろこびました。

私の一本づり

大正十三年 尋三年
近藤 末治(荒俣)

私の一本づりはおかあさんが町から買って来たのです。買ってもらった時に、私はとび上がるほどおもしろかった。兄さんから、おをたててもらってから、さっそくはいてすべったらころんだ。その時は兄さんにわらわれた。それから一しようにけんめいならつたので、じょうずになった。

二日もたつたら、どんどんすべられるようになってきた。雪のないところをすべつたら、土にささって又ころんだ。その時は兄さんが居なかつた。買ってもらった時は、いたましくて家の中に入れておいたので、家の人からわらわれた。私の一本づりは大へんすべる。

さて、一本づりとは？ スキーかソリか？ 大戸

分教場のお友だちへ

大正十三年度 尋三年
齋藤 光(渡前)

しのぶさん、おわかれしてからよほどたちました。私はじょうぶで毎日学校に来ています。私の方では読み方は十六で、修身は二十一です。それから、算術の試験も読み方の試験もしました。皆さんは御丈夫でしょう。だんだんお正月も近づいてきました。一月一日に又いっしょになることがあります。その時、色々話をしましょう。

海

大正十三年度 尋三年
田村みどり(幕野内)

ゆのはまに行った時、海を見ました。海は青々としていて、その上にはかもめがうかんでいました。ほかけ舟やさかなつり舟がありました。海の水はしおけ(塩気)がします。海にはけんこやかにこがいます。私はけんこをひろって来ました。海はほんとうに景色がよすごいです。私は、ゆのはまに行った時、海を一番たのしく見ました。

日記

大正十三年度 尋三年
佐藤たけよ(和名川)

五月二日 水曜日 晴れ
今日から日記をつける事にしました。私が学校からかえって、おさらいをすましてから、おかあさんともち草を取りに行きました。いっぱい取ってからうちへ帰りました。弟が遊んでいましたから、おとうさんはどこへいったとききますと、町に行つたといひます。私はおとうさんが帰ってくるのをまっています。夕方、おとうさんは帰ってきました。そして、私のはおりとおかしをみやげに買ってきました。私は大喜びしました。

僕の内の子ちゃん

大正十三年度 尋三年
佐藤 清一(大半田)

僕の内には赤ちゃんが一人居ます。その赤ちゃんは今年二つになりました。僕が学校からかえって行くと泣いて居ます。僕がただいまといくと、赤ちゃんは泣くのをやめます。それからかばんをおろして飯をたべると、あかちゃんほうまうまといひます。飯をたべて、僕がしゆくだいをでかすのをだまって見えています。それから僕と遊んで、赤ちゃんに色々な話をして、よほどなると汽車が来ました。すると赤ちゃんは「ひょう」といひました。

さくらばな見

大正十三年度 尋四年
武田於よね(砂川)

さくらの花は今さかりです。昨日先生につれられてさくらばな見に行きました。私は、川で泳いでいるへびを見ました。私は土手で見ていましたが、石をなげました。へびはやなぎの木にまるくなりました。私は土手のさくらを見て、公園地に行きました。そして高い竹やぶのような所で、ごはんを食べました。竹やぶをさがして、たけのこをとっていました。女学校の生徒がきましたから、それを見てあそびました。うちにかえる時にはあつくてたまりませんでした。三川橋で休んできました。昨日の花見はたいそうおもしろくありました。

由良の夕方

大正十三年度 尋五年
東海林八三郎(上藤島)

夕方になると空は真っ赤になりました。私は日が海におちるまで見ていました。すると、一寸ほどずつだんだん海へはいつてなくなりました。それから日がずぼんとくれましたから、私は外ですずもうと思つて外に出ると、空がすこし赤くなつていました。私はふしぎに思いました。日が海におちると空が真っ赤になりました。

酒田行き

大正十三年 尋五年

丸山 春治(渡前)

僕が昨日、四時で起きてみると、だれも起きていなかった。おかあさんの部屋に行ってみました。おかあさんは、ふとんをはいで起きていました。

そうして、おかあさんと僕はかおをあらった。おかあさんは、それからご飯をたきはじめた。そのうちに、僕がかわのふくろ(バッグか?大戸)におかしを入れたり、葉を入れたりしていると、おとうさんとおばあさんが起きてきました。そのうちに、おかあさんはなべをおろして、ご飯を二つぶにぎった。

それから、僕はおかあさんから着物をきせてもらっていた。すると、六年生の善内君が僕によった。僕はいそいで、ぼうしとかわぶくろとこうもりを持って外へ出て、善内君と一緒に県道へ出てみると渡前の生徒がたくさんいた。そうして、みんなと一緒に停車場に行くと見ると、生徒が黒山のようにあつまっていた。

それから先生たちがきて、一緒に汽車に乗った。僕たちは人のたくさん乗ってない所に乗って、いすにこしをかけて外をながめながらいきましました。最上川はキラキラと海のように広く風や波はすこししかありません。

それからだんだん行って、酒田の停車場でおりて酒田の県道を少し行くと、なに店だかで砂糖湯をみんなにばいずつのませた。

そうして、町中を歩いて見ると、自動車や自転車や人力車が絶え間なく行ったり来たりするので、僕はあぶなくてたまらなかった。

だんだん行くと、酒田にはいろいろの形のよい山やけしきのよい山がたくさんありました。先生は日和山が一番よいから日和山にあがるといったので、僕はどこだろうとききますと、もうすこし行くとありますといいました。一生けんめいにあるいて行くと何山だか見えるので、また、先生からききますと、日和山だとおっしゃいました。

日和山にあがると休み小屋があつて、そこにこしをかけた見渡すとお宮がありました。海を見ると、海の水はかみのようにすんでいた。そうして波もなく風もなく、あんまりけしきがよいので、話をすることも出来ないようでした。

そして、日和山でよほど遊んでから、三時半ごろ家に帰りました。

秋の夕暮

大正十三年度 尋五年

佐藤 貞恵(大半田)

からすが二、三羽ガアガアなきながらとんで行く。夕方になったので巢に帰るのである。

太陽は西にかたむいて、海にしずんでしまった。私が太陽のしずむのをだまって見ていると、広いはてしのない空に一番星が出て来ました。

朝顔

大正十三年度 尋六年

齋藤おすみ(渡前)

朝顔よ、お前は どうしてこんなにかわいらしいのでしょうか。私はお前の顔を見るのが何よりもうれしゅうございます。毎朝、毎朝、早くから美しい笑顔で、よくきれいにさいてくれます。私はほんとうにうれしゅうございます。

毎朝こんなに美しく咲いてくれるのに、お日様が東の山からお顔をお出しになると、お前の美しくいらした姿が、次第にしおれるなんて、何というかわいそうなことでしょう。

美しいこのお前をいつまでもいつまでも咲かせてながめようございます。

炭たき

大正十三年度 尋六年

武田みねゑ(砂塚)

兄さんはこの二十日から山に炭たきに行きました。近所の人たちもなべや蚊帳や米などを用意して、一緒にに行きました。

私が毎日東の山を見ていると、煙が上がっています。ああ、あそこで兄さんが炭たきをしているのかと思うと、自分も行きたいように思います。

今日お父さんに聞いてみたら、明日あたり来るそうです。

私は兄さんが帰ったら、炭をたく様子を詳しく聞きたいと思っています。

どこの山で炭焼きをしたのでしょうか。 大戸

由良

大正十三年度 尋五年

小野寺 泉(荒俣)

由良のはまは 人だらけ

おきには汽船 かけている

ここにうきるは 竹いかだ

あそこにたつは やぐらなり

およいでいくのは とらた君

おもしろそうに およぎたり

たのしい由良も 今日かぎり

あすとおもえば いやになる

白山ぼしには 人がいる

いわのかけには かにがいる

あちらのほうには ふねがある

こちらのほうには みせがある

てまり

大正十三年度 尋五年

佐藤鉄之助(幕野内)

ころころころぶ てまりさん

ついてはあそぶ こどもらの

なかまにはいつて つかれてあそぶ

てまりさん

当時、鶴岡中学（現：鶴南）や高等女学校（現：鶴北）は尋常小学校六年生で受験していました。

その当時は、尋常小学校六年生で卒業するか高等小学校（現：中学二年）に進む人が多く、中学や女学校に進むのは成績もよく裕福な家庭の子どもでした。

ちなみに、大正十三年度の鶴岡高等女学校の受験者は二五四名で合格者は一四八名。難しい学校でした。

大正十三年度、渡前小学校から鶴岡高等女学校には五名受験しています。その内、齋藤キヨさん（渡前）佐藤みさをさん（大半田）高橋うめさん（和名川）塩野さくみさん（上藤島）の四名がその受験の様子を作文に書いています。また、その時の試験問題ものっていました。

これらは、当時の受験の様子を知る貴重な資料だと思いますので、ちよっとくどくはなりますが、四人の作文と問題を紹介させていただきます。（大戸）

高等女学校入学受験記

大正十三年度 尋六年 齋藤 キヨ（渡前）

三月二六日午後三時、学校を出て藤島停車場へと急いだ。つれは、うめさんと、みさをさんと、繁子さんと、さくみさんと、私と、先生の六人である。停車場に着くと間もなく汽車が来た。車中、色々明日の試験のことが胸にうかんで、心がおちつかない。

やがて汽車は鶴岡停車場に着いた。そして兼子旅館に着いたのは五時すぎであった。湯にはいつてつかれた体をやすめていると、間もなくご飯が出た。ご飯をすましてから明日の試験の準備にとりかかった。そのうち下女が来て床をのべてくれたので、みんな九時頃床についた。しかし、床の中でも心配で中々眠られない。やっとねむりについたのは十時半ごろであらう。

私はうめさんに起こされた。起きて見るとみんな床の上に立って着物を着ていた。そして朝食をすまし準備をととのえて女学校に行った。体操場にはいつて時間割を見たり、本を出して復習

していると、やがてみんなが二階に上がっていく。私もその後について、かいだんを上っていくと、そこでみんなの名前を呼んでいた。そして先生に札をもらって教室にはいつた。

すると、男の先生が御出でになって問題を配布してくださいました。それは読方（国語）であった。

まず心をおちつけて何回も問題を読んでみた。十二の巻の第十九課「釈迦」の所から一番たくさん出た。たいていは出来るものばかりであったが、帰って先生に聞いてみると少し間違いがあった。

次の時間は算術であった。算術はみんなやさしいものばかりで、時間が余ってこまる位であった。

次の時間は作文。題は「空」。中々書きにくい題であった。

午後から体格検査と試問があった。試問は一人一人を一室の中に呼んで、色々なことを聞くのであった。

その試問も終えて、また一緒に兼子旅館に帰った。そして湯にはいつりご飯を食べて、きのうと同じように復習にとりかかった。

五人が電灯の下に集まって、先生に算術をお習いしている、校長先生と土田先生が御出でになって、今日の試験の模様などを聞かれた。先生がじまん顔に、今日の算術は五人ともみんな出来たという、校長先生と土田先生はにこにこしながらお帰りになった。それから又少し復習をつづけたが、ねむくなったので六人はまくらをならべて、さびしい夢路をたどった。

今朝は昨日より心がおちついた。なれたのであろう女学校へ行って見ると他の生徒もよほど来ていた。

しばらくして試験がはじまった。第一時間目は算術である。昨日の算術とくらべるとむずかしくはなかったけれども、時間が少なくて問題が多かったためにひまがなかった。

第二時間目は体操である。長い時間かけ足をやらされて苦しかった。

二日間の試験もようやく終えて、宿に帰って昼食をした。そして心配の胸をおさえながら帰途についた。

大正十三年度 鶴岡高等女学校本科 入学試験問題 算術科（2日目）時間50分

(1) $(\frac{7}{8} + \frac{5}{6} - \frac{5}{12} \times \frac{3}{10}) \div 3\frac{1}{6}$

(2) $(0.32 \div \frac{2}{25} \times 7\frac{5}{8} - 0.52) \div 1499$

(3) $245.3 \times 0.37 + 24.5 \div 0.7$

(4) 6頁800字は何キログラムか。
()キログラム
★大戸ヒント 16頁=60kg

(5) 次の最小公倍数を求めなさい。()
15 3 10 9

(6) 戸数172のある村で、
来年度の経費が4715円3銭6厘であった。
★大戸ヒント 1円=100銭 1銭=10厘
平均1戸につき何程(はらひ)あたるか。
(式)

(7) 三角形の板がある。
その底辺は36cmで高さは13cmである。
その面積は幾(いく)cmか。
(式)

(8) 畳替えをするに畳表1枚が1円65銭、手間代が1畳につき60銭とすれば、8畳2間、6畳1間の座敷全部表替えする費用はいくらか。
(式)

(9) 物を落とすと、初めの1秒間に4.9m落ち、
第2秒間には第1秒間の3倍、第3秒間には第1秒間の5倍落ちる。
ある塔の頂上から物を落としたら、3秒で地面に達した。この塔の高さは何mか。
(式)

高等女学校入学受験記

大正十三年度 尋六年
佐藤みさを(大半田)

三月二十六日午後三時頃、学校を出て雪道の上を藤島停車場へと急ぎました。そして、先生に買ってくれた切符をもらって汽車に乗りました。

車中、私は何だか戦場へでも行くような感じがしました。それは、もし試験に落第したならば、先生や両親や兄弟姉に面目はない、再び顔を合わす事が出来ないと思つたからであります。試験場で生死の間にある私共の思いと、戦場で生死の間にある出征兵士の思いは同じであろう。

こんなことを考えているうちに、間もなく鶴岡停車場に着きました。

私も六人の二日間の宿、兼子旅館の二階の一室にはいつてゆつくり休んで晩の御飯をすまし、湯にはいりました。心も体もきれいに洗われて、ゆつたりとして座敷にはいつて、明日の試験の学科を復習して、九時頃床につきました。

翌日は六時頃目がさめて床からはなれました。顔を洗い、御飯を食べて、又、試験の準備をととのえて、女学校へトボトボと先生について行きました。校内は私共と同じく試験を受ける生徒でいっぱいになっていました。これ等の人と競争せねばならぬと思うと、思わず胸がドキドキしました。

先生の合図で試験場にはいつて、きめられた自分の席に着きました。そして、よく注意を聞いて、読方、算術、綴方の試験を受けました。教室の中はいたつて静かで、ただ他の生徒の書く鉛筆の音がコツコツと聞こえるばかり。

午後には体格検査と試問がありました。それも終えて旅館に帰つたのは午後の三時頃でした。夜は又算術の復習をして九時頃床につきました。

翌朝は又六時頃起きて前日のように復習をして女学校へ行きました。今日は、なれたからであるか、他の生徒を見てもなつかしい友達のような気がしました。そして、算術と体操の試験を受け、昼頃旅館に帰つて、今日の出来具合を話し合いました。そして先生にきつと及第するといさめられて帰途につきました。さくみさんと繁子さんは汽車で、うめみさんとキヨさんと私は、色々話をしながらあるいて帰りました。長い長い間、先生に教えられて準備した学科を、わずか数時間で終えたかと思うと、何だか物足りない感じがしました。

しかし、その僅かな数時間に、私共が長い間準備をした結果があらわれて来るのであると思えば、その僅かな数時間は極めて尊い時間でなければなりません。

試験場で生死の間にある私共の思いと、戦場で生死の間にある出征兵士の思い・・・私もあの時本当にそんな感じにうたれましたよ。最後の一段条理整然としたまことに立派な堂々とした議論文です。(土肥) ↑ 担任であろう。(大戸)

渡前小学校の宝物 学校文集『わたまへ』より
* 大正十年〜昭和三年までにタイムスリップ

大正十三年度 鶴岡高等女学校本科 入学試験問題
国語科(講読) 二時間

(一) 左の文をよく読んでみて問いの次に各々答えを書きなさい。

ある時のことである。釈迦は夜もすがら静座してひたすら思いをこらしていると、やがて一点の明星がきらめいて、夜はほのぼのと明けそめた。其の刹那、彼は迷いの雲がかりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。彼は此の尊い心境を世界の人々とともにせずにはいられぬという慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

(ア) 「其の刹那」とは、何をさすのですか。

(イ) 「迷いの雲がかりと晴れる」とは、どんなことですか。

(ウ) 「此の尊い心境」とは、何をさすのですか。

(エ) 「世界の人々とともにせずにはいられぬ」とは、どういうことですか。

(二) 左の語の下に其の意味を書きなさい。

- (ア) 保護色 ()
- (イ) 不朽の名声 ()
- (ウ) 好機至れり ()
- (エ) 二朝に仕えず ()
- (オ) 必要は発明の母 ()
- (三) 左の語をみんな組み合わせ一つ一つの文を作りなさい
驚も鳴き やがて はじめたから 多かつた
出しましょう 雪も消え

※ まずは、(一)までにします。次号に続く。

* 大正十年〜昭和三年までにタイムスリップ

高等女学校入学受験記

大正十三年度 尋六年 高橋うめ(和名川)

今日は入学試験なので、朝早くから支度をして学校に行った。そのうちに先生もおいでになって、午前中は算術の勉強をした。

昼からそろそろ出発の用意をして、キヨさん、みさをさん、さくみさん、繁子さん、私の五人が先生につれられて学校を出たのは午後の三時頃であった。

藤島の停車場から汽車に乗った。汽車の窓からあちらこちらをながめているうちに鶴岡停車場に着いた。そして宿屋兼子旅館について御飯を食べ、お湯にはいって勉強を始めた。そして、床についたのは九時頃であつた。

夜があけて二七日の朝となつた。みんな六時頃から起きて支度を整え、御飯を食べて女学校へと急いだ。みんなの胸はどんなであつたらう。

学校には生徒がたくさん来ていた。七時半になって私どもは試験場にはいった。はいつて見ると体がふるえて心がおちつかない。

ようやく読方、算術、綴方の試験を終えて昼飯を食べた。昼からは身体検査と試問があつた。そして又、宿に帰った。明日は算術ばかりだといふので、算術の復習をして九時頃床についた。

夜があけて二八日の朝となつた。今日は一時間目算術、二時間目体操、試験は昼まで終えた。

そして、宿に帰って御飯を食べ、私とみさをさんとキヨさんの三人はあるいて家に帰った。繁子さんとさくみさんは汽車で帰った。私共が家に着いたのは午後二時半ごろであつた。家には人がたくさん来ていて試験の様様を聞かれた。

一日おいて三十日の正午に結果は発表された。私はどうなっているであろうかと心配している所へ先生が自転車でわざわざ私のうちまでお出でになつた

そして「合格だ」と言われたので、家内中非常に喜んだ。先生も四人とも出来たので大喜びであつた。

志願者二五四名の内一四八名が合格したのである。私なんか入れないと思つて、あきらめて居たところが、幸いに此の喜びを得たのは全く先生のおかげで、その御恩は私共一生忘れることが出来ない。又、両親はじめ家内一同が非常にありがたく思っている。

高等女学校入学受験記

大正十三年度 尋六年 塩野さくみ(上藤島)

三月二六日の午後三時頃、私ども五人は先生と一緒に学校を出発して、雪の道を藤島停車場へと急いだ。先生から切符を買ってもらつて汽車に乗った。間もなく鉄橋を渡つて鶴岡停車場へ着いた。

それから鶴岡の町の中を歩いて兼子という旅館に着いた。そして二階の一室に上がった。間もなく晩の御飯が出た。それからお湯にはいって復習をした。そして道具を整えて床に就いたのは午後の九時頃であつた

私は繁子さんと二人まくらをならべてねた。ねむりにつこうと思つても、明日の試験のことが心配でなかなかねむられない。ようようねむりについたらかと思

と、ふと時々目がさめる。三度目に目がさめた時に、やっと明るくなつてきた。

起きれという先生の命令に従つてはね起きた。支度を整え朝食を食べて、いよいよ女学校へと急いだ。

途中、藤島の生徒や先生にも会つた。学校に行つてしばらく体操場で休んでいた。やがて時間が来たので女学校の先生につれられて、番号と名前を書いた札を持って試験場にはいった。

第一時間目は読方。それは二時間で書くのであつた。先生はいろいろの注意をよく教えてくれたから、それに従つて答案を書いた。

第二時間目は算術。それは一時間半で書くので問題は五つであつた。先生は又いろいろの注意をよく教えてくれた。

第三時間目は綴方。その綴方は思いもよらぬ「空」という題で、一時間で書くのであつた。大そう頭をなやました。やつとのことであつた。

午後には身体検査と試問があつて、又、先の宿に帰つた。そして晩の御飯を食べて、お湯にはいつて又明日の試験の算術を復習した。そして明日の試験の心配をしながら床に就いたのは九時頃であつた。

ようよう夜が明けて、又起きれという先生の命令によつてはね起きた。みんな心配顔をしながら顔を洗い朝の御飯を食べて女学校へと急いだ。

そして女学校の先生の命令に従つて試験場へ行った。その時間は算術であつた。次は体操であつた。

これで二日間の試験も全部終わり、又旅館に帰つて昼食をした。そして家に帰つたのは二時頃であつた。

大正十三年度 鶴岡高等女学校本科 入学試験問題 国語科(講読) 二時間(前号掲載したもの続き)

(四) 左の漢字の上に

各々適当な漢字を一字ずつつけなさい。

(ア) () 愛友 (イ) () 明

(ウ) () 績 (エ) () 略

(オ) () 密出

(五) 左の語の右に平仮名を振りなさい。

(ア) 従容 (イ) 田舎

(ウ) 体裁 (エ) 部屋

(オ) 区域

(六) 左の文の片仮名の下に其の漢字を書きなさい。

近年、木材のジュヨウ () が

ゲキソウ () したので

リヨウザイ () にテキ () した

ジュモク () のナエ () を

我が国にイシヨク () したが

サイバイ () の仕方がよい為か

ハツイク () が極めて早い。

コウモリ

大正十四年度 尋二年
齋藤 正雄(渡前)

私は毎日夜になると、大きなさおをふりまわして、やっとうへコウモリを一匹しめしました。私はおもしろくて、コウモリをかごの中に入れて置きました。朝おきて見るとコウモリはにげていってしまいました。私はいたましくていたましくてなくようでした。私は、今日のぼん、又どうかしてしめたいとおもいます。

私の箱庭

大正十四年度 尋二年
成澤 茂次(荒俣)

私には箱庭があります。箱や山や川などは、おとうさんからこしらえていただきました。まだ川にははしをかけません。山には松の木やその他いろいろの木をうえました。だんだん川のはしもおとうさんがこしらえてくださるようです。私は毎日学校からかえって、箱庭をながめるのが一番たのしみです。

おじいさん

大正十四年度 尋二年
高橋みさを(砂塚)

私のうちのおじいさんはおもしろいおじいさんです。おじいさんが一人ではたらいしている時、うちの奥蔵がおじいさんに「おれもかせぐか」というと、じいさんはわらいながら「奥蔵がかせいでくれるなら、おれのこしもいたくなくなるよ」といいました。おじいさんは今年六十七で奥蔵は六つです。

うちのおじいさん

大正十四年度 尋二年
田村 糸(幕野内)

私のうちのおじいさんはよいおじいさんです。毎朝毎朝一番はやくおきて、ごはんをたいてくれます。そのうち、おかさんがおきると、おじいさんは仕事場へかせぎに行きます。ごはんは二はいしかたべませんが、それでも力があつて、おもい物でもどんどんもつてあるきます。おじいさんは時々こしがいたくなりりますが、すこしもやすまないでかせぎます。夜になると、おじいさんは酒を三本ものみます。

かえる

大正十四年度 尋二年
佐藤 貞子(上藤島)

かえるは朝やひるにはなきませんが、ひぐれになると田のくろのあたりでなきます。私は菊三郎をつれて、かえるのなく方へいってみました。私どもの足音をきくと、かえるはなくのをやめました。菊三郎と二人だまってきいてみると、又かえるはなきだしました。日ぐれになつてうちへかえると、うちの人はみんなごはんをたべていました。私どももうちへはいつて、ごはんをたべました。菊三郎が一ばんおそくまですぎないので、みんなから耳をひっぱられました。

私のうちのねこ

大正十四年度 尋二年
成澤 鉄作(渡前)

私のうちのねこはゆうべけんかをして、足がびっこになりました。あまりかわいそうでしたから、くすりをつけてたばねてやりました。ねこはいたいのものがまんにして、げんきよくあそんでいます。私がさかなのとぎをくれるとよろこんでたべます。私のうちのねこは大そうかわいいねこです。

風

大正十四年度 尋二年
齋藤 増雄(渡前)

この間の風は大そうつよい風でした。その風で学校のお庭の大きなさくらの木も、私のうちのさわらの木もおれしました。私がだいにじにしていた花物も、みんなころんでやくたたなくなりしました。風がふくとき、私が外へでてみますと、きいろやあかの木のはがとんできれいでした。

私の日記

大正十四年度 尋三年
弁納 清恵(荒俣)

四月十五日 火曜 曇のち晴
今日から日記をつけることになりました。今日は私の方でお祭りですから、私は学校からいそいで帰りました。おかあさん一人るすをしていました。私はすぐにお宮にさんけいに行きました。ねえさんはおかしをたくさん買って来ました。四月十六日 水曜 雨

私が学校から帰って見ると、町のいとこから絵はがきが来ていました。昨日おひなさまをかざりましたから見に来て下さい、と書いてありました。四月十七日 木曜 曇
朝早くおきておさらいをしていますと、馬ごやのうめの木で、うぐいすがホーホケキヨとなきました。学校であそんで、おそく家にかえったので、ねえさんにしかられました。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

三三三 佐藤たけよさんの「日記」

佐藤たけよさん(八九才)が今でも元気で、昔の思い出を語ってくれました。そのころは、鶴岡から温海への自動車道路への改修のころで、お父さんは毎日馬車で砂利ひきに出ているそうです。そのころは、女子で羽織をきている子どもは、お金持ちの子どもとかぎられていました。お父さんはふんばつして、三年生のかわいいむすめに、大きな羽織をかってくれたのでしよう。よろこんでお話してくれました。

当時、渡前小学校は他のものはん校として参観におとずれる人も多く、学校の教育もそれなりにたいへんきびしかったそうです。したがって、作文もよくできた人をのせてくれたそうです。

日記

大正十四年度 尋四年

小関よしゑ (荒俣)

八月六日 水曜日 晴

六日になりましたので、私のうちではまゆもぎがはじまりました。明日、お母さんが、私をつれて、まゆ市場へ売りに行くのです。

私はうれしくてたまりません。早く明日になればよいと楽しみに待っています。

私の妹

大正十四年度 尋五年

押井 義雄 (箕升)

私の家の妹は今年三つになります。大そうおとなしいようなかわい顔をしています。大のわがままな子なのでこまっています。

朝、お母さんがみんなに魚を分けてやると、何でも一番早くもらわないと泣きます。それで早くやると、自分のをみんな早くたべて、お母さんの分をたどつてたべます。誰も知らないでいると、又ほかの人のを取る。お母さんは心配して、なるべくやらないようにすると、はしなどをなげてしまします。

こんなにわがままをするので、今度お父さんにしかられます。すると、やっこだまってしまします。子供のうちは、だれもあんなもんでしょうか。

私の弟

大正十四年度 尋五年

松浦 松治 (大半田)

私の弟は今年で四つになりました。名前は三蔵といひます。朝起きるときはいつでもきげんもよくて、大元気で。でも泣きはじめると、いくらだましてもとまりません。つい「倉に入れるぞ」というとすぐに止めます。

昨日の朝、私が起きてから少したつと、着物をもつて私のところへきました。そして私の着物を着せてくれと頼むのでした。私がさっそく着せてあげましたら大喜びでした。ほんとに私の妹合はかわいいのです。

うちの猫

大正十四年度 尋五年

塩野 勘作 (上藤島)

うちの猫は去年、豊栄からもらつて来たのです。その時は小さくて、雪が降ったら死んでしまいか知れなかつたのでした。しかし、ようよう生きてきました。

それが、この間一週間ほど家にいませんでした。ぼくはもう死んでしまったかとあきらめました。どこかで殺されてしまったらうか。誰かから殺されてしまったらうか。誰かから川にでも流されたらうかと毎日心配しておりました。

ところが一週間目の夜、僕らが寝ないうちに外から何だか猫のなく声が聞こえました。僕が家の猫が来たのではないかと、戸を開けると猫が家の中に入ってきました。見れば家の猫です。僕はうれしくてたまらぬ程でした。

その夜、僕が床に眠つてから、猫が床の中に入ろうとしたのだろう。その時、つめを立てたので、僕は目をさました。ふとんを空けてだいてねました。僕はかわいくてなりません。家の人は、一週間も過ぎてから、よく来たものだと感心しています。

赤い菊

大正十四年度 尋五年

武田 寅蔵 (砂塚)

僕の家の畠には赤い菊がたくさんうえてあります。私のもあります。それは去年、僕がおかあさんから苗をもらつて、春にうえたのです。

それが秋に花が咲きました。その花はあまりにきれいなので、私はこの二十二日の日、学校からかえるとすぐ鉢植えにしました。それに毎日水をかけて手入れをし、またながめて来ます。

今は生氣よく大きな花が咲いています。この花は十一月の初めに咲いて、冬になつても散りません。私はあんまりきれいだから、今朝、学校に来る時、ほとけ様に二、三本たててきました。

大水の日

大正十四年度 尋五年

松浦こぶち (大半田)

八月二三日には大そう雨が降りましたので、今までおかであった所に水があふれました。それが見る間に川いっぱいになり、今度はずつと高い畑や田の上までもついでてしましました。村の人々は皆大さわぎをして川ばたへ走つて行きました。

私の家でも大人たちはみんなでかけてしまつて、家には私と三つになる女の子が居るすをして居りました。雨は降る。暗くなる。それでもおかあさんたちは帰つて来ない。こまつて、ただ心配して居りました。

すると、なんだか来たような足音がするから、雨戸をあけてみたが誰も居ないので、ますますさびしくなりました。それから少したつて、うちの人たちが帰つてきましたので、ゆっくりしました。そして「よくなるすいをした」と、ほめられました。

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

三一号 上野まさ子さんの「ゆうべ」の

謎解き ちつべたつべふぐりたまとは?

とくに冬は、いろりやこたつをかこみなぞかけをしました。(ちつべたつべふぐりたまは)小さい大きいふぐれた玉(という意味です)

からとりは春に植えて秋にほります。小さい(ちつべ)いもを植えると、秋にはそのいもが大きくなつてふぐり玉のわきに、ちつべたつべ様々なこいもがつきます。(だから答えは「からとり」なのです)

(なお昔は)男の〇〇たまをふぐりと言いました。

ちよつとエツチなクイズだったのですね。大戸

* 大正十年、昭和三年までにタイムスリップ

新春夢がたり

校長 大戸真澄

渡前小学校のお宝

職員室入り口の左側の壁に「富士山」と題した大きな絵が飾られてある。大きな会社の社長室にでも似合いそうな風格のある絵である。その絵の下のプレートには次のようにある。

「富士山」 岡 吉枝

昭和十七年四月

寄贈 安達 健吉 訓導 (結婚記念)

私は、前々から、その絵とプレートを重ね合わせて二つの疑問を感じていました。

一 教師にすぎない安達氏は、いかに結婚記念とはいえ、この高そうな絵を・・・勤務校に・・・

疑問①「なぜ寄付したのか？」

— TVの「なんでも鑑定団」が大好きな私がどうしても気になるのは値段・・・

疑問②「この絵はいくらぐらいの価値があるのか？」

今回は、紙幅の関係で疑問②に絞ります。

— 値段を知るためには作家を知る必要がある。

昨年十二月。インターネットで調べ物をしていたら若月先生に、ついでに画家「岡 吉枝」さんも調べてくれるように頼んだ。ひよっとしたら何かがわかるかもしれないという程度の気持ちだった。大した期待はしていなかった。ところが意外な結果となった。

- ☆一九〇七年(明治四〇) 第一回文展 三等賞
- ☆一九〇八年(明治四一) 第二回文展 三等賞

「文展」は現在の「日展」ということである。日本最高の権威ある美術展である。

岡氏はそこで二度も三等をとっているのである。日本でも一流の画家ということになる。とすれば、あの絵は相当の価値があるはずである。

しかし、ここで新しい疑問が生まれる。

— そんなにすごい絵だとすれば・・・

疑問③「一教師にすぎない安達氏が

手に入れることができるだろうか？」

安月給の一教師がそれを買って、学校に寄付したと考えるのは、たしかに不自然である。とすれば、この絵は偽物(コピー)なのかもしれない。

しかし、そうとも限らない。何かの事情があつてあまりお金を使わずに手に入れたという可能性もある。

また、安達氏か奥さんの実家が大金持ちで、結婚を祝いボンと大金を出してやったという可能性もある。

*

本物だとすれば・・・数百万?・・・いやいや・・・数千万円?・・・そうならどうしよう?

年の始めからメデタイことを考えています。(笑)

新年明けましておめでとうございます。本年もご愛読くださいますようお願いいたします。

今回は「お正月」に関する作文を探してみました。

元日の朝

大正九年度 尋四年 齋藤恵美子(渡前)

まちにまちたるお正月も、はや今日となりました。いつもお母さんにおこされる私が、けさは雀におこされてとこを出ました。

誰よりも一番早く起きたと思つて、いそいでへやから出て見ますと、今年九つになる弟がちゃんとおきて下男にもちやきのおてつだいをしております。いつおきましたかと聞きますと「一時間ほど前」といつてじまん顔でおりました。

私は感心しました。みんなは「どおりで今日はお天気になった」といつて笑いました。それからみんなでたのしくおぞうにをたべました。

もう正月

大正十年度 尋五年 加藤順市郎(箕升)

私は正月が来るのを毎日楽しんでます。

正月になれば、うちのお父さんから頭の上に御もちをあげてもらつて、一つずつ御年をいただく。

うちの人は元日の朝の二時か三時頃に起きて御もちを焼きながら楽しく語る。

妹は正月になると八つになる。八つになるとすぐ学校に入るものと思つているのか「正月になると学校に入る」といつてよろこんでいる。

一月一日は、朝早くおぞうにをたべて学校の祝いの式に行く。そうして式をやつてあがりになる。

次の二日で人はみんな町に物を買いく。その時には私も行くことになつてゐる。二日の日は私はお母さんに五十銭いただくことになつてゐます。

新年

大正十四年度 高等科二年 佐藤 重(荒俣)

嗚呼(ああ)大正十四年も夢の間に過ぎ去つてしまつて、新しく大正十五年を迎えました。

我等が入学してからもう八カ年になつた。回顧すればなんだか夢のような気がします。

我等国民七千有余萬は、この楽しい新年を迎えて喜に満ち、東天より昇る朝日が清く美しくきらきらと輝いてゐるように、我等もこのような心でこの十五年も送らなければならぬ。

一年の計画は元旦にあり、で、一年のことは元日に決めていくのであるから、我等も過ぎ去つた後のことを考へて、悪かつたことをなおし、よく身を檢束して益々善良なことを行ない、大日本帝國国民として恥ぢないようにし、世界一等国の名誉を保ち、益々國威の發揚を圖らなければならぬ。

※檢束：行動の自由を許さない(辭書で調べました)

* 大正十年〜昭和三年までにタイムスリップ

卒業式には、まだちょっと早いのですが、卒業式の「答辞」を見つけてきましたので紹介します。

卒業式の答辞

大正十三年度 尋六年
榎本 藤吉（柳久瀬）

今日、我ら卒業生のため盛大なる卒業式を行なわせられました誠に嬉しく思います。

小学校に入学した当時は、いろはのいの字も知らぬ幼子でありました。それが、校長先生始め諸先生から六年の長い間、お世話してお教え下さいました御恩は誠に山よりも高く海よりも深こうございます。

私共は、卒業の後もこれまでのお教えを守って、ますます智を広めて卒業生の名をはずかしめぬように致しまして、この御恩の万分の一にも報い奉る覚悟でございます。

卒業の喜びと共にお別れの悲しさをつくづくと感じます。なつかしい学校、親しい友達、今日を限りに別れると思えば、自ら胸がせまって参ります。

まして先生にお別れするのは何よりもつろう御座います。この後、折々学校に参りましてお目にかかりたいと存じます。

申し上げたい事は山々あるけれど、今は思うように言うことができません。唯だ、これを答辞と致します

同じ題でもう一つ載っています。だから、これが本当の答辞か、それとも習作かは？です。大戸

私のうちの犬

大正十四年度 尋二年
阿部 秀夫（上藤島）

私のうちの犬は、私が四つか五つの時もらったのだそうです。

私が学校からかえると、私をどこかの人でも来たのかと思つてワンワンほえます。それでも、私を見ると尾をふつて、私をなめたり私の着物を尾でパツパツとはらいたりします。

私は学校からかえると、犬にごはんをくれるので、げんかんでまっています。ごはんをもつて行くとびよんぴよんとはねて、めしをやることよるこんでたべています。

今日

大正十四年度 尋二年
加藤 金子（荒俣）

今日は雨風で大そうわるい空です。それでも私は宝徳まで行かなければなりません。私は途中で飛ばせられるかもしれない。私は今日も大きい人をまっています。私の村の一年生もまっています。

私は、この寒い日などはなくて、もつとあたたかな日ばかりだとよいと思います。天に行つて、こんな寒い日などなくしてくださいといいたくても、天まではどうしても上がれません。だから、こんな日はなんべんあつてもしかたありません。

へちま

大正十四年度 尋二年
小関 春美（荒俣）

私の家にはへちまがたくさんあります。一番大きいのはおとうさんのうでぐらいになりました。それは、おじいさんのおくすりとへちまのつゆと合わせてのむためにうえたのです。

へちまのみは物をこするのにつかわれるそうです。へちまはもう皆もぎました。よそへも分けてやりました。

へちまとおくすりと合わせてこしらえると、赤くぶどう酒と同じようでした。それでものんでみると、あじはちがいます。

また来年もへちまをたくさんうえるそうです。

妹の七つ祝い

大正十四年度 尋二年
齋藤 玉（渡前）

八日は妹の七つのお祝いの日でした。おかあさんとおとうさんが一生けんめいはたらいて妹の七つ祝いをして下さいました。

妹は大よろこびして、私の七つ祝いの時着た着物を着て、お宮まいりに行きました。その日は天気がよくて、お祝いにはあつぱれでした。

にわとり

大正十四年度 尋二年
齋藤 雄治（大半田）

私のうちでは、にわとりをたくさんかっています。毎年、今ごろにひよこをたくさんふやします。

それで、私は毎朝おやどりやひよこに水をやり食物をくれます。おやどりやひよこたちは、私のかえりをまっておりますから、たいそうかわいらしゅうございます。

にわとりでもこのとおりですから、私たちは先生のごおんはわすれてはなりません。

☆当時の先生の評

にわとりのことから、先生のごおんまで考えてきた君はかんしんだネ。大人のようにすネ。しかし、むりに大人のまねをしてはいけませんヨ。

小さい時に大人のまねをして書いていると伸びませんからネ。↓ いいアドバイスですね 大戸

和名川 高橋俊二さんの感想と解説

三三三 近藤末治さんの「私の一本づり」の謎解き 「一本づり」とは？

スケートです。下駄のように鼻緒をつけ、うらはは中の山で（その尾根にあたる部分に）一本の（細いレールのような）鉄がついていました。それで、馬ぞりがかたくなつた雪道をすべつたものです。

★ 私もそれで遊びました。大山では「かね下駄」と呼びました。冬の楽しい思い出です。（大戸）

たごあげ

大正十四年度 尋三年
成澤 實(荒俣)

私は毎日、学校からかえるとたごあげてたのしんでいます。十六日にたごをあげると、たごがうなるこえがしました。

私が「たごさん、たごさん、なにをしたの。さむいからなくのだから。さむいならへんじせ」というと、たごは「うん」といいました。

私は「たごさん、今いったのはへんじですか」とききました。たごは、何ともいいませんでした。

私がつたごをおろしてかえってききますと、まだ友だちがつたごあげをしていました。私もいこうかと思いましたが、あまりさむいのでやめてうちへかえりました。

ひよこ

大正十四年度 尋三年
富樫しげい(柳久瀬)

私にうちにはひよこがいます。ひよこに菜の葉やごめをやる時、ひよこはみんなよってたべます。

私は昨日学校からかえって行くと、ひよこがピヨピヨとないていました。たごめをやる時とびあがってたべました。

雨がふってきて、ひよこの羽がぬれましたから、かわいそうだと思って箱の中に入れてやりました。

私は、学校からかえって小さいひよこをみるのがたのしみです。

由良にいった時

大正十四年度 尋三年
太田 操(渡前)

私は、この間、おとうさんにつれられて由良にいきました。私はおもしろくてたまりませんでしたので朝四時で起きました。したくをして、ていしやばへいきました。

藤島から汽車にのって三瀬でおりました。それからあるいて由良にいきました。

宿につくとすぐ、私はごはんをたべました。それからみんなと海にいってはいりました。よし子さんは二ども海へくぐりました。私もおもしろいので海にはいっておよぎました。

宿にかえって、又ごはんをたべて、あそびにでました。大きな橋をわたって行って、岩についた貝をひろったり、舟にのって見物したりしました。それから六時ころの汽車でかえりました。

ゆうべのゆめ

大正十四年度 尋三年
齋藤みつゑ(渡前)

私はゆうべ、犬からかじられたゆめをみました。

おとうさんが、ほかのうちの人がくるから酒を二合かってこいというのでした。私は「はい」といって、酒屋に行きました。かえりは学校の方からきました。すると、うしろから大きな男の人が、きかなそう犬をつれてきました。私が「きかない犬ですか」とききますと、その人は「きかない犬ではないよ」といって

私にかからせました。

私はびっくりして「きかない犬だ」といったら、犬は私の中ゆびにかじりつきました。私はいたくて泣きました。こういうゆめをみました。

目をさましてみると、あかるくなっていました。おかあさんがよぶからといってみますと「おまえはゆうべないだっけな」といわれました。

私はゆめをみた話をしてみんなにわられました。

おやすみの中日

大正十四年度 尋三年
田中 小里(幕野内)

おやすみの中日、私は糸さんと雪すべりをしてあそびました。

そのうち、フワフワとわたのような雪がふってききましたので、二人でうちにひっこんで、こたつにあたってざっしをみていました。

外をみると雪がふらなくなりましたので、また外に出てさかをつくってあそびました。

糸さんが、なんにもしないでたっていますので、糸さんにききますと、さかをつくるのはやめて、だるまをこしらえないかといいました。

私は、うちに行つてかた炭をもってきました。

私はだるまのなり(からだ)をこしらえて、糸さんはあたまをこしらいました。二人でこしらっただるまさんはおもしろいかおしていました。

日曜の朝

大正十四年度 尋四年
今野 勇(上藤島)

僕は、ふと目をさめたからすぐにとび起きた。雨戸をあけて外を見ると空にはまだ月が黄色にかがやいている。しばらくたつと、寺のかねがゴーンゴーンと聞こえて来た。

となりの家では戸をガラガラとあけはじめた。大きな声でうたいながら車をひっぱっていく人がある。おもしろい人だと思った。雀はかたまつて、おもしろそうににぎやかにさえずっている。

東の空はもうもえるように真っ赤になって、大きな日がだんだんと出て来た。

少したつと、阿部牛乳屋の女中が車に牛乳をのせてくばって来た。新聞配達夫は新聞を大急ぎで配達してさつさと行ってしまった。

だんだん人通りも多くなつた。お日様もあたたかくきらきらとかがやいて、よつほど高く上がった。

報告 あの絵は本物だった!

四十号で紹介した「岡吉枝の絵」について、高橋俊二さんから、次のような情報が寄せられました。

—— 当時、岡吉枝さんは「押切」に疎開していた。絵を食物と交換したり、米や野菜を画代とする

こともあった(自分の家にも岡さんの絵がある) ☆これで、手に入れることができた謎がとけました。

すな引き

大正十四年度 尋四年
太田 晋(渡前)

私たちは土曜日にすな引きをしました。私の方のくみでは六人で、車を引く人が四人、あとはおす人が二人で三川橋の所まで引いて行きました。そして、橋の上からきよみさんとよき子さんがはね下りました。私たちは橋の上に居て、つなをもつていると下の方ではバケツに砂をもつて、つなにむすぶと私たち人はつなをひき上げて箱に入れ、又下におろしてやりました。十二、三回くりかえし車を引いて学校にかえりました。

その日はちようどしようきち(正吉かな)におよめがくる日なので、くるとすぐ車をおいて見に行きました。それから学校にきてごはんを食べ、先生のおっしゃる事をしてかえりました。

引いてきた砂は、何に使うのだろうか？
この時間帯は授業時間なのか放課後なのか？
学校にきて食べたごはんが昼食であれば、砂引きをしたのは午前中、すなわち授業時間中ということになる・・・学校の砂場に入れる砂なのだろうか？先生も行ったのか？謎は深まる。(大戸)

私の家のひよこ

大正十四年度 尋四年
阿部 翠(柳久瀬)

私の家のひよこは、まだ羽がはえませんが。

昨日、私がえさをやるとおもしろい様に食べていました。親に別なものをやるとひよこもついて来て食べます。それでかごに入れました。入れると小さな聲でピヨピヨと鳴きます。

私が親をかごの中に入れますと、ひよこはおもしろい様に細い足でチヨコチヨコ歩きました。親をかごから出すとコココとあたりを見ます。私は学校からかえって、ひよこを見るのがたのしみです。

冬

大正十四年度 尋四年
成澤とし子(渡前)

だんだんあられや雪がふって寒くなります。今日も朝、学校にくる時あられがふりました。今度は雪がふるでしょう。

雪がふると私たちは学校にくる時にたびをはいたりゴムぐつをはいたりします。

冬、学校にくる時いるものは「たび」「ゴムぐつ」「ぞうり」などです。

冬

大正十四年度 尋五年
阿部栄治郎(柳久瀬)

さむい冬だ。冬になってからは、まだ一日も雪のふらない日はない。あさ、天気がよいと思えば夕方になるとわたのような雪がこもことふってくる。人の足あともなくしてしまふ。

だるまを着た人も、マントを着た人も、みな外を歩

く人は白くなって行き来している。

お日様はどこにいたかとも見ても、雲にかくれてうすく光りをてらして暮れてしまふ。

夜などはなに音一つ聞こえるものはない。ただ風の音ばかり。朝になって見ると、道は雪でうずめられている。ほんとに冬は寒いものである。

僕の近所のかじや

大正十四年度 尋五年
五十嵐岩蔵(上藤島)

僕の近所のかじやは、朝からばんまでトントンカン トンテンカンとはたらいしています。

一人はそんなに年よりではありませんが、一人はもうとうにおじいさんになっていきます。それでも今でも一生けんめいにはたらいしています。

そのおじいさんは、よくなべのつるなどさまさまなものをこしらえております。このかじやはひっきりなしにはたらいしています。

又、二人は冬のさむい日でも、夏のあつい日でも、木からつゆがおちるように汗だらけになってはたらいしております。

僕もかじやになりたいが、僕にはなれないと思いません。かじやになっていいる人はなかなか感心なものであると感心しております。

此の頃のようす

大正十四年度 尋五年
成澤てつ子(荒俣)

此の頃はなかなか寒くなりました。木にはもう、まっ白い雪がのっそりとかぶって居ますし、天からは綿のようになつて、ふわりふわりと降って来ます。

小さい子どもは、頭にずきんをかぶったりして、おもしろがって遊んでいます。

夜明け頃は、風がごうごうと吹いて、さびしいような感じがします。おじいさんやおばあさんは寒い寒いと言って、こたつに入って居ます。

学校に来る時は、人々は大そうなんぎだようです。

電気の消えた夜

大正十四年度 尋六年
佐藤おきん(大半田)

私とおかあさんが一しよに裁縫をしていると電気がぱっときえました。すると、そばにいて勉強をしていた弟がびっくりしてたちあがりしました。

弟は、昼でも夜でも何かガタンというときとすぐ人と人との間にはさまっていきます。今夜もまた私とおかあさんの間にはさまってちぢこまってしまいました。

すると、今度はねずみが二階でカタンと音をたてました。その時、弟はわきにいたおかあさんからにげられました。

すると弟はどうにもならないとみえて、おとうさんおとうさん、今夜は電気も消えたし、一しよにねた方がいいのでは、と言ったので、みんなにわらわれました。

子ねこ

大正十五年 尋二年
成澤 留藏 (荒俣)

私のうちには、親ねこと子ねこがいます。私は子ねこがすきです。

学校から帰って行くと、子ねこが見つけてついて来ます。私がごはんを食べていると、子ねこがよつて来ますから、魚のときをやるよとよるこんでたべます。

天気の良い時には、親ねこと二ひき外へ出てあそんでいます。親ねこはだまってるのに、子ねこはどんどんかかっていきます。でも、親ねこは、手でちゃんとおさえてしまいます。子ねこはなんべんおさえられてもかかります。

きのうの朝、おきるとすぐに、私が子ねこをだいて火にあたっていました。おかあさんから「そんなにおねこばかりちよささないで、はやく学校に行け」といわれました。

きのう

大正十五年 尋二年
成澤 鉄雄 (荒俣)

「おかあさん、お天気はどうですか」と、とこの中からおききします。「今日は上天気だ」ということでした。よるこんではねおきました。

ごはんをたべて、学校にくる時には、何もかぶらないで来ました。

おひるすぎになると、空がだんだんくもつて来ましたから、私はこまったと思いました。

いよいよ学校があがりになった時には、今日は友だちが、みんなかぶりものを持って来ませんので、みんなも何もかぶらないで、ぞうりを持って、きものをはしよつてはしりました。

村をはずれて、のほらに出てからは、よくよくこまりましたから、一しようけんめいになってはしりました。それでもうちへかえった時は、きものがすっかりぬれていました。本はそんなにぬれませんでした。

おかあさんにきものをとりかえてもらって、つね吉君のうちへあそびにいきました。

昔はスクールバスもなかったし、ふつうの家に電話もなかったの、こんな時は本当にこまったと思います。自分でなんとかするしかありません。それにしても「本はそんなにぬれませんでした」は感心ですね。教科書を大切にしていたことがよくわかります。
(大戸)

たこ

大正十五年 尋二年
齋藤 松彦 (渡前)

私はたこがほしくてたまらなかつたから、あんなにははつてくれとたのみました。あんなには、私が二度も三度もたのんだのははつてくれることにしました。

それでお父さんからはんしをもらおうとしたら、お父さんは「たこならはんしでは、そんなさけてだめだろう」といって、白石紙をくれました。

あんなには、その白石紙にぎつしをみて「うしわかまる」と「べんけい」をかいてはつてくれました。

すぐあげたかったが、その日は天気がわるくてあげられませんでした。次の日は、次の日はちようど日曜で天気もよかつたから、家のうらに出たら、喜代藏君と正雄君が来てあげました。

たこあげ

大正十五年 尋二年
成澤 啓記 (渡前)

私はたこあげが大好きで、おともいもあげました。たこはうなりをたてて上がつていきましたが、そのうちに風が強くなつてきたので、おっぱのみじかいのがかたがってきて、おちてしまいました。

それから、おっぱをつないで又あげました。あの時あがつていたのは、三郎君、一郎君、健吉君、哲三郎君、豊作君、吉郎君、それに私でしたから、おそろしい音を立てました。

どのたこもまけずに元気を出して、あらそつて上つているようでした。私はなんぼさむくても、たこあげは大好きです。

私のうちのおじいさん

大正十五年 尋二年
佐藤みよし (幕野内)

私のうちのおじいさんは、毎日酒をのんでも、おそく朝は早くおきます。どんなに酒をのんでも、おそくねても、朝は早くおきます。

おじいさんはわかい時は、酒をのまないでも上手にうたつたそうですが、今はへたになりました。おじいさんは、酒をのむと字が書けません。それでも自分より書き手はないといっています。

うんどうかい

大正十五年 尋二年
富樫和三郎 (柳久瀬)

おとといは学校のうんどうかいでした。私どもは百メートルはしるのでした。

私はまけてはならないとおもつて、一しようけんめいにはしりました。そうしたら一とうになりましました。はしつてるときは一とうだとわからずにはしりました。ほうびには西洋紙一じようもらいました。

私が紙をもって赤のくみにかえると、みんなからほめられました。おもしろいよう、はずかしいようでした。

昨日のからす

大正十五年 尋二年
庄司 フデ (大半田)

きのうの朝、みせの戸をあけると、からすが鉄道で何かを一けんめいにつついていきます。

よくそこを見ると、汽車のまどからおとしたべんとうのくいがらです。

犬が一びききました。又一びきはしつてきました。からすはとうとうまけて、むこうの杉の木にとまりました。そして、カアカアとなきました。

ゆめ

大正十五年度 尋二年

佐藤てつゑ (大半田)

私はこのあいだ、ふしぎなゆめを見ました。それは、算術をおいた時です。私がだれよりも先にできあがりしました。それで毛糸であみものをやっていたら、先生にとられました。私はびっくりして、先生をぶうとふきました。それはゆめです。

朝おきると、うちのものに話しますと、おとうさんやおがあさんにわられました。

春をまつ

大正十五年度 尋三年

大川市太郎 (渡前)

これからはだんだん春になってきます。春になれば、うめの花も咲くし、きれいなバラも咲くし、それからたんぽぽやすみれの花が、きれいに野原一めんに咲きます。ひばりは朝早くから空をとんでいます。

早く春になればよいとおもいますが、今年は雪の多い年で、なかなかきえませぬ。早く春になってくれればよいとまっています。

たこ

大正十五年度 尋三年

齋藤 豊作 (渡前)

私は兄さんからしみだこをこしらえてもらいました。私はその時はおもしろくてたまりませんでした。

私は早く風が吹いてくれればよいとまっています。けれども風はなかなか吹いて来ません。私はしかたなく、たこをとこの間に上げてねました。

その次の朝おきてみますと強い風が吹いています。私はさつそくたこをしょって行って、兄さんからあげてもらいました。たこはずんずん上がって行きます。そして、だんだん小さくなっていきます。私はおもしろくて手をうってよろこびました。私の兄さんはよい兄さんです。

ゆうべのかみなり

大正十五年度 尋三年

阿部 弘 (柳久瀬)

ゆうべのかみなりは大そう強かった。

きのう私とおじさんが田にいねしよいにいった行きました。そのかえりがけにかみなりがはじまりました。ちようど、たいようがしずんで、あたりはうすぐらくになりました。ほかの村のでんきが星のように所々にびかびか見えました。

かみなりの音が聞こえなくなると、こんどはいなびかりがびかっと光りました。

私はおっかなくて急いで家にかえりました。

私の家のでんき

大正十五年度 尋三年

近藤喜一郎 (幕野内)

私の家のでんきは、時々ついたりきえたりします。でんきがつくと、その下で本を読んだり、字をならつ

たりします。

私が一しょうけんめいに勉強していますと、何をしたのか、でんきがぼっときえました。となりの家に行つてききますと、やはりでんきがきえていました。ああふしぎ、ああふしぎと思つてさつそく家にかえつてみるとでんきがついて居りました。

たこ

大正十五年度 尋三年

太田 市郎 (渡前)

僕は今日、おじさんからたこをおろしていただきました。僕のたこは二枚だけです。中に渡部のもん(太田)なのに、なぜ渡部?大戸)が書いてあります。

このたこを風がある時あげると、僕がもつて行かれるほどつようございます。ですから僕は風のない日にもそつと上げてみました。するととうとう、たこは田のくろにおちてしまいました。

大風

大正十五年度 尋三年

松浦 鉄美 (大半田)

昨日の夕方から、にわか風がふいて寒くなったので、私どもは寒くて寒くてたまりません。シャツや着物とたくさん着てごはんを食べました。そして、いろいろの火にあたりました。

私とおとうさんとは、あまり寒いので、あかとりをあぶつて、それをしいて早くねました。すると大風がいつそはげしく吹き立てました。勇ましいいきおいでこうこうとふくので、とこの中にくぐつて小さくなってねました。

「あかとり」とは何でしょう?

(大戸)

春

大正十五年度 尋四年

太田 賢治 (渡前)

雪はだんだんきえだした。むく鳥もだんだんとんできはじめた。春になってあたたかくなれば美しい花も見られ、美しい鳥のこえもきかれる。

お手をつないでおもてであそぶのも春が一番よいのであります。

春になれば、よいけしきも見られるし、里(どこのことだろうか?大戸)にあそびにも行かれます。

ある朝

大正十五年度 尋四年

成澤 茂次 (荒俣)

ある朝、私が早く起きて、だい所で顔を洗っていると、池の方で「テデポッポ、テデポッポ」となくものがあるの、いちもくさんにかけて行くと、池のはたの竹やぶに、何だかかさかさ音を立てていました。僕が竹をヨサヨサとうかすと、にげて行ってしまいました。

家にかえつて、うちの人にお話ししたら、それは八卜だとおしえられました。私はそれから急いで学校へ行きました。

お人形様

大正十五年度 尋四年
成澤おさだ (渡前)

私のお人形様はかわいいお人形です。私がある日、お人形のゆめをみましたら、その翌日になるとおばあさんが町に買物にいきました。その日は丁度日曜日でしたから、私はおばあさんに「お人形をかって来てください」と頼みました。そして、おばあさんは「買って来るから妹をよくだましていらつしやい」といいましたので、私は「はい」といいました。

おばあさんは夕方に戻って来ました。

私が「おばあさん、お人形を買って来ましたか」と聞きますと、おばあさんは、お人形を二つ出して「これは誰なだ」といいました。そして「おさだばかり持つても妹もほしがるだろうからと思つて二つ買って来た」とおつしやいました。

夜のご飯をすぎてから、妹と二人で人形あそびをしました。

妹はあまり面白がつて、翌朝ご飯を食べるときにもお人形をだいて食べました。すると、お湯がお人形の顔にこぼれたので、手ぬぐいでお人形のお顔をふきました。すると、お人形のお顔がはげて片目がなくなりました。それで皆は大わらいました。

その時、妹も笑ったかな？それとも・・・大戸

おかあさん

大正十五年度 尋四年
成澤おいし (荒俣)

私のうちのおかあさんは、よいおかあさんです。私が小さいときは、あたたかいふところの中に入れてあつかつてくれました。

かみをゆつてくれたり、べんとうをつくつてくれたりして下さるのも、みなおかあさんです。もし着物などがぎれると、おかあさんがすぐぬつてくれます。又私の足がきたなくなると、おかあさんはお湯をわかしてくれくれます。

それで私はおかあさんを大事にします。おかあさんも私を大事にします。

さよなら

大正十五年度 尋五年
富樫きげ子 (渡前)

私の家のみよしさんは本郷村におよめに行きました。天気が悪いので、大きな箱ぞりにのつて行きました。私は村はずれまで送つて、村はずれで「さよなら」と言つて別れてきました。

それから、(私はいつも) 帰りに先生に会うと「先生さよなら」と言います。学校から帰るときは、私と正子さんは一緒に帰ります。正子さんの家が近いので、正子さんは「さよなら」と言つて家に入ります。私も「さよなら」と言つて別れます。

梨

大正十五年度 尋六年

齋藤 房吉 (渡前) ↑俳句の青山先生?

秋の果物はさまざまありますが、私の一番好きなのは梨です。でも、私のうちに梨の木はありません。秋の風ははげしいので梨がおちます。それで、親類のうちからもらいます。

この頃も持つて来てくれました。この頃持つて来たのは、太郎兵衛赤市という面白い梨の名で、うちの人は皆笑いました。

その梨は、うまいことは何ともいわれませんが。でもこの頃の風で、その梨はもうおちてしまいました。

ひよこ

大正十五年度 尋六年

小関繁太郎 (荒俣)

朝、私が鶏(にわとり) 小屋にえさをやりに行くとき、ピヨピヨと鳴く音がする。

ああ、三週間も前から、鶏にあたためさせておいたあの卵はどうなっただろうと思つて、箱を開けると、またピヨピヨと音がする。

親鶏を箱から出したら、夢にも思わない玉のようなひよこが生まれていたので、弟に知らせると弟は本気にしない。(それで) 鶏小屋につれて行くと、弟はそれを見てはねてよろこんだ。

(それから) 鶏小屋を出た。今も見たい気がする。

今日の朝

大正十五年度 尋六年

上野 久市 (上藤島)

今日の朝は大変寒かった。そうして、僕が床についているうちに、家の茶の間で家の猫と隣に猫がけんかをしていた。僕もそれでほっと目がさめた。

私はその時思つた。「猫は僕に起床してもよい時間になつたと教えてくれたのだ」

そうして学校に行く用意をして、ごはんを食べて、それから家を出た。

「今日は雪中遊戯はあるだろうか」そんなことを考えながら、吹雪と戦つて学校に来た。

活動写真

大正十五年度 尋六年

高橋伊勢治 (和名川)

三月七日、渡前小学校で午後六時より火災と衛生に関する活動写真が行なわれた。私は学校から帰ると家の手伝いをして活動写真を見に来た。

村の子どもと一緒に居りますと、第一巻が始まった。我々が病気になるのは何のためかと言う事がしめされた。又、目が悪くなつたら早く養生するように注意をしていた。それからだんだん進むと火災に関するものが写つた。それもちよつとしたあやまちことから出る事がわかつた。

そんなあやまちがないように注意しましょう。

この号より「大正十年〜昭和三年まで・・・」を「大正九年〜昭和二年」変更します。発行年ではなく、実際に作文を書いた年度に合わせました。又、前号までの「大正十五年度」は「昭和元年度」に訂正します。

遠足

昭和元年度 尋六年
瀬尾 房吉（渡前）

私が学校に行ったら、校長先生が今日は遠足に行きますと言いました。私はすぐ家に帰って弁当を持ってきたら、生徒はもうとっくに帰ってしまっていました。やなぎの木のところは一年生と二年生がおりました。門のところには先生がいて、いま寅治君が行ったからおかけよと言いました。

私が一生けんめい走って行ったら、寅治君と義三郎君がいました。もう一人は女の人がいました。その人たちといっしょに行きました。

柳久瀬をこえ、中村をこえ、そうして瓦工場のところへ行ってから、野荒町をこえ、こんどはすぎ坂を登って松原中で一休み休んでいたら、校長先生が自動車に乗って来ました。そこに三年と四年が遊んでよいと行って、私たちは五年が先頭になって行きました。

松原のはずれに弁慶が金峰山から投げた石がありました。門をこえるとすぐ急な石段をおりました。すると川がありました。それは「はらい川」ということです。そこには滝がありました。

それからだんだん登ると二の坂に行きました。二の坂をこえ三の坂にきたら、よほど苦しくなりました。それから四の坂と五の坂になると、さかずきやふくべなどが（石段に）きざんでありました。五の坂にくるとからかね（唐金）の鳥居が見えました。門のところへ上がってお宮に入って行きました。

先に校長先生が六所神社におまいりするのと同じようにおがみなさいと言いました。（だから）そうしておがんでお宮に上がってみると、丸い柱や三本足のからすがいました。そこでお宮をおがんで、それから弁当を食べました。

それから小さいお宮を見物しました。一番あとには蜂子皇子のはかをおがみました。帰りには五重の塔も見て帰りました。

家に帰りついたのは暗くなったのにつかれて、ひじょうにおそろしいことでした。家に帰るとごはんを食べてすぐねました。

この作文によれば、この遠足は当日の朝、校長先生が急に決めたようにも読み取れるが、いくら昔でもそんなことがあるだろうか？

大戸

梨

昭和元年度 尋六年
高橋 多吉（砂塚）

僕の家は梨の木は村でも多いほうです。その中に盆のころに食べられるものもあります。まだ木に残っているのも四、五本あります。厩屋（うまや）の後に三本ある木は、稲上げ中に食べてもまだ残っている。

この頃風が吹いたので木から梨がぼたぼたと落ちてはわれる。弟はそれをひろいに行きます。その中からよいのを取って名月に上げました。

怒

昭和元年度 尋六年
渡部つねよ（箕升）

怒ということはどう考えても好ましくないものである。平生（へいせい）どんなやさしい人でも、怒ったときの顔形は見えないほど見苦しいもので、こんな人がこんな顔をもっていたかと驚くほどです。

私はことに怒りということは、つつしまなければならぬと思う。犬や猿のように少しのことでも泣いたり怒ったりするのは実に悪いことです。

私のうちの子犬

昭和元年度 尋六年
成澤としゑ（荒俣）

私のうちにはかわいい子犬がいます。その子犬は今年の七月に生まれたのであります。生まれてからよほどたつと、目をぱっちりとしらきました。毎日毎日おもしろそうに遊んでおります。

私がごはんやあられをやる時、子犬はおもしろそうにして、私を見ながら食べます。

私が学校から帰って行くと、うちの赤ちゃんと遊んでおります。うちの赤ちゃんと遊んでおもしろいので、おもしろがって、おかしをやったりします。

子犬の色は黒と白のぶちであります。うちの人がかどこへ行くにもついて歩きます。又、うちにはねこがいるけれども、少しもかかりませんので大へんよいのです。（でも）となりに犬がいるので、うちの犬とけんかをするので、うちの人は心配しています。

私のうちのひよこ

昭和元年度 尋六年
宮崎 繁子（渡前）

昨日、私のうちのひよこを、ちよつと外に出して遊ばせておいたら、となりの家の猫からとられてしまつたと言いました。私はおどろいて「何羽とられたの」と聞くと、二羽とられたそうです。

その時私は、はつと息をついて、おとうさんに「めんどりかおんどりか」と聞いたら、おとうさんは「おんどりとめんどりと、二羽とられたのです」と言いました。その時私は、あんなに一生懸命に育てたひよこがとられたとは、大へん残念でした。

となりの人がおんどりをつかんで見ていたので行ってみますと、おんどりは足もくびの所もかじられておりました。

私が家に持って帰る途中、伊七のねえさんが車を引いてきて「いたましいことしたの」と言いました。その時私はなみだをこぼして、家へ持っていききました。

ひよこ

昭和二年度 尋二年
齋藤 只雄(渡前)

私のうちでは、この間ひよこが生まれました。私にはかわいくてかわいくてなんべんも見ます。するとひよこは、げんきよくどんどんとびでてえさをたべます。なん羽いるだろうと思つてにいきさんからきいてみると十七羽いるようです。そのうちまた生まれるそうです。まだ寒いので火を入れて、にいきさんが一しゅうけんめいにそだてています。私はひよこが大きいです。大きくなつたらにいきんにまけないでそだててみようと思ひます。

朝

昭和二年度 尋二年
成澤おきん(渡前)

だいどころの方でにぎやかな音がするので、私は目がさめました。私のわきでねているおかあさんもおきています。私は学校に行くのがおそくなつたと思つてすぐおきました。とけいは六時でした。小さいにいきさんがだいどころで大わらひしています。何をしたのだろうとおもつてだいどころに行つてみますと、私の家のねこが生まれたばかりの子ねこをくわえて、あつちにいったり、こつちにいったりしています。小さいにいきさんはそれを見てわらつています。

この間、ねこが三びき生まれました。(親ねこは)そのうちの一びきをくわえて来てみんなにみせたのでした。(すると)おとうさんが来て、下女にねこをすててこいといいましたので、私はかわいそうでなりませんでした。

おひなかさ

昭和二年度 尋二年
太田 房子(渡前)

私はおせつくが来るのをいつからたのしみにまっています。もうおせつくもちかづきました。私は四月一日になると、はこの中からおひな様を一人ずつだして、みんなかさります。そしていろいろめずらしいごちそうをそなえるつもりです。それから、私のうちにはおきやくさんも四、五人来ます。おともだちもたくさんつれて来てあそぶつもりです。それから、それから、おせつくがくるようになれば、だんだんうらもおもてもかわきましよう。その時はいもうとのふみ子をつれて、たんぼにあそびにいきたいと思ひます。

ゆうべ

昭和二年度 尋二年
野口こしん(荒俣)

長い間さびしい分教場にいましたが、いよいよあす本校に行くというので、私はうれしくてたまりませんでした。やさしい先生や本校のお友だちといっしょにべんき

ようしたり、あの広いたいそうば(体育館)でみんなといっしょにあそぶことなどをかんがえて、なんども目をさましました。

雪

昭和二年度 尋二年
小林 豊太(荒俣)

これから雪はだんだんきえて来ます。今日、私が学校に来る時は、道の雪はだんだんきえて大そうあるきわるくなりました。昨日、私が学校からかえつて行く時、上荒俣の人がそりをひいて行くのに道に雪がなくてそりがすべらないので、あせをながしながらひいていましたので、私があとからおして上げましたら、大そうよるこんで行きました。

弟のものまね

昭和二年度 尋二年
石川 民治(渡前)

おととい、私にうちに木の上に、かっこ鳥が来てなきました。私はだまつて見えていますと、かっこかっことないてとんで行きました。今日はせみがうらの木でぜーぜーとうるさくないいました。三つになる私の弟の勇はなんでもかっこ鳥のものまねしてみせたり、せみのまねをしたりしてやかましくします。

(そういう時は)私はべんきようをやめて勇をつれて外に遊びにでます。外にくると勇はいつもおとなしくだまつて私についてあるきます。

学校のふしん

昭和二年度 尋三年
齋藤 晴一(渡前)

渡前の学校を大きくして、りっぱな学校にするために役場の人や村の人は力を合わせて、いたましいぜにをたくさんつかつて、五十人ほどの大工さんをつれて来て、さしずをしてはたらかせていました。

大工さんはいっしょうけんめいにかなづちをふり上げ、くぎをうってはたらいています。村の人も来てつだいをしています。今は、のきをこしらえている大工さんもいます。やねのてっぺんにあがつて、こばにくぎをうっている人もあります。下では、わき見もしないで、のみであなをあけています。

六十間より長い学校になるといつて、先生はいつも私たちをよろこばせます。はやくできればよいとみんなだねがつています。

念のため『百年誌』で調べてみると、昭和二年七月、三年五月の十ヵ月をかけ、校舎を増改築している。この増築により校舎総坪数は一一〇七坪となった。出来るのを楽しみにしている気持ち

(大戸)

平成十五年度も渡前小に勤務できることになりました。発行を継続いたします。(校長 大戸 眞澄)

ふくろう

大正九年度 尋二年
五十嵐やよめ(上藤島)

私はふくろうを一度も見ることがありません。友だちから聞いたのですが、かおはまるく、目はくりくりして、ちよつとかわいらしい鳥だそうです。

私は、そんな話を聞いてから、いつも見たい見たいと思っていました。すると、ちようど読み方の時間に先生がおもしろいふくろうの絵を見せて下さいました。その時はじめて「ああ、こんな鳥か」と思いました。

昨夜

大正九年度 尋六年
近藤きくせ(幕野内)

ゆうべはものすごい夜でした。犬はワンワンとほえているし、街道を歩く人もないのに、なぜこんなにほえるのだらうと思った。そのうちに、裏口の戸をあけるような音がするので、私はおそるおそる障子のきれている所から見ると、戸はあかっている。私はそれはたまし(霊)であると思った。

(そしたら)今朝、柳久瀬のおばあさんが死んだと知らせがきたのでびっくりして、そのおばあさんにお世話になったことやゆうべのことなど思い出した。

隣のおじいさん

大正九年度 高一年
浅賀 作治(大半田)

僕のうちの隣におもしろいおじいさんがいる。いつも元氣のない青い顔をして家の中にひっこんでいる。不思議なことには、そのおじいさんは幽霊が見えるということだ。

こたつにあたっている、便所に行っても、ナムアミダーブツと念じていないことはない。そして、僕等が遊びに行くと色々な話を話すが、僕の耳には何を話しているのかちつともわからない。

でも、家の人にはわかるそうです。それですから、おじいさんが話をしたあとで、その家の清松君が話のかいしゃく者だ。

清松君の話によると、おじいさんが床の中で夢を見ながら眠っていても、街道をあるく幽霊がきららかに見えるという。

私はこの話を聞いたとき、そんなおじいさんがあるものかと思つて友達に話してみた。そしたら、それはあるものだという。

そのおじいさんは、今年九十近くになった。今は、昼でも床の中にいる。

僕は小さい時に、あのおじいさんからおいしい赤い梅の実をもらったり、又、ある時なんかは、おじいさんと一緒に野原に遊びにつれてゆかれた。いたつて氣立てのやさしいにこにこした人だ。あのおじいさんのお世話はどの位なつかか知れない。

あの人は、きつと極楽に行くに相違ない。僕は極楽に行くよう、行くようといのっている。

撃剣

大正十年度 尋五年
富樫 吉郎(柳久瀬)

私の好きな物は第一番には馬あるいは撃剣です。ある日のことです。私は兄さんと撃剣をしました。

兄さんは、今、農学校の三年生です。撃剣ではなく柔道に入っておりますが、今、中学校一年生の建造よりもずっと上手です。

さあ、いよいよ始まった。

私は、兄さんの面を「一つ、二つ」と数えて、三つまでうった。私は、力まかせにうったのであったが、兄さんはそれでも少しも動きませんでした。それから胴をうとうとしましたら、兄さんに身をかわらせて、「エイ」といって私の胴をなぐりつけました。その早かったこと。私は「まいったり」といってこうさんしました。

私は撃剣が大好きですから、中学校に入ったら、柔道ではなく撃剣をする。

ふけよ風

大正十年度 尋五年
佐藤とよへ(幕野内)

ああ、この風は大そう涼しい風である。こんな風は誰が吹かせるのだらう。人間を楽しく暮らさせようと思つたのだらうか。心も澄んだ。

木の葉は舞を舞う如くひらひらと散る。せみも涼しそうな聲でなく。

私の家の座敷には風がよく入るので、分家のお母さんが涼みにくることが度々ある。暑いところに入ると何事もあきて眠たくなる。それより、このやさしく吹いてくれる涼しい風に吹かれながら仕事をした方がずっとよいのである。

私の罪

大正九年度 高一年
榎本初太郎(柳久瀬)

昼の鈴の音は身にしみて聞こえた。

先生は教室を去った。級の者は、ごはんを持って僕のの前を通つても一言も話をしなかった。唯、孫九郎君が「ごはんは食べるもんだ」と言った。私はその時、思わず涙がつとわき出た。

始まりの鈴は又鳴った。その時間は体操であったから、誰一人来る者はいなかった。

後を見れば、成績品掲示板が風にゆれて、壁とぶつかっている。又、机の上には、私の弁当が重そうにのっている。

時々、女生(女の生徒の意味であろう)が教室に入ってくる。その時は男生であったなと思つた。

初太郎さんは、先生に叱られたのだらうか。

ご飯も食べる気にならないほど、深刻に真面目に反省している様子が浮かんできます。(大戸)

大黒様のおとしや

大正十年度 尋三年

齋藤 於敏 (渡前)

きのう十二月九日は大黒様のおとしやでした。豆ごはんも豆なますもまっかだいこんもおさかなもおせんじのせてあげました。

うちの人がみんなおがんでから、おせんをさげて、それからごはんをいただきます。おとうさんはごはんのまえにお酒をおあがりになりました。私どもは、おさかなとかすづけとおつゆをたべました。

ごはんがすんでから、おかしをもらって、大へんおもしろくあそびました。

ぶん鳥

大正十年度 尋二年

齋藤 憲一 (渡前)

私のうちにはぶん鳥が二羽いたのですが、この間一羽しんでしまいました。しんだのを見るとかわいそうでなりません。それをねえさんと二人でうめてやりましたが、あとの一羽は、かなしいこえでないていました。

それから二、三日ほどたつと、朝早くからさえずりだしました。私がえさをやるとすぐたべます。

これは、おとうさんが東京からおみやげに買ってきてくださったのです。ぶん鳥はかわいい鳥です。私のゆびの先にあわをつけてやると、ゆびの先をつつきます。ねこがくると、びっくりしてとびあがります。私がおねこをほう(おいはらう)と、ゆっくりしたようなかおをしてさえずります。

ぶん鳥はほんとうにかわいい鳥です。

落葉

大正十年度 尋三年

田中宗三郎 (幕野内)

秋になるとだんだん葉が赤くなってきます。風がふくとちようちよがまうようになって、ちらりちらりおちてきます。

その葉がみんなおちてしまうと、かきのような赤い物なら目立って見えるであろうが、冬になればみななくなってしまうのである。菊のような物は、だんだんくされてしまいます。

秋のおわりごろになれば、たいていの物がなくなってしまう。うめもどき(これはなんだ?大戸)のような物はこっぴているでしょう。

昨日

大正十年度 尋三年

太田 好 (渡前)

昨日、僕は学校からかえってから畠に行きました。そうして、かやこもずをしよってうちにかえってから又、柿をもぎました。そうして、あそびに行つた。

友だちが木の枝をおつて、それをまげて、それを目につけたら赤目をしたようになりました。

僕もまねていたら、駐在所の子どもたちがわらったので、僕等もおかしくてたまりませんでした。わらったら、目につけたものがみんなとれてしまいました。

たまな

大正十年度 尋三年

大川 桃丸 (渡前)

私は畠にうわつてあるたまなであります。小さいうちは、せいひくくてもまるかりません。

私は人からこえをかけられて大きくなるのです。

人が私のあたりのくさをとってくれます。ありがたくてたまりません。けれども、大きくなってまるかつかたくなる、こがれてしまうのです。

人が畠にきて「まるがったなあ」といってこぎました。私はしよわれながらないておりました。そして、人が家に持つて行って食べるというので、私は心のうちで人にうまれてくればよかつたとおもい、なみだをぼろぼろながしながらあら(洗)われました。

そして、私のきたないところをとってしまい、キャツとこえさけび、さぎさぎとはやされて食べられました。

せみ

大正十年度 尋三年

菅澤 すが (幕野内)

みんなとせみがなく。あの松の木の上に。三びきくつついてさつきからないてる。

そこに、七つになる男の子がきて、そのせみを見てその木にのぼつてせみを一びきしめました。そして、その男の子はうちへはしつてかえつて、せみを糸につけました。けれどもその糸はほそい糸で、ぼきんともげてせみににげられました。

男の子はなきながらうちにかえつていきました。すると、うちの人にわられました。

私はその男の子は、たいそうせみが好きだとおもいました。

だいこん

大正十年度 尋三年

成澤おとく (渡前)

私のうちのだいこんは、今年たいへんよくできました。昨日、みんなはたけからとつてきました。まんまるいのもありました。

今日はあらつてあるだろう。それから、なわであんで、そしてほします。ほしてから、だいこんづけにしたいです。

私のうちでは青いうちからたべて、赤くなるまでおきません。冬のうちみなたべてしまいます。

私は青いのがすきです。赤くなるとしよつぱくて私はずきではありません。けれども、あまりしよつぱいのでなければすきです。赤くてあまりしよつぱいはすきではありません。

大水

大正十年度 尋三年
松浦よしみ (大半田)

このごろは、たいそうな大水でありましたので、今つくか、今つくかと思つて、わたしの内でもしんばいしてしまいました。それでも、みごとつかないでしまったつぎの朝、おかあさんやおとうさんが、その大水のおはなしをしていました。

町あたりはたいそうなんぎしたということだ。あら町の橋のらんかんが水にくぐつたということなので、私はおぼけはててしまった。こんな大水は、私は今はじめてです。

私のうちのうさぎ

大正十年度 尋四年
齋藤 寿男 (渡前)

私のうちのうさぎは、去年やなくせから買ったので、買った時は大そうやせて居ましたが、今では大そうこえています。

買ってから三月になると子をもちました。そのうさぎを買ったのは六月六日で、子をもつたのは九月六日です。三びき生まれましたが、その中、全く黒いのが一びき、ねずみ色のが二びきでした。

その三びきの子の中、一びきはうってしまいましたもう一びきはしんでしまいました。もう一びきは夜出て見えなくなりました。

今年はまだ生まれません。去年は死なれたり見えなくなったりしたので、今年はそのことのないようにうさぎだてようと、うちの人たちがいつて居ります。

金市君

大正十年度 尋四年
小野寺慶治 (荒俣)

金市君は心持ちのよい人です。僕にかかったことありません。おとなしくて、学問も出来るし、きかい体操も上手です。

毎日前かけをかけて、きれいな顔をして、大そう男ぶりのよい人です。文字を書くことも図面をかくことも上手です。僕とすもうをとると、僕はいつも金市君にまけます。僕は金市君をよい人だと思ひます。

ゆうべ

大正十年度 尋四年
丸山新治郎 (渡前)

ゆうべ、僕もみんなもねてから、なんの音もきこえない所に、ぴかっと光ると、ごろごろと雷の音がしてきた。それがますます強くなると、電気はぱつときえた。雷は強くて、僕の家の上でなるようである。

僕はどこかにおちるかとお心配していると、そのうちに雷はならなくなつた。すると、電気はぱつとついたら

私の妹

大正十年度 尋四年
齋藤 米 (渡前)

私の妹は今年八つになりました。せんだつて病氣にかかつて、大そう心配しました。四、五日とこについで、やっとおきだせるようになりました。

私のいいつけをよくきいてくれるので、大へんよい子だとほめます。ことに弟とちがつて、きげんもよく

手伝いもします。うちの人もほめてやりますが、ことによると、弟と二人、ものさしをもって、うちの中をかけまわるときもありました。話をするときも、まじめになっていいです。私は妹が好きです。

今朝

大正十年度 尋四年
小関 つぎ (荒俣)

今朝、おとうさんが四時頃おきて、おしげさんのおとうさんと、おやまにさんばいにいききました。今朝は私もおとうさんと一しよにおきました。

おとうさんは私に「さつきの時、るすい(留守居)をしたから、おみやげにこうもりをかつてくる」といつていききました。私はそれをまつています。

おとうさんは二ばんとまつてくるそうです。おとうさんがかえつてくるとせきはんをくばります。

おやまとは、月山？羽黒山？湯殿山？こうした風習は、今でも続いているのでしょうか。 大戸

鳥シメ

大正十年度 尋五年
金内清太郎 (和名川)

この間、僕のうちの松の木の下にすずめが毎日たくさん飛んできて、稲をつついてたべているから、おじいさんと僕と、どうかしてしめたいと話していた。

僕が休みの日におじいさんが、このすずめをとりにかかった。

まず、すずめが来るところに、さらつと白い雪をした。その上にぬかを又さつとした。それから網を張つて、へやのまどから見ている。

すずめはさえずりながら飛んで来た。僕は「うまいぞ、来た来た」と思いながら見ていた。見ているうちに何羽かのすずめが、ばたばたとかかった。

僕はとんで行つた。おじいさんはほかけた。行くうちに二羽はにげた。僕とおじいさんはいきなり、一羽ずつくびたをねじつた。みな見ると十三羽あつた。

この話がたちまち村の人にわかつて、かじ屋の伊三郎が売つてくれないかと言つてきたから、皆で四銭で売つてやつた。伊三郎は、すずめをわらでからがきつけて持つて行つた。

猫の死

大正十年度 尋五年
近藤 治作 (荒俣)

私のうちの猫は、二週間前に外の猫二匹にかかられて足をかじられました。

朝見ると、二階にうちの猫の毛がいつぱい落ちていました。猫はこわがつて、うんうんうなつて居た。うちの人は色々心配して、きず薬をつけてたばねてくれたが、それでもこわがります。歩く時はびっこをひきます。一週間たつてもまだよくならない。そして、物もたべなかつた。とうとう、二週間たつて死んでしまった。昨日墓にうめて来ました。

あの猫は、ろくにねずみもとらないで、のららのと生きていたが、ああなりして死なれては、何だかわいそうでならない。

海岸の夕

大正十年度 尋五年
齋藤恵美子(渡前)

八月九日の夜、母や叔母さんに連れられて、湯の浜の海岸を散歩した。月がきらきらと照らすとともに、海の波は銀の玉でもうかしたように見える。波はしずかに岸によせてくる。

私どもは、浜風に吹かれながら、だんだん帰ってきただ。その心持ちのよいことは、何ともいい様がなかった。夕は殊におもしろかった。

大洪水

大正十年度 尋五年
押井おふさ(箕升)

この頃は、大洪水がありました。そこそこの橋もながされたそうです。

水のつかれた村や町は、どんなさわぎでしょう。水のつかれた家では、みな消毒をしています。

近所の村では、親子三人死んだということです。鶴岡もだいぶつかれたそうです。

私の村では、幸いにつかれませんが、仕合せな事です。つかれた村や町などは、ほんとにかわいそうではありませんか。

ゆうべ

大正十年度 尋五年
阿部千代女(上藤島)

ゆうべは大そううれしかった。

私が夜のごはんを食べて、こたつにあたって勉強していると、兄さんが「藤島にいつてこなければなりません」と言った。私は「なにをしに行くのか」とたずねた。兄は「大そううまいものをかいて行くんだ」と言った。そうしてすこしたつと、となりの兄さんが来た。又べつこの家のおじさんが来た。私はふしぎでたまらなかつた。

兄さんが藤島から帰ってきた。見ると肉があつた。私はとなりの人々に食べさせるんだなと思っていた。はたしてそうであつた。

そうして肉を食べてからこたつにあたって、みんな昔ばなしをかたつていた。私はだまってきいていると私の番になった。私は、ある時にすゑよさんから聞いた昔ばなしをしたら、大そうわらわれた。それがすむと、唱歌をうたつてきかせた。私が「あははは」と歌うと、みんなは又「あははは」とわらう。父は学校でも色々な唱歌をおしえるものだと言つた。きのうの夜はほんとうにうれしかった。

冬の夜

大正十年度 尋五年
小林 隅恵(上藤島)

日がようようなくなると、六時二十七分の汽車がくる。(その時刻になると)毎ばん「あわじ島通う千島の・・・」と、さびしい冬の夜に美しい聲で歌いながら道を歩く人がいます。

ある時、私の家のおむかいの家で、その人を手をたたいて呼んだ時がありました。

私はこたつにあたりながら、お母さんに「あれは何をする人ですか」と聞くと、お母さんは「その人の運を聞くものです」といいました。

こういう冬のさびしい夜に、あの美しい聲で歌われると、ほんとうにさびしい夜ということが、ありありとわかります。

時代小説などに「淡路島通う千島の・・・」とうたいながら、おみくじみたいな物を買って歩く「辻占い」が登場する時があります。

そのような人が、この時代に、この地区に、実際にいたとは驚きです。 大戸

大水

大正十年度 尋六年
小林 栄一(上藤島)

おとといより雨が降り続いて、今日まで雨であつたから、河水はだんだん増加して来て、昨日の朝には僕のうちの畑にまで来て居た。ところが夕方になると見るうちに水が増して来て、畑などはよほど水にうずめられた。

夜の十二時頃。ジャンジャンジャン。私は半鐘だと思つて飛び起きた。家の人はもう起きていた。

私とおかあさんとおばあさんと三人で見に行ったらもう街道はいつの間にか川になつていた。古郡の橋が流れてきてひつかかっているという話でした。その藤浪橋は流れたという。それでなお驚いてしまった。家に行つて見たら、竹やぶの後まで水が来ていた。うちには来れまいと思つて、あちらこちら見ると、ほりに水がちやらちやら流れてきたので、その晩はろくに眠られなかつた。

夜が明けた。家には幸いこなかつたからよかつたが水にうずめられた家もあつた。畑の野菜や田の稲がうずめられたから、今年は悪く出来るであろう。水はおそろしいものである。

この作文は大正十年八月七日に書いたものである。ということは、この大水は八月四〜五日に発生したことになる。事件の二日後に書いたということもあり臨場感のある作文に仕上がっている。

衛生の心得

大正十年度 尋六年
松浦こたけ(大半田)

人は何をすることも、身体が健康でなければなりません。身体の弱いほど不幸なことはありません。弱い者が一人でもあれば一家の不幸でもあり、また一国の不利益でもあります。殊に自分が悪い病気にかかって、他人に伝染させることはこの上もないことであります。ですから、常に衛生を守らなければなりません。

養生の方法は種々あるが、衣食住に注意することは最も必要であります。

酒、煙草などをつつしめ、規律正しく運動し、且つ睡眠をする事などは大切であります。

猫

大正十年度 尋六年
高橋 米藏(和名川)

僕のうちの猫は対馬からもらったのである。もらった時はまだ小さくて、あじやれもせないほどだった。人なつこい大そうかわいらしい猫だ。毛色は三毛で大そうきれいだ。

親をたずねてニャアニャアなくことはめつたにない。これだけは僕も感心している。もし人ならば、小さい時に親とわかれてなかないものはない。このごろは大そう大きくなつた。

この前の猫はねずみもとらないで横着であつたが、この前の前の猫はやはり三毛猫で大そうねずみをとる猫であつたといふことである。僕のうちには三毛があつていふといふことだ。今の猫も三毛だから、きつとねずみをとるだろうと思ふ。二、三日前には、ねずみをとつて半殺しにしてじやれていた。一番とる時になると一日に二、三匹もとることがある。

僕のうちでは、よい猫をもらつたといつてよろこんでいる。今はねずみをとらない日はない。また、遊び時には、自分の弟の子猫と一心にけんかのけいこをしている。僕の家の猫はほんによい猫だ。

なわないきかいと 大正十一年度 尋四年

わらぶちきかい 渡部子之吉(渡前)

私のうちには、なわないきかいとわらぶちきかいがあります。おかあさんが毎日なわをなつて居ます。私は私のうちに宿をかりている家にもなわないきかいがあります。

そのうちのなわないきかいがこわれた時、金市君のおとうさんが来て、なおしてくれました。その時は私も見に行きました。

金市君のおとうさんがなおさない前に、三橋の村の会長になおしてくれとはがきをやつておきました。が、なおしてもらわなくてもよいようになりました。

思い出の松の木

大正十一年度 尋四年
成澤 弥市(渡前)

私の祖父のまた祖父が役場で議員をしていた時、自分が大事にして育てた松の木を、家でながめるよりも役場においてながめた方がよいといつて、役場に持つていつて植えて毎日ながめて居ました。

それがそもそもの玄関の前の西方の松の木です。それだから家のおばあさんは、松の木がかわれないかと言つて時々私に聞きます。私は、まだまだ東の方の方よりもせいぎがよくて、おばあさんのいるうちは大丈夫だと言います。

きんじり

大正十一年度 尋五年
太田子之助(渡前)

昨日、僕が学校から帰る時、誰かざつこつりをしていました。急いでそこへ行つてみると、もう誰も居りません。(それで)帰つて、富市郎君のうちの方に行つてみたら、武君と喜代藏君とが一生けんめいにざつこつりをして居ました。

僕はすぐうちに行つて、道具を持つてつりに来ました。しかし、誰のにもあたりません。しばらくして、ぼくのうきがたつようになりました。あげてみたら何もくつついてきません。

もう一度同じ所に入れたら、又うきがたつようになりました。こんどこそつてやろうと思つてあげてみたら小さい力チ力であつた。よほど大きいのだと思つたのに、こんなに小さいのだから、だめだと思つてうちへ帰りました。

蜂の巣

大正十一年度 尋五年
渡部 金市(渡前)

五月頃からこしらえ始めたはちの巣は、僕のうちのき下のような所にあります。今はちようど小さいかばちや位の大きさです。

巣には蜂がたくさん居つて、そこここ穴をあけて出たはどこかへ飛んで行きます。うちの人たちは「あぶないから、あの巣にはかまうな」とおつしやつた。今日は天気が悪いが蜂は平気で、ぶんぶん元気よく飛び回つては、何かを取つて来て巣の中に入ります。巣の近くに柿の木がある。その柿はあま柿で、稲あげ時には十分にたべられますが、蜂が居て大層都合が悪い。

しかし、蜂は虫でありながら、人もつくれないような上手な巣を作るのには、僕は実に感心しました。

姉さん

大正十一年度 尋五年
小野寺かめゑ(荒俣)

姉さんは、毎日日本を見たり仕事をしたりして、何もしないで遊んでいることはありません。今もきちんと机にすわつてほうぼうをとじています。(？大戸) 姉さんは毎日おこつて居ることはありません。毎日にこにこしています。

私は姉さんをよい人だと思つて居ります。人に悪口をきいたこともありません。人からもらつたものは少しも見えなくしないで、りつぱにしまつてあります。つぎきれでもみんなていねいにとつておきます。この頃も私どもにわけて下さいました。

私も姉さんのようによい人になりたいと思ひます。

修学旅行

大正十一年度 尋五年
長南 利太(平形)

五月十二日に尋常五、六年が一緒に旅行に出かけました。

藤島の停車場から汽車に乗つて大山停車場に降りました。それから大山町を通り、坂道を上つて、トンネルをくぐり、加茂に行きました。トンネルの中には電灯がついて居たのでそんなに暗くはなかつた。加茂の港には汽船、発動機船、帆船など色々な船がとまつて居りました。

しばらく加茂の海辺で貝を拾つて遊んでから湯野浜に行きました。そこでも又遊んで、こんどは山をこえて善宝寺に行つてお寺の中を見せていただきました。それから大山の停車場に行き、汽車に乗つて帰りました。

毎週金曜日に発行していますが、今週の金曜日は修学旅行のため六年生がいないので早めに発行しました。

僕の図画

大正十一年度 尋六年
佐藤 元藏 (和名川)

僕は図画をかくことが下手である。残念でたまらないがしかたがない。
僕らの組で上手なのは、勘治郎君、順市郎君、米吉君などであろう。

勘治郎君は中でも上手で、成績品をよく方々の学校に送ってやられる。順市郎君は熱心で、いくらかいてもあきない。馬や人物画は実によかった。

僕の兄はいつでも、人物画はむずかしいと言って居る。僕などは、これはよほどよかろうと思つて出しても八点ぐらいしかならない。それを兄に見せると「こんな物」と言つて笑われます。それで終にはむざいてしまいます。

兄はいつでも「僕ほどかけるか」と言う。僕は「かけるつて、かけるつて」という。すると「そんならかけ」と、紙をつだされる。(そんなとき)僕は「本当にかく」と言つて逃げてしまう。

上手な人はそまつなようにかいてもよく出来るし、僕などはどんなにいていねいにかいても善く出来ない。残念でたまらない。

親子

大正十一年度 尋六年
松浦 富藏 (大半田)

親子は水魚と同じで、親子が分かされると、どちらも面白くない。それは分かれてみなくてもわかる。

猫を考えてみても、親猫が子猫を五匹もつたとすると、その内から一匹とると、親猫は一生けんめいになつてたずねることは、だれであつても皆知つて居る事である。

一年生と二年生の時、修身で習つた様に、あの猿であつても、親猿がイロリの上に下げられておかれた時に、子猿が一生けん命にあたためてくれたことは、先に習つて知つて居ることである。(まして)人の親子がはなれたら、親でも子でも世の中をくらししていけない。親は子を大事にして、子は親の言うことをよく聞いて助けなければならぬ。

そうして、よく世の中をくらしなければならぬと思ひます。

おじいさん

大正十一年度 尋六年
佐藤 恒治 (和名川)

私のうちのおじいさんは、よく何でもかわいがる人です。私のことはよくかわいがつてくれます。ただ、よんでも返事をしないとわがわがする。よつほど大きい聲でよんでもだまっています。とんと知らない風をしているからにくくなる。しかし、これは年をとつたので耳が遠いからなのでしかたがない。

私が「銭をくれ」とはたると「おやおや又銭くれつて。一年に何円使うがし」とくどきますが、部屋に行つて持つて来てくれます。くどくがくれないことはない。

それから、おじいさんはお湯がすきで、ごはんのすんだ後、大きな茶わんで何ばいもお湯をのみます。鉄びんがからになるほどのむんだから、おばあさんはい

渡前小学校の宝物 学校文集『わたまへ』より

* 大正九年〜昭和二年までにタイムスリップ

つもくどいて、お湯を後でのむ人が困るといいます。ごはんはたべないでおかゆをたべています。毎日、土をはこんだり、石をはこんだりして働いていますが、土蔵をたてるといっています。

《大正十年度高等科一年(今の中一)の遊学旅行》

船での松嶋

大正十年度 高一年
高橋みつぎ (和名川)

朝日に照らされて銅月樓を後にした我が高等科は、松嶋の宿を後に旅立った。

朝日にきらきら波がくだかれて、美しい松嶋は銀の波の上にある。船が波のゆされ(?)波が船にゆられて鳴の間を行つた。色々と変わりゆく鳴。進路をさえぎらんばかりであつた。あらわれたと思うと、また別の鳴。変わり変わつて行く鳴は、筆や言葉につくしがたい。

私の組は一番前になつて進んで行く。朝風にひるがえつて袴がぶわぶわしている。声高く唱歌を歌いながら進む様には我が小さな胸をおどらせた。宿の夕、海の朝とは、あの世の人のなつても忘れられない。

海に手を入れ、海草をとりながら進んで行つた。余り面白いものであるから、早くついたように感じた。林の様な煙突からもくもくと出る煙が空いっぱい塩釜に着いた。いよいよ塩釜見物である。

青葉神社の仮装行列

大正十年度 高一年
齋藤 善吉 (渡前)

塩釜から乗つた汽車を仙台停車場で下りた。前の広場には人が山をぎざぎざしている。

僕は早速その場へかけつけてみれば、青葉神社の仮装行列であつた。姿はもう実に面白く、いろはがるたの絵の通りでした。それはそれはおかしくて僕は心の中で笑つた。又、各国の軍人の姿をしてきたものもあるし、又、としよりが杖をついて腰に手を当て、赤い大黒ぼうしをかぶつて、さもいたそうにやつときた。こんどはだるまさんが目をくるくるさせて、あつちこつちを見ながら扇であおつてきた。青葉神社の仮装行列は実に面白かつた。

旅行の一節

大正十年度 高一年
武田 良吉 (大半田)

松嶋駅において東南に進むこと約半里で新富山に行つた。その景色は歌や唱歌につくつたのよりよかつた島々の配合がよかつた。海に鳴が立っている。その立っている鳴。鳴の松。松嶋がくれに行く白帆の船。実に話にもされない程よかつた。

★新富山とは? なんて有名なかな? (大戸)

松嶋村から塩釜まで舟に乗つて松嶋の景色を見物した。舟にのつている舟頭は鳴が見えれば、これは何鳴といちいち教えてくれた。

それから舟頭は、この松嶋湾に松の木のはえていない鳴があるとおっしゃつた。それは「親に勘当(かんどう)はだか嶋」という鳴であつた。
★その島は今でもあるのかな? (大戸)

今週の木々金曜日は、三、四年生の金峰自然教室があるため、先週に引き継ぎ早めに発行しました。

私のうちのおばあさん

大正十一年度 尋二年
上野 久市(渡前)

私のうちのおばあさんは、ふじしま大とう寺にじゆかい(?)にいきました。

私は四日目におまいりにいきました。お寺には人が大ぜいでとまれせんから、おばあさんは、まいばん九じごろうちへかえります。

私がいったとき、おばあさんから、おかしやもちなどをたくさんもらってきました。みち中でたべたいと思つたが、がまんして、うちへかえってからのもうとやおとうとにわけてやりました。

私のきょうだい

大正十一年度 尋二年
梅津 文雄(柳久瀬)

私のきょうだいは三人あります。一ばん小さいのうとは三つになります。

いもうとはかわいい子どもです。私が学校からかえると「にいさん、ただいま」といって、はしってきます。私はいもうとのおもりをしてそとへ出ます。

小さい子どもは大そうかわいいものです。

私のうちの金魚

大正十一年度 尋二年
城戸 しげ(幕野内)

私のうちにはいろいろな金魚がいます。三つ尾の金魚に二つ尾。又、せなかにひれの無いものもいます。白いところに赤いところがまじって、たいへんきれいです。

私がそつとそばへいくと、金魚はなにかものでもくれるかと思つて、みんなあつまつて来ます。私がそつとゆびをやるとくわきます。ほんとおもしろくあります。

たけのこ

大正十一年度 尋二年
小林 正見(上藤島)

私のうちには、もうその竹はらがありません。そこには、たけのこがたくさん出ます。このごろ雨がふつたので、たけのこはずんずん大きくなりました。

私がたけのこをたべたいというと、おかあさんはくわをかついで、たけのこをとりにいきました。私は、そのたけのこをたべたいとまっています。

学校のなだれ

大正十一年度 尋二年
佐藤 清一(大半田)

学校のなだれは時々ありました。(ある日の)夕方になつてからかみりなりのように屋根からおちますと、僕のむねはどきどきしました。おばあさんは「清一のかおは青くなつた」といいました。おばあさんが見に行くというので、僕もついて行きました。

雪は山のようにつもつて居ました。向かいの道は見えなくなりました。

それからいろいろにあたつて、おへやでねむりましたが、なだれのおっかないゆめを見ました。

私のうち

大正十一年度 尋三年
宮崎 東龍(渡前)

私のうちのうら山に小さな山があります。そこに上ると汽車の通るの所も見え、県道に人のあるく所も見え、田も見えます。

私のうちのながしの左の方にせきがながれております。ながしのまえには竹やぶもあるし、戸の口のまえには梅の木が二本、すももの木が一本、ふとつたようにはえています。

とりつき(?)の前にはせん水があります。そのせん水にはこいが五、六匹います。

そのわきに竹やぶがあります。このあいだ、竹の子を五、六本とつて来てたべました。

えんがわの前には栗の木があります。栗の木にはぶどうのつるがからまつてあります。

庭には、つじやつばきやさぐらの花がさきます。本堂に行く所には、たいこやぐらがあります。たいこやぐらにはたいこもあるし、つきがねもあるし、すずめのすもくんであります。

私の人形

大正十一年度 尋三年
成澤 操(荒俣)

かわいらしい私の人形は、さげがみをして、赤いりぼんをつけて、いつ見てもうれしそうなおをしています。私は、あまりかわいいから、かおをふいてやりました。

私は時々信子さんとおひなごとしてあそびます。はかまをはかせて、かばんをさげさせて学校へやります。又、運動会にやるときはべんとうをもたせたりしてあそびます。

この人形は、私のだいじなお友だちです。

雪だるま

大正十一年度 尋三年
佐藤 正治(大半田)

《詩》 ぼくの遊びは 雪だるま

だるまのあたま 白あたま
目はまつくろで ならみみす
手足がなくて おかしいな

昨日の吹雪

大正十一年度 尋四年
阿部 市郎(上藤島)

朝起きてみると、空はうす白くてどこも見えない。おそろしい吹雪であった。

それからまもなく、朝ごはんをすませてから、かばんをさげて学校にきました。

とちゅう顔に雪がふつてまつげにすがすががりました。私は目をばちばちいわせると、すずのようになつて、ぶらぶらとなりました。私はわざと目をパチパチいわせると、又ぶらぶらとなりました。

そして、いくたびかころんで体中雪だらけになりました。それがすっかりしみてしまいました。

*しみて...「凍みて」であらう。(大戸)

これからのたけがり

大正十一年度 尋六年
押井むめろ(荒俣)

私はたけ(きのこ)がりをすることが大です。去年もおばあさんと二人で行きました。その面白さは言いようがありません。

枝ぶりのよい松の木の下に、きのこが、たくさん松の葉の散ったのを頭にのせて重そうにしています。それをとってかごに入れ、又あちらこちらをたずね廻ってとりました。それから小川で手を洗って御飯を食べて、又たくさんとって家へかえりました。その時は遠足よりもたのしくありました。これからのきのこは、どんなに面白いかわれませぬ。

美しい蓮の花

大正十一年度 尋六年
阿部たまき(上藤島)

皆さんは蓮の花を知っているでしょう。蓮の花がお池に咲き揃ったのは、まことに美しいもので御座います。花は白、又は桃色をして、葉は丸く大きく平たい形をしています。

その蓮の茎をおつて見ると細い白いくもの巣のような細い糸が出てきます。昔、中将姫がこの蓮の糸で機を織ったというのであります。

夏の朝、顔を洗って蓮の花のお池に行つて見ると本当に気持ちのよい、目の覚めるような感じがします。

美しい友の情

大正十一年度 尋六年
榎本おみゑ(荒俣)

私が二年のとき、同級生に菅原光子さんという、それはそれはなつかしい友達がありました。光子さんという方は親切で情が深く、しかも心の正しい方でありました。

ある日、学校に行きますと、何だかだるいような気がして、私がぼんやりしている時、先生から読み方のこうぎをかけられました。私は何が何やらさっぱり分からないので答えないうで、先生がおこつて立たせられました。わきで光子さんが気の毒そうな顔をしていました。私は非常にはずかしく思いました。けれども、どうにもなりませんからだまっています。

あがりになるまで何へんも先生におわびに行きました。先生はゆるしませんでした。それを見て光子さんが「私もおわびをして上げるから」といって、先生が教室に来た時、光子さんはこう言いました。

「先生、おみゑさんは私の大切な友達ですから、どうぞゆるしてください」

先生はここにこした顔をしながら私のそばによつて来て「こんどからしないものだ」といって、よくく教えてゆるして下さいました。

先生は光子さんの情の深いことにどんなにか驚いたでしょう。光子さんのお恩は一生わすれませぬ。

秋になった

大正十一年度 尋六年
成澤みよき(渡前)

はや夏もすぎで涼しい秋になりました。見渡すかぎり黄色にみのつた稲は重そうにたれていて。農夫は朝早くからこみをいそいで田の方に行

く。ふと考えていると、青年の人が身体も包まるほど草を背負い、顔を赤らめ、こわそうに馬小屋へ入って行く。

小川の水は風が吹きわたり、さらさらと小波をたてている。

まもなく、老人がずどんと鉄砲をうつと、森のこかげから、すずめはわれさきにと山の方をさして行く。

大沼與吉前校長先生よりの手紙

大正十一年 四月

長々手紙も上げませんで失礼しました。皆様、相変わらずお達者でお勉強ですか。

私は先月十九日、皆さんのお見送りを受けて藤島駅から出発した事は昨日のように思います。一度郡役所につとめました。そして去る四月一日、渡前の学校に帰りましたが、お話する機会を得ないで、今更くやしくてなりません。

去る八日に家族を連れて再び余目駅から出発しました。そして、天童町大字北目七十八番地の家に、私と家族四人と親類の一人一人で這入りしました。ちょうど嵯峨野の奥にでもありそうなあばら屋です。それでも大沼與吉と新しい門札を貼り出しました。

近所には山形、山寺とだいたい見るものがあります。今年の旅行には先生にお願ひして、是非山形にやっ来て下さい。そして、その時には必ずアバラ家に寄つて下さい。私は貧乏ですからご馳走は出来かねますが、水ぐらいはいつでも差し上げます。

私が天童に来てから逢う人ごとに「あなたは渡前で何か」と問われます。ほんとうに渡前は知らぬ人がないほどです。私は聞かれるたびに大我慢で渡前を話して聞かせます。由良臨海教授の絵葉書やピアノの絵葉書を何時でもカバンの中に入れておいて聞く人に見せてやります。

家は天童の東南の端にあつて、誠に田舎の様で静かな所です。夜になるとツチうつ鍛冶屋の音より外に何物も聞こえませんが。一人机に向かつて仕事をして居ると皆さんの顔が見えてきます。キリッとしたキマリよい皆さんの態度、熱心な勉強ぶりが目の前にちらついて思わず涙にむせぶことがあります。

やりましょう。お互いに負けないでやりましょう。断然負けないことにしましょう。

皆さんは模範学校の生徒です。先生の教えをよく守つて充分にやつて下さい。私は天童に居て皆さんの幸福を祈つて居ります。皆さんは各一年ずつ進んで今年の時も決めたでしよう。

土肥先生は、やっぱりピアノを盛んにやりますか。確か今年の八校学芸会は渡前が当番ではなかつたかと思ひます。負けないで勉強して下さい。

今年の由良はだいにぎやかでしょう。山形のフンドシやヨシモシから負けないで大旗をこしらえて、土肥先生から唱歌でもきいて威勢よく乗り出しなさい。黄色から負けないで必ず赤が一等になつて下さい。

今は忙しい仕事の時間でありませぬから、これで筆をとめます。いづれ暇を見て又書くことにしましょう。それでは皆様お達者で。

私のうちの四方

大正十二年度 尋二年

成澤喜三郎(渡前)

私にうちの東には大きな川があります。なつになる
と、私はその川で水をあびたり、ふなやなますなどを
つつたりします。

西の方には大きな道があります。そこを毎日じてん
しゃやばしゃやじんりき(人力車)などがひっきりな
しにあるきます。

南は一めん田で、田のむこうにうちがたくさんたっ
ています。

北には伝九郎といううちもあるし、伝兵衛というう
ちもあります。伝九郎といううちは、しょうゆややき
ふなどを売るうちです。

画家・成澤翠映さんの作文です。この作文で翠
映さんの実家の場所がわかりますか。(大戸)

ほたるがり

大正十二年度 尋二年

山口 みね(渡前)

ゆうはんがすんでから、ほたるかごとほたるぼうき
を持ってほたるがりにいきました。もうたくさんの子
どもがいて「ほたるこい。そっちの水はうまくない。
こっちの水はうまいぞ」とよんでいました。

私も「ほたるこい。そっちの水はうまくない。こつ
ちの水はうまいぞ」と大きなこえをたてながら行く
と五、六びきとんできました。「よしっ」といって、ほ
うきではたくと四ひきおちました。

うちへかえって草を入れて、水をふいて、ねるとき
かやの上へ上げておいて見ると、大そうよくひかっ
ておもしろくございました。

つぶひろい

大正十二年度 尋二年

成澤なつ子(渡前)

きのう、私とにいさんとつぶひろいをしました。

私はいさんに「どっちがたくさんひろうか、くら
べてみよう」といいました。にいさんは「よし、それ
ならしましょう」といって、二人は一ししようけんめい
ひろいました。にいさんはかごを持って、私は手おけ
を持ってひろいました。

ひろってからくらべてみると、私がいさんよりず
っとたくさんひろいました。にいさんは少なくひろっ
たので負けになりました。

えんそく

大正十二年度 尋二年

齋藤 京(渡前)

きのうは大そうお天気がよいのでえんそくに行きま
した。道のあるくときはおもしろいしょうかをうたい
ながら行きました。

どてにはさくらの花が一めんにさいっていて、きれい
でございました。どての草原にすわって、まさ子さん

とごはんをたべました。

うちへかえるときは、さくらの花を一ぱいひろって
みねさんと一しよにかえりました。

寅治君へ

大正十二年度 尋三年

富樫 勇策(柳久瀬)

寅治君おかわりはございませんか。私は丈夫で、今
海から上がって来た所です。

私は六日に由良に来ました。朝の二時半頃、兄さん
と家を出ました。ていしや場まで行った時、まだだれ
も来て居りませんでした。ていしや場の戸もあいて居
りませんでした。すこしたつと戸があきました。それ
から中にはいって、いすにこしかけて居ると、一人の
人がざるやふごなどをぼうに下げてきました。それか
らすこしたつと四、五人づれの人が来ました。だんだ
ん人が来ました。

兄さんがきつぷを買って、高いだんを上げて、又
左の方のだんを下りて、汽車にのって、三瀬のていし
や場で下りて、少し行って店でぼうしを買いました。
三瀬をすぎ山道を通って由良につきました。

海を見下ろした時は波もしずかで、あちらこちらに
白いほが見えて、なんとよい景色だろうと思いましたが
私はあつさもわすれてあるきつづけました。又、心の
中では水泳をしたら、なんとよい気持ちだろうと思
いました。

やどにつきました。ゆっくりやすんで海へへ出まし
た。まだ水泳大会ははじまりません。又やどへかえっ
て来てやすんで、昼のごはんをたべてから又行ってみ
ましたら、渡前や山形の赤いこしまきのはたが海風に
ふかれてひらひらしていました。

渡前や山形や豊浦などの百メートルや取りつき(リ
レー)かな?大戸)やいかだずもう(?)などを見て大
そう面白くありました。

それから海水浴をして、やどにかえって水をつかっ
て、海風にふかれながらいい気持ちになって、この手
紙を書いたのです。

君の家のすずしい木の下で、この手紙をよんでくだ
さい。そして、君も海水浴をした気持ちになって下さ
い。さようなら

この作文には次の評がついておりました。

三年生でこの位の手紙を書けるとは、ほん
とにえらい。寅治君はきつと、海水浴をした
気持ちになって君の作文を読んだことでしょ
う。(松田)

私もまったく同感です。当時の水泳大会の様子
を知る手がかりにもなりますね。(大戸)

私のうちの四方

大正十二年度 尋二年
成澤喜三郎（渡前）

私にうちの東には大きな川があります。なつになる
と、私はその川で水をあびたり、ふなやなまずなどを
つつたりします。

西の方には大きな道があります。そこを毎日じてん
しゃやばしややじんりき（人力車）などがひっきりな
しにあるきます。

南は一めん田で、田のむこうにうちがたくさんたっ
ています。

北には伝九郎といううちもあるし、伝兵衛というう
ちもあります。伝九郎といううちは、しょうゆややき
ふなどを売るうちです。

画家・成澤翠映さんの作文です。この作文で翠
映さんの実家の場所がわかりますか。（大戸）

ほたるがり

大正十二年度 尋二年
山口 みね（渡前）

ゆうはんがすんでから、ほたるかごとほたるぼうき
を持ってほたるがりにいきました。もうたくさんの子
どもがいて「ほたるこい。そっちの水はうまくない。
こっちの水はうまいぞ」とよんでいました。

私も「ほたるこい。そっちの水はうまくない。こっ
ちの水はうまいぞ」と大きなこえをたてながら行くと
五、六びきとんできました。「よしっ」といって、ほ
うきではたくと四ひきおちました。

うちへかえって草を入れて、水をふいて、ねるとき
かやの上へ上げておいて見ると、大そうよくひかって
おもしろくございました。

つぶひろい

大正十二年度 尋二年
成澤なつ子（渡前）

きのう、私とにいとさんとつぶひろいをしました。
私はいさんに「どっちがたくさんひろうか、くら
べてみよう」といいました。にいさんは「よし、それ
ならしましょう」といって、二人は一しよけんめい
ひろいました。にいさんはかごを持って、私は手おけ
を持ってひろいました。

ひろってからくらべてみると、私がいさんよりず
っとたくさんひろいました。にいさんは少なくひろっ
たので負けになりました。

えんそく

大正十二年度 尋二年
齋藤 京（渡前）

きのうは大そうお天気がよいのでえんそくに行きま
した。道があるときはおもしろいしょうかをうたい
ながら行きました。

どてにはさくらの花が一めんにさいっていて、きれい
でございました。どての草原にすわって、まさ子さん

とごはんをたべました。

うちへかえるときは、さくらの花を一ぱいひろって
みねさんと一しよにかえりました。

寅治君へ

大正十二年度 尋三年
富樫 勇策（柳久瀬）

寅治君おかわりはございませぬか。私は丈夫で、今
海から上がって来た所です。

私は六日に由良に来ました。朝の二時半頃、兄さん
と家を出ました。ていしや場まで行った時、まだだれ
も来て居りませんでした。ていしや場の戸もあいて居
りませんでした。すこしたつと戸があきました。それ
から中にはいって、いすにこしかけて居ると、一人の
人がざるやふごなどをぼうに下げてきました。それか
らすこしたつと四、五人づれの人が来ました。だんだ
ん人が来ました。

兄さんがきつぷを買って、高いだんを上げて、又
左の方のだんを下りて、汽車にのって、三瀬のていし
や場で下りて、少し行って店でぼうしを買いました。
三瀬をすぎ山道を通って由良につきました。

海を見下ろした時は波もしずかで、あちらこちらに
白いほが見えて、なんとよい景色だろうと思いました
私はあつさもわすれてあるきつづけました。又、心
中では水泳したら、なんとよい気持ちだろうと思
いました。

やどにつきました。ゆっくりやすんで海へ出まし
た。まだ水泳大会ははじまりません。又やどへかえっ
て来てやすんで、昼のごはんをたべてから又行ってみ
ましたら、渡前や山形の赤いこしまきのはたが海風に
ふかれてひらひらしていました。

渡前や山形や豊浦などの百メートルや取りつき（リ
レー）かな？大戸）やいかだずもう（？）などを見て大
そう面白くありました。

それから海水浴をして、やどにかえって水をつかつ
て、海風にふかれながらいい気持ちになって、この手
紙を書いたのです。

君の家のすずしい木の下で、この手紙をよんでくだ
さい。そして、君も海水浴をした気持ちになって下さ
い。さようなら

この作文には次の評がついておりました。

三年生でこの位の手紙を書けるとは、ほん
とにえらい。寅治君はきつと、海水浴をした
気持ちになって君の作文を読んだことでしょ
う。（松田）

私もまったく同感です。当時の水泳大会の様子
を知る手がかりにもなりますね。（大戸）

二年生

大正十二年度 尋二年
齋藤 武(渡前)

私は二年生になってから一度もやすんだことがありません。そして、松田先生とべんきようしました。一年生とかまだへ行つたこともあるし、また、四年生までといっしょにきぶねに行つたこともあります。学校からかえつてからは、こまぶちやたこあげをしてあそびました。また、こえひきをしたこともありませす。雪なげをして目にぼつちりあてられて物を見ることも出来なくなつたこともあります。それから、長いなつやすみもありました。先生からやおとうさんからしかられたこともあるしほめられたこともあります。もう、じゅよしきも近いうちに来ます。

遠足

大正十二年度 尋四年
成澤まさゑ(渡前)

昨日、湯野浜に遠足に行きました。私は四時半でおきました。それから学校に来て停車場に行きました。だんだん行つて大山におりました。おりてから土屋先生にわらびをとつてやりました。加茂では海にはいつてあそんだ。湯野浜に行く道では岩にきれいな松が一本はえていました。湯野浜に行くとはんをたべました。私どもがごはんをたべている時、太田先生が海にはいつておよいでいました。すこしあそんでトンネルをくぐつて、大山から汽車にのつてうちにかえりました。

春近く

大正十二年度 尋四年
佐藤 小菊(暮野内)

もうやさしい春に近づいた。春になると春々とした草や蝶々、とんぼなどがたくさんでて来る。ああ早く春になればよい。春はたいへん涼しく、また大そうきもちがよい。湯野浜に旅行も行かれるし、小鳥もピーピーさえずる時節である。あの暖かい春が目に見えるようだ。早く春になれば。

母の病氣

大正十二年度 尋五年
小野寺 泉(荒俣)

私が第一番にいたしましたのは父母です。その父母になくなられた人もおりました。それにくらべてみれば、私は本当に仕合せな者だと思つています。(ところが・・・)その母が今病氣です。ごはんなんか少しばかりしか食べません。少ししか食べなければ仕事もなりません。母のことが心配でなりません。いもうとは母のそばによつて見ていました。おばあさんもまことに心配しています。私は学校に来て母のことが心配でならなかつたが、二十一日は少しばかりはたらきました。それでもまだ少しなおりません。早くなおつてくれればよいがと思つております。

私のうちのひよこ

大正十二年度 尋五年
齋藤とめの(渡前)

私のうちでは、ひよこを七匹かつております。大それた大きくなつたので、箱からとびあがるようになりました。親にはわくぼという虫がたけたので、ひよこにうつると死ぬから箱から出しました。親はなきながら入ろうとするが、入るところがないので、親はその箱の上にあがつて、何も食べないでなきながらひよこを見ていました。ひよこは親がいなくなつたので、こまつたような顔をしていました。みんな大きなこえをたてて箱のあたりをさわぎまわつてないでいます。

私が親どりにごはんをくれたら、親どりはすつかりくつてしまいました。その時私は思いました。親どりからひよこをばなすのはわるいと。しかし、親どりにわくぼという虫がたけている。早く親どりの病氣をなおしてやらねばなりません。

昨夜

大正十二年度 尋六年
加藤おとめ(箕升)

今夜はほんとうによい晩だと思ひながら、机によりかかつて読本などを予習した。前の庭には掘え風呂(近所の人も入りに来るのだらうか?大戸)がたつていて、大へんにぎやかである。一時間もたつと予習はとつとあきてしまつて、本には少しも気がはいらぬ。ただ夜を知らせるにぎやかな蛙のなく声やのきばの木の枝にとまつている小鳥が時々出すかん高い音に気がとられてしまった。これではならないと思つて、又しつかりと勉強にとりかかつた。一時間ほどで予定の仕事が終えた。

雨戸を開けて見ると、庭には二、三人しかいない。家の前の電灯に大きなほたるが一匹、光にまよつて飛んで来たが、そこに来ると急におちてしまった。毎晩のように勉強すると、おとうさんからいろいろの話聞く。今夜はほたるが人のためになるといふ有益な話を聞いて、面白く床についた。

朝顔

大正十二年度 尋六年
齋藤おすみ(渡前)

朝顔よ、お前は どうしてそんなにかわいらしいのでしょうか。私はお前の顔を見るのが何よりもうれしゅうございます。毎朝毎朝早くから美しい笑顔でよくきれいにさいてくれます。私はほんとうにうれしゅうございます。

毎朝こんなに美しくさいてくれるのに、お日様が東の山からお顔をお出しになると、お前の美しくいりどつた姿が次第にしおれるなんて、何とかわいそうなことでしよう。美しいお顔を、いつまでもいつまでもさかせてなごめとうございます。

別れし先生を思い出して

大正十二年度 尋六年
齋藤 キヨ (渡前)

「さあ、この時間は唱歌。次の時間は読み方」と、熱心に教えてくださった先生も、今はめつたにあうことの出来ない遠い所へおいでになりました。先生は今頃どうしていらつしやることでしょうか。やはり向こうの学校で熱心に生徒を教えていらつしやることでしょうか。また、うちに居ては一生懸命にお勉強のことをごさいますしよ。

先生は此の夏休みに私共の学校にお出でになることです。私は毎日そればかりのしみにして、はやく夏休みになればよいと待つて居ます。その時は先生は間違えるほどお間違いでしよう。

先生も遠い所でよい景色をながめながら私共のことを考えておいでしよう。ああ早く夏休みがくればよい。そして早くあの元氣のよい先生のお顔を見たい。

ひばり

大正十三年度 尋三年
小野寺清一 (荒俣)

私が学校にくるときひばりがさえずつて居ました。私がかえをきいて居ましたら、ひばりは柳久瀬の方にとんでいって、それから田のくろにおりてしましました。きつと、田のくろに巢をくんで居るのでしよう。あのひばりは、私が学校であそんでいるとき、又空たかくあがつてさえずつて居るでしよう。

村の朝

大正十三年度 尋三年
野口 市松 (渡前)

昨日の朝五時半ごろおきてみると、そこにはとりのときをつくこえがきこえてくるだけで、村はひっそりとしてねむっていました。

少したつと、お宮の方から朝日がぼつと出て来て、うらのガラス戸にかがやいてたいそうきれいでした。やがてなつとう売りが「なつとう、なつとう」といいながら、年のとつたおじいさんがなつとうをかついで来ました。

そここで雨戸をあける音やわらをうつ音がきこえて来ます。どこかの人が自転車に乗ってチリンチリンとならしながらやつて来ました。しばらくすると工場へ急ぐ女工たちが三人来ました。

女工が工場にはいったと思うと工場のリンがカランカランとなつて、工場のはたおる音がやかましくきこえて来て、村はだんだんにぎやかになつて来ました。少したつと、人力車が二だいかけて来ました。子どもが道にるので「ハイ、ハイ」と車夫がいつてかけていきました。

見えたことと聞こえたことを素直にしかも無駄なく表現しています。将来教育長になるような人は、子どもの頃からどこか違いますね。(大戸)

浅賀正治さん

「千年の船」制作者
大半田出身 石彫家 が

高校の教科書(東京書籍)にのりました!

本校の卒業生の活躍を共に喜んでいただきたく、紹介いたします。ちよつとむずかしい文ですが・・・

石の音が聞こえる

加賀美 幸子

人の倍もある高さの石の上で、立ったりかがんだり、座ったりまたがったりして、鑿(のみ)を自在にふるっているのは浅賀正治さん。四十歳を過ぎたばかりの石の彫刻家である。

「この石は？」と聞いてみたら、七千五百万年前、恐竜時代の石だと言う。石としては、まだ若いものだそうだが、そういえば、触つてみたら本当にまだ初々しい感触が手に伝わってくるような気がして不思議だった。

長い間静かに眠っていた石は、浅賀さんによって、ようやく目覚め、人々の中に生きることになるのだ。石彫の行き先は、土浦市の公園だと言う。

立って、石に向かうのではなく、石の上に乗って作業することについても聞いてみた。「ヨーロッパ人はなぜか、ほとんど地面に足をつけて、大きな石に向かつて鑿をふるい、日本人はなぜか、昔から石の上から鑿をふるう」と浅賀さんは、その師から伝え聞いている。

頑強な石に平行に身を置き、立ち向かうヨーロッパ人の姿勢と、石に身をすべて預け、石といっしょになりながら、問いかけながら、石を動かしていく日本人のあり方が見えてくるようで、おもしろい話だった。

しかし、石を割り、刻む道具は、日本もヨーロッパも少々形が違うだけで、今も昔も原始時代もまったく同じだと言う。古今東西「鑿と槌(つち)と楔(くさび)」形も大きさもまことにシンプルな道具だけで人々は石を刻み続けてきたのだ。大きな硬い石なのに、そんな少しの道具だけで扱えるというのも、なんだか石の心が見えるような気がして私はひかれた。

石は見事に強いのに、「石の目」を見つけ、そつと楔を入れると、いとも簡単に身を割つてみせてくれるという。石の上に乗る、身を任せ、声をかけてみると、石の刻み方も石の方から教えてくれる。

無理に取りかかるとはなく、自分勝手に掘り進むのではなく、そつと石の具合を聞きながら鑿をふり下ろしてみると、「そこは、ほら違うだろう。それでは駄目だろう。ほら、それならうまくいくだろう。力を入れなさい。抜きなさい。息を合わせてごらん。疲れたらもう休んだらどうだ」と話しかけてくれるそう。石の上に乗って、石と対話できていれば、だんだん、石の刻み方がうまくなる。

「長い時間かけて、石がすべてを覚えてくれる」と浅賀さんは言う。そのメッセージを聞けるかどうかで、技や心が決まってくるのであろう。(次号につづく)

私のうち

大正十三年度 尋三年
土田 二郎(柳久瀬)

私の家の表通りは人や自転車などが通ります。西にはつぼ(?)や小川があります。その小川ではつりもできれば物あらいもできます。

私のうちは夏はずいすずしい所で、外の人が夏の昼休みにぎっしりなどを持って来たりして、すずしい客間でその本をよんだりします。そして「ここはずいすずしくてよい所だ。私のうちはあつくてこまる」などといひます。しかし、私のうちは冬になるとさむい所で、ふぶきの吹くときなどは大そうこまります。

みねさんへ

大正十三年度 尋三年
丸山 とめ(上藤島)

このごろはたいそうさむかったね。それでも私たちは毎日学校へかよっています。

先生は、この間あしがわるいのでお休みになりました。あなたはまだなおりませんか。かねゑさんもまだ来ません。松吉さんはとうとうなくなつたので十八日におそうしきでございました。私たちは先生といっしょにおくりに行きました。

二期はもう終わります。あなたはよくからだを丈夫にして学校に早く来てください。みんな待っていますから。さようなら。

この手紙によれば、みねさんとかねゑさんは病気で学校を休んでいる。しかも最近、松吉さんがなくなっている。どんな病気だったのだろう。ちなみに卒業生名簿には「山口みね」「永田かねゑ」という名前がある。病気は治っている。☆

夏

大正十三年度 尋四年
佐藤たけよ(和名川)

夏は大そう暑いものです。しかし私は、夏が大すぎです。夏になれば青物も沢山出ます。

私がおざしきで勉強してしていると、涼しい風が吹いてくるので、気持ちがよくてたまりません。暑い時は、水泳ぎをするので大そうおもしろくあります。

今まで土の中にかくれて居た蟬も、もうだんだん暑くなつたので、庭木にとまってないでいます。夏の中ごろになつてくると、蟬がゼーゼーないで、物音もきこえないようになります。この頃から、うちの杉の木にとまって鳴きだしました。

杉虫

大正十三年度 尋五年
富樫 勇(暮野内)

私の家のうらに大きなあすなろと杉の木がある。そしてその前に庭がある。そこには時々様々の小鳥が来る。又、時には猫の顔によく似たみづくも来る。

ある日、私が庭のあたりを通って行くと、どこからか小さいきれいな小鳥の声が聞こえる。私はふり向い

て見ると小さい杉虫といっている鳥であった。

よし、一つつかまえてやろうと息をこらして、そっと手を出したが、すつすと木の間をぐりぬけて、もうかげの方に逃げて行つた。何と早い鳥だろうと思つた。そして、このことを家の人に話していると、又、木の枝にとまって、声美しくさえずっていた。

浅賀正治さん

「千年の船」制作者
大半田出身 石彫家 が

高校の教科書(東京書籍)にのりました!

「石の音が聞こえる」(加賀美幸子)前号の続きです。

石のように冷たく、石のようにびくともしない、という表現が使われるように、石との一体感はどうも持ちにくい。

でも石は、もろいところもあり、優しく深く、更に言わずもがな、永遠の象徴でもある。その石に一生を託し浅賀さんは石の上に座り続けてきた。そして生み出したその作品はカエルもナマズも子どもも、具象も抽象も数多くあるが、とにかく丸く温かい。そばに行くと、ほら触ってごらんと石の方から近寄ってくる。

思わず手を出し、寄りかかり、腰かけたくなる。丸くほっこりした形が手のひらに吸いついてくる。何と親しげに!そして、何という不思議な温かさ。

……石の優しさと温かさを引き出したい。人々に触ってもらいたい。何千年も生き続ける石のメッセーじをくんでほしい……と生みの親浅賀さんは言う。時代を超えて生きる石への賛美が浅賀さんの笑顔を丸くする。優しくて大きな仕事だ。

浅賀さんが生き、石が生きている。石の彫刻はリズムとタイミングだそうである。そして相手に合わせ、妥協していくのだと言う。妥協はよほど力がないとできないこと。石から教わった自信のほどがうかがえて、うれしいメッセーじであった。

ある番組で訪ねた茨城県岩瀬町での出会いである。

岩瀬は昔から石の町と知られている。多くの石が切り出され、建材として各地で役割を果たしている。岩瀬の人々の暮らしを支えてきた岩瀬の石。

以下、浅賀さんが登場してこないので省略。

表紙から二枚目には「象」「石舞台」の二つの作品と「製作中の浅賀さん」の三枚の写真が掲載されている。まさに、この教科書の代表的教材文として取り扱われているのである。

浅賀さんは、こんなにスゴイ人だったのですね。

そのスゴイ人の後輩にあたる皆さん。特に六年生はこんなにスゴイ人がつくつた「千年の船」に何を彫るか・・・今から考えておきましょう。(大戸)

僕の竹刀

大正十三年度 尋五年
高橋 正雄 (和名川)

僕には竹刀が一本あります。
先生が「今度けっけん(剣道)をやらせるから、竹刀を買ってもらえる人は家の人にねがってごらん」といわれたので、僕はすぐお父さんに買って貰ったのです。僕はこれでけっけんをやるのです。
その代価は一円三〇銭で竹が五本に、先皮、しぼり皮、つる、つばがついている。かるくて自由になるから大そうよい竹刀です。僕は大事にして白い袋をかけて名をかいて、今は学校に置いてある。
これでけいこして、うんと上手になってやろうと思っっている。

大風

大正十三年度 尋五年
松浦こぶぢ (大半田)

この前の大風には大そう困りました。学校から帰る時に風が強いので、雨がふるけれどこうもりをさされませんでした。これからどんな天気になるのかと心配しながら家に帰りました。
しばらくして雨はほとんどやみましたが、今度は強い風が吹いて来ました。暗くなる頃には、東の方からまっ黒な雲がどんどん走って来ました。風はだんだん強くなって、夜半頃には木も屋根も皆とんでしまいそのような大風になりました。
うちの人たちは、皆おそくまでおきて居ました。

つつじ

大正十四年度 尋二年
齋藤 健吉 (渡前)

私のうちのつつじの木は、のき下にあります。つつじの花はラッパのようになって、きれいにさきます。このごろまで、きれいにさいていましたが、今はすぎてしまつて、来年のはるにならなければとても見る事ができません。

ひよこ

大正十四年度 尋二年
阿部 秀夫 (上藤島)

私のうちのひよこは生まれてからよほどたつたので羽が出てきました。
ひよこは皆で十二羽生まれましたが、一羽は死んでしまいました。
日がくれてくると皆おや鳥の羽の下にだかれます。

あかちゃん

大正十四年度 尋二年
齋藤 玉 (渡前)

うちのあかちゃんは生まれてから十日あまりしかたちません。
私は学校からかえるとだきます。あかちゃんはだくと泣きます。でも、私がちちくびをやると、あかちゃんはスバスバとすわずります。

そのあかちゃんに今日名前をつけるそうです。私はうちへかえるのをたのしみにして、あがりになるのを今からまつています。

自転車

大正十四年度 尋三年
齋藤 増雄 (渡前)

私は昨日、たけし君と家のうしろで自転車をなれました。(練習しました)よほどなれると、すこしなれましたが、たけし君は私よりのれませんでした。
私は自転車の下の方に足をかけてのりましたら、しらべ(チェーン)に足がついて、足がまっくろになつてしまいました。
たけし君も何度もころびましたので、足が私とおなじになりました。私はだんだんおもしろくなって夕方までなれました。

「自転車の下の方に足をかけてのりました」
この乗り方を「三角乗り」といいました。
むかしは子ども用の自転車などありませんから子どもでもおとな用に乗りました。するとサドルに腰をかけると足がペダルにとどきません。だから、サドルに腰をかけないで乗ったのです。
私もそうして乗りました。
(大戸)

べんとう

大正十四年度 尋三年
高橋みさを (砂塚)

私はべんとうであります。
生まれはあつみであります、店にだされて十日ほどたつと汽車にのせられてすなづかにきました。そうして毎日みさをさんにつれられて学校にきます。
今日もふろしきにつつまれて教室にいます。みさをさんは四時間目がすぎると、私をだしてたべます。
うちにかえると、私は水に入れられてすっきりあらわれます。それから、すっきりからだをふいてもらいます。夜はとだなの中でゆっくりねむります。

当時は温海に弁当箱を作る工場みたいなものがあったのだろうか？材質は？
(大戸)

てまり

大正十四年度 尋三年
田村 糸 (幕野内)

私はおばあさんからてまりを買っていたたくつもりです。買っていただいたら、私はいっしょうけんめいについであそぼうと、今からたのしみにしています。
私もてまりのように板の間から手のひらまではねかえることが出来たら、どんなにおもしろかろうと思つていますが、私がつてまりになつてもあんなに早くはねかえることが出来るだろうかと思ひます。
私はおばあさんからてまりを買っていたたくつものを何よりたのしみにしています。

僕のうちの猫

大正十四年度 尋四年

五十嵐英吉（上藤島）

僕のうちの猫は大そうかわいい。昨日さかなをくれたら、うまそうにたべていた。それをたべあげてから、茶の間でいっしょうけんめい口に手を入れていた。見ると猫のあごに大きなとげがささっていたのをとろうとしていたのでした。僕はあまりかわいそうだから、口をあけてとげをとってくれようとしたらにげてしまいました。

夕方になっても、やっぱり苦しんでいるから、お父さんにそのことを話しました。お父さんは、猫をつれて来いというから、僕はそつと猫の後に行ってつかまえてお父さんに連れて行きました。

お父さんは猫をマントに包んで顔ばかり出して口をあかせて毛ぬきでとげをひっぱったがぬけて来ない。又ぐんと引っぱると猫はニヤーとさげびました。この時とげがぬけて来たので、みんな大喜びをしました。お母さんは「いたくなかったか」などと猫にきくので、うち中の人はみんな大笑いをしました。

初夏

大正十四年度 尋四年

渡部 竹恵（渡前）

初夏になればつばめやいろいろな鳥などもますますこちらの方へ飛んでくる。

私の家の近所のかわらの屋根のあたりで、すずめやからすなどはうす暗い、私の起きないうちから元氣よく鳴いて居ます。

東の山に日の出ぬうちから、人は一生けんめいに仕事をして居ます。

初夏の朝早く起きて勉強し、東の方に向かってしんこきゅうや運動をすると、ことに気持ちがよくございます。こんな頃に起きてみると、道端の草は朝つゆにぬれ、心持ちがよい。あついに日に照らされて、草はだんだんのびるでしょう。

さつき

大正十四年度 尋四年

押井たつの（荒俣）

さつきもだんだんはじまりました。私の家でも明日からだそうです。

家の人は四人で、しげさんの家の人が手つだいに来てくれるそうです。私の家でもしげさんの家にお手つだいに行くそうです。去年もそういたしました。

かなしかった事

大正十四年度 尋五年

佐藤 武（荒俣）

世の中には僕よりかなしかった事のある人もあるでしょうが、僕が生まれてから今までで一番かなしかった事は、おじいさんが死んだときです。

僕が学校からかえってくる途中、となりの家人がこえ引きをしておきました。そして僕に「おじいさんが病気になる」とおしえてくれました。僕は、あれほどたっしやなおじいさんがどうして病気になるのだら

うと思いつながら急いで家にかえって見ると、となりの人や家の人が頭をひやしてかんびょうしてしまいました。お父さんが「兄さんをよんでこい」と言いましたので急いでよんできました。それから医者をおよびだして、何日もかんびょうしたが、医者のききめもかんびょうしたかいかいもなく死んでしまいました。僕は、大そうかなしくありません。

今日のあらし

大正十四年度 尋五年

田村みどり（暮野内）

今日のあらしは、ほんとうにひどいあらしでした。私が夕べねて居て、ふと目をさますと外ではピューピュー風がうなっていました。それから間もなく、五時をうつので起きてみると、お母さんがごはんをたいている所でした。

私がおを洗っていると、やがてピカッごろごろとかみなりがなり出しました。その時、風はやんで居ました。

それから勉強して居ると、おばあさんが起きて来て表の戸をあけたので勉強をやめて、外をはこうかと思つて表へ出ました。見ると、表はすっかりぬれてはかれませんので、家に入りました。ごはんを食べて、髪をゆっていると、又ごろごろとなり出したので、お母さんが店に来て、かみなりがやんでからでないかと学校に行かれまいと言つて居ました。

学校に来る時は寒いので、たくさんきものをきて、ますますはげしくなるあらしの中を来ました。二時間目には、あらしが降りました。今日のあらしは、ほんとにひどかった。

姉さんの帰るまで

大正十四年度 尋六年

齋藤 於敏（渡前）

いつもは三時か五時に帰るのに、今日は六時になつても帰らないので、お母さんはだんだん心配になつてきたのでしよう。「キエ子は来ないか」と何度も言います。

私も心配なので門の傍まで出てみたが、よその人ばかり来るので悲しくなりました。青い空もだんだん黒くなる。いくら待っても来ない。

御飯がすんでから、お迎えにいかうかと思つてお母さんに聞いてみたら「みんな行つてもよい」と言うので「それなら、お母さん一人になるもの」と言つたが「一人でもよい」と言いますので、私たちは御飯の後片付けを急いで家を出ました。

もう七時。空にはお月様が出ていました。役場まで行つたがまだ来ません。だんだんさびしくなりました。ふと、汽車に乗りおくれ歩いて来るかもしれないと思つて、家の方に急ぎますと、下男が来て「まだ来ないから、私が行つて来る」と言うので、それではと家へ帰りました。

家に帰つて、どうしたのだらうとお話をしていまして、「ただ今」と言つて姉さんがはいつて来ましたので、皆安心の胸をなでました。

たこ

大正十五年 尋二年
齋藤 松彦(渡前)

私はたこがほしくてたまらなかつたから、あんちゃにはつてくれとたのみました。あんちゃは、私が二度も三度もたのんだからはつてくれることにしました。それで、お父さんから半紙をもらおうとしたら、お父さんは「たこなら半紙ではそんなまきけてだめだろう」ということでした。そして、白石紙をくれました。あんちゃは、その白石紙に、ざっしをみて牛若丸と弁慶の絵をかいてはつてくれました。私はおもしろくてたまりませんでした。

その日にあげたかつたが天気がわるくてあげられませんでしたから、あげないで次の日にあげました。次の日は、ちょうど日曜で天気もよかつたから、家のうらに出て居たら、喜代蔵君と正雄君も来ていっしょにあげました。

私は人形です

大正十五年 尋三年
加藤 金子(荒俣)

私は人形です。毎日ガラスの箱に入れられて町のにぎやかなありさまを見て居りましたが、私の知らない人が来て、私を買って行きました。

それから、木でこしらえた箱に入れられて、どぞう(土蔵)にしまわれて居りましたので、一年に一べんしか外を見ることが出来ません。

毎年の四月には私を箱から出してかざります。赤い着物を着せられておもしろくかざられます。そして、ごちそうをたくさん上げてくださるべますが、すぎると又箱に入れられてしまわれます。

そして私は、又一年間だまって箱に入つて居なければなりません。「はらがへつてもたべられませんか」

私の弟

大正十五年 尋三年
齋藤 雄二(大半田)

私には弟が二人います。大きい弟は、私のいうことをきかないで、ただのんきに毎日遊んでいます。

小さい弟は今年四つになりましたが、私が学校に行く時や帰つた時には、かならず「ただいめ」などをていねいにします。そして、毎日ざっしや絵本などを見て遊んでいます。それから、馬が大そうすきで、朝起きてから夜ねるまで木馬をひいて遊んで居ます。この弟はおもしろい子です。

だるま

大正十五年 尋四年
成澤 鉄作(渡前)

だるまのかっこうはとくべつであります。生まれは印度だと正雄君が言いました。だるまには手も足もないのであります。私のうちの人の言うことでは、仏様の前に九年もすわつていたからだと申します。

私のうちでは「だるま様、だるま様」とたつとんでいます。それは、私共がころんでもさかさになつても

おきられるようにだと言います。又、風邪をひかないようにだと言っております。

われわれもだるま様のように、一度しくじつても又くりかえすようにならなければなりません。

ねこ

大正十五年 尋四年
佐藤 稔(荒俣)

私のうちに黒いねこが一匹います。そのねこは、ひげははりのようにとがっています。

ねこがけんかしているから僕が見にいくと、大きいねこがいたので、僕が大きなねこをたたきますとにげていきました。そうしていると、ねこがすずめをくわえてきました。それを見ようとすると、ねこはにげていつのまにかくつてしまいました。

この頃はミミズクをおつかけてきました。ミミズクはこが(大きな桶：大戸)にはいつていきました。お母さんがしめてきて、兄さんがにがしてやりますと、うれしそうににげていきました。

おぼん

大正十五年 尋三年
田中 小里(幕野内)

私はおぼんにおもしろく遊びました。そして夜になると、おとうろうにあかりをつけて皆いっしょに「ぼんの十三日さつきからまった」といつてあそびました。おぼんの十三日には、うちの人とよい着物をきて墓参りにいきました。墓参りの帰りにはお寺によつて参詣しました。そして家に帰りました。

うちに帰つてから着物をとりかえておもしろく遊びました。また夜になると、おとうろうをつけて外で遊びました。そして八時ころうちにはいつてねました。

狐火

大正十五年 尋五年
太田 晋(渡前)

去年の六月頃、光代さんと雪子さんとみどりさんと弟の十司と私とで、蛍がりに工場の方へ行きました。途中、橋を渡っていたら、幕野内の方でぴかぴか光るものがみえますので、狐火が来たと言つてみんな走りました。

私も走ると、弟が「待つて」と言つて、泣きそふな声を出したので光代さんと私が待ちました。

三人で学校の前までくると、和と半蔵と系蔵(和と系蔵は名前としては少しおかしいが、そのまま書きました：大戸)と三人がきたので「向こうから狐火がきた」と言つたら「狐火なんぞ、こわくない」と言つて行つてしまいました。

私達三人は家にかえつて後できいてみると、それは外の人が自転車をおしていたのだとわかつて、私達は大笑いしました。

◆私は、鯉のぼりのさおの先についている矢車をUF Oと思ひ込んで大騒ぎしたことがあります。恐い話も実は、ああ勘違い・・・大笑いが多いようです。

平成十五年度一学期最終号は大正十二年度の海浜学校?の作文にしました。夏休みに一週間……!!

海水浴日記

大正十二年度 尋六年

齋藤 米(渡前)

八月一日(水)雨のち晴れ

朝のうちは雨であったが、汽車が進むにつれて天は次第に青空とかわった。

三瀬の停車場を下りて由良へといそいだ。そして、海蔵寺というお寺について腰を下ろしたのは九時頃であった。一休みした後、先生から順序を定められて道具をかたづけした。

いよいよ海へと出かけた。一同、広い砂原に並んで太夫様のきとう(祈祷)があった。それがすむと海にはいった。男生は活発に泳ぎまわった。

私は生まれて始めて海にはいったので、何だかこわいように感じた。浅いところに手をつけて泳いでもなかなか面白かった。たみさん等は深い所に行つてどんどん泳ぐので、どんなに愉快だろうと思つた。一時間程たつと寒くなつたのであつた。

海水服を洗つて、みんなでお寺へ帰つた。少し遊んでから昼の御飯が出た。腹がすいて居たので何でもおいしく食べた。午後から又海にはいった。そして帰つたのは四時頃であつた。

夜になつてお菓子をいただいた。みんな面白く本を見たり、お菓子を食べたりして、今日の出来事などを話しながら九時頃床についた。

八月二日(木)雨のち晴れ

五時に床をはなれた。一同本堂の前にすわつて仏様を拝した。先生方が注意をされてから朝の自習をした朝飯のおいしかったことは言うまでもない。

又海水浴場へといそいだ。砂原の上に整列して体操をした後、海の中へはいった。だんだん面白くなつて来た。それから私も長い橋を渡つて白山島に行つた。そして、岩と岩との間にならんで写真を撮つた。

午後の海水浴を終えた後、先生から湯札をいただいたお湯にはいった。小さい湯つばなのでいっぱい人がこんでいた。

夕食後、先生より面白いお伽話を聞いて楽しくやすんだ。

八月三日(金)曇りのち晴れ

朝、海辺に行こうとしたら自動車に出あつた。おぼさんと妹どもがにこにこしながらその自動車から下りた。私どもが泳いでいると、お母さんも遊びに来た。おぼさんがキヨさんにうきぶくろを買つてくれたので私もそれをかりて泳いでみたら、ひとりで浮いて大へん面白かつた。

宿に帰つてお母さんからお菓子をいただいた。五時の汽車で妹等は家に帰つた。夜は蓄音機を聞いて楽しい夢にはいった。

八月四日(土)晴れ

今日も又熱い砂原をふんで体操をした。みんなのだ(肌)はよほど黒くなつて来た。泳ぎの先生がみえて、上手な人に泳ぎ方を教えてくれた。

八月五日(日)晴れ

海水服を着て砂の上に立っていると、青年団の人達が来た。

夜の御飯がすんでから、先生につれられて散歩をした。夕日はもう海へしずもうとしている。村外れの山には百合の花がたくさん咲いていた。日はもう暮れて前にいる人もはつきりわからなくなった。

宿に着くと先生はそこ今とつて来た百合の花をいけてくれた。そしてみんなでお菓子をいただいた休んだ。

八月六日(月)晴れ

今日は水泳大会なので人がたくさん集まつた。

午前のうちはいつものように遊んで、お昼の御飯を食べた。御飯がすむと豊浦村から絵葉書とお菓子をいただいた。

二時から会が始まつた。楽団の音がすると山形の生徒は大きな声で唱歌を歌つた。四つの学校はそれぞれ自分の方に一心に元氣をつけている。何べん泳いでも渡前が勝つので皆々大喜びであつた。

五時頃宿に帰つた。夜になつてから、みんな集まつて蓄音機を聞いた。

八月七日(火)晴れ

一週間も夢の間に過ぎて、いよいよ今日帰らなければならぬと思つと、何となく名残惜しく感じた。

今日はいつもよりごちそうがあつた。

涼しい海で体操をして最後の泳ぎをした。

毎日毎日楽しく遊んだ海へに別れを告げて宿に帰つた。そしてそれぞれ自分の物をかたづけて、五時の汽車へと三瀬に向かつた。

今日の水泳大会

大正十二年度 尋六年

齋藤 キヨ(渡前)

八月六日。今日は水泳大会があるというので、見物人は黒山のように海岸におしかけた。雲一つなく晴れ渡つた午後の日がかんかんとりつけける海へには、渡前、山形、三瀬の三校の生徒が、各決められた場所にずらりとならんで、今やおそしと順番の来るのを待っている。やがて三校の競争となつた。

海の中でも陸の上でも、拍手の音、万歳の声で耳もさけるばかりである。

楽隊の音にはげまされて競争はいよいよ始まつた。みんなは手にあせをにぎつて見つめている。

一等、二等、三等。勝負はきまつた。たいていは渡前か三瀬の生徒である。山形は競争する前に神にいのりをこめたり、唱歌を歌つたりして元氣をつけていたが、いよいよ競争してみるとだめであつた。けれども最後には渡前も三瀬にはかなわなかつた。で、とうとう二等になつた。

会が終わると旗をおし立てていさんで宿に帰つた。午後の日は相かわらずににこにこ私共の勝つたのを喜んでいた。

第二学期が始まりました。またよろしくお願ひします。夏に關係ありそうな作文を選んでみました。

石ばつき

昭和二年度 尋三年 佐藤みよし(幕野内)

私が学校にいくと、むこうほうでにぎやかにうたう音がきこえます。だれがうたうのかと思って、よってよくみますと、石ばつきの人たちがうたうのであります。毎日石ばつきの人たちが大工さんたちがはたらいてくれるので、学校が早くたつことでしょう。大きな学校でまりつきをしたり、ぼったんぼったんのゆうぎをしたりしたら、どんなにおもしろいでしょう。早くあたらしい教じょうでべんきようしたい。

昭和二〜三年度に校舎を増設、西体操場(8間×16間)使丁室を新築しています。

ところで「石ば」とは何でしょうね。おそらく「石場」・・・建物の基礎となる石を置く場所でしょう。うたは「どんづき唄」かな? 大戸

おぼん

昭和二年度 尋三年 佐藤菊三郎(?)

おぼんはおもしろい。あたらしいげたをはき、きれいなきものをきて、ごせんぞさまのはかまいりをします。はかまいりには、ちようちんやもちやおかしやほおづきや水などをもっていくます。

はかにいってそれをかけたり、あげたりしておがみます。おがんで来てから、みんなであそびます。僕はそれがおもしろい。

僕はおばあさんからせにもらいます。それをむだにつかわないでちよきんをします。

私どもの先生

昭和二年度 尋三年 成澤つやゑ(?)

私どもの先生は、私どもによく字をおしえてくれます。できないことも先生からすつかりおしえてもらいます。先生はひげをたてていますが、毎日ここにこしておる先生です。私どももみなにこにこして先生のおしえをまもっています。

先生はわるいことをしなければこしやぎません。おもしろい時は、私どもと一しよに大口をあけてわらいます。わるいことをするとまなこを大きくしてこしやぎます。(その顔を)石じぞうさまのようだという人もおられます。それでもすぐきげんよくします。

おもしろい本もよんできかせます。むかしばなしもうんとします。それでもできない時はしませせん。
*これは夏には關係はないが面白いので.....大戸

なつかしい学校

昭和二年度 尋四年 松浦 鉄美(大半田)

ああーなつかしい学校に行きたくなりました。毎日、学校のことを思い出しながら、日数を数えて、十五日の日の来るのを楽しみにしてまっして居るが、まだ七日しかありません。この長い夏休み中、私はなつかしい先生方をはなれ

て勉強をしなければなりません。

この綴り方をつくりながら、つくづくと学校の事を思い出しています。早く学校に行きたくて行きたくてたまりません。あのなつかしい学校を私は一寸の間でも忘れる事は出来ません。

鉄美さんは、どこで何をしているのだろう。十五日間の勉強合宿みたいだが・・・謎ですね。 大戸

夏休み中

昭和二年度 尋四年 阿部 秀夫(上藤島)

長い三十一日の休み中は、毎日朝早くしゆくだいをかいた。又、うらの島や土手の草むしりをした。花には毎日水をやりました。又、家の使いをしたり、叔父の家に行ったりした。

八月十八日。越後寒川の叔父の家に行くことになった朝早く起きて、五時の汽車で行った。向こうに着いた時七時二分になっていた。汽車からおりたら友達がむかえて出て居りました。

屋から海に行くことにしました。それで昼まで様々な遊びをしているうち、ごはんが出たのでごちそうになった。それから友達と海へ行った。貝やかに等を一心につかまえた。又魚つり等もして遊んだ。

そして、四時頃家へ帰って、僕のとつたものを見たら貝やどかり、かに、うに等がたくさんはいって居ました。うにのはうのを見ていたら(おばあさんが)「よくこんなにしめて来た」と言って、西瓜を持って来ました。僕はそれをごちそうになってまた遊びに行った。そして夜のごはんをたべた。もう、時間はどんどんたっていくますので心細い感じがしてなりません。

少し休んでから六時の汽車に乗って家へ帰りました。

大水

昭和二年 九月二日 小関 春美(荒俣)

この頃はお天気が悪くて、毎日毎日雨が降っていました。特に二十七日二十八日の雨はよほどひどかったです。

私は今日のはれるか、明日ははれるかと毎日思っていました。私どもの村では私が生まれてから、あのぐらゐの大水はなかつたかと思ひます。

私は心配して神々にいのつていました。家に人もあまりひどい時には神様にいのつていました。よほどはれた日がありましたから、外であそぼうと思つて出て一時間ぐらゐ遊んだら又雨が降って来ました。

次の日の朝べんきようをした時はまったく心持ちがわるくてべんきようなんかされないほどでした。うちの方へ行つて見ますと田には水がいつぱいで、稲は頭しか見えませんでした。お母さんに話しますと

「空はまだ青空も見えない。もっと強い雨が降る」と言われたので、私は家にも大水が来るかと思つて夜もねむる間がないほどでしたが、間もなくはれたのでこんどはうれしくなりました。

私は時計です

昭和二年度 尋四年 阿部 弘(柳久瀬)

私は鶴岡の或る時計屋さんに毎日かざられて居りましたが、知らない人の買われました。それから三日程すぎると十歳位の悪い子供にあたえられました。

私はいままで働いていましたが、病気になるまで、又おなじ時計病院にこしらえに持って行かれました。すると、時計屋の番頭が私の体をほどこして、又べつになおしました。その後は決して働かないことのない様になりました。

この家の人々より二倍三倍も私は働きました。この間、四年の子供が学校からかえって「時計の針の絶え間なくめぐるが如く時の間も」と大きな声でうたわれたときはほんとうにうれしく思いました。

昨夜のゆめ

昭和二年度 尋五年 成澤 茂次(荒俣)

昨夜のゆめは大そうかなしかった。

僕はお父さんと由良へ行った。そうして水を浴びていると、お父さんがいない。僕はこまった。なきながら岩へ上った。すると一人の男がいる。それで「お父さん」とさけんでみたが返事をしない。よく見ると体は黒く足は細長く、せいが高い。それはお父さんのゆうれいであろうと思つて岩のかけにかくれた。

「お前のお父さんは、岩から汽船に移る時、汽船へとどかなくて海の中へしずんでしまったのである」と。僕はいつそう大声でなき出した。するとゆうれいはぼつと姿をけした。僕はお父さんは死んだし、どうしたらよいだらうと思つているとぼつと目がさめた。ねどこを見るとお父さんがねむつていいる。僕は汗をばたばたながしながら汗をふいていいると、時計は静かに五時を打った。

老人

昭和二年度 尋五年 菅原 花子(新屋敷)

或る日、よそへ行つての帰りでした。姉さんと手を引いて来ると荷車の楯を下ろして側に休んでいいる貧しい姿の老人が居ました。大勢の人が其の周りに寄つて来て「きたない爺さんだ」「可愛そうにね」と話し合つていました。私達も其の人を見ましたが、本当にきたない体をしていました。けれども何だか可愛そうでなりません。

人々が余り大勢来たのでうるさくなったのでしよう力のない声で「お前らは何を見ているのだ」といって大そう怒りました。

そこへ巡査が来て「あちらへ行け」と言うと、老人が立ち上がりました。巡査が「そんなにひよろひよろしていて大丈夫かい」と聞きましたら「ありがとう、ありがとう」と言つて、幾度も頭を下げて行きました。あの老人は今頃どこへ行つたでしょう。

当時、新屋敷と平形、それに駅前の一部も渡前小の学区でした。この号から、少しずつそれらの人の作文も紹介していきます。(大戸)

由良の一日

昭和二年度 尋六年 成澤喜三郎・翠映(渡前)

今日は由良水泳大会だ。天気はどうか気になつてしかなかった。天は曇つて今にも雨が降つて来そうだ。時々白波がざぶんと音する。

「今日は雨が降りそうだ。こまったなあ」と思つていいると黄金小学校の応援歌が広い海に響いて来る。いつか聞き覚えのある唱歌だと思つた。

朝のお習いもすんだ。もう寺の生徒も来そうだ。

「先ず、寺に行こう」と兄さんが言うので来てみると大会の話をして居つた。話も終わったので、いよいよ応援団長、選手を先頭に浜をさして走つて行つた。

朝より天気がよくなつた。やがて路を進行して来た青年団員に会うと「おー」とか「やー」とか言つていいる。海辺に近くなつた。いよいよ海が見える。見物人各々学校生徒は各々自分の席に着いていいる。もう黒山のように井上先生は知り合いがあるので「おお」「や」と言われて礼をする。

やがて各々席に着く。選手は皆必勝をいのつていいるようだ。応援団の大旗がひらひらと前に立つて、一同大元気である。「もう屋が近い」と思つていいると井上先生とその他二人の先生が酒盛りの式を始めた。ターニング台まで舟で行き、ターニング台に着物をぬいで三先生は海に入った。(いろいろな泳ぎをしてみせた)見物人、学校生徒一同は拍手をした。かくて式も終わった。

由良の人は「まずまず、おぼげだごをすんもんだのし」「よくあげだごとして沈まねなやまず」などと口々に言つていいる。僕らも中々上手なものだと感心した。

今度はいよいよ競泳なのだ。渡前応援団は他校から負けずに応援歌を歌つた。

中等学校の競泳もすみ、いよいよ小学校の五十米競泳となつた。選手、林治君、寅治君を始め四人の渡前選手は元氣よく舟に乗つた。「ふるえやふるえや」と利明君が歌つた。一同元氣よく「ふるえやふるえや今こそ我が鳥合の衆を・・・」と歌い始めた。各校も負けずに応援して音する。

やがてターニング台には末治君が上がつた。「おー負けるなや」「負けるな負けるな」と大声で応援していいる寅治君、久市君、林治君の順序で競泳も終わり、舟に乗つて岸へと帰つて来た。女の選手は一等、二等と決まつていいるように勝つ。

時間も過ぎ、やがて先生のおおせで「昼飯を持つてきた人々ばかり箱を持つて行つて下さい」と言うので、残念にも男子のリレーを見ずにすぎた。聞けば男子のリレーは三等であつたそうだ。「残念であつたなあ」女子は見事一等になつた。

中等学校の競泳も諸先生の式泳も終わり、優勝旗は我が渡前に授与される事になつた。羽根田先生審判長の報告によれば、渡前二六点、念珠関一八点、豊浦一〇点、黄金三点であつた。

かくて夕もや次第にせまり、優勝旗を先頭に選手、先生や生徒等は笑顔をつくつて堂々と帰途についた。戦いに勝つた者も一同つつみきれぬ喜びを持って夕飯を食べた。夜は活動写真で由良の人々を喜ばせ、大いに渡前小学校の名譽を上げた。

草取りしながら

昭和二年度 尋六年 齋藤 茂代(渡前)

草が沢山生えたので、午後からお母さんと家の周囲を草取りしました。

先ず目についたのは毒だみの花がまっ白に咲いている所。それを取ると苔が一面に生えていて毛せんを敷いたようでした。

私はお母さんに「晩、この苔の上に蚊帳をつつて寝たら涼しくてどんなにきもちがよいだろう」と言ったら、お母さんは「ねてごらん。夜露にくっさり濡れて風をひきます」と言いました。

私は夜露のことは考えないで、涼しいことばかり考えて言ったので、そう言われると何も言われなかった

私の金魚

昭和二年度 尋六年 佐藤久太郎(和名川)

私の金魚はかわいい金魚です。みなで二匹います。一匹はたもとの方の小さいせきからしめたのです。もう一匹は私の家の前のせきからしめたのです。

私が見ていると、一番大きい金魚に小さい金魚がついて泳ぎます。又、一番大きな金魚がうかんでごちそうを食べれば小さいのも食べる。大きい金魚と小さい金魚がいつの間にか仲よくなつてしまつた。

小さい金魚も大きい金魚も去年産まれたので同じ大きさでありそうなものだが、なぜ違ふのだろうと考えました。

それから(前は)人が行くとすぐに沈んでしまつたが、今は沈まないようになつたから何よりもうれしいです。

夏の夕暮

昭和二年度 尋六年 小関よしみ(荒俣)

それは丁度夏の夕暮のことです。待つても待つてもお父さんもお母さんも帰らないので心配になつた私は弟を連れて山に迎えに出ました。

だんだん行くと、向こうからお母さんとお父さんの様な人が来ましたので、胸をどきどきさせ乍ら弟に呼んでみなさいと言いました。弟が「お母さん」と大声で呼びましたが、声は闇の中に消えて何の答えもありません。

だまって立っていると、其の人達はだんだん私達の方に近づいてきました。見ると、其の人達は私の家の前の人でしたので「お母さんは来ませんでしたか」と聞くと「まだ山から出ないでいる所ですから、これから迎えに出て駄目だ」と言われたので、小さい弟の手を引いて一しよに戻りました。あの時の心細かつたことは一生忘れることが出来ません。

日記

大正九年度 尋三年 小野寺慶治(渡前)

四月二十八日 水曜日 曇り 今日から日記をつけることにしました。

私が学校から帰ってみると、どこかからかもちをもらつてありました。私はおもしろかつた。それから私は、豆かすをけずる時くわで足を切ろうとしました。その時は青い顔になりました。

それから、おしよ様にごはんのやなぎをおさめて来いと言われましたから、寒かつたががまんしておさめて来ました。

そして途中で風に吹かれました。その時、私のお父さんが死んだことを思い出しました。あの時は大そうこまりました。夜になると電気を下ろして本を読みました。

御盆礼に行った時

大正九年度 尋四年 富樫 吉郎(柳久瀬)

私と妹と二人づれで御盆礼に行きました。家を出て富沢を通つて、荒俣を通つて、それから狩やに行きました。(ついたら)まずあいさつをして、みやげ物を出しました。そして風のあたる所でしたばらく休んでから遊びはじめました。

おじさんが、すずめおどしに鉄砲をうちに行くからついて行きました。おじさんはたった一発しかうたなかつたです。

それからおじさんとつりをしました。私のに鰯(ふな)がかかりました。その鰯は五、六寸もありました。上げる時はさおが弓のようにながつて、やっと上げました。しばらくするとおじさんのかかりました。それもやはり鰯でした。それは四、五寸ありました。又少したつと私のにもおじさんにも一しよにかかりました。それも四、五寸でした。今までかかつてこれしかと二人で大笑いしてかえりました。

うちにかえつたら私の父が来ていました。かえりはお父さんとかえりました。

私のうちの赤ちゃん

大正九年度 尋四年 阿部千代女(上藤島)

私のうちの赤ちゃんは大そうかわいい赤ちゃんです。私が学校から帰つて泣いて泣いている時は私がねんねんころころねんころせといつて泣く時もあります。

私がおぶつてたんばへ遊びに行く時もあります。ねえさんがおぶつている時は、家の中の座敷やえんがわで子守歌を歌っております。お座敷やえんがわにいと、涼しい風が吹いてきて心持がよいからお座敷かえんがわでだましているのです。

夏の夕立

大正九年度 尋五年

井納おしげ(荒俣)

庭に木の葉のゆるぎもとまって、せみのなくこえは一そう暑さを感じます。

空に黒雲があらわれたとみているうちに、たちまち空一面黒くなりました。雷がぴかぴか光ったと思ううちに、まもなく耳もはりさける様な雷が天井までふるわせます。そのすさまじい音はいくさのときの大砲の音もこうではないかと思われます。

やがて、あられかと思うような雨がばらばらと降って来て、しばらくの間は向こうも見えません。雨の音の音の外は何も聞こえません。

やがて雨ははたとやみ、雷なども晴れて、雲はしだいになくなつて、ふたたび青い空があらわれました。草や木もせいせいとして、見るさえも涼しい心持ちがします。

ニクシ、スゴイ、

子供の眠り

大正九年度 尋五年

富樫 建造(柳久瀬)

眠っている子供をつくづくと見れば見るほど深い深い感じを起こさせるものである。

眠りは極く善い事であるが、又時によると悪い事でもある。スヤスヤと眠って居るのを見ると、いかにも神々しい感じを持たせるものである。(しかし、それとは逆に)今頃この子供はどんなゆめを見ているかわからないような眠り顔をして居るものもある。寝ぐるしいのを見ると、いかなる悪魔に攻められて居るかと思ふと実に恐ろしい感じをあたえるものである。眠りにこのような違いがあるのは実に面白い。

近況を石川先生に

大正九年度 尋六年

知らせる手紙

成澤太治郎(渡前)

拝啓 先生とお別れ申しましてから、もう三年になりました。今は五月の中旬になりましたから、よい時節になりました。先生はお体が御丈夫でいらつしやるだろうと思ひます。私も丈夫であるけれども、今より一週間前に少し風をひいて学校を休みました。でも今はかわりなくかよつて居ります。

近ごろは時候もよく、農家にとっては大切な時であります。なわしろの苗も日々に長くなりました。今までは枯れ木のようになつて居つた木も青緑の色をして目覚むるばかりあざやかにになりました。

今度学校全体瓦屋根にすることにしました。今は半分以上ふいてあります。

此の節の学校で面白いのは理科実験であります。それに近いうちに修学旅行で湯野浜に行くのです。先ずは近況御報知まで。

五月三日

職員名簿で調べた。どうやら石川興作(余目)らしい。大正二〜七年度の六年間在職している

夏の夕方

大正九年度 尋六年

成澤林治郎(渡前)

夏の夕方は人々や草木に至るまで心善く感じらせると思う。涼しい風がさつと吹いて来ると、二三羽の鳥や一群の雀は自分の住んで居る森や林をさして飛んで行く。

十五夜の月の宮の森の上に半分見えるのや太陽が西の方の山にかくれる所は、一段と夕方の景色を引立てる。青々とした田の上を見れば、いかにも涼しく生き生きしているように思う。汽車の汽笛まで涼しい風につたわつて来て気持ちよく思われる。草の葉などに夜露が下りて光るのも又一段の景色をそえる。

けれども只一つ蚊がぶんぶん音を立てるのは、あたら夕方の景色をきずつけるかと思う。

とても小学校六年生が書いたとは思えない文章ですね。恐れ入りました。 大戸

栗めいげつ

大正十年度 尋四年

齋藤 キヨ(渡前)

昨日は栗めいげつでした。私のうちではもちをついて神様やほとけ様に上げました。それから豆や栗などもゆでました。

私はもちにあずきをつけてみましたが、なかなかうまくつきませんでした。妹もつけてみたいと言つてお母さんにしかられました。妹はもちがすっかりできないうちにつまんで食べていました。

私はお母さんにはんだいを出せと言われたので出したら、妹は出すが早いか食べていました。夕飯がすんでからみんな一しよに豆や栗を食べました。

山口武弥君

大正十年度 尋六年

高橋永三郎(平形)

武弥君は学校からかえると、第一にすぐ勉強する人である。

昨日は日曜日であつたから、僕は武弥君の家に遊びに行つた。その時に武弥君は書き方をならつて居た。武弥君は「永三郎君」とよんで、筆という字がむずかしいから下書きを書いてくれという。私は筆をとつて筆という字を書いてやつた。

そこへ武弥君のお母さんが来て、これは誰が書いたんだという。僕は武弥君が書いたのだといつたら、お母さんはにこにこした顔で「このぐらい書けるならいいが」といつて庭に出ていった。

字をならつた後で、僕と武弥君と外に出て遊んだ。武弥君は竹げたをはいてすべつた。すべつたと思つたすぐたおれた。するとお母さんが来て「こんなにすべる時は竹げたをはくものではないといつた。

武弥君はすぐに家にかえつてくつをはいて来た。武弥君は家の人のいうことをよく聞く人であると思つた。

明日は町小学校陸上競技大会が開催される予定です。選手として参加する五、六年の皆さん！今までの練習を生かして、がんばってください。そして、今までの先輩に負けたくないような活躍をしてくれることを願っています。ただ、どうも天気がよくないようで、延期になる可能性が大きいような気がします。...

それはそれとして、昔も各校が一会場に集い競いあう大会がありました。そこでこの号では、五、六年生への激励の心をこめて、いつもの「わたまへ」ではなく、今から二十五年前に発刊された「百年の歩み」の中から、そうした作文や思い出話を紹介します。

聯合運動会の思い出

昭和五十一年度 四年 成澤 吉広(東渡前)

四月、聯合運動会が開かれた。四年生は初めて連合運動会に出るのだ。

四年生の百メートル競走です。スタートラインにからだ。ピストルが鳴って、選手がいつせいにスタートした。力いっぱい走った。白いゴールが見えた。そして最後の力をふりしぼった。ついに一位になった。

賞品をもらいに行ったら、三年生のとき、成沢先生が山形の大学に行ったときに代わりのきてくれた信田先生が藤島小学校にいた。その信田先生から声をかけられた。一位になったのでよかったと思った。

次に、五、六年生の百メートル競走が始められた。ぼくは渡前小学校の場所にもどり、みんなといっしょにおうえんした。ぼくたちの右側にいる東栄小の「渡前小ぶつとばせ」というかけ声が聞こえた。ぼくたちも、まげずに「東栄小ぶつとばせ」と言い返した。

四年生の六百メートル競走が始まるころだ。スタートラインに走っていった。

ピストルが鳴った。ぼくは、はじめからスピードを上げた。先生がいた。先生から「もつと飛ばせ」と言われた。一周を走り切った。あと一周なので力いっぱい走った。ゴールに思いつ切り走りこんで一位になった。とてもうれしかった。

来年は記録を作りたいと思う。

明日走る五年生の息子よ。奮起せよ！ 大戸

次からは、大人になってからの思い出話です。子どもの頃の作文ではありません。あしからず...

郡大会でも大会新記録

昭和三十三年卒業 高橋 一郎(和名川)

私達の小学校時代は、児童数が六百人を越えるようでした。したがって先生もたくさんいました。こわい先生、やさしい先生、先生一人一人、個性があり、時にはぶんなぐられたりでした。しかし家の人には何も言わず一人一人が反省し、また助け合って小学校生活を送りました。

そんな様子ですので、学校対抗の競技会などは一週間も前より、学校一丸となって練習練習の毎日。家に帰るとぐったりでした。練習も、まるで馬のごとく、それ走れ、やれ走れの連続でした。しかし、今になり私はこの練習が一番よい方法だと思います。身体で覚

えたことは何年たっても忘れないものです。そして大会当日は一人一人が全力を出し切り、勝敗は別に私達と先生が一緒になり、喜び、また涙して次の大会に備えたものです。

小学校六年間で一番の思い出は、六年の時の入学式の次の日より七月中旬の郡大会まで、一日の休みもなく練習したことです。

四人がライバルであることも幸いし、四百メートルリレーでは、光ヶ丘大会第三位、町大会は大会新で第一位、郡大会も大会新で一位となり「渡前小強し」と言われたものです。

これも先輩が築いた伝統ある渡前小学校の意気が受けつがれてきたからでした。これからもこの意気を後輩にひきつぎ、伝統ある渡前小学校を続けられることを祈ります。

聯合運動会のこと

昭和四十四年度卒業 渡部 さわ(西渡前)

桜並木の学舎を後にしてから、もう八年もたちますが、臉を閉じると、あの頃の思い出が鮮やかによみがえります。

眠ったふりをするのに苦勞した修学旅行、酷寒の中行なわれた寒稽古、毎年同じで、卒業するころまではそらんずることができた「在校生のことば」など、お話ししたいことはたくさんあるのですが、連合運動会のことを少しお話ししてみようと思います。

今でもそうだと思いますが、深緑の香る侯に毎年町営グラウンドで行なわれる連合運動会は、私たちの楽しみにのひとつでした。何日も前から一生懸命に練習をして、その日に備えた私たちは、籠から放たれたひよっ子のようにピーピーさえずりながら、藤島までの道を列をなして歩いたものです。そしてグラウンドに着くや否や、赤白の段だら模様の特巻きをして、カモシカのように軽やかに競走馬のように走り回りました。

私が六年生の時などは、運動会の最中に、十勝沖地震という大きな地震が起きたのですけれど、走っている人はそれに気づかぬほど一生懸命でした。

そして日が傾く頃になると、仲良しになった他校の友だちとの別れを惜しみながら、それぞれの母校へと帰って行ったものです。

小学校時代、人間には健康が最も大切だと教えていただいたような気がします。どうかこの良き伝統がいつまでも続き、たくましい渡前健児がたくさん巣立ってゆかれますように。

私の身体

大正十年度 尋六年
滝澤喜久治(新屋敷)

私はいったい身体が悪いので、毎年のように湯治に行く。しかし、あまり身体は丈夫にならない。朝夕わすれず毎日運動をやるが、やはり丈夫にならないのでつくづく残念に思う。

毎日通学しては居るが、私の現在はやはり身体が弱いので学校にきてもいっこう学問に身が入らない。私は日夜その事を残念に思っている。

私はこのような身であるから、将来どういいう仕事をしたいものかさっぱりわかりません。

病氣見舞いの文

大正十年度 尋六年
丸山 安治(上藤島)

先頃より君は耳の病氣であるということを知りました。耳の病氣はとりわけ苦しいものだそうですが、友だちのお話によれば、大分はれて物も食べられないといふほどだそうですが、此の頃の模様はどうですか。

何の病氣も養生が一番大切ですから、学校の方は何も心配しないで薬をつけて早くなおるようにしなさい。これからだんだんすずしくなりますから、耳さえよくなればずんずんもとの通りに丈夫になりますよ。

台湾

大正十年度 尋六年
松浦こたけ(大半田)

台湾は元清国の領土でありましたが、明治二七、八年の戦役の結果、我が国の物になったのであります。形は木の葉の様で、海岸の出入り少ないので良港にとぼしく、中部には南北に走って居る台湾山脈があります。河流はおおむね西と東に流れます。

西部には広い原野があつて、縦貫鉄道が開かれ、交通の利便大いに開けました。

南部は熱帯にぞくしているから気候一般にあつく、植物も内地に比してちがう物が多くあります。

六年生ともなると、様々な種類の作文を書いて作文力のトレーニングをしていたことがわかります。それにしても、この三作品はいずれも大人っぽい感じがしますね。
大戸

私のうち

大正十一年度 尋三年
野口 市松(上藤島)

私のうちは私とねえさんとお父さんお母さんとの四人くらしです。

お父さんは七時にやくばへ行きます。そして夕方の六時ごろかえって来ます。お父さんは本をよむことがたいそうおすきで、ひまさえあれば本を出してよんでいらっしやいます。

お母さんは毎日、人のかみをはさんだり、このけをそつたりしてあげるののでいそがしいから、ねえさんがごはんをたいたりおしるをにたりします。私はみせをはくのがつとめです。

昨日の火事

大正十一年度 尋三年
齋藤 京(渡前)

昨日のぼん、上藤島で火事がありました。夕飯がすんで、私たちがこたつにあたつていた時、表の方で「火事だ、火事だ」とさけぶこえがしたので私はびっくりしました。

うちのガラス戸はうす赤くなりました。うちの人は火をいけて(灰をかけることかな?大戸)みんな外へ出て見ましたが火はだんだんしずまって来ました。

やっとあんしんして、うちへかえってねました。ねてもうちから火事など出さないのでくれと思つて、いつまでもねむられませんでした。

私のてっだい

大正十一年度 尋三年
山口 みね(渡前)

私は学校からかえつて、いつもおかあさんにおてつだいをします。おとうとおんぶしたり、こまづかいに行つてこいというときは「ハイ」といって、ようじをうけて行つて来ます。

いつかおかあさんが「じゅんささまに行つて弟の羽織が出来たかきいてこい。もし出来たら持つて来い」とおっしゃいますから行きました。出来ていましたから、持つて来ておかあさんにわたしました。

おかあさんは、すぐそれを弟にきせて見ました。かわいいのでみんなよろこびました。

「時」すずめ

大正十一年度 尋三年
齋藤 茂代(渡前)

すずめがちゅんちゅん ないている

おもしろくてなくのか すずめちゃん

それとおおながか いたいのか

おなががいたくて なくのなら

さっさとおいしやに みてもらえ。

てふてふ

大正十一年度 尋四年
城戸 しげ(幕野内)

私はてふてふ(ちようちよ)です。

私の小さい時は、女の子も男の子もいやな毛虫だと言つて、にげてしましました。それから間もなくさなぎにかわつて、何も食べずに居ましたが、だんだん羽がはえて、てふてふとなりました。

私は花の咲くのを待つて居りました。今は色々な花のまつ盛りです。私は面白くてたまりません。毎日、花の上をひらひら飛んで歩きます。おいしいごちそうもたくさん食べられます。

私には羽がありますから、高い所でも飛ぶことが出来ます。それで、そんなに恐ろしい敵もありませんが知らないでくものすにくつついたりすると困ります。それはだいいじな羽が折れるからです。

今は「こわい」といつて逃げていつた女の子も男の子も、すっかりわすれてきれいなてふてふだといつて見ます。私もそんなことはわすれて、ひらひら元氣よくとびまわります。子供等はなおよろこんで見ます。

蚕

大正十一年度 尋五年

宮崎 東龍(渡前)

僕の家には蚕がたくさんいる。もう二回皮をぬいで大分大きくなった。おばあさんは毎日風が吹いても桑の葉を取って来て食べさせる。

おばあさんが下をかえた後で、僕が何気なくそこへ行つて見ると、蚕がたくさんすてられて居た。僕は「おやおや、おばあさんは目が見えないのか。こんなにして」と思つて折り箱をもつて来て、紙をしいて蚕をひろい、桑の葉をはしてひろげて食べさせた。

ひろつた時あんなに小さかつたのが、今では大それた大きくなった。まゆを作つたらどんなのが出来るだろう。お父さんは「この蚕から一升も出るだろう」とおっしゃつた。僕は、早くまゆがつくられるのを楽しみにして待つてゐる。

私の雛(ひな)

大正十一年度 尋五年

佐藤 吉治(和名川)

家の人が夜、外でおふるに入つていた時のことでした。今年生まれた鶏が、やつと「こけこっこう」とうたうようになったのです。

その時、まだ朝にならないうちに、なぜないたのだらうと、僕は不思議に思つて人に聞いたたら「大ぜいの人が話したり、笑つたりしたから朝になつたと思つてないたのでしよう」と言いました。また他の人に聞いてみたら「ひよこがこけこっこうとうたえるようになったので、面白がつてうたつたのでしよう」と言つたので、みんなが大笑いでした。

夕立

大正十一年度 尋五年

齋藤 憲一(渡前)

僕が外で遊んでいると、東の空が次第にくらくなつて来ました。そして見て見ている間に頭の上からぱたぱたと大つぶの雨がふつて来たと思つたら、ぴかっと光つた間もなくごろごろなり出しました。そして二、三度なるうちの田に居た人々は走つて家に逃げて来る。まるで戦場のようなでした。

僕も家にひっこんだ。少しすぎたら止んだようだから僕は又外に出て見ると、あとはもう静かでした。しかし田の方を見ても誰もいませんでした。涼しい風がさつと吹き渡つて来た。

藤島から酒田まで

大正十一年度 尋五年

佐藤 小菊(幕野内)

八月十七日に、お父さんと二人で藤島駅から酒田行き汽車に乗つた。

藤島駅を出ると、左に平形のお寺が近く見え、少し進むと狩川が遠く右の方に見えました。広々とした田んぼの稲のほは、吹く風にそよそよと動いて居ます。余目駅に着いた時、お敏さんとキヨさんと京さんがお母さんにつれられてプラットホームに立つて居りました。「お敏さん」とよんだら、きれいな顔をしてここにこ笑いました。そのうち汽車は又走り出しました。広い野原をすぎると大きな川に長い鉄橋がかけてあ

りました。砂越をすぎると、今度は酒田が近くなるのでうれしくてうれしくてたまりませんでした。

お父さんと色々話して居るうちに「酒田、酒田」と言う声が始まるから、驚いて外を見ると、もう汽車は酒田駅についているのでした。

お墓まいり

大正十一年度 尋五年

百瀬たけゑ(新屋敷)

八月の十三日から二十日まではお盆であつた。十三日には、おばあさんと私と妹と弟と三つになる子供と五人づれでお墓まいりをしました。おばあさんは三つになる子をつれて行くので私たちと一しよに歩けないから、私たちは三人で一足先に行きました。

墓について一番入口にある石とうを見たら「陸軍兵長・南利作」と書いてありました。これは兵隊に行つて死んだ人だとすぐに思いました。

そのうちにおばあさんが来ましたから「この村に兵隊に行つて死んだ人がありますか」ときいたら「あああります」と言つて、其の人のお話をして下さいました。それから奥にあるうちのお墓を拜んで帰つて来ましたが、と中で梅枝さんたちとあいました。うちに帰つてから、お墓にあげた餅をたべてあそびに出ました。

加茂の遠足

大正十一年度 尋六年

菅原徳之助(新屋敷)

十一月十九日。今日は天気もよし。遠足にもよい日だと思つてガラス窓より外を見ましたら、なんと雪が降つていた。此れは大変と思つて、便所に行つてあきらめながら又戸を開けてみたら、それはそれはまったく違つて、月が気持ちよさそうに光を送つていた。それで気持ちよく家の中に入つて行つた。そうして、そのことを家の人に話したら笑われた。

それからさつさと支度をして出かけた。僕は少し遅れて、大山に近い所のお宮でやつとみんなに追いついた。追いついたと思つたら、そこで朝食を食べるのでした。

少したつてから、又大山に向かつて出発した。そうしてこわい山道をがまんして歩いた。よほど行くと、面白そうなずいどう(トンネル)があつた。それをくぐり、又だんだん行くと加茂の海岸がせんと見えて来た。僕はいつそう嬉しくなつて来て、続け様に歩いた。そのうち加茂に着いた。午前九時半頃でした。

岩渡りをしてみたり魚をとらえてみたりして遊んでから昼のご飯を食べました。ご飯を食べてから五人の友達と一しよに北に向かつて出かけた。

そのうちに「海に落ちた」という声がしげんと耳に聞こえた。だれが落ちたろうと思つて行つてみたら、僕達の級の生徒であつた。そこで着物や色々な物を見んな薪火にほして居るうち「集まれ」がかかつた。

もどりは様々に物を考えながら行つた。すると、海に落ちた者のことを夢の中で思い出したようになり、あの時はみぞけなかつたと思つて、しらすしらす歩きながら大山の停車場へ到着した。

武道大会

大正十一年度 尋六年
阿部 市郎(上藤島)

武道大会は去る十二月六日の日で、私も出ました。朝、学校にくると準備がととのつていました。それからだんだん始まると、私の番がきました。

私はさっそく道具をつけて一生懸命になつてたたかいました。そして首尾よく勝ちました。私はうれしくてたまりませんでした。そして道具をはずして着物をきて、ほうびをもらいに行きました。胸をおどらせながらもらつてきました。

まもなく昼になりましたので、ご飯を食べて又やりました。

その結果、渡前が勝ちましたのでうれしくてうれしくてたまりませんでした。

ちよつと説明不足かな・・・とにかく、昔から渡前は剣道が強かつたようですね。 大戸

夕べ

大正十一年度 尋六年
齋藤とめの(渡前)

夕べは非常に涼しい風が吹いてよい心持ちでした。私が家の前をながめながらあるいてみると、風がそよそよと吹いてきました。私はこんな涼しい風はどこから吹いてくるのでしょうかと思ひました。風は私の身を切つて隣の家へとんで行きます。なんべんもなんべんもあたらしい風が吹きとんで行きます。

私は家の前をつくづくながめながら、馬が物を食べているのに気がつきました。馬は草をうまそうに音を立てて食べていました。

それからおかあさんと二人でのそりのそりと歩きながら家の中に入りました。その時はちょうど、蛙の音が少しばかり聞こえていました。

それからよほどたつと九時頃になつたので、みんなお休みにまりました。その時、拍子木の音がちかちかと聞こえてきて、私の家を通つて、隣の家の方へ行きました。

秋の空

大正十一年度 尋六年
成澤おとく(渡前)

秋の空は雲一つなく晴れて、空のまん中にきらきら光る太陽ただ一つ。そうして、その太陽は人々の背中はやけこがすほど一生けんめい照らしはたらいて、夕暮にはずぼんと暮れる。

みんな夕飯をすまして涼みおるうちに、太陽のかわりにお月さんがにこにこして出て来ます。

お月さんは、いつでもにこにこして、一番ににこにくと、あまりににこにこしているのです。そばに銀の砂をまいたようにびかびか光らせて、お星さまがたくさん出てきます。ほんとうに秋の空は、見るからに気持ちよさそうです。

ようねんクラブ

大正十二年度 尋三年
齋藤 増雄(渡前)

私は手向のおじさんからようねんクラブをいただきました。その本にはさまざまのおもしろいことがたくさんありました。中でも一ばんおもしろくかなしかったのはちゅうげんかろう(大戸)のお話でした。私は手向のおじさんにおれいのはがきをやりました。

ある日、おじさんが町へ行つたとき、私におみやげだといってようねんクラブの一月ごうをかつてきてくれました。それにはすぐろくもついていました。

この間、おじさんからはがきがきて、三月ごうもおくといいよこしました。

私は今からたのしみにしてまっています。

遠足

大正十二年度 尋三年
成澤 鉄作(渡前)

この間、私共は先生につれられて羽黒に遠足に行きました。朝は天気のもようがわるいようでしたが、ひるころになるとだんだんよいお天気になってきました。私共は柳久瀬をこえ、いずみにいきました。それから松原の坂道をとつて手向に行きました。仁王様のところまでちよつとやすんで又よほどあるきました。羽黒の坂道をあがつて、五重のとうのあるところではおんをたべて、はらい川のあたりでしばらくあそんでかえりました。かえりがけに松原でやすんで赤い実のなつたものをとつてうちにみやげにしました。

私がうちにかえつたのは四時ごろでした。

四年生になつてから

大正十二年度 尋四年
山口みどり(平形)

私は四月一日から四年生になつて渡前小学校に行きました。友だちがたくさん居て大そううれしかったです。そうして友だちと一しょに遊んでるうちに始まつた。

西たいそうばに行つて校長先生のお話がすんでから「右むけ」をかけられて教室に入り、富樫先生のお話をきいてからかえりました。

四年生になつてからは、分教場よりたくさん先生の居て大そうおもしろい。

四月八日は太田先生がかわりました。太田先生がお話する時は涙を流して、本当になくありました。

天神様のまつり

大正十二年度 尋四年
丸山 とめ(上藤島)

私は、まさ子さんと天神まつりに行きました。町に行くとはげものがたくさん居ておどつたりして居ました。

私たちはお宮に行つてさんけいしてから、かるわざの所に行つてみました。中ではかねやたいこの音がして大そうにぎやかでした。

でも、私たちはそれを見ないでかえりました。

明日はいよいよ学習発表会です。子ども達は張り切っています。観客が多いと盛り上がり、子ども達はさらに張り切ってがんばります。お忙しい中とは存じますが、是非ともご来場下さいますようお願いいたします。

町におつかい

大正十二年度 尋五年

佐藤 清一(大半田)

昨日、僕は学校から帰ってから、大宝寺の本間與七さんという家に、えんどう(豆)を持っておつかいに行きました。三川橋をこえ、西三川橋もこえた時、なんとなく僕ははずかしくなつて、もう、そればかり思つて歩かれないようでありました。

本間與七という家は綿屋です。綿屋の戸の口に入ると店には誰も居ませんでした。ぼくが「ね工」というと、あつちの方から「はい」といつて出てきた人がありました。それは僕のうちからおよめに行った人でありました。

僕が「えんどうを持って来ました」というと「おおそれはごちそう様」といつて、又奥へ行きました。僕は何しに行くのだろうと思つて待つていると、まもなく出て来て、うちわを一本くれました。僕はいたたいた。「遊んでいきなさい」といわれましたが「おそくなるとおばあさんがまつて居るから、まず行きます」といつと、「一寸待つて下さい」といつました。

僕が待つていると、錢三十錢と西洋紙三帖を僕にくれました。僕はその錢でちよ金しようと思ひます。

あ〜くちかた

大正十二年度 尋五年

梅津 文雄(柳久瀬)

或る日、僕が遊んでいると、学校の壁に何鳥だかつきあつて下に落ちた。僕は其の鳥を見て目が見えない鳥かと思つて、そつと鳥を捕りに行つたら、ぱつと飛んで行きました。それを追つかけて行つて見ると、菜種の中に入つてしまいました。

僕は菜種あたりをまわつてみました。そのうちに鳥はいつの間にか橋のらんかんに止まつていました。又追いかけて、今度はもう鳥の後に近づくと、できませんでした。そつと手を出して、もう一分ほど鳥の尾をつかまえようとした其の時、鳥はぱつと飛んで林の中へはいりました。

僕は、其の帰り道、それこそくやくやくやくと何ともいふことが出来ませんでした。今更に思ひ出すことが出来ます。

ざっしを

大正十二年度 尋五年

もちつた時の弟

城戸 しげ(幕野内)

此の頃、弟が隣の家からも太郎の話などが書いてある非常におもしろいざっしをいただきました。其の時、弟はうれしがつて、ざっしをだきしめて外へとび出しました。

私は「どこへ行くの」ききますと、弟はそんな事にこたえもせず、一もくさんに表の方へ走つて行きました。そして、しばらくたつと又ざっしを持って、ここにこ笑いながら家に入つて来ましたので「どこへ行って来ました」ときくと、じまんそうに「お友だちの所へ行って、見せてきたんだよ」といつて大いばり

した。そして、どこからかたたくさんのざっしを持ち出して来て一さつずつくらべていました。が「やっぱり此のざっしは一番よい。だいにしておこう」といつてじつと其のざっしを見つめて居たが、ふと「金太郎の事も書いてあるよ。となりのお母さんはほんとによい人だ」とほめながら、はこの中にしまいました。まもなく妹の友だちが遊びに来ましたので、さっきのざっしをとり出して「これを見てごらん。おもしろいよ」と、見(たく)ないというのにもかまわずに、むりにすすめて見せました。

それから後は、誰が来ても一番早く見せます。そして「これは金太郎。これはもも太郎です」とおしえるので、私どもがおかしくつて笑うとおこります。そして見せおわるといたましそうちにしまいます。

弟は大そうざっしを見るのが好きなので、私どもが学校からかえると、自分は字がよめないので私どもにやませます。もしもよまないと大そうおこります。

弟は、ざっしをもらった時は十日ぐらひは大せつにしています。あとはどこにでもなげておきます。いつかもなげておいたので、「しまいなさい」といつと「いやだ」といつので「それなら、こんどから一さつも買つて上げないぞ」といつたら「しまうから、こんどはたくさん買って下さい」といつて、さつさとしましました。

此の頃の夕方

大正十二年度 尋五年

今野 米子(新屋敷)

学校からかえると夕方近くなつた。お母さんが使いにいつてこいというので家を出た。村はずれの橋の上で西を見ると、真つ赤になつてほんとに美しかった。

それから藤島まで行つて、かえりはこの家でも電灯がガラスごしに見えた。停車場の電灯もいくつもならんで大そうきれいであつた。

小川の水も清くすんでさらさら音を立てて流れて行く。ふみ切りの所まで来たとき、どこからともなく、かねの音がカアンカアンときこえて来た。あたりはもうまっ暗になつた。

これからのたのしみ

大正十二年度 尋五年

小関よしゑ(荒俣)

冬になつたので雪もこんなにたまりました。これからは今よりも、ますます寒くなるのです。そうして、もう二週間もなればお正月が来ます。

私たちの村では昨夜おとしやで、私も行きました。おとしやは、前からのたのしみにして居たのですが、それもすぎましたし、これから来るお正月はほんとうにたのしみです。

お正月が来たら、私は十三になります。雪もにわかにたまりません。たのしいたのしいお正月よ。私はお正月になれば正月れいに行きます。

長畑につくまで

大正十四年度 尋六年
齋藤 於敏 (渡前)

藤島の停車場で親類の人たちといっしょに汽車にのった。汽車は青田の中を走って、やがて余目の停車場につきました。去年もあそびに行つたので、たいていは道がわかりましたが、二つも村をぬけて行くのでわからないところもありました。

まがりかどでできくので(間違えて一周してしまい、また)同じ人にきいたらわらわれるだろうなどといつて笑いました。野原をこえ、また村にはいつてきくのでおかしくてたまりませんでした。

道をきくたびに、ていねいにおしえてくれる人もあれば、笑っておしえてくれない人もございました。また行つて、墓のわきや酒屋の前やこぎれいな家の前やきたない家の前などを通つて、やがてきれいな小川の傍を通つて、やっと長畑の家につききました。

妹

大正十四年度 尋六年
山口 豊恵 (平形)

私は昨日、妹と田に行つて稲はこびをしました。少したつと、妹はあきたとみえて「家へかえる」といつて出かけようとなりました。

お母さんはそれを見て「一人で行くといたたちが出て来るよ」といつたので、妹は「そんなら一しょに行こう」といつて、また一生けんめいにはこびました。

するとお父さんが「稲をたばねてみる」というから「はい」といつてたばねましたが、妹は馬のりになつてたばねたので、みんな大笑いしました。

おひるの時、みんなそろつてご飯をたべて居ると、妹が「田でたべると、おまんまうまい」といつたのでお母さんが「そうだから行くな(家に帰るな)」といつたのだ」といいました。

お父さんの病氣

大正十四年度 尋六年
菅原ゆきゑ (新屋敷)

うちのお父さんは、此の頃にわかにご病氣にかかられて、おじさんの家にねて居ます。

うちでかかられたのならよいけれど、よそでかかられたのだから家に来ることも出来ない。また、毎日よその世話になつて居るので心配でたまりません。

「今頃どうしているだろう。うちの事を心配して居るだろう」などと思うとじつとして居られませんで、お母さんに聞いたら「今日行つて見て来なさい。雨ふりなら私も行くけれども、天氣がよいと行かれないから、お前が行つて見て来なさい」といいました。

それで私は、学校がひけたらすぐ行こうと思つて居ます。

学校の二階から見た

大正十四年度 尋六年
富樫 武男 (幕野内)

秋の景色
草木は大そう色づきました。なしの木は葉が落ちて

なくなりました。そうして、色々の葉の色が、黒いほどこい緑の葉に黄色の葉がはさまつて美しく見えます。山も、高い山には雪がふつて見えます。もう雪のじせつになりました。家々ではかこいをし始めました。松の木は元氣そうに枝ぶりをよくして生えています。酒屋の煙突からはむくむくとけむりが出て居ます。柿の木には真つ赤にじゅくした柿が見えます。秋の景色は大そうきれいです。

家の犬

大正十五年度 尋三年
阿部 秀夫 (上藤島)

家の犬はまいばん夜中頃になるとほえます。少しげたのおとを高く歩くとほえます。

僕が学校からかえると、うら門までむかえにきて、しつぽをふつて面白がつて手をなめますので、僕は犬をはたけの方までぼつて、家まで走つて行つてごはんをくれます。犬はそれを戸ノ口でまつています。ごはんをやるのと面白がつてしつぽをふりながらたべます。僕がこやの中あたりへかくれて呼ぶと、こやの中へはいつて、よくたずねないで(さがさないで)家のうしろへ行つてたずねます。また呼ぶと、お庭へ来て四方を見まわります。ほんとに家の犬はかわいい犬であります。

春

大正十五年度 尋三年
小関 春美 (荒俣)

今はもう春の中ごろになりましたので雪もたいいていきえました。(でも)このごろ二、三日はちらちらと雨も降りましたので庭はみんなぬれてしまいました。

雨がやむと、女の子はまりをついたり、男の子はこまをめぐしたりして、おもしろく遊んでいます。春はあたたかく、これからさきになると、うめや桜や其の外いろいろの花が咲きます。

春は寒くもなくあつくもなく、日は長く、私達の遊ぶ一番良い時です。

おそろしかった事

大正十五年度 尋四年
本間八重子 (平形)

日曜日の朝ごはんをすぎてから、私と妹は二人で藤島の油揚げ屋に行きました。油揚げを二枚買つてかえる時、その(油揚げ屋の)となりのうちの犬が来て、私のうしろについて来ました。

妹はうしろむきながら泣きそうな顔をして私のそばにいます。妹は泣くし、犬は私をかじろうとするように私たちのうしろについてきます。

そのうち犬が私たちにほえました。そのほえるすがたは、まるで私たちをかじろうとするようでした。その時ほどおそろしいと思つたことはありません。

現渡前小学校学区の方の作文が少なくなってきました。今後は平形・新屋敷が多くなります。

いなあげ

大正十五年度 尋三年
長南 俊治(平形)

此のころは、どこのうちでもいなかりはとうに出来てしまつて、昨日あたりからいなあげがはじまつた。昨日はお天気もよく、その上、風もあるので、いなあげをするには大へんよいお天気であつた。昨日はちよつどお休みなので、私はいもうとをつれて遊びに出た。どこのうちでのいなあげで、中々いそがしそつであつた。いねを馬車に山のようにつけてはこんでくるのもあれば、馬につけて首のすずを「サンゴサンゴ」と音させて、げんきよく運んで来るのもあり、人が背中にしょつて「ヨイシヨイシヨ」と運んでいるのもあつた。

私のうちではおとうさんが馬で運び、大きい兄さんは荷車で運び、その外はしょつて運んだ。

今日はだんだん天気がよくなつて来たから、夕方まではいなあげが出来るだろう。いなあげはいそがしいものだから、いなあげが出来たら、うちの人はどんなにゆつくりするだろう。

春の景色

大正十五年度 尋四年
成澤 實(荒俣)

春はたいへん景色がよいので、おもてであそぶにはあつぱれです。

春になつたから、遠足にももうつれて行くんだらうと思ひます。暖かで、いくらあそんでもよくなりました。野原は広々としています。木の葉はさまざまの色になつています。

やつぱり春は景色がよい。梅の花や桜の花がこれから咲きます。

うめの花

大正十五年度 尋四年
渡部 伝治(渡前)

うめの花はたいそうきれいです。私はうめの花がたいそう好きです。私がうめの花が咲いたか見にいきますと、一本の木に咲いていました。ほかの木には少しばかり咲いていました。

うちに行つて、おかあさんに「なぜ一本の木に咲いて、もう一本の木には咲かないでしょう」というと、おかあさんは「あれはずつとおそく咲くのですヨ」とおっしゃいました。

母の病氣

大正十五年度 尋四年
佐藤おい己(大半田)

私のうちのおかあさんは、去年の九月ごろから病氣で床にやすんでおられます。そしてだんだん病氣がわらくなつて、今はもう(一人で)ねおきすることも出来ません。そうして、ごはんをたべる時もねたままでたべます。

私が学校からかえると、おかあさんが毎日「今かえつたか」とおききになります。そして私にくすりをのませてくれといひます。私はのませてやりませう。

私は病氣になつたおかあさんに心配をかけまいと思つています。

遠足

大正十五年度 尋五年
土田 二郎(柳久瀬)

昨日は羽黒登山をして、たいそう面白かつた。

十文字を通つて松原に行きました。大きな松が沢山しげつていました。此所には弁慶が金峰山から羽黒山まで投げた大石がありました。黄金堂には仁王様がありました。そこでは休まないで行きました。

手向には宿屋、役場、郵便局、自転車屋などいろいろありました。松や杉をさした門もありました。わきには牡牛がいました。此の牛は火事が出ないように守る牛だそうです。また少し行くと五重の塔がありました。そこから石段を上つて行くと汽車がはしるのが小さく見えました。

だんだん行くとこんげ様(権現様かな)という大きなお宮がありました。からじしが両わきにすわつていました。上には真黒な力士が四人にらんでいました。先生方と生徒一同は神々しく押しました。

校長先生が自由に見てもよいとおっしゃいましたので見ました。中には天狗に面が二つありました。丸い太い柱がありました。

神主が僕らにどこだといふので渡前だといつたら、渡前はどちらの方だといふので、高二の生徒が藤島より南の方といひました。神主は何里くらいだといふので、口々に二里、三里といひました。(すると)「これからまた帰るのか。えらいな」とほめました。

ごはんを食べてもよいと言ふので食べました。たいそううまかつた。すんでから、僕らは蜂子王のはかに行つて頭を地につけて押しました。よほどあそぶと集まれといふので集まりました。

石段を下りて門がある所で休みました。大きい生徒が牛をいじめました。黄金堂まで歩いて行くと、先生が自由に帰つてもよいといふので急いで帰りました。家に着いたが日が暮れませんでした。ごはんを食べべから家の人に話をして床につきました。

豆名月

大正十五年度 尋六年
田村みどり(幕野内)

私のうちでは夕べ豆名月をしました。夕方になるとおぼあさんは机をえんがわに出して「こんなに曇つているから月が出ないかもしれません」といつて、さつまいも、豆、なし、ぶどう等をたくさんもつて来て机の上のせました。すると、あかちゃんも台所から走つて来て面白がつて手をたたいていました。おぼあさんは手をたたいておがみしました。すると、あかちゃんも手をたたいておがみしました。兄さんにほめられたので、また台所に行つてしましました。

私たちもおがんでごはんを食べました。ごはんがすんで、私たちが茶の間で遊んでいますと、おぼあさんが机をえんがわからもつて来ました。豆やさつまいもを腹いっぱい食べました。

お母さんが私たちに「そんなに食べるとお腹をこわしますよ」と言ひました。それで私がたなに入れようとしたら、あかちゃんは「入れるな」と言つて泣きました。それから少し遊んでねむりにつきました。

雛

大正十五年 尋六年 宮樫 勇作 (柳久瀬)

ひよこは、かわいらしいものである。小さな黄色なあしで、ちょこちょこ歩く。

私が毎日世話をしているので、どのひよこもみなかわいらしい。私が餌をやると私にとびつく。そして餌をまくと声を出さないうで食べている。

そのひよこが三羽死んだ。死んではかなしかった。親どりはこまかい土の上にしゃがまって、何か一生懸命にもがいている。

今日

大正十五年 尋六年 佐藤 武 (荒俣)

今日は大へん寒い。此の頃までは春の如く暖かい日ばかり続いてきたが、今日は急に寒くなった。

外を見ると、松の木や杉の木などは寒そうに風にゆられてる。電柱や葉のない木はひゅうひゅうと寒そうにうなっている。

学校にくる小さい生徒は、大そう難儀である。今日はほんとうに寒い。

私は火鉢である

大正十五年 尋六年 佐藤 武 (荒俣)

私は鍋火鉢です。夏ごろに学校のおしれにおかれまして。毎年十二月になるとだされ火をおかれます。今、六年男生(このように書いてありました。男子生徒という意味でこのように使われていたのではないだろうか)と想像しました。大戸)教室にも二つあります。私は、その中の方にある火鉢です。

私には生徒もあたる先生もあたる。いつか先生がタバコをのんだときもありす。湯をわかすこともある。掃除をする時には、がたがたさせて運びます。

私はみんなが火鉢にいたずらするようなことはみな知っています。

私はもと或る店にあったのが、番頭に学校のどれかにわたされたのです。

私は今はこうしているけれども、これから後はどうなるかわかりません。

晩秋

大正十五年 尋六年 長南はるゑ (平形)

今は晩秋だ。なかなか寒い。昨日今日あたりは、あられがガラガラバラバラとやってきた。しかし、今は風の音ばかりだ。

教室の硝子戸にうちつける風も何かは知らぬが、ガタガタミチミチと、ひとりごとをいっている。田んぼに休みなしに立っている電信柱も、寒いというのかヒュウヒュウ泣いている。葉も落とされ、小枝も枯れはてて、野原に立ちつくす木もさびしそうだ。

また、田んぼを歩く人でさえ「寒い。寒い」といいながら、泣きたいような顔つきで、どんどんどんどんどんどん歩いていく。私もその一人である。

ゆうへのゆめ

昭和二年 尋四年 加藤 金子 (荒俣)

ゆうへのゆめはこわかった。水泳をしていたのでした。平気でだんだん深い方へ行くと、あとはもう何も見えなくなつて、手足は少しも動かなくなつてしまいました。大声で「助けてくれ」と言おうと思つても声が出ません。どうしたらよかろうと思つて居る間にだんだん沈んで行つてしまいました。

すると、向こうの方から私をよぶ声が聞こえました。私に息はだんだん消えていくばかりで、今は助かりそうもない。ああ、だめだと目をつぶると、はつと思つて目をさました。

朝起きてからかがみを見たら、ゆうべ泣いたよう(な顔)でしたから、はずかしかったがお母さんに「ゆうべ泣いたのか」と聞くと「泣いた」と言つて笑われました。

初秋

昭和二年 尋四年 齋藤 豊作 (渡前)

初秋となりました。今まではあつくて、ちつとの間もがまんが出来ず、すぐ友だちと水遊びに行きました。が、こんどはそんなに河に入ることは出来ません。これからだんだんとさむくなるばかりです。

夜になると時々、家のえんの下や草むらのかげでかなしい秋をつげる虫の音がします。その虫の音を聞いて、もう秋が近づいてきたことが頭にうかびます。

夜になつて外に出てみると、空にはさえきつた星がたくさん出て、きもちよくはれ渡り、なんとなくあの広々とした空へ自分も行きたいような時があります。もつともあついたり時とくらべると心がかわつたようになります。

たんぼに出てみれば、黄金色にそまつた稲が重そうに頭を地につけて、つゆをのせています。もう稲刈りも近づいて来ます。それを考えると、ますます秋がふかくなつて来たことが思い浮かんで来ます。

私はあまりあついたり時よりすすしい時節がすきです。このすすしい時によく勉強しようと思ひます。

私の家のふしん

昭和二年 尋五年 田村 糸 (幕野内)

私の家では大きいふしんが始まりました。表と裏を皆コンクリートにするのです。ふしんにやとわかれて来ている人は五人で、左官は六人です。

お父さんがさしずをしたたり、自分もセメントを合わせたりして一生懸命で働くものですから、もう表の方は出来上がりしました。

今は裏の方にかかっています。裏は片付けをしなればなりません。それで二日かかるそうです。

早く(工事を)した店の方は、もう堅くなつて、いくら上がつても跳ねてもつぶれません。

早く裏の方も出来るといいと思ひます。出来たらどんなに良い事でしょう。

* 大正九年、昭和二年までにタイムスリップ

貝拾い

昭和二年度 尋六年
齋藤市之助(渡前)

八月一日の午前中は進級試験もおえて、貝拾いである。我等は先生のさしずによって白山島付近の岩と岩との間を見ると貝がたくさん岩にくいついてあった。僕等はかを見つけて「先生、かにが居る。かにが居る」と言うと、先生よりも早く生徒等が来た。「(その後)後に先生が「見せる、見せる」と言って来た。僕等は岩の中に手を入れて「この畜生にがすものか」と口々に言う。すると(先生に)「そこらから棒持ってこい」と言われた。棒を持って来てやると(その棒を岩の中につっこんで、かにを追った。そして)棒を上げて「ああ、しめだ」と言った。誰かが「余程大きいな」と後の方で言った。ほかにも「かにがいた」という声が所々から聞こえてきた。

後の方で誰かが「いそぎんちやくがいた」と言うから、ふりかえって見ると興一君であった。先生が「いそぎんちやくならさわるな」と申しながら来た。先生が「どこに」と言ってガラス箱を見た。(そして、先生が)「ああ、見つかった。市之助君くぐってみなさい」と言うので(僕は)「どこにいた」(と言うと先生は)「ガラス箱を見た」と申して見せてくれた。

(僕は)「ああ、ここにいる。わかかった」と言って、すぐぐぐった。手をやってとらえたと思うとすぐうき上がった。先生に「とても岩にびっちりくいついてとれない」と言うと、先生は「そうだ。とてもくつつくのが上手なものだ」と言って、その場を立ち去った。ふと見れば、空には真昼の日がきらきらとかがやきわたっている。

「さあ、行こう」と言って宿舎へとむかった。宿舎についてからガラス箱の中を見たら、かに、かい、ひとで、いしもち等いろいろ海の動物がたくさんあった。それから後はご飯を食べた。

汽車の中で

昭和二年度 尋六年
成澤なつ子(渡前)

北海道旅行の一節

汽車には遠くから旅をしてきた人達が多く乗って、その人達はみな居ねむりしていた。

私達もねようとしたが眠られないので、停車場を数えたり、名を讀んだりした。「鏡箱昆布」などと物の名のようなのがいくつもあった。

夜が近づくと海が見えた。海は静かで白帆が浮いていた。白帆は夕日に赤く輝いて綺麗であった。私は写生したいと思ったが、汽車が速いのできれなかった。田に働く人も家に帰り、藁葺(わらぶ)きの家では灯がついた。私も眠った。気がついたらもう函館にっいていた。

風呂場

昭和二年度 尋六年
齋藤 武(渡前)

風呂がまの火は勢いよく煙を立ててもえている。か

まどの口から暗いかまの前に赤々と光がさしている。風呂場の方から話し声が聞こえてくる。朝から吹いていた風はまだやまない。屋根の上にとくさん積もっていた雪がパツとこなのようにとんでいく。

僕は石炭を運んでいた。小さい箱篋(？：大戸)で運ぶのだから、中々はかどらない。雪のまじった石炭は、ちようどごまをつけたにぎりめしのようだ。手が冷たい。ほっぺたが痛い。馬鹿らしくなった。

しばらくすると兄さんが出て来た。僕はすぐに「馬鹿くさいな」と、兄さんに聞こえるように言うと、兄さんは笑いながら「兄さんも運ぼうかな」と言われた僕は急に、今馬鹿くさいと言ったことが悪かったと思

った。兄さんは一番大きな箱篋を持って勢いよく運び始めた。僕も負けないつもりで一生懸命に運んだ。冷たかった手もほっぺたも体も温かくなって来た。間もなく石炭は箱いっぱいになった。

兄さんは箱篋に腰をかけて僕の方を見ながら「ほっぺたが西洋人のように美しくなったなあ。どうだ、馬鹿くさいか」と言った。「いや、馬鹿くさくありません」と、僕は言った。僕は、働くことは大それた事だと思った。

無言の行

昭和二年度 尋六年
齋藤 京(渡前)

私と福代さんと清恵さんとよし子さんの四人で鐘が鳴る迄「無言の行」を始めた。ただし笑う事はよい事にした。

初めは誰も何も言わないで一生懸命綴り方を書いていたが間もなく皆が笑い始めた。そのうちに福代さんが私に「無言の行の綴り方を書きましょう」と口を切ってしまった。すると、よし子さんが「福代さんが口をきいた」と、また言ってしまった。

其れでも未だ私と清恵さんは約束を破りません。清恵さんは口をききたいのでしようか、紙切れに「無言の行をやめましょう」と書いてよこしました。私は「止めます」と書いてやりましたが、福代さんは自分が口をきいてしまったので「止めない」と言いました。

福代さんは私達が口を聞くようにする為、自分が早く口をきいたので「私が一番しゃべりません」と言いました。其の内、鐘が鳴りました。

ものを言わないのは、私と清恵さんでした。今の時間は本当に面白かった。

かみなりさん

昭和二年度 尋三年
成澤鉄四郎(渡前)

かみなりさん かみなりさん
雨の降るたび

どうしてそんなに あばれるの
みんながそれて にげてゆく
ようじをたしにも ゆかれぬ
かくれたお日様 はやくだせ。

お人形

大正九年度 尋二年 成澤 弥市(渡前)

お人形が、私どもの方を向いて先生の机の上に立って居ます。

長い袖の着物を着て、赤いおびをして、リボンをかけて、手はりと(?)さげて居ます。黒々としたかみをさげて、かわいいかおをして居ます。まゆ毛は黒くて、口は小さくて、目はぼつちりして、大そうかわいらしいお人形さんです。

着物は先生がおこしらえになったのだそうです。

ある晩のゆめ

大正九年度 尋三年 齋藤 キヨ(渡前)

私が遊んで居る所に米さんと須惠野さんが来て「キヨさん、これから三人で野原に花をつみに行きましよう」と言いました。それで、私はおかあさんから手かごをもらって三人で行きました。そこには赤、青、紫や色々の花が咲いて居ました。そこで三人で様々な花をつみました。

夕方になって須惠野さんが「米さん、もうくらくなりますから、早く帰りましよう」と申しました。そして、半分も来たと思う頃に日はくれてしまいました。

その時私が「もう、うちもあそこに見えますから、急いで行きましよう」と言ったかと思うと、そこにはにくらしい様な男の人が立っていて「お前たちはどこの者だ」と言いました。

私は「あそこに見える家の人です」と言うと、その人は「それでは一しよに行こう」と言って、私共三人を引っぱる様にして歩くのでした。

まもなく家の前に来ました。その時、その恐ろしい様な人が「お前たちの家はここではないのか」と言っていて、私共を門の前に置いて行きました。私共はほつとして門の中にはいって行って、大きな声で、ただいまと言いましたら、其の声に目がさめました。

旧師に送る手紙

大正九年度 尋五年 小林 栄一(上藤島)

このごろはお手紙をいただきまして、まことにありがとうございます。

先生は御丈夫でいらつしやいますか。私は大丈夫で学校に通っていますからご安心ください。

今度はいよいよ秋になりました。先生はこの秋に一生けんめい大学で御勉強のことと思えます。

私どもは一年の間、先生からいろいろお世話になりました。まことにありがとうございます。

北海道には寒くはありませんか。先生は風邪をひかないようになしてください。

私もからだを丈夫にして勉強して、先生の御恩をかえそうと考えて居ます。 さようなら

★ 北海道の大学・・・この当時は北海道帝国大学しかなく、合格したのかな? (大ネ)

五年生になってから

大正九年度 尋五年 田村こよし(細谷)

いよいよ四年生の三学期のしけんも終えて、四月一日からあらためて五年生になりました。

私は四年生の時から行いが悪かったから、五年生になつてからは悪い心持ちも直して、よい人間になつていきたいと思つて居ります。先生から今までしかられたのが、心にしみじみおぼえて居ります。

今度五年生になるわけですが、四年生の三学期に九等という成績をいただきまして大そう面白くあつて又、うち(の人)からもほめられましたから、五年生になつてからは一そう勉強して六年生に上がろうと思つて居ります。

私はうちの人が早くねる度に電灯をもつて勉強します。もう少し勉強すると八等になるのだ。それがくやしい。今度(からは、もっと)一心に学問しまししよう。今度、五年生になつてから一日もおさらいをしないことはありません。そしてひまがあれば家の手伝いにほねを折つて居ます。

上野先生に上げる手紙

大正九年度 尋二年 松浦源三郎(大半田)

上野先生はおかわりございませんか。私は丈夫で一日も休まないように努めて居ます。

今の時候はすごくよくて、勉強するのに最も適して居ます。又、近いうちに海の方に旅行につれて行くそうです。其の時は、うに、なまこなどを研究するのが何よりのたのしみです。

近頃の村の変わりは、御宮の御屋敷にながどができ、御宮の木はすげなくと変わり、苗代は緑色と変わつた。村はずれの御宮は北にと、村の変化はひとかたならないのでございます。

学校では屋根が瓦となり、先生は四、五人新たにお變わりにならした。校長先生は大沼先生と變わりました。

日数が立てば、また變わりの事もありません。其の時は、あらためて又申し上げます。 さようなら。

夕涼み

大正九年度 尋六年 本間 重恵(平形)

私はうちわを持って、庭の石に腰をかけて涼んだ。見ると、どこの家でも蚊やりの煙を出している。

こうもりは私を中にして、いっしょうけんめいになつてまわっている。

きりぎりすやその他の虫も美しい声を出して鳴いている。

くもは木の枝と木にすをかけて、えをとろうとかまえて居る。せみは一日鳴いてもまだ鳴いている。

広々とした平野には稲がよく茂つて、それに夜露がおりて、きらきらと光っている。

前の小川はさらさらと流れて、月の光をくだいて居る。

尋常科の作品が少なくなってきたので、この号では高等科の作文にしてみました。

発音練習

大正九年度 高一年
佐藤孫九郎(荒俣)

毎日学校に来て、朝の発音練習ほどきらいな物はない。(きらいな人が多いので)発音練習があるか無いかの問題で話をしない朝は無い。

毎朝、まず先生方のそろって居る方を見る。校長先生がおいでになると、あっと声が出る。むちと発音の書物を持って居るのだ。校長先生が先生方に礼をして教壇に立てば、あとはもうあきらめる。さけるほど口をあき息を入れる。

口形練習が一番いやだ。それが終わって文に入るとゆっくりする。毎日同じ事をやっても、私の発音は進歩した所はちつとも無い。それは、いやだいやだと思つて居るからである。時間を費やして、あんなことをするよりも、その時間で国のことの新聞でも聞かせたらよいと毎朝思う。発音をやる先生は一年の土屋先生と二年の土田先生しか無い。僕は発音で気に入わんと思つて教室に入つても気に入わん。

僕は一週間前から当番をまわつて居る。当番になれば朝は体操場に出なくてもよい。ただ教室に居のこつて火の用心でもしたり、机をならべたり、下をはいたりするのだ。僕はそれが大好きだ。今日、僕は実際に当番にあつた。

訛りの矯正教育をやつていたのであろう。今ではテレビがごく自然にそれをやってくれている。それにしても、このような批判的なことを堂々と書いた孫九郎さんもえらいが、それを文集にのせた先生もたいしたものだ。面白い。 大戸

お母さんの居眠り

大正九年度 高一年
佐藤金三郎(大半田)

昨日の晩である。お母さんはつぎ物をしながら、面白ふしで歌を歌つて居る。猫はお母さんのそばでごろごろ気持ちよさそうに眠つて居る。お母さんの歌はなんとなく僕をひきつけるようである。

すこし過ぎると歌が止んだ。見ればお母さんは気持ちよさそうに眠つて居る。

僕は突然「お母さん」とよばつても返事がない。つづけてよぶと、お母さんは気持ち悪げにあつちこつちを見ながら、又つぎ物をはじめた。猫は寝床をかえて又眠つておる。

或る夜

大正九年度 高二年
長南忠治郎(平形)

人は皆寝静まった真夜中頃、天井の鼠の奴等は今こそ我等の世界だと言わぬばかりにガタゴタゴリゴリと騒ぎ出し、はては座敷を走り回る音がする。

僕等の部屋で居眠りをして居た猫は、この物音に目をさまし、ひそかに出て、その鼠をつかまえようと大きな目でねらつて居る。鼠はまだ騒いで居る。猫はヒラリと跳ね出して「ニャー」と一声。座敷は猫と鼠の

戦場となった。暫(しば)らくはチューニャーガタゴトで大騒ぎ。突然「やかましい」とお父さんの一声に猫も鼠も鳴りをしずめた。

部屋に入った猫は、又も布団の上でコクリコクリ眠りはじめた。家の中は、一人住んでいないほど静かになった。座敷の時計はカチンカチンとなつて居る。

思い出の一節

大正九年度 高二年
齋藤 民治(渡前)

思い出せば九年前。僕の家で上へ下への大騒ぎが起きた。その原因は至つて小さい。しかし(原因が)わからぬうちには中々大きいのである。

毎晩家の隅でウーンウーンとうなる様な音がする。それも上であるか下であるかわからない。家中の者は皆恐ろしがって、着物を着て寝て居る。

そのうち、あまり恐ろしいものですから、八卦おきに聞いてみた。八卦おきは「土の中に昔の刀やよろいかぶとが埋まつていて、それが出たくて(うなつて居る)のである」と言う。

翌日、さつそく床をのけて掘つてみたが、何一つとして出てこない。(でも)その晩もウーンウーンという音がする。

近所の人達が僕のうちにきて「きつと、火のあやまりでもあるためであろう」と、様々心配してくれる。そんな事を言われると益々恐ろしくなってくる。

その翌日。誰でしたか、夜学から帰つてきて、炬燵に入つていたら、その時もウーンウーンと音がしたそう。音はたしかに天井の板の上である」と、その人は言った。

父さんと二人で早速はしごを持ってきて天井板を取つてみた。そして、いきなり声を立てて驚いた。

それは鼠の仕事である。鼠が昔の糸車に上つてめぐして居るのである。その車のめぐるときにギーギーと音がする。その音が妙にひびいて、ウーンウーンとうなる様に聞こえたのであつた。

その晩は、一同安心して酒をのんでお祝いをした。そして、その晩からは枕を高くして寝る事ができた。

不思議な力

大正九年度 高一年
山口 良三(平形)

たいていの人が難しいと言ふのは算術である。しかし、僕は算術なんか考えさえすれば出来る物だからそんなに難しくはないが、読み方には閉口してしまふ。

あんなに厚い辞書を書いた人は、どんなに読み方の力があるのだろうか。僕には人間業とは思われない。又文字を作りだした人はどんなであろう。

何事も人の出来る事を出来ないのは、ただ出来ない出来ないからである。

誰も居ない所に居て考えれば出来る事でも、人が大勢集まつてやかましい時には出来ないというような事は、いつもあることである。

一人の時は神様か誰かが助けるものかもしれない。

兎の死

大正九年度 高一年
佐藤金三郎(大半田)

この間まで達者であった僕の兎が死んでしまった。(実は)この前から、箱の中で円くなって座って居るばかりであった。僕は学校から帰って来ると、すぐにこの兎を見たが丈夫そうには見えなかった。

次の朝起きて見たら、昨日よりだんだん苦しそうになって、餌をやっても食おうとはしなかった。ただ少しにおいをかいでみたばかりであった。庭で遊ばせても、ただ軒端のあたりに円く座っておるばかりであった。学校に行っても兎のことばかり考えていた。

学校から帰って行くとすぐ、その兎のいる場所へかけていった。(でも、その時はすでに)兎は眠ったように箱のすみへ座っていた。思わず涙が落ちた。あのかわいい兎が死んでしまった。

箱の中から出して兎の体を見たら、耳は氷のようにつめたく、口びるはむらさき色にかわっていた。その死んだ体を前庭の杉の木の下にほうむって、そこには大きな石をのせておいた。兎の体はいつか土となってしまう。

学校で飼っている兎もこの間亡くなりました。かわいがっていた四年生も金三郎さんと同じように土にうめていました。こうした体験が優しい気持ち育ててくれるのでしょう。 大戸

希望

大正九年度 高一年
富樫 昌一(平形)

僕は今から家にはいたくないと思つて居る。学校を卒業したら他へ出て仕えるつもりです。或いは外国にでも行きたいものだと思つて居る。

中等学校に入れられる身分でもあつたら何もそうは思わなかったが、小学校しか卒業させられない程の身分であるから、とうてい家には居る気がない。

親には心配を掛けるだろうが、どうしてもあの南洋か南米でも行きたいと思つて居る。(たとえ南洋や南米にがだめでも)どうしても外に出て活動しなければならぬと思つて居る。

外国の面白い話などを聞かせられると、ますます行きたい感じが浮かぶ。南洋には面白い話もあるし、排日もない。気候から見ても僕の身には合つて居るらしい。どうかして行きたいものである。

自分が置かれて居る厳しい状況を見つめながらも、負けていないところがすごいですね。 大戸

第五組

大正九年度 高一年
武田 仁蔵(砂塚)

五組には八人居ります。組長は米吉君、副組長は昌一君です。

種々のものを栽培しましたが、人数は多いけれども何を作ってもよく出来たものではありません。それで、五十嵐先生から「大根をよく作って、他の組を驚かせ

てやれ」と言われました。

それから非常に努力しました。草取りをしたり、追肥をしたり幾度となく手入れをしました。すると、大そう大きくなりました。他の組の者にうらやましがられて、桜島(大根)に傷をつけられました。

いよいよ大根つみがきました。分担圃に来て見ると緑したたる深緑色の葉を見せて居ります。八人の者は面白くて大きいやつから一斉に抜きました。

桜島は「大」に入りました。小真木は「小」に入りました。練馬は「中」に入りました。大は十七本、中は三十四本、小は十九本の合計七十本です。

高等一年では第一等です。努力して一等になったのですから面白くてたまりません。この努力を五十嵐先生に見せたい様な気持ちがありました。これを先生に見せたらどんなに喜ぶでしょう。

先生に対する僕の考え

大正九年度 高一年
丸山 正吉(渡前)

先生はいつも僕等に「人はしかられる人でなければならぬ」と言われるが、僕はあまりしかられたことはない。

いつも思うが(先生は)僕を見ぬいた(見離した)のかもしれない。僕が悪いことをしたと思つても先生はちつともしからぬ。先生は僕を将来みこみがないと言ふのかもしれない。

栄吉君や興四郎君などが少しでも悪いことをするとすぐおこるが、僕にはちつともそんなことはない。もし、先生から見ぬかれたとすれば、僕はどうなるかしない。

かわいそうな病人

大正九年度 高二年
齋藤おいの(渡前)

昨日まで元気で遊んで居たうちの寿男は、昨日の夕方から急に腹をやみはじめ、今日は床についている。そして、時々腹がやめるので、朝からお母さんがついて居られる。

私は裁縫をしながら、早く病気がよくなつてくれればよいなどと考えていました。少しの間でもやめないともうこれでよくなつたのか(もしれない)。しかし、そうでないのかもしれない)などと心配して居ました。

しばらくの間お母さんと寿男の声が聞こえないのでどうしたのかと見に行きました。座敷のかやはふわふわと風に動いている。その中で寿夫は心地よさそうにすやすやと眠っている。

私はそのそばに行き雑誌を見ていたが、ただ寿男のことが心配で、雑誌に心が行きません。それで外へ出たら、裏の方で寿男のような小さい子供が三、四人元気よく相撲をとっていました。ああ、うちの寿男も丈夫でいたら、今頃は面白がつて相撲をとっていたであらうと思うと胸がいつぱいになりました。

それからうちに入ったら、又腹がやみだしたとて苦しんでいるから腹をさすつてやりました。ああ、病人はどんなに苦しいことでしょう。

日曜日

大正十年度 尋四年
齋藤 米(渡前)

この間の日曜日に、私がふと目をさますと明るくな
ってしまいました。下女が「みんなごはんすきましたから
早くおきなさい」と言いました。私はあちこち見まわ
しました。すると、ねえさんはまだねていました。
ごはんをすまして、すこしべんきょうしてから弟と
あそんでいました。(すると)おかあさんが「昨日の
ように又縮をしょいなさい」と、私に言いました。
じゅばんの上にはんどりを着て、ぞうりをはいて行
きますと、ねえさんが机の前に向かって「こう、およ
ね早いこと」と言っているきょうをしてみました。
縮をしょいますと縮がぶらさがって、やつこのこと
で(縮をかけるくいの所までかな)来ました。ひとが
二度歩くうち一度しか歩けません。
夕方になると足がちかちかしました。おゆにはいつ
て、ゆっくりとどこにつきましました。

秋になった

大正十年度 尋四年
山口まつを(平形)

寒くなった。今日などは雨が降って学校にくるのも
うちの人が田に行くのも、たいそうなんぎです。
うちのおとうさんやおかあさんは「ああ、昨日も雨
で今日も雨。いやだいやだ。今日休みたい」といつて
いた。

私たちは運動会をまっでいる。昨日校長先生が「あ
す天気であつたら運動会をする」とおっしゃったが、
今日は雨だ。私はあきらめた。

外にたつて西の方を見ると、西の方からだんだん雨
になった。さくらや梅の葉がだんだん赤くなつておち
はじめた。ああ、秋の雨はいやだいやだ。

きびだんご

大正十年度 尋五年
菅原 末治(新屋敷)

四月八日、学校からかえって行くと、うちのおぼあ
さんは三升鍋できびだんごをにている所でした。

僕はきびだんごが何より好きだから「これはよかつ
た。ちょうどよい所に来た」と思った。早く食べた
つて、にるのを待っていられないようでした。あまり
せついたので、おぼあさんから「ししゃかれました。
にてから砂糖あんに入れてもらつてたべました。

どんなにうまかろうと思つて待つていたこのきびだ
んご(ですが)かんじょうより(思つたより)うま
くない。一つ食つてうまくないのにたまげた。うちの
人たちはみな「うまくない。うまくない」といつていた
その日は皆食べあまして次の日までのこつてあつた。
きびだんごの粉に米の粉をたくさん入れすぎたから
であつたそうだ。

きびだんごは、トウモロコシの粉と米の粉をま
せて白玉団子のようにして作る。そして混ぜる割
合が難しい。以上初めて知りました。 大戸

秋思い

大正十年度 尋五年
佐藤 さつ(荒俣)

秋は私どもが、よくもの思いをする時です。それで
私もこの頃から、よくもの思いをしてきました。
私はいつか大変面白くないことを思いました。
これからだんだん寒くなつて、寒い寒い冬になつて
学校にくるにも困るようになることを思い出したので
す。私は自分の体も弱いのに妹も居りますから(去年
までも)大変困りました。

この様に秋というものは、大そう思いのよけいな時
です。

弟

大正十年度 尋五年
齋藤美恵子(渡前)

朝早くから座敷の奥で弟が本を読んでいる。
私は弟の出で来るのをおどしてやろうと思つて、お
ぼあさんの部屋の所にかくれていた。(すると)弟は
平気で、唱歌を歌いながら出て来た。私は(ああ、廊
下の所まで来た)と思つて、ごむまりをたもとから出
して足になげると、弟は驚いてさげんだ。
昨日の弟の驚きは一通りではなかつた。

今日の吹雪

大正十年度 尋六年
小野寺虎太(荒俣)

今日は大へん悪い天気です。
私は昨日から、明日はきつと悪い天気になるだろう
と思つていました。なぜであるかというのと、とびが下
を飛んでいたからです。とびが下を飛ぶと天気が悪い
とは、人がよく言うことですが、私は迷信だと思つて
います。しかし、昨日はあたりました。

今日のごよみをはいでみますと、寒中と書いてあり
ました。私は今朝便所に行きましたが、その時はもう
おそろしい吹雪でありました。学校に来る時などは、
もう風が強くて一寸先も見えませんでした。その時は
みんな寒い顔をしました。学校から帰る時もまた寒い
顔をしなければならぬでしょう。もう今でもこんな
大風です。今日の天気は寒中のしるしだと思ひます。
私は冬になるのがいやでなりません。

稲こき

大正十年度 尋六年
田村弥市郎(細谷)

この頃いつも私は早く起きて稲をこく仕事の手伝い
をします。私が起きるとみんな起きて、それぞれ稲を
こくしたくをしています。
うちの器械は高地式というのですが、私がめくして
おとうさんがこきます。力蔵がつだし(手渡し)役に
なります。ねえさんがまるき(まるきけ?むすびか)役
になつて、朝のうちに五十まるもこきます。

今は私の村の方では大たい器械でこきますから、早
くできるとよろこんでいます。
高地式はせんぶうきもついでいて大そう便利です。

★昔は細谷(現在羽黒町)も学区だったのですね。

平成十五年の最終号です。「愛読ありがとうございます」といっていました。よいお正月をお迎えください。 大戸

私のうちの愛犬

大正十年度 尋六年
弁納おしげ(荒俣)

時は大正十年三月七日生まれの赤色の愛犬は、父が四月四日に近村からもらって来た犬でございます。朝食の時「玉、玉」とよぶと、すぐ飛び起きて尾をふってごはんをまっています。私が「ワン」と言うと、犬も「ワン」と言います。「食べなさい」というと犬は前足を立てて、頭を土の上につけて食べます。

たしか四才の時であった

大正十年度 高一年
佐藤はなゑ(幕野内)

おかあさんが私をつれて伯母さんのうちに行った時であった。おかあさんが私を伯母さんのうちにおいて田に行こうとした時です。私が後え(後追い)をしたので、伯母さんは戸を開めました。私はどんなに泣いたかわからなかった。(でも伯母さんは戸を開けてくれませんでした)この事ばかりは大そう恐ろしかったので、かすかに覚えていきます。(それ以来)伯母さんが用事などで来てうちに寄りますと、私は余りおそれてかくれたものだと言われました。こんな様な伯母さんであったが、一昨年死んだときにはもっと生きていたならばよかったと思つた。

我が幼時

大正十年度 高一年
佐藤 金蔵(大半田)

四、五才の頃である。僕は馬が好きであつたそうである。秋の稲上げの頃に、僕は馬を引きながら先に進んで来た。県道と里道の四つ角で馬車と行き合つた。白色の馬が引いてきた馬車であつた。僕はその馬車にひかれてしまったのである。

僕はいたくてたまらない。血はどうどうと出て来るお父さんははつと思つたものか僕をだき、手ぬぐいでたばねてくれたとはたしかに記憶して居る。それからすぐ医者につれられて行つた。すさまじい台の上にねせられて、足を洗われた時は実にいやであつた。それから包帯をしてもらい、うちにかえる途中には菓子を買ってもらつた。その時には痛いながらも面白くあつたものである。

毎日お医者様のうちにつれられ、その包帯をとき編をとるときは、痛くてたまらなくて泣いた事もある。一日二日と行くといやになつてきたが、木馬をかってもらつたり、菓子をかってもらつたりして医者に通つた。今ははやなおつて、もとの足になつたのである。

三、四才の頃

大正十年度 高一年
成澤太治郎(渡前)

僕は二才の春どきは立って歩めなかつたということだ。僕は水のある所を大へん面白がつたそうだ。手水鉢や雨だらいの水にしりをついて、ばちやばちやさせ

たものだそうでした。家の前の小川の入りダボダボいわせて、家の人が昼がきたと言うと泣きながら上がったものだと、母の或る晩のお話であつた。

私が四才の時、湯野浜に湯治に行く時、鶴岡まで歩いて車に乗り、山道を上がり、また歩いて湯野浜についた。その時父に「家からここまで来て、今日一日でめつきり足が丈夫に成つた」と言われて、頭をなでられたのは今でも覚えて居る。

また或る朝の事。僕の知らない子供がえんがわで遊んでいるのを押して落として、お母さんに叱られた事もあつた。

母が魚の尾を持って、餌を聞いていた時に、わきから打ち落とした事もあつた。これはたしか四才の時である。

村の東西にある松の木

大正十年度 高一年
山口 末吉(平形)

村の東西にある松の木は実に面白い松の木である。我々が朝、かにどう(カニをつかまえるしかけ)をあげに行くと、松に風がからまつて、なんとなく物すごい感を我らにあたえる。また、どこに行つて来ても僕を見送っているように思われる。

暑いときにその木にこしをおろして休むと、東の山から風が吹き下ろして、松の木にあたつてごうごうとうなつて、涼しさをあらわしているように思う。

また、その景色も面白い。枝ぶりは左右に手をのびたような形である。それから東の松の木には、毎年からすが子を生む。

昔、その松の木がはえていたあたりは松原であつたのだそうだ。それを我が村の人達が一心になつてかいこんして、枝ぶりのよい松の木を二本残しておいたという話である。

道行く人

大正十年度 高一年
高橋 金吾(柳久瀬)

道行く人をつくづく眺めて居ると、色々な顔付の人が通る。例えば、いかにも面白く無い様な顔をして通る人もあれば、いかにも面白くにこにことした大黒様のような人も行く。

又、歩む様子も一様ではない。それは足がピツコである人、酒によつてトカトカする人も通れば、足をはだけて歩く人もある。そうだからと思うと、腹のふくれた布袋(ほてい)様のようで、いかにもこわそうな人も行く。

そうして橋などにこしかけて、つくづく眺め、考えてると、この人はどういふくせがあるかなどということが自然と思ひ出るものである。

観察したことを表現する練習をしているのだから。高等科一年(中一)ですが、その年令以上に大人びた感じがしますね。面白い。 大戸

新年明けましておめでとうございます。平成十六年もご愛読くださいますようお願いいたします。

起床前の一分間

大正十一年度 高一年
齋藤 善吉(渡前)

時計は六時を打った。僕は起きようとしたが寒くて起きられない。また床へひっこんでいた。そうしたら子供がやってきて、私の上へ上がってしたばたした。僕は(それでも)ねたふりをしていたら、子供はしかたなしに走っていった。

庭の方で雀がさえずっている。間もなく、汽笛の音が勇ましく聞こえる。「汽車がきたなあ」と、ひとりごとを言った。外は、ひゅうひゅう吹雪である。

冬

大正十一年度 高一年
高橋 米蔵(和名川)

今は冬だ。ずいぶん寒い。毎日、白いわたのような雪がぱらぱらとやってくる。

我等が学校に来る時や帰る時など吹雪にあうとたいへんこまる。小さい子供をかげにして行かなければならないから、身が凍るようである。電信(柱)の針金(電線)は、ひょうひょうとなつて居る。その鳴り音を聞いても寒い。

冬の景色にも美しいものがある。夜はたいへん静かで、翌朝になって見ると、雪が二三尺もつもっていることがある。木や竹などにたくさん雪がのつていて、竹は重そうにしわっている。また枯れ木のような木はわたでもまいたようである。夕方になって、小鳥が餌をさがす有様や、また餌をさがさうともしないで小枝に寒そうにとまっているのは、見るに見られない美しいながめである。

雪遊びもまた面白い。たくさんの子供があつまつて雪合戦するのは実にいさましい。また氷すべりも面白い。おおぜいの子供がいろいろなすべり物をもって遊ぶのは実に面白い。

冬は寒いことは寒い、遊ぶことや景色の点から見るとたいへんに面白く美しいので、僕は冬になると実に面白い。

時間

大正十一年度 高一年
成澤 豊作(柳久瀬)

時間というものは一分もむだにしてならないという事は知って居るが、実際になつてやってみると実にむずかしいものである。

人が仕事をしている時にだまつて立っているのを見ると、あの人はだまつて居るより、なにかしたらよさそうなものだと思ふ。(しかし)自分がだまつて居るのが自分ではわからないものだから、だまつて居るが実際には、時間というものは一分もむだにしてならないといふことはわかっているのである。

ことわざに「ちりもつもれば山となる」ということがある。このことわざはよく表したものだと思つて居る。時間は一日一時間でもむだにしたなら、十時間むだにする。それで私は、時間をむだにしまいと、今から心がけている。

渡前小学校の宝物 学校文集『わたまへ』より

* 大正九年〜昭和二年までにタイムスリップ

親の恩

大正十一年度 高一年
田中きくめ(幕野内)

私どもがこのように大きくなって、学校に通うことが出来るのは、みな親がいるからです。小さい時分から親の手に育てられ、一人前の人となることが出来たのです。もし、親がいなかったならば、どんなに不自由で、どんなに悲しいものでしょう。

六年生で卒業して他に奉公にやられたり、家の手伝いをして居る人も居るのに、私どもは高等科に入られて、毎日勉強することが出来るのは、みな親の恩です。それで、親に報いるためと思つて勉強しなければなりません。

田沢金五郎君

大正十一年度 高一年
榎本 安治(柳久瀬)

僕等の級に田沢金五郎君という人が居ります。何をやらせても忠実な人であるから、先生がいつも「お前達は金五郎くんを手本にして学べよ」という。

朝のあいさつするとき、金五郎君の「お早よう」は私達の最敬礼よりも少しそまつな礼をしている。それなのに、反対に金五郎君が手本といわれたものだから或る人は強くうらんで居るといふ話でした。

尋常四、五年生に時は非常に悪い成績だったという事でした。それで、是は大変だと思つて、尋常六年や高等一年の時は人に勝れた勉強をしたという事です。例を挙げるとよくわかる。

書物は渡されてから一週間余りで読み方も書き取りも全部明らかに分かったそうです。この一事をもつても、どの位熱心に勉強しているかがよくわかる。

嗚呼(ああ)僕も金五郎君のように忠実に勉強してよい成績をとらなければなりません。

僕のうちの

大正十二年度 高一年

隣の農学校生徒

阿部幸太郎(上藤島)

僕の隣の金男君のうちに、農学校の生徒が宿をかりています。毎日一人でご飯をたいたり、料理をして一人ぼっちで二階で食べている。

朝は早く起き、夜はおそくまで勉強して居る。そうして十時頃になると尺八を吹く。尺八を吹かない事は無い。いくら寒い風が吹いても汽車の音かと聞けばかすかに尺八の音である。

今は農学校の三年であつて、しかも其の級の級長だそうである。いくら学問したもんだかわからない。そして、人には丁寧な人である。

或る晩の事、僕が其の人に遊びに行つた時はもう驚いた。机の上には書物がたくさんならべてあつたし、下には厚い書物が沢山あつた。僕はこれで学問するんだなと思つた。沢山ある書物のわきには毎日吹く尺八があつた。非常によい人である。

当時の農学校の生徒がエリートとして尊敬、憧れの目で見られていたことがうかがえます。大戸

お酒

大正十二年度 高一年
齋藤 末吉(渡前)

世の中には、ずいぶんわけのわからないことがたくさんある。酒はその一つです。

酒はずいぶん用いられる。お目出度い時、面白くない時、面白い時などに必ず使われる。酒屋の前を通っておいをかんだだけで、すぐに飲みたくなる人もあるという。僕には、どこがうまいのかどうもわけがわからない。

よつてくると、だんだん顔の赤くなる人と青くなる人がある。話の音がだんだん高くなる。常にはしゃべらない人もしゃべるようになる。みなそうではないがねくだをこく人もある。人の死んだうちに行つて歌を歌う者もある。とんでもないことだ。

僕は酒がなかったら国の経済にもなると思う。僕は酒がだいきらいです。

この人はおとなになつても酒を飲まなかつただろうか？調べてみたいような・・・大戸

人の集い

大正十二年度 高一年
菅原喜之助(新屋敷)

人がたくさん集まつて話をしてるのを聞いてると面白い。

何かの用事で集まつたのに種々の話をしてる人がある。天気の話をしてる人もあれば、馬の話などをしてる人もある。そうして一晩がやがや話してる人もあれば、いびきなどをかいて、ただねむつてしまつて、何も話さないうちに行つてしまふ人もある。人の集いはおかしなものである。

冬の夜

大正十二年度 高一年
近藤 治作(荒俣)

あゝ冬の夜はさびしい。ひゅうひゅうと風の音がする。あられがばらばらと降る音がする。

家の中はしいんとして人の音はしないのに、台所の方ではねずみの音がする。

大分夜がふけたようだ。時計ばかりがこちこちと唱歌を歌つて居る。

僕がこうして勉強しているのは、明日の試験問題に正確な答えをしたからだ。神は助けてくれようか。

近ごろの寒風に

大正十二年度 高二年

出会う人を見て

齋藤久次郎(荒俣)

この頃は非常にあれました私はその中を物ともせずに通う郵便配達人を見ました。

あの大風に他人の用事を通ずるために、白くなって弁当を腰にして一日さわぐのだと思うと、無駄に手紙はやらないと強く心の中で感じました。

あの人は、私どもがこたつの中に休んでいるのを見て、自分の仕事はつまらない職業だと思つたかもしれ

ないと後ろ姿を見たが、何も変わった風はありませんでした。

何事もあのような心持ちでいかなかったら社会が治まらない。我等は大風で石が飛んで来ても槍が飛んで来ても、自己の職業に勉めなければならぬと強く思いました。

五月四日の夜

大正十二年度 高二年
高橋永三郎(平形)

昨日の晩は曇りがちの夜でした。

僕は八時頃に床についた。盛んにねむっている時に火事の夢を見た。はつと思つて目がさめた。しばらくたつと、半鐘(はんしょう)の音が遠くかすかに聞こえる。間もなく我が村でも半鐘を打った。

僕はお父さんに「火事だ。火事だ」と言うと、お父さんは「どこで。火事など出まいぜ」と言う。僕は「あんなに半鐘がなっている」と言うと、お父さんは「やつとわかつて「そらどこだ」と言つて床を出た。僕も出ようとすると止められて、又ひっこんだ。お父さんは家を出発した。

すると間もなく、我が村のポンプがガラガラと僕の家を走つて行く音がする。

そして三、四時間たつとお父さんが帰つてきた。聞きますと、火事は渡前の織物工場であると言う。この火事は何が原因でおこつたのだろうと聞くと、糸を乾かすため、その糸が火に落ちて糸がたちまち焼けたのが原因だということだそう。

嗚呼、林治郎君や林治郎君の家の人、近所の人ほどんなに驚いたかわからない。火を用いる場合は、よほど気をつけなければならぬ。僕は毎日、火事ほど恐ろしいものは無いと思つて居ります。

五月四日の夜

大正十二年度 高二年
成澤 豊作(柳久瀬)

五月四日の夜は本村の工場がやけた。

僕は家におつて、寝床で眠つておつた。すると、村の半鐘の音が耳にさわった。いざ火事であると、すぐねまきをきて家を出た。出て見れば本村である。

すぐ家にひき返つて、着物をきかえて玄関に出た。ゴムぐつに足を入れようとしたけれども、入らないのでぞうりをはいて家をとび出した。すると、高張り提灯(ちようちん)をつけたポンプが飛ぶが如く走る。僕も一心不乱に走った。

本村について見れば、火事は工場であるので、心がうやうやになつてしまった。しばらくの間ぶらぶらまわつて、仲間にしていた林治郎君等をなぐさめて家に帰った。帰る時に仙台におる仲間を思つて、どんなにおどろくことであろうと考へて再び寝床についた。寝床についても火事場の事を夢に見て、五月四日の夜はすんでしまった。

貴重な記録文発見!

「関東大震災」のことを書いた作文です。まさかこうした作文があるとは思いませんでした。

藤島でもけっこうゆれたことがわかります。

また、総理大臣や皇太子殿下が行方不明だとか不確かな情報やデマが乱れとび、社会が大きく混乱したことがよくわかります。

特に朝鮮（現在の韓国と北朝鮮）の人たちはそのデマにより実際に迫害され犠牲になりました。かわいそうなことをしたものだと思います。

情報を早く正確に知るといことが、いかに大切かという事がよく分かります。高学年の人は、ぜひ自分で読んでください。（大戸）

おそろしい大地震

大正十二年度 尋五年 太田 好（渡前）

九月一日、学校がひけてから、家へ帰ってご飯を食べて居ると、何だか妙に体がゆれるので、あやしみながらご飯を食べて居ると、お母さんが急に「ほうら、地震だ」と、大きい声で言いました。

僕はおどろいて何気なく仏様の方を見ると、平ぜい動かない輪籠が、左右に動いて居るではないか。僕はすぐご飯をすました。そのうち又ゆれたから見ると、今度は反対に動いて居るので、みんな外へ出た。

少しやんでから家に入った。その時、お母さんは、「今までにない地震だ」と言いました。僕や兄さんは「学校はだいが動いたろう」と言いました。その日はそれですみました。

翌日になりますと、さあ大へん。東京はもちろん、その近辺は大火事だという。大ていの人が皆言って居ります。ちようど僕の家で東京朝日新聞をとって居りました。ところが、東京朝日新聞社もやけたときいたので、さっそく山形新聞をとることにしました。

そのうち浅草にある十二階は半分やけ落ちたということも山形新聞の号外で知りました。又、総理大臣や皇太子殿下が行方不明だとか、松坂屋とかいう呉服店などがやけたとかいうことが号外に出てきました。

又、此のひどい地震なのに不逞朝鮮人が爆弾を持って、大きな建物がつぶれたのに、それを投げつけてやくななどということをしたなども出ていました。此の大地震のものは、伊豆半島にある天城山だということである。

朝鮮人が荒れまわるので、兵隊や巡査はどんどん出かけるし、東京あたりの青年には抜刀を許したので朝鮮人はどんどん殺されました。それで、こちらの方にも朝鮮人がにげて来たというので、消防の人たちが、かわるがわる村の中を廻ってくれています。なんと有りがたいことではないか。又、東京市の人たちは大へんななんぎをして居るでしょう。かわいそうなことではないか。

寺

大正十二年度 尋六年

加藤おとめ（箕升）

たださえさびしい寺に、があんがんと鐘が鳴る。お経を誦む声も聞こえる。私は、その音、その声を聞く毎に死んだおかあさんのことを思い出す。

おかあさんは死なれる前に私をしつかとだきしめて「この子をよく育て、よく勉強させて、一人前の人になるように教えてください」と、かたくなのんで死なれたそうだ。

寺の鐘の音とお経の声は、私をほげますおかあさんの心と思われる。

このお母さんは亡くなっても、自分の子どもをりっぱに教育しているのですね。きつと、家族のだけれが、死に際の様子を何度も何度もおとめさんに語ってやったのだと思います。（大戸）

私の二むまり

大正十二年度 尋三年

今野 米子（新屋敷）

私にはごむまりが二つあります。おかあさんがつるおかに行つて買つて来て下さったのと、分家のおじさんがなるこ（鳴子）というところへおとうじに行つてとうじみやげに買つて来て下さったのとです。

おかあさんからいただいたのは、赤やむらさきでみことな花もようがついています。大へんよくあがります。おじさんからいただいたのも、赤い花のもようがついて大へんみごとです。やっぱりよくあがるごむまりです。

このごろまで毎日、この二つのごむまりを持って来てはついで遊んでいましたが、ある休みの日に小さい弟にかしてあげたら、よその子どもとなげあったのでおじさんからいただいた大じなごむまりを、とうとう見えなくされてしまいました。

私の弟

大正十二年度 尋三年

城戸 しげ（幕野内）

私の弟は今年四つです。べんとうが大すきなので、私が学校からかえつて来ると、弟はおもしろがって「まま。まま」といって、私からべんとうを取ります。

私は土曜日の日は学校にべんとうを持っていきません。ところが、かえつてみると、弟は私のうちの橋のところまでむかえに出ていて、私からべんとうを取ろうとしました。すると、いつも学校からかえつて来るとあるべんとうがないので、弟はなき出しました。

ある日のこと。私が学校へ来てみると、私をむかえに行くといつて、休み石の所まで来そうです。私はそんなことを聞くと、弟が大すきです。

弟を大好きなわけがよくわかりますね。 大戸

図画

大正十二年度 尋五年

田中宗三郎(暮野内)

僕は図画は入たな方であるが、図画の時間になると何よりおもしろくなり、うちにいっても時々図画をかいて遊んでいる。僕は、人(人物)はなかなかかけないが、景色はかくことができる。

今日も図画のある日である。その図画の時間は何をかかせるものであるか楽しみにしている。

僕は、好君のようになりたいものだどつくづく思います。でもそれは、よほどの人でなければ出来ないと思っております。

図画はよくかける人ならばおもしろいだろうと思えます。僕もじょうずにやりたいものだ。図画はおもしろいものである。

かに

大正十二年度 尋六年

太田子之助(渡前)

昨日、僕が走ろうと思つて外に出た。こど(?)の所に行つて見ると、何だかかにのようなものがある。僕がそつと手をやると、かには早く、石の下にかくれてしまった。

こんどはじめてやろうと思つて手をやると、かには足をしめられたので一生懸命に逃げようとしたが、僕はぎつちりと足をつかんで足はなさない。こんどは僕も一生懸命ひっぱつたので、かにの足がもげて来た。それで、もう一度手をやると、かにはどこへ行ったかわからなくなったので、僕はがっかりして家へ帰った。

牛の子

大正十二年度 高一年

天野みねゑ(柳久瀬)

子牛は親牛のあとからついて行く。しかし、頻り(しきり)に道草を食う。つくんと立っているから、何をしているのかと見てみると、思ひ出したように駆けて行く。

ちよつとした事にもひどく驚くから、おりおり道端(みちばた)の溝などに落ちる。

脚ばかりが長くて滑稽(こっけい)な姿をしているが、実にかわいらしいものである。

元日の夜

大正十二年度 高一年

成澤みよき(渡前)

赤い夕日はとうに没した。二、三人の老人は大声をはり上げてやって来た。きつと年頭に出かけたのである。見ているうちに見えなくなつてしまった。

家々の勇ましい国旗もみなしまわれて、かげだに見えなくなつた。

我が家の子供ばかり大元気で外で遊んでいる。母から「家に入れ」と頻りに言われても、うんとも言わないで遊んでいる。

外はもう、人のすがたも見えなくなった。ただ隣り村のつきがねの音が聞こえる。いつもならさびしいと思ふが、今日はさびしくない。

今日は元日だというので、年頭にきた人が十二、三人あつたが、ちらりばらりと皆帰つた。ただ一人このこされ、おおいばりで父と大議論やつている。

もう、そこら近辺の年頭の人は帰つたとみえて、笑つたり歌つたりする声も聞こえなくなつた。

勇ましい青年のラッパの音が空高く響き渡つた。

僕の思い出

大正十二年度 高二年

〇〇〇〇(〇〇)

私は旅行に行きません。なぜかと言うと、家事都合の為、家人より行くなと言われたからです。

私は毎日、涙をこぼして学校に来ていた。そして、学校より家に帰ると、父母に旅行に行かれるよう毎日願つていたが、家内、金の都合の為行かれなかった。これは残念だと、毎日くやんでいました。

待ちに待つた旅行も行く日になつた。朝早く行つたでしょう。

私はその日、学校に来て勉強していました。勉強していても旅行に行つた人を思うと、もう勉強はされなかつた。

五月四日、又学校に来て、自習をしていても旅行に行つた人たちを思った。

今頃は日本三景の松島のよい景色を見ているでしょうか。又、仙台の兵隊の演習でも見て居るか、色々なことを思つて、外をながめて、ぼろけ顔をつくつて勉強なんかそんなにしません。

旅行に行つた人が帰つてくるとはねて(勉強をやめて、ということかな? 大戸)話を聞きました。

さまざま考えて、書いた人の名前は出さないことにしました。

当時の厳しい生活がうかがわれる作文です。この人の気持ちや旅行に出してやれなかつた親の気持ちを想像すると涙が出そうになりますが、この人に、安っぽい同情は必要ないようです。

なぜならば、この人は家庭の事情で修学旅行に行けなかつたを単なる悲しい体験で終わらせていません。行つた人ではできない貴重な体験にしています。また、行けなかつたことを引け目に感じてもいけないようです。それは、行けなかつたことを堂々と作文に書いてることからわかります。

この人は、この後も逆境をもバネにして大いに学び、心を鍛え、りっぱな大人となり、堅実な人生を過ごしたのではないかと想像します。

このようなマイナス体験を作文に書いた人もそれを文集にのせた先生もたくましい。 大戸

冬

大正十三年度 尋五年

阿部 俊夫(上藤島)

今は冬だ。中々さむい。今日も昨日もいやな吹雪ばかり。空を見ると灰色の雲がやって来る。あちらこちらの電信柱は寒そうにひゅうひゅうと鳴っているのを聞くさえ身の毛がたつ。道行く人々はいかにも寒そうにとぼとぼと進む。

僕等は小さな子供をひきつれて学校に行くのだ。先生は度々おっしゃる。「こんな時節に小さな子供の歩けない日は、大きい子供はよく注意してめんどう見てやれ。又、汽車のふみきりのあるところは、よくよく注意して歩くこと」まことの事である。今に春がくるだろうが、よく注意してつれて行かねばならない。

僕は西の方に向かって来る子供はどんなになんぎであらうと感心している。

早く冬が過ぎてくれればよいとしみじみ思う。

規律週間

大正十三年度 高一年

渡部 金市(渡前)

我々は単独に生活するものではなく、必ず一つの社会をなして共同生活をして暮らさなければならぬと本にある。その共同生活をして、一つの国をなしていくに、僕は規律ということが最も大切なことと思えます。

今朝きめたのは学校内の規律で、国家の規律に比べてみれば小さく、又平易なるものである。しかし、たとえに「ちりがつもつて山となり、しずくが寄つて川となる」というものがある。小さいきまりではあるが今朝きめた規律の中には国家の規律の源となるものがあると思えます。

教室の出入りの時の行進を立派にすること等は大きくなつて軍人になつてからも、大いに必要なことと思えます。又、我々は、きめた規律によくしたが、この規律に対しては、又、この決まりに対してはと、さらに考えを加えて、それにしたがって、決してそむかない覚悟をする必要があります。

この一週間は勿論、それを永遠に保たしめて、このきまりについて先生より叱られないよう、覚悟しなければなりません。

学校でどんな決まりを決めたのか不明であるが何か強く心に期すことがあつたのであらう。意気込みが伝わってきて頼もしい。 大戸

こおろぎ

大正十三年度 高二年

小林 友吉(荒俣)

暑くて昼は勉強がだめだ。この頃は朝早くか晩方がよい。昨夜は一番明るい電灯を持って来てやった。

やっていると、雨戸の近くできりきりと鳴くこおろぎの音がした。勉強はよして聞いていた。だんだん近くなつて、とうとう障子に上がつて来た。つかまへようとしたら逃げて、真つ暗やみの庭にかくれてしまった。

ああ、あのこおろぎは何と想つてやつて来たのだろう。何と想つて逃げて行つたらう。又来ないだろうか

年の暮の町

大正十三年度 高二年

佐藤 元蔵(和名川)

大売出しの広告旗。どの店先にもひるがえっている町の中はゴタゴタ。足のつく場がない。

どの店でも愛嬌(あいきょう)よく客をもてなしている。社々に暮を張つて金物を広げて口先で人をごまかそうとしている上方商人やら、魚売りが客をむりに引つ張るやら、何と賑やかな事である。

鷲の如くに肩を怒らしてバスケットを手に持ち急ぎ足で歩く旅の者やら、暮れの町は忙しそうである。

藤島の町の様子であらうか。私が住んでいる大山では年の暮に市がたつたものである。子どもの頃はその市で買物をするのがすごくが楽しみだった。懐かしい風景である。 大戸

不思議に思われる月の夜

大正十三年度 高二年

阿部たまき(上藤島)

新聞に八月十三日に火星が現われる事が書いてあつたのも忘れて、涼味をとりみんな外へ出た。

するとまもなく月が目についた。あつと思つた。その月は赤い赤いまるで西に太陽が暮れる時と同じである。「火星ではないか」とお母さんは語つた。おぼあさんは「火星って何」「火の星」と私は言つた。おぼあさんは「お母さんはなわからず」「火の星って何」。

お母さんは火星の説明をした。たくさんある星にみな名がついていること。その一種に火星という星があることを話した。おぼあさんは「でも、あれは月でしょう。まるいから」と言つた。お母さんも「そりやあ月でしょう」と言つた。

床につこうとしている所にお父さんが帰つて来た。お父さんの話では、それが火星だとの事でした。

火星は何百年に一度しか地球に近づかないものだからだ。去年までは地球から一億里はなれていたが、今年には四千五百里ばかりしかはなれていないそうだと。誠に珍しい不思議な星である。

ふと思ひ出して

大正十三年度 高二年

阿部ちよめ(上藤島)

この一学期の成績はどんなだろう。

昼の間は自分の勉強の事ばかり考えても居られない夜になれば蚊にいじめられて何ともならない。

理科や地理はとんでもない事を書いてしまった。修身の考査の時は夢の中で書いた様な気がする。どんな成績になるやら案じられてならない。昨年はあの位精出してあの成績だった。どうなるだろう。

二学期、三学期にも精を出してやりましょう。考査もあと二度しかない。また、若い時は二度とないと言ふ。しつかりやりましょう。

(評) 出せだせ、ありつたけの精力を。

休みの中の一日

大正十四年度 尋三年
高橋みさを(砂塚)

お休みのうちはおもしろいことがたくさんありました。それで山さかすべったり、又せんべいつきをしたりしてあそびました。

五日になったら、おとうさんはせんべいをたくさん買ってきてくれました。私と兄さんと弟の三人でせんべいつきをしました。弟がとれないので、おとうさんがとってくれました。

こんどは、おとうさんは、だれにもとってくれないことにしてかたりました。そして、おとうさんからみんなとられてしまいました。すると、おとうさんはやめたといつてせんべいをわきにおきました。弟はおとうさんのわきにいつてせんべいをたべていました。すると、兄さんもみつめて二人でみんなたべました。

おとうさんはそれをしらないで、又せんべいつきをしようといつたら、せんべいがみんななくなつたのでおとうさんはみんなにわられました。

或る晩の夢

大正十四年度 尋四年
土田 二郎(柳久瀬)

「お父さん、それは僕の自転車ですか」

「そうです。お前はいい子だから買って来たのだ」

「お父さん、いつ乗るのですか」

「いつでもよい」
それでは今乗ろうと、急いで庭へ自転車を出して乗ってみた。中々うまく乗れる。これは面白いと向こうへ行くと、曲がり角に一人の男がいる。あぶないと思つて、チリンチリンと強くベルを鳴らしたら目がさめた。おいしいことにそれは夢でした。

先生の目がね

大正十四年度 尋四年
山口 みね(渡前)

私共の先生は目がわるいので、毎日目がねをかけて学校に来ます。

教室で私共に字を教えながら、先生は時々目がねをはずします。私共は先生が目がねをはずしたら、目が細いようでおかしいと言つてアハハと笑うので先生もにこにこを笑いました。

私共も目を悪くすると大へんだから、今から目をていねいにおかなければならないとおそりました。私共の学校には目がねをかけた先生が四人居ます。

今朝

大正十四年度 尋六年
長沢 房吉(大半田)

今朝起きて見ると、真っ白な霜が雪のように下りている。やあ、もう冬だなあと思われた。そして、せきばたに行つて、手を水に入れたら、体がしんとして大そう気持ちがいい。しかし、顔に水をつけた時の寒さはとてもであった。でも、手ぬぐいで顔をふくと、ど

こだか少しあたたかくなつて来た。その時、僕は思った。寒くなつたんだから、小鳥の声は聞こえなくなつたんだなあ。

冬のながめ

大正十四年度 高一年
佐藤 貞恵(大半田)

待ちに待つていたお正月も過ぎて、やがて又学校がはじまつた。吹雪は少ないが、白い柔らかな雪がふわりふわりと降っています。

近い村も雪がかかったようによくわからない。木々には、雪がゆつくりしたような顔をして腰をかけている。杉や松の緑色は、真っ白な雪の中から顔を出したり、又、南天の実が雪の中から赤い顔を出しているのは誰でも見とれるに決まつている。

又、それに加わつて、青々とした竹が重そうに雪を背負つて、節からまげているのは見捨てがたい美観である。

「木々には、雪がゆつくりしたような顔をして腰をかけている」とは、上手な表現ですね。 大戸

雀

大正十四年度 高一年
大川 桃丸(渡前)

しずかな寒い夕方の事であります。私がせつせと夕飯の支度をしていると、猫がどこからか一羽の雀をくわえて、私のそばへ来ました。

日頃より木の枝に愛らしい姿をして遊んでいる小鳥を見ては捕らえてみたい、かごに入れて飼つてみたいと思つていたので、猫の口から取つてやりました。猫はくやしそうに私の手へ飛びつこうとするのを片手でおさえながら、雀をよく見ると、かわいそうに小さい体には傷がついて深くていたんでいます。けれども、雀は必死となつて私の手から逃げようとしません。

生命が何者かにうばわれる時もこの様なものだ。かわいそうに逃げがしてやろうと思つて、油断して手をゆるめると、ぱつと飛んで茶の間中ばたばた。

それを見た健市が箱を持って来て「雀をこの中に入れてよ。逃がすなよ」と泣き出します。仕方なしに箱に入れておきました。のぞいて見ると円く小さくなつていました。そのまま箱にふたをして重いものを乗せて置きました。

しかし、朝になつて見ると、箱には白い糞のみ落ちていました。私の不注意から猫に食べられたのだ。

学校に来る途中、小鳥を見て、今生きていれば他の雀のように広いこの野原を自由に飛べるのに、楽しく生きていられるのに、と思ひ出して、死んだ雀の不幸を悲しく思いました。

猫は、なかなか執念深いものです。 大戸

二度びっくり

大正十四年度 尋五年
城戸 しげ (幕野内)

日曜の日、私が茶の間で、あまりおもしろい本があったので、見向きもしないで一生けん命によんでいました。すると、ふと後から妹が来て、おじいさんが東京に行った時に、おみやげに買っていただいた大きなゴムまりを背中にどつとなげました。びっくりして本を前におとし後を見ると、妹はまっ赤なかおをしてわらいながら立っていました。

私は「そんなことをして」と言おうと思ったが、妹が前よりも一そうおかしそうにわらうので、私もおかしくなってアハハとわらい出しました。

二人がおなかをかかえてわらって居ると、茶の間の戸をがらりとあけて入って来た者があります。私は又びっくりして見るとそれは弟でありました。

弟は日の丸のはたを持って、大元気で入って来た所です。私たちのわらい声を聞いて、何であらうと思っながらとあけたのでしよう。それで私は二度びっくりしました。

花物の種注文

大正十四年度 高一年
菅原徳之助 (新屋敷)

先月から色々のカタログを送ってもらって、よく注意して見ましたら、中々面白くきれいな花がありました。それから、早速注文する事に致しました。それで、今度長い休みになったら、おばあさんから錢をいただき、夏になったら西に島に広々と涼しそうに咲かせて、おばあさんを喜ばせてやりたいと思うのです。

今の老人は、よく仏教を信じて居るので、よく御寺参りにも行き、仏様を拝します。ですからおばあさんは其の花を取って花立にさし、毎日嬉しく日夜を過ごすことと思われます。

いつか赤いお日様も消えて寒い北風が吹き、薄黒色の雲が流れ、寒い世の中になると同時に、今までのきれいな花も種に変わります。それを箱に入れてしまいい年又きれいな花を咲かせましよう。

卒業を前にして

大正十四年度 高二年
成澤 勇 (荒俣)

我等一同は八箇年の長い教育も夢の間に過ぎ、卒業式を前にしています。三十三名の我等は、やがてこの学校を出て行くこととなりました。

今思うに、何もわからぬ一年の時から、先生に毎日手厚くもてなされ学問してきたが、はや一人前として社会に出ていく事も目の前にせまって来ました。何となく心細くある感がします。

昨年は広大な運動場を作るやら、前の荒地を開墾するやら色々なことがありました。其の仕事も成就し楽しく又愉快に、思う存分運動し勉強してきました。

この八箇年間の教育を諸先生方にお受けしました御恩は山よりも高く海よりも深くと深く身に感じました。今年、うんと勉強しようとした事も予定の如くはいかず、今くやしいような感じがします。今はもう追

いつかず、今後ますます上の学年に進みたいと思えます。又我等は最上級生として最後の花をかざることも出来ないの、先生に対して申しわけがありません。今は再び取りかえすことが出来なく、又も一度という時期もおくれてしまい、もうわずかの所で卒業することとなりました。

残念ながら、後半に述べていることがよくわかりません。何か、しきりに後悔しているようであるが、どんなことがあったのだろうか。(大戸)

昨日

大正十五年度 高一年
宮崎 東龍 (渡前)

朝一校時をすまして剣道道具を櫛(そり)につけて準士君や藤吉君、久三郎君、作太郎君、それに僕と富樫先生と日向先生と一行七人は、押切の剣道大会に行つた。風が烈しくてひどかった。横山村をはずれてから道に雪がなかったから、自分で自分の道具を背負って行った。

学校についたのは十二時半頃であった。控室に行つたら、もう藤島の選手が来ておつた。

御飯を食べていたら、去年御転任された伊藤先生が来て、にこにこ笑いながら「やあ、よく来てくれたなご苦労ご苦労」とおっしゃつた。作太郎君が「背が高くなったようだの。校長先生になると背が高くなるのだらうか」と言つたので、皆がどつと笑つた。

それからしばらく休んでいたら、始めの鐘がなつたので演武場に行く。校長先生のお話があつて、それからすぐ試合が始まつた。僕と横山の生徒だった。小手二本取つて勝つた。

一本切り抜きでは藤吉君が一等になった。自分の友達に勝つたのでなんとなくうれしかった。

試合が終わつて、校長先生の終わりのお話があつて餅をいただいて皆帰りはじめた。

横内まで横内の人と一緒に来た。家についたのは八時半頃だった。くたびれたのですねた。

夜

大正十五年度 高二年
齋藤 準士 (渡前)

ふと目が覚めて、見ると茶の間の電灯が今にも消えそうである。何時だろうと思つても、ただカチカチと時計の音が身にしみ入るばかりである。台所では鼠が何かをかじっている。其の他には何の音もない。

私の他に目のさめているものは、鼠と時計ばかりだろう。何だか淋しくなつてきた。目を閉じてもなかなか眠れない。早く夜が明ければよいと思う。

時計がカチリと五分前を報じた。幾つ鳴るだろう。今か今かと耳を澄ましているが夜の五分前はなかなか長い。昼ならず鳴るのにも思いつつ横向きになる。

ああ、あの時、時計は何時をうつつたのであろうか。私は五分間の内に夢の人となつたのである。

ふと目がさめた。太陽は昇つて、夜は全く明けている。朝の風は涼しそうに部屋から窓へぬけている。

雪

大正十五年度 尋四年
太田みさを(渡前)

今年は何もなかったにない大雪です。越後の高田地方では二丈二尺(約四、二M)も降り積もって、今では雪がとけて大水がつき、人々はたいへんななんぎをして居るといふことです。私が昨日、新聞で見ました。おかあさんは「庄内は一番よい所だな」といつていらつしやいました。

新潟では家が雪のためにうずめられて倉から米を持ち出すことも出来なくて、家の中で死んでしまったのや、汽車が雪にうめられて汽車の中で死んだのなど沢山あるということですよ。

新聞を読んでおかあさんにお聞かせすると、おかあさんは「新潟の律子さんが雪にうずめられたか、お見舞いにいかなければなるまい」とおっしゃるので、私は悲しくなりません。

律子さんは今、四年生で私と同年ですよ。

此の頃の雪

大正十五年度 尋五年
長南 豊七(新屋敷)

此の頃は雪がたくさんふり、又ふきがふきました。家の人は、こんな雪は生まれてからないようだと言っていました。私もそう思いました。

汽車はまったくとまったので、家のおとうさんは鶴岡に行くのに行きたくて行った。それから、農学校の生徒は六時間目が終わってから学校にきた人がたくさんいたそうです。これは夜ごはんを食べる時の話です。家の後のふき山はずいぶん大きくなって、そりですべるとおもしろいそうです。私は今日、学校からかえるとスキーですべろうと思います。

雪中遊戯

大正十五年度 尋五年
土田 二郎(柳久瀬)

去る二月二十五日、四年以上が雪中遊戯をしました。僕は第四中隊で、中隊長は東海林八三郎君である。初めは玉をころがして城をきずいた。それが終わると、今度いよいよ戦った。

僕等は一生懸命になって働いた。まるでけんかの様であった。すると、紅組が万歳万歳と言って来たので面白かった。二度目も前と同じようになって勝った。二度目も紅が勝ったので面白かった。

後で三浦先生が、一度目は十三分で、二度目は五分で勝ったと言われた。又、城も紅の方が上手だということでした。それで紅が勝ったのでしよう。

山の人

大正十五年度 尋五年
齋藤 京(渡前)

山の中に住んでいる人は、毎日静かな所で木をきり又は炭焼きをして暮らしています。山の家では只、時々梢で鳴く小鳥の声や猟銃の音を聞くばかりで、たい

へん静かな所で暮らしています。

それでも力蔵さんは住めば都よ。わが里よと言ってさびしさも思わず、大きな声で歌を歌っています。

又、或る家では父や子が楽しく働いています。朝早くから父は木をきり、兄はそれをそろえ、子供は運んで、日のくれるまで一生けんめいに働いて一生を過ごすのです。

卒業に近づいた

大正十五年度 尋六年
松浦 辰美(大半田)

これまでいろいろお世話になった先生方とおわかれする日。六年間共に学んだ同じ級の友とおわかれする日。その日はいよいよ近づいてきました。

今日も学校に来る時、さまざま話をしていこううちに、ふと卒業の事が思い浮かんだ。学校にくる日はもう少した。でも今は試験中で、学校に来てはその事ばかり考えているので、四年生頃は長分長いと思つた一週間も今は短くて、もっと長ければよいがと思うようになりました。

又、私たちがおわかれする授与式ももうじき来るのです。其の時はあつい涙を流して先生方や生徒とわかれなければなりません。それを思うと歩いていた足も歩けなくなりそうです。

此のなつかしい学校をあとにして、今度は家においてお父さんやお母さんを手伝わなければなりません。それを思うと高等科に入る子供は幸せだと思えます。

目覚まし時計

大正十五年度 高二年
大川 桃え(渡前)

小さなかわい目覚まし時計がチクタクチクタクと時を刻んで行きます。

朝毎にジリジリとやかましいやかましい音がすると、私は夢からさめて、朝飯の支度をして学校へ通ってきたのに、もう卒業です。そして先生や友達と一緒に勉強する事が出来ないのです。

此の目覚まし時計を見ると、色々の事が考えられます。或る時は、兄さんがとおい所へ働きに行くのに早く起きて支度をしてやった事、飯をたきながら居眠りをしてしかられた事など、はっきり記憶しています。買った当時は、ベルが鳴るとびっくりしてはつとたる位でした。子供もイジメの中で驚いて泣き出す程でした。兄さんは目覚ましは重宝(ちようほう)だな、と、言っていました。

私は学校を遅刻しないで通ってきたのが何よりうれしく思います。

みんなこの目覚まし時計のおかげです。

卒業後は此の目覚まし時計のように一心に働いて、一つの目的に到着するように努力しましょう。

目覚まし時計の音が、かすかにチクタクチクタクと聞こえてきます。

うんどうかい

大正十五年 尋二年
菅原や江の (新屋敷)

昨日は私たちの学校の春の大うんどうかいでした。お天気がよいので、みんな大よろこびでいそいでまいりました。本校のうんどうばにつくと、すぐにうんどうのしたくをして、ちゃんとまっています。

そのうち、いよいようんどうがはじまったので、みんなで見えていました。六年生のせいとや高とうかのせいなどは、あのひろいうんどうばをちよつとの間に二かいもまわるので、早いのおどろくほどでした。リレーのきようそうになると、みんないじをはってむちゅうになるので、中々おもしろうございました。

私は、ちようどおなががわるいので、はいりかねてさんねんでたまらなかつた。

三時すぎにうんどうがおわって、うちへもどつたのは五時ごろでした。

つぎの日、ごほうびをいただいた子どもたちをしばらく十八人もいるので「みなさんのきゆうは、よくはしつた」といってほめられました。私たちも大へんうれしかつた。

月の夜

大正十五年 尋五年
丸山 とめ (上藤島)

大そう静かな夜であつた。私は夕はんを食べて外に出ていると、東の山から円いお月様が出てきました。月はだんだん上り、村はひっそりとして、どこからか笛の音がきこえてきました。私はその時、死んだ姉さんのことを思い出しました。

月を見上げて、月の唱歌を歌つたりしている所に向いの方で卒業の唱歌を歌つて行く子供がありました。私はそれをきくと涙が出てくるようでした。

田んぼのあたりは、もやがたくさんかかつていました。村々には電気がちらちらして見えました。

卒業を前にして

大正十五年 尋六年
富樫 勇作 (柳久瀬)

今は三月。初春になつた。此の三月は悲しいようなよろこばしいような時である。

今まで六年間という長い年月に、友として学んだ学友にわかれ、又、先生としてお教え下さつた大恩人とおわかれする事は、何という悲しい事でしょう。しかし、学びの道であるところの六年間を終え、世に出るという事は、喜ばしさにたえぬ次第であります。

私は、親とも兄弟ともわかれた経験は一度もないので、今度の卒業式はどんなに悲しいか想像されな

富樫さんは尋常小学校で卒業し、高等科には進まなかつたようである。ちなみに、この年の卒業生九十四名中、高等科に進んだのは五十七名であつた。進学率は約六十五%である。

餅が焼き上がるまで

大正十五年 尋六年
城戸しげ (幕野内)

月曜日、私が学校から帰って行くと、あまり腹がすいたので、おばあさんから大きな餅を一ついただいた。火ばちの火をどんどんとおこして焼きはじめた。それから、明日は試験だから勉強しようと思つて、火ばちのわきで餅を焼きながらしらべた。

しばらくすると、さしきの方で「餅がやけて黒くなつたようなにおいがする」と、おばあさんの声。焼きはじめたから一度も餅の方を見ないで、本をしらべていた私には何のにおいもしなかつた。

おどろいて見ると、どうでしょう。あんなに白かつた餅は、真つ赤な火にやかれて真つ黒になつて居る。こまつたなと思つたが、自分が食べるのであるからしかたがない。別の方をかえして又やいた。

今度こそは黒やきにしてはならないと思ひ、時々餅の方を見たが、いつこうやけもしないで居る。ようやくやけたので、食べようと思つて餅を手に持った。持つたことは持つたが、何だか食べられないようだ。黒くなつた餅をだまつて見ていると、いくら自分が食べるのであつてもこまつてしまう。それに大きくて食べられそうもない。でも、思ひ切つて大餅にかじりついてみた。にがくて少しもおいしくない。真つ黒な餅は一口かじられたまま、私の手の上につけて居る。今度餅をやく時は、本を見ないで黒くしないようにやこうと思ふ。

同じ人の作文はなるべくせないようにしているのだが、この城戸しげさんの作文は、つい何度ものせてしまつて居る。この方の作品にはそれだけの魅力があるからである。
大戸

春を待つ

大正十五年 高一年
成瀬まさる (渡前)

見渡す限りの銀世界にかこまれた。我々の顔をしかめていやがる冬の寒さ。いやだと考えれば考える程いやだ。

しかし、今は大寒も過ぎ、待つものは春だけだ。かげろうの立つあの野に桜の花が咲きみだれ、小さな子供等が、あの小路をやあやあと遊びまわるのがもう目の前に出てくる様だ。大人の人達は腰をかがめて田の中に居る有様。

我々は教室に居り、春の心を思い浮べながら習う心持ち。花見に行く時の面白さ。考えてみれば数えきれない。指をおつて数えて居るより仕方がない。

毎日ながめて居る冬景色はもういやになつた。春から呼び声のかけられる頃になつたら、私は飛び上がるであらう。

本紙を平成十五年度の最終号といたします。大戸